正義の名分　～乱世ではよくある話～

江流素朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
正義の名分　～乱世ではよくある話～

【Ｎコード】
Ｎ３６１８Ｕ

【作者名】
江流素朗

【あらすじ】
俺はあるきっかけで「お人形」と契約して魔法使いと言われる職種になった。
もっとも魔法が使えるのは「お人形」で、俺ができるのはその「お人形」を操る事だけなんです。
でも希少な職種だとか、ほとんど無敵な力を持っているとかなんとかで、自動的に軍隊へ入隊となったと思ったら、独立魔戦部隊筆頭魔術師などという大層な役職を任されちゃったりして……普段、何の取り柄も無い俺がですよ……契約した「お人形」もなんだか変

な娘だし……困ったもんです。

とりあえずそれでも俺自身の正義を貫くためにがんばって行く……予定……です。

プロローグ

過去、幾度となく繰り返された世界規模の戦争。それまでは一定のルールの下に行われてきた戦争だった。
しかし最後に勃発し、後に「破壊神の囁き」と言われる世界大戦では、早期終結を目指した支配者の一人が最も短絡的な行動に出てしまった。

大量破壊兵器の堰を切ってしまった。

一度流れ出した奔流は止める事は出来ず、全ての支配者が連鎖的に報復という名の下、それを使ってしまった。
やがて、支配者が消え去った国家は継戦能力、いや、全てを失い、勝者も敗者も決まらないまま大戦は終息に向かった。
最後の戦闘が終わった後、この星に残ったものは、荒廃し汚染された大地と海、そしてわずかに生き残った人類だった。

大地や海の恵みに見放された人類だったが、それでも生き続ける事を許されたわずかな地に集まり、小さな地域社会を作り上げて生活を始めた。
初めは過去の出来事を教訓に、地域社会は近隣地域とは交流を深めない、閉鎖的なものであった。
しかし時が経つとともに過去の凄惨な出来事は現実味が薄れ、作られた伝説を語るように受け継がれていく事となる。
そして「歴史は繰り返される」の言葉通り、人々の物欲、金銭欲は交易という言葉に置き換えられて近隣地域に広がり、やがては地域社会単位の支配欲となり、平和な時代の終焉を迎えた。

地域社会の代表達は、外に向けられた支配欲を満たすために各地

で戦闘を繰り広げた。そして地域社会の併合が始まり、国という単位に変化していった。

いつしか国王とよばれるようになった地域社会の代表達であったが、更なる支配地域の拡大を求めて戦火を拡大していく事となる。

旧文明の技術が消失して以来、空や海を自由に動き回れる金属の乗り物は伝説となっていた為、資源の大量消費を前提とした物量戦は避ける事が出来た。当然、遥か彼方の天空より飛来し、人類を滅亡の危機に追いやった邪教の破壊神と言われ語り継がれてきた、大量破壊兵器「ミサエル」も存在していない。

この星を滅亡に向かわせた「破壊神の囁き」は、旧文明の技術を消し去る事によって、完全な滅亡を防ぐ事となった。

もっとも戦争という偏った技術が急速に進化する環境の中で、万が一、大量破壊兵器が生み出されたとしても、使用される事はなかったであろう。

戦争の早期終結の名の下、わずかに残されている清浄な大地を、これ以上荒廃させるわけにはいかなかった。

この時代の戦闘は、剣や槍を持った兵士が戦う白兵戦が基本であった。そのため支配者達にとっては、民衆という人的資源と、それらを養う為の清浄な大地の確保が最重要であった。

やがて淘汰と併合が進み、力の拮抗した二つの国が残った。

そんな中、戦闘技術が進化し剣士の中から一風変わった技を持つ者が現れ出した。

彼らは侍や騎士と呼ばれ、その戦闘力の高さから両国でそれぞれ重用された。

そして更には、今までと全く違う体系の戦闘能力を持つ者が現れた。

「異世界の者」とも「悪魔の契約者」とも言われたが、一般的には「魔法使い」と呼ばれた。
ただし、その存在は非常に稀で、長く続いている戦乱の世の中で、いままでに十名ほどしか確認されていない。
しかし戦闘力は非常に強力で、「国を守護する最終兵器」とまで言われる程であった。
故に両国の支配者とも、彼らを敵国に対して攻撃力としてではなく、抑止力としてしか有効に活用できなかった。

そして、決定的な戦果を上げる事が出来ない両国の戦争は、いたずらに長引ていく事となった。

プロローグ（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。
更新期間が空くかもしれませんが、よろしくお願いします。

議場にて　1（前書き）

サブタイトルのみ変更いたしました。

議場にて　1

「ちょ、勅命の発布である！」

軍務会議の場に、遅れて駆け込んできた帝の腰巾着……もとい、侍従長である宮内尊文（みやのうちたかふみ）の声が響き渡った。

拮抗する両国のパワーバランスのためか、このところ大きな戦闘もなく、かといってこう着状態の戦況を進展するための策も見いだせず、ともすると惰性的な空気が漂っていた会議の状況は一変し、凛と張りつめた空気に変わった。

宮内侍従長は緊張した面持ちと少々震える手で封を切り詔を読み上げた。

「勅。

独立魔戦部隊所属、天鳥神楽（あめのとりかぐら）、天鳥鈴音（あめのとりすずね）の両名は、近衛部隊と共に吾の戦場視察に同行し守護する任を与える。

神国天ノ原（しんこくあまノはら）、天命ノ帝（あまめノみかど）」

今にも裏返りそうな、そして微妙に震えた情けない声だったが無理もない。現帝の天命ノ帝が即位してから七年、これまで公の場での勅命は一度もなかった。

「えっと宮内侍従長、それだけですか？」

勅命を受けた本人は、本来なら「その任、承ります」とすぐさま返事をするべきなのだろう。しかし、大きく予想を外したというのか、勅命らしくない命に対して拍子抜けした俺はつい聞き返してしまった。

「はい、以上ですが、お断りしますか？　天鳥筆頭魔術師殿」

「あっ、いや、失礼しました。その任、承ります」

疑問符は付いたのだが、公の場の勅令にこれ以上突っ込むわけに

もいかない。なによりも宮内侍従長の嫌みをこれ以上聞く前に素直に返事をした。
しかしここに集まったほとんどの者が同じ事を思ったに違いない。
「何故、この程度の任をわざわざ勅令として公の場で発布したのか？」
俺や鈴音は今まで何度も帝の戦場視察に護衛として連れ出された事があるのだ。しかもそれはこの場にいる全ての者が一度は連れ出された事がある。
今までは帝に呼び出された者が直接口頭でその命を受けていた。ある意味、勅命と言えばそうなのだが、それでも公の場で命を受けた事はない。言えば、帝の個人的な希望みたいなものだったと思う。
とりあえず俺は、前帝の頃から軍部の要職に付き、現帝の即位と同時にその手腕を買われ、軍全体をまとめる総長に就任した大石原厳（おおいしのらげん）なら、不可解な勅令の意図を知っているかと思い尋ねた。
「この件に関して大石原総長は、何かご存知ではないですか？」
「天鳥君、儂は何も聞いてはおらぬよ。
しかしながら何らかの意図があるのは明白だろう」
「やっぱりですか……」
「この件に関しては、何らかの事情を知っている者がこの場にいると思うが、誰かは問わぬ。
この場で説明できる事なら、その者が既に口を開いているはず。
天鳥君には、追って沙汰があるだろう」
「わかりました」
大石原総長との会話が終わるのを見計らったように、かん高い声が耳に飛び込んできた。
「天鳥筆頭魔術師殿、どうも君はこの勅命に不満があるようですね」

わざわざ誰か確認するまでもなく宮内侍従長だった。
「いえ、そんな事はないのですが……」
と、俺の弁解が始まる前にその口が開いた。
「だいたい君はですね、帝に使える者としての自覚が足りないのではないのですか……」
（げげっ、始まっちまった。これだから年寄り文官ってやつは……）
その喋りの様は、旧文明の文献に載っている、金属の弾を雨霰のように撃つ「機関銃」という兵器に似ていると言われている。その威力たるや肉体的にはゼロだが、精神的にかなり応えるらしく、今までに何人もの文官を再起不能に追いやったとして、以前より恐れられている。
できれば身内相手ではなく、戦場に立って敵兵の精神をボロボロにして欲しいくらいだ。
「……そもそも勅命というのは、帝のお言葉なんですから、聞き返す、ましてや意図を探るなどというのはあってはならんのです……」
（うへ、怒ってるな、初めての勅令を読み上げた晴れ舞台にケチを付けちまったからな……）
「……ですから帝が白と言ったら、黒いものでも白なんです。けっして疑問を持ってはいけないのです……」
（うわっ、すげー事を言いだしちまったよ。
って、「黒いものでも」って言っちゃってるし、どのみち、そんな事を子分に言わす親分には普通なら誰も付いていかなって……

てか、これ以上とんでもない事を言い出す前に、誰かこの暴走を止めて下さい）

その時、うまい具合に大石原総長と目が合った。すかさず「この暴走を止めれるのは大石原総長、あなただけです」と言わんばかりの視線を送った。

「……で、あるからと、人の話を聞いているのですか？　天鳥筆頭魔術師殿は……」

俺の熱い視線に乗せられた意思が伝わったのか、宮内侍従長の話が弾倉交換のために途切れかかったところで、大石原総長が重そうに口を開いてくれた。

「まあまあ、宮内侍従長、まだ会議の途中ですし、この辺りで勘弁してやってくれませんか」

「はあ、しかし勅命に対して、聞き返したり、意図を探るなど言語道断ですよ」

「宮内侍従長のお怒りはごもっともですが、何はともあれ、軍部の規律の問題でもありますから、後ほど儂の方からも注意を促しておきます。

それで、いかがでしょうか」

「まあ、大石原総長がそうおっしゃるなら、お任せします」

宮内侍従長は言いたい事がまだありそうだったが、大石原総長になだめられ席に座った。

（総長、ありがとうございます）

「さて、少々休憩を取りますか」

大石原総長がそう言って席を立ったところで、軍務会議は一時中断となった。

議場にて　1（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

議場にて　2（前書き）

サブタイトルのみ変更いたしました。

議場にて　2

「さて、全員揃ったところで会議を再開する」

わざわざ聞き耳を立てなくても聞こえてくる、宮内侍従長の嫌味たっぷりな独り言に嫌気した俺が十五分程席を外した後、議場に戻ってくると、待ちかねたように大石原総長が再開を宣言した。

「では、山神侍大将、戦況の報告をお願いします」

「はい、概況からですが、国境付近の小規模戦闘は頻繁に起きています。しかし神軍、北軍ともに決め手を欠いており、相変わらずこう着しております。

まずは第一砦から……」

このところは、唯一の対戦相手であるバルドア帝国と国境付近での小競り合い程度の戦闘が続いていたので、大きな戦果はなく、また大きな損失も出ていなかったため、侍大将の山神彩華（やまのかみあやか）が淡々と戦況報告をするのみであった。

「……以上、現段階では兵員、および物資の補給は滞りなく行われております。

以上です」

目を閉じて報告を聞いていた大石原総長であった。しかし報告が終わると目を開き難しい顔でゆっくりと口を開いた。

「決め手を欠いてか……神軍だけでなく、北軍もというのが幸いであるな。

もっとも、先ほどの勅令の件もあり、近々何らかの進攻策が打ち出されるかもしれぬ。

気を抜かぬように通達しておいてくれ」

「了解いたしました。
ところで大石原総長、その勅命にあった帝の戦場視察についてはいかが致しましょう」
「ふむ、今まで帝の戦場視察は警備上の問題もあり、お忍びという形で行っていた。
しかし今回は公の場ではっきりと勅命という形で伝えてきたわけだ。したがって、行く先々にはしっかりと伝えておく方が良いだろう」
「はい、それでは直ちに」
「おいおい山神君、いつ、どこに行くのかもわかってないのに、どう伝えるのかね？」
「あっ……失礼しました」
大石原総長にツッコミを入れられて、照れ顔を見られまいと下を向いたのだが、髪の毛の隙間から桜色に染まった耳が見えていた。

（ふっ、彩華の早合点と照れ屋は相変わらずだな）

彼女は兵士達の間で、「氷結人形」と陰で揶揄されたりする。
それは、美人と言われる容姿をしている彼女なのだが、感情がほとんど表情に出ないうえ、それを引き立てるような冷ややかな言動と性格、そしてなによりも、武術の達人が持っている独特の凛とした雰囲気が、そう言わせるのだろう。
中には俺に「あの人形、しっかり操れよ」と言ってくる不届きものまでいる始末である。
まあ、俺の特技だから、そんな事をしてみたいという衝動にかられた事があるが……
もっとも、時々彼女が見せる人間味あふれる「欠点？」を知れば、「氷結人形」などという間違った見識は消えて、一躍人気者になってしまうだろう。
彩華と幼馴染みの俺をはじめ、議場にいる全員、彼女にせっかち

なところがあるのを知っている。そして、それによってしでかした失敗に対して、早合点したことに自分で気がついたり、ツッコミを入れらたりすると、必要以上に照れてしまうという、かわいらしい「欠点？」があるのも知っている。

なんだかんだと言っても彼女の怖い……凄いところは、俺と同じ十八歳という年齢にも拘わらず、一癖も二癖もある屈強な侍たち数百名をまとめている大将である。その腕前は確かであり、更にはカリスマ性も持っている。

部隊名は立派だが二人だけだし、年上だからお前が「筆頭」をやれと言われて、しかたなくやっている誰かとは大違いなのだ。

そう言えば彩華には、こんな話がある。

彼女は髪の毛を長く伸ばしている。確かにまっすぐで艶やかな黒髪はすごく美しく、彼女の外観的な魅力のひとつとなっている。しかし武術に限らず、闘いにおいて髪の毛が長いというのは、それだけで不利になるにも拘わらずだ。しかしこの事を彼女に尋ねると、毎回同じ台詞が返ってくる。

「この髪に触れる事ができるのは、私がそれを許した者だけです」

この言葉を証明するかのごとく、訓練を含めた闘いの場において、彼女の髪に触れる事ができた者を俺は知らない。そして、その事実を証明するかのごとく、「彼女の髪に触れる事ができたら、願いが叶う」という噂まで飛び交うほどである。

その真偽を確かめようとして、彼女に平手打ちされたり、斬られそうになった者は、大石原総長はじめ多数いると言われる。

その度に彼女は顔を桜色に染めて自己反省していたらしいが……

そんな中、俺はどうやら彼女に許された数少ない一人らしい。それは単に幼馴染みという、心を開ける存在だからかもしれない。

ただ残念ながら噂の真偽については、今のところ目先の願いに関

して、噂は噂であるとしか言えない。
もっとも俺の本願はまだ道半ばだから、噂の真偽がわかるのは、当分先の事になりそうである。

是非、叶って欲しい願いであるのだが……

「さて、残念ながら本日も特に議題がないのでこのあたりで、閉会とする。
ただし、先ほどの勅令の件もあるので、各部署いっそう気を引き締めるように、以上」
大石原総長の言葉で軍務会議は閉会したのだが、勅命が気になっているようで誰一人席を立とうとしない。
普段なら、そそくさと議場を後にする者まで残っている。
いろいろな憶測が飛び交い、少しざわめく議場であった。

突然、一瞬の静寂に包まれた。

それは何かが起きたから、静かになったのではない。
誰でも一度や二度の経験があると思うが、全員の話し声がたまたま揃って途切れただけの事である。
しかし、そんな時に他の者とタイミングがずれて呟かれた言葉は、席が離れていてもしっかりと耳に入ってくる。
今回、それが俺にとって非常に不快な言葉として耳に入ってきた。

「……ちっ、今回は人形劇団近親カップルのおもりってか、って、あ、ヤバっ」

俺と目が合って、すぐさま視線をそらしたのは、近衛長の天守命（あまのもりめい）であった。
なにやら宮内侍従長とお話の最中だったらしい。

どうにも帝の腰巾着と言われる奴らと反りが合わない。
天守近衛長は二十四とそれなりに年も離れているのだが、俺とは元々犬猿の仲と周りからは言われており、その為か何かことあるごとに噛み付いてくる。
噂で伝わってきたのだが、彼は鈴音に気があるらしい。しかし当の鈴音は俺と周りが怪しく思うくらい仲が良いから、何かとやっかんでいるという。

（しかし、鈴音は十六歳だから、お前、ちょっとヤバいんじゃないかい？
もっとも、別の意味であまりお薦めしないのですが……）

ところで俺と鈴音は本当の兄妹ではない。戦災孤児として、幼いときに宮中の施設に引き取られ、兄妹のように育てられた。
したがって、彼が言うように近親なんとかではない。もっともその前に、鈴音と俺は恋人というわけでもない。
しかし、その言葉は俺の怒りを点火させるには十分だった。

「テメー！」
席を立ち天守近衛長に向かって言い放った。
その時、言葉がかぶった。

「貴様、今の暴言をすぐさま取り下げ、謝罪しろ！」

言葉をさえぎられ、口をふさがれたような状態になった俺は、声の聞こえてきた方に視線を向けた。
そこには、怒りに満ちあふれ、今まで見た事がない表情をした、山神彩華が立っていた。

議場にて　2（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

議場にて　3（前書き）

サブタイトルのみ変更いたしました。

議場にて　3

（えっと山神彩華さん、なぜあなたがそんなに怒っているんですか？）

「今一度言おうか、天守近衛長！
今の暴言を取り下げ、謝罪しろ！」
その怒りの迫力に負けてか、天守近衛長は黙り込んでしまった。
さすが普段から闘いの場に身を置く侍大将の一喝である。

「彩華……さん、なぜそんなに怒っているんですか？」
俺はわかりきった理由を、つい尋ねてしまった。

「神楽だけならまだしも、鈴音をも侮辱するのは許せん！」
（うっ、やっぱり尋ねるんじゃなかった……）
しかし、彩華の気持ちはわかる。
戦災孤児の彩華も俺たちと同じく宮中の施設に引き取らた。
そこで一緒に育てられた彼女にとっても、鈴音は妹のような存在であったに違いない。
その鈴音を最悪の言葉で侮辱されたのだ。

（って、その腰の物はいつのまに出したんですか？）
怒り心頭に発した彩華は、いつの間にか帯刀してる。そして今にも斬り掛かってやるぞとばかりに、柄に手をかけている。
しかし議場のある本殿内は、特別な事情がない限り帯刀もちろんのこと、武器類の持ち込みは当然禁止されている。

「どこから出したか知りませんが、その腰の物はヤバいですよ、彩華さん」

「これか？　呼んだ」
そうだった。彼女の刀は「魔剣」や「妖刀」の類であった。
といっても彼女の刀は、何かに取り憑かれたり、呪いや祟りを受けるような物ではない。言うなれば呼べば来てくれる、便利な正義の味方みたいな物である。

「って、本殿内は呼んじゃ駄目だろう」
「何を言っているんだ、神楽。
今が特別な事情の時でなければ、いつがその時なのだ」
今までにない程、頭に血が上っているらしく、彩華本人も何を言ってるのか、わかっていないようである。

「へ理屈を言ってないで、大事になる前にしまいなさい！　彩華さん！」

俺が少し強い口調で諭すと、多少落ち着きを取り戻し、自分が今している事がわかってきたのか、柄から手を離した。
ここまでの事は周りも見て見ぬふりをしてくれている。

（大事にならずにすんだか……）
しかし、それを見計らったように、天守近衛長が口を開いた。

「いやーホント、スマンスマン。
そこまで怒れちゃう事だとは思わなかったよ」

（誰か、こいつを黙らせてくれんか）

彩華とのやり取りで、収まりかけていた俺自身の怒りの炎が再燃しだした。
しかし、そんな事はおかまいなしに、彼の話が続いた。

「ところで天鳥兄妹って、本当に戦う事ができるの？」

（こいつ何を言い出しちゃってんだ）

「ほらさ、北軍のマホー使いに対する抑止力とかなんとか言って、戦場に行くみたいだけど、実際に何かしているところを見た事がないんだよね」

（こいつ馬鹿か？　抑止力が何かしちゃ駄目だろう。何もしなくても、相手が同程度の攻撃ができなくなるから、抑止力って言うんじゃないのかい。

もっとも俺も、テメーが戦っているところはみたことないぞ）

「そもそもオレって、目で見た事しか信じないからさ、マホーって信じられないんだよね」

（こいつ、本当に馬鹿か。それとも俺と真剣に喧嘩したいのか？）

「一度は見てみたいんだけど、そのマホーっていうやつを……ホントにあるならばね。

黙ってないで教えてチョーダイ、天鳥君」

「いい加減、口がすぎるぞ！」

先ほどの件があった為か、俺と天守のやり取りを黙って聞いていた彩華が口を開いた。

「いい加減、口を閉じやがれ！　この野郎が！」

そして彩華と同時に俺も叫んでいた。
しかし今回は俺が彩華の口をさえぎる形となった。
彩華と目が合って一瞬の間があいたが、今回は俺が続きをいただいた。そして、怒りの感情を抑えるように冷ややかな口調で続けて彼に話しかけた。

「なんだ、魔法が見たかったのか。
もっと早くに言ってくれれば、いらん誤解を生まなかったのにな、天守近衛長殿」
「あっ、いや……」
どうやら俺の返事が予想外のものだったらしい。

「でも、実際に見ないと信じられないんだろう？
いいよ、見せてやるよ」
「だ、だから、今じゃなくて……」
「そうか見るだけじゃ不満なんだ。
直に触れて感じたいんだ。
しかたない、今回特別に直に感じさせてやるよ」
「ちょ、そ、それは、て、敵に……」
天守近衛長の目に溜まっている涙を俺は見逃さなかった。

「まあ、遠慮するなって」

そう言うと俺は薄ら笑いを浮かべた顔の前で、指先だけが触れるように手のひらをあわせた。そして、気を込めるようなそぶりをした後、大きく両腕を左右に開いた。すると先ほどあわせていた左右の指先をそれぞれ繋ぐ、七色の光を放つ糸が五本現れた。
その直後、五本の光の糸は、真ん中で絡み合い、やがて一つの形を作り出していった。

俺や鈴音は、魔法使いとか魔術師なんて言われている。しかし呪文を唱えて炎を放ったり、杖を振りかざして雷を落としたり、手を振り風を起こし竜巻を作り出すなどという事は直接できない。
（まあ、そういう事は、漫画にまかせてあります）
では何ができるのかと……強いて言えば、召還に類する事になるかもしれない。
と言っても出てくるのは、いかにも強そうな「魔界のなんたら」とか、「なんとか神」などと言うものではなく、「お人形」である。
実際のところ、それが本当に「お人形」なのか、はたまた「生きている物」かはわからない。しかし一応「最終兵器」と恐れられているからには、只の「お人形」でないことは確かである。
それは、いつ、誰に作られたのか、どこからくるのか、「神の贈り物」とか「魔王の使い魔」など、いろいろと言われているが全て謎である。
そして俺や鈴音はその「お人形」を操って、一般的に言われる魔法使いのような力を使う事ができる。
それが魔法使いと言われる所以である。

もっとも俺としては、人形使いや傀儡士とか言われる方が合っていると思う。しかし残念な事に、その辺りの役どころは既に存在している上、彼らには「人形に魔法を使わせるなんて、邪道だ！」なんて言われてしまったわけで、仕方なく魔法使いとか魔術師と言われるのを受け入れている。

一応、力の加減はできるのだが、全開時、その威力は凄まじく一瞬で城塞都市が消えたとか、一個師団が突然全滅したなど、「最終兵器」の名に恥じない物である。
ありがたい事に俺たちは、それほどの力を使う場面に今まで出くわした事がない。
しかしそれらは、今までの史実に出てきた六人の魔法使いの記録

にはっきりと記されている事実である。
そんな危険な戦闘力を持つ魔法使いは、陰陽関係で一時代二人の存在が原則であった。だが現在この天ノ原に二人、バルドア帝国に二人の合わせて四人も存在しているのだ。
当然どちらかがその破壊力を行使すれば、一時的に戦局は行使した方が有利になる。
しかし、この世に報復という言葉が存在している限り、どちらかが先行して魔法使いの戦闘力を使うことができないでいる。
過去三回あった魔法使い同士の戦闘記録を見ても、一対一の闘いでありながら、かなりの被害が出ている。それが現在は四人、つまり二対二の闘いになるという事である。それは本当に「破壊神の囁き」の再来となり、今度こそ人類は完全に滅亡してしまうかもしれない。
したがって今のところ俺たちは、相手を牽制する為の抑止力としてのみの存在である。

ちなみに、この大きすぎる力を得るためには、この「お人形」と契約する事が必要となってくる。それは、一体ににつき一契約、つまり魔法使いと言われる人間は、「お人形」の数だけしかいない。
確かにこんなとてつもない力を持っている者が何百、何千人もいたらと、考えるだけで恐ろしくなってくる。
だが、そんな凄まじい力の持ち主との契約は、その力を手に入れたいからと望んで結ぶことはできない。「お人形」が契約主を選び、むこうからやってくるのだ。
そんななか、何の取り柄もなく、さえない俺がどうして契約できたのかは謎である。言ってみれば、選考基準がわからないのである。

俺が「お人形」と契約したのは、戦災孤児となり施設の引き取られた七歳の時である。
その当時、自分から両親を奪い去った戦争を恨んで、「いつか戦

争をなくしてやる」と子供ながらに思っていた。
そんな時に、目の前に現れた「お人形」に言われるがまま意味もわからず、半ばだまされたような形で契約を結んでしまった。
それはそれで良かったと、後悔はしていない。
「おいで、黒鬼闇姫（くろきやみひめ）」

議場にて　3（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

議場にて　4

「あっ、あっ、天鳥君、そっ、その本殿内に呼ぶのはどうかと思いますが……」
　声を裏返しながらも一応意見することができた天守近衛長であった。しかしその顔色はみるみる青ざめていく。

「何でそんな事をいうのかな。そもそもお前が魔法を見たいと言ったから呼んだんだぜ」
　俺の呼び出しに応えるように、絡み合った光の糸は少女の人形を作り出した。

『来たよぉ神楽君、どうしたのぉ？』
『こいつが魔法を見たいんだって』
『へェー、そうなんだぁ』
　黒鬼闇姫は、おっとりとした口調でそう言うと微笑んだ。
　ちなみに、闇姫と会話ができるのは、基本的に契約した俺だけであり、特定の条件を除き他の者には聞こえない。

『さあ闇姫、ご挨拶しようか』
『ハァーイ、笑顔いっぱいのご挨拶しまーすぅ』

（ウーン、上品な顔立ちや、気品ある雰囲気も、話をすると見事に崩れるなぁ……周りには声が聞こえないからよいのだけど……）

『あぁ、ヒドーい、神楽君聞こえたよぉ』
『ごめん、闇姫。
　えっと挨拶だけど、笑顔いっぱいの方は可愛くて好きだけと、今回はもう一つの方でお願いするよ』

『了解したヨォー。
実は黒、あれ好きなんだぁ』
闇姫は薄ら笑いを浮かべながら、楽しそうにしている。
俺は闇姫との会話が一段落したところで、置いてきぼり感あふれる天守近衛長に視線を向けた。

「天守近衛長殿、黒鬼闇姫がご挨拶したいそうだ」
「あ、挨拶なんていらないから、そ、そのお人形を早くしまって下さい」
「まあ、遠慮するなよ。
人見知りが激しいこの娘が挨拶したいって言ってるんだぜ。
ソォートォー気に入られちゃったみたいだね、天守近衛長殿」

『エェッ、神楽君、変な事を言わないでよぉ。黒はそんな事言ってないし、こんなやつ嫌いだよぉ』
『ツッコミ厳しいね、闇姫。
脅し文句だよ、脅し文句』

「あ、天鳥君、と、とにかく遠慮して……」
天守近衛長の言葉が終わる前に俺は闇姫を動かした。
「さあ黒鬼闇姫、挨拶しますよ」
『ハァーイ』
俺は闇姫とつながっている両手の「命の糸」を、天守近衛長に向かって伸ばした。すると、七十センチ程の闇姫の体が、羽毛に息を吹きかけたように舞い上がり、「命の糸」に導かれ彼の背後まで飛んでいった。そして闇姫を見失なったのか、あたふたとしている彼に負ぶさるような形で降り立った。

「ひっ、ひっ、くっ、首が絞まる」
彼は突然何かに首を絞められて、かなり動揺している上、顔色が

かなり悪くなっている。

『黒は裾をたくし上げて足を開くなんて、品のない事はしないんだよぉ。

だからぁ、ここに掴まるのが一番なんだよぉ』

確かに闇姫は振り袖を着ているので、足を開こうにも開けない。ましてや「お人形」といっても一応は女の子である。裾をたくし上げて下半身をあらわにするというのは、かなり抵抗があるようだ。

しかし、このまま首を絞めたままにしておくわけにはいかない。

『闇姫、それ彼には聞こえていないですよ。

とりあえず、窒息しちゃうといけないから、手を肩に置こうか』

『ハァーイ』

首から手を放して肩に手をかけると同時に、闇姫の顔を彼の顔の横にもってきた。

「さて天守近衛長殿、お待たせしました。

それでは黒鬼闇姫からのご挨拶です。

ではどうぞ」

『ゴホン、初めまして黒鬼闇姫です。

拙者、未熟者でありますが、以降お見知り置を……ペコリ』

愛想笑いを浮かべ、最後に一礼をして挨拶を終えて、どやがおの闇姫であった。しかしその隣の彼は、闇姫にいきなり一礼されて、どう反応して良いのかわからず、呆気に取られたような、それとも拍子抜けしたような、複雑な表情をしていた。

『闇姫さん、拙者もペコリもよかったですよ。この短時間によく考えましたと褒めたいのです。しかし残念なお知らせですが、それも

彼には聞こえていないですよ』
『えぇー、昨日せっかく寝ないで考えたのにぃ』
『って、今日こうなる事を予想していたんですか？』
『当然ですわ。黒の予想通り動いてくれた天守君はしっかり褒めてあげますね。うん偉い！』
『だから、それは彼に聞こえていないって。
ところで闇姫さん、先ほどの打ち合わせとずいぶん違っていますが……』
『あっ忘れてたぁ、神楽君ごめぇーん。
だってぇ……』
『はいはい、一晩寝ないで考えた挨拶がしたかったんですね。わかります。
でも今度は、間違いなく決めてくださいよ』
『ハァーイ、了解了解ですぅ』
そう言うと、闇姫は天守近衛長と視線を合わせた。
その直後、満面の笑みを浮かべていた闇姫の表情が一変した。
それは、この世に生を受けたもののいずれにも当てはまる事がなく、光の届かぬ漆黒の闇の中で生まれ、古より鬼として語り継がれて、恐れられたたモノであった。
のど元を食いちぎってやるぞとばかりに、牙を剥き出しに開いた口からは、息づかいに合わせて黒色の瘴気が溢れ出ている。

「ひっ、ひぇー」
あまり聞きたくもない声色で、天守近衛長の悲鳴が議場に響き渡った。

『ねぇねぇ神楽君、これ迫力あって良いでしょう？
黒、お気に入りの一つなんだよぉ』
『……うん、迫力満点で良かったよ。
でも一番良かったのは、この会話があいつに聞こえていない事だ

ね』
『あぁー、またそうやって馬鹿にするぅ。
でも黒だって、「やればできる子」だってわかったでしょぉ』
『言われないでも「できる子」だとわかってますよ。でもね闇姫さん、「やればできる子」っていうのは、できない子に言う言葉であって、自分自身に対して言わない言葉ですよ』
『……神楽君の意地悪……』
これ以上闇姫の機嫌を損ねるのは、今後の展開上よろしくないので、話を天守近衛長にもっていく。

「さて天守近衛長殿、黒鬼闇姫からの挨拶もすんだところで、ぼちぼち魔法を体験していただきましょう」
「いっ、いっ、いや、もっ、もう充分です」
「そんな事言わないでください。
おや、お顔の色がよろしくないようで、そのうえ少々震えていますね。
あっ、冷え込んできたので寒いですかね。気が付かないですみませんでした。ではせっかくですので、魔法で暖めて差し上げましょう。
黒鬼闇姫、お願いしますね」
そう言うと俺は「命の糸」を操り、へたり込んでいる彼の背中から闇姫を一度離した。そして正面で向き合わせ、両掌を上に向け両腕を広げさせた。すると闇姫の両掌から紅蓮の炎が燃え上がった。

『ねぇねぇ神楽君、本当にやっちゃってもいいのぉ？　一応お仲間なんでしょぉ。
後で、他の大将達に怒られない？
神楽君だけならいいけど、黒も一緒に怒られちゃうのは嫌だよぉ』
『って闇姫まで、彩華と同じ事を言うのか。
もっともここまでやっちゃうと、今更手遅れかな……残念ですが

……闇姫さん』
『えぇー、手遅れって、黒も怒られちゃうんだぁ。そのうえ、あんな事やこんな事までされちゃうんだぁ……グスン』
『まあ何を想像したのか知らないけれど、闇姫は大丈夫だよ。
でも、怪我なんかしてもらうと取り返しがつかないくらいヤバくなるから、とりあえず、「幻想の炎」に包まれて暖まってもらいましょう』
『りょーかいですぅ』
このとき俺自身退くに退けない状態となっていた。しかし闇姫の言葉に救われた。

（うん、ありがとう闇姫。確かにやればできる子だね）

『だから神楽君、聞こえてるよぉ』
『あっ……、と言うわけで、よろしくお願いします』

「さて天守近衛長殿、この炎に包まれて、体の芯までしっかりと暖まっていってくださいね」
そう言うと俺は闇姫の炎が燃え上がる両掌を彼の方に向けようとした。
そのとき後方から声が響いてきた。

「兄さん、この辺りで止めて下さい！
ここまでなら、帝も無かった事にしてくださります」

振り向くと鈴音が険しい顔つきで立っていた。しかもその隣には、彼女と契約した「お人形」である銀界鬼（ぎんかいきき）姫が武装して並んでいた。

議場にて　４（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

議場にて　5

『あっ、鈴音ちゃん、銀ちゃん、お久しぶりですぅ。
でも二人ともなんだか怒ってる？
何で何で？　どうしてなんですぅ』
『久しぶりって黒鬼闇姫さん、先ほどまで鈴音様のお部屋でご一緒していたではありませんか』
『そうですよ。
それに怒るも何も闇姫ちゃん、突然姿を消したと思ったら、こんなところで何をやっているんですか』
『えっと、神楽君に呼ばれたんだぁ。
そしたら面白い事やっていたから、黒も一緒に遊んでいたんだよぉ』
『予想通りの答えでございますね、鈴音様』
『ふぅ、全くこの馬鹿兄さんが……鬼姫ちゃん、とりあえず止まったみたいだから、その物騒な物はしまっていいわよ』
『はい、承知いたしました』
そう言うと、銀界鬼姫は自分の背丈の倍近くある戦鎚を小さくして首飾りに変えた。

一口に魔法と言っても、闇姫と鬼姫ではそのスタイルが違うのである。
闇姫は炎、雷、水などの属性による攻撃を主に使う。一般的によく言われる魔法という物である。それに対して鬼姫は魔法兵器と言われる物を使い、切断、振動、貫通などの物理的な破壊力を魔法によって増幅する攻撃を主に使う。これらは侍の特殊能力に似てはいる。しかしその威力、有効範囲は別次元である。
鬼姫は戦鎚が好きなようだが、この魔法兵器は剣、槍、戦鎚、戦斧など、その状況によって形を変える事ができる。

鬼姫を前衛とするなら、闇姫は後衛となるであろう。

「さて兄さん、先ほどの鬼姫ちゃん達との話は聞こえたと思います。予想通りといってもどうしてこうなったのか、納得いく説明を聞かせていただきます」

俺は昔から何かにつけて鈴音に叱られる。

これが非常に苦手である。鈴音に叱られるくらいなら、大石原総長に叱られた方がいいというくらい苦手なのである。

何となく視線を合わせづらかった俺は、闇姫に視線を向けた。

そっちは闇姫が鬼姫に叱られている。

『ですから黒鬼闇姫さん、何かあったらどうするつもりでしたの？』

『……』

『黙っていてはわかりませんのよ』

『……グスン』

どうやら闇姫も鬼姫に叱られる事が苦手のようで、ここまでしょげているのは初めて見る。

いい加減な俺と天然系の闇姫、それに対してしっかり者の鈴音と誠実な鬼姫、普段ならちょうど良いかもしれない。しかし今は叱られているのである。叱る方は「ぬかに釘」にならないようにいっそう熱が入る、叱られる方も「なんでそんな細かい事まで……」と逃げ出したくなる。多分この時の相性は最悪だろう。

「兄さん、こっちを見てちゃんと聞いて下さい」

叱られている闇姫の反応が面白く、こっそり楽しんでいた俺は、慌てて鈴音の方を向いた。

「そもそもこの後、大石原総長や天命ノ帝からお叱りを頂くのが、兄さんだけならまだしも、闇姫ちゃんを巻き込むのはどうかと思います」

（って鈴音、お前まで……）

「兄さん、それ聞こえていますよ」

「あっ、しまった」

そう契約者同士は、自分の「お人形」を通じて相手の「お人形」の言葉を聞く事や、相手の心の声も聞く事ができるのである。

これが鈴音に怒られるのが苦手という最大の理由かもしれない。

「しまったじゃないです。

そもそも兄さんは、契約を軽んじているんじゃないんですか」

（す、鈴音……宮内化しているぞ）

「だから聞こえていますよ。

それに、あれと一緒にしないで下さい、気持ち悪い」

「ご、ごめんなさい」

『って、こら鈴音、あれとか気持ち悪いは駄目だぞ。

本人にはわからないからいいかもしれないけど……』

『あっ、つい本音が出てしまいました。

とりあえず二人の秘密にしておいて下さい』

突然、しょげて下を向いていた闇姫がこっちを向いて微笑んだ。

『鈴音ちゃん、今のお話、黒や銀ちゃんにも聞こえちゃったよぉ』

『えっ、そうですね。じゃあ闇姫ちゃん達も含めた四人の秘密にしておいて下さいね』

『ハァーイ、黒はお口を石よりも硬く閉ざしまーす』

つい先ほどまで、鬼姫に叱られてしょげていた闇姫に笑顔が戻り、いつもの調子に戻った。

「さて、兄さんとの話はまだ終わっていませんよ」
「えぇー、流れ的には闇姫のツッコミで終わりじゃないのか」
流れを断ち切る闇姫の「ナイスツッコミ」と思った俺は愕然とした。
そして闇姫は鬼姫に何かを言われている。
『それに闇姫さんもまだ途中ですわよ』
『えぇー、黒もまだ銀ちゃんに叱られるのぉ？』
『いいえ、私の方は……以上です。あとは鈴音様にお任せします』
『鬼姫さん、それって丸投げですか？』
突然闇姫まで預けられた鈴音が鬼姫に聞き返した。
『鈴音様、決して丸投げではありません。あくまでも私からの話は……終わったということです』
『怪しい間が気になりますが……話を聞かない子が二人か……重い……』
『って鈴音、俺は聞く耳を持っているぞ』
『黒も、言われれば聞く子なんだよぉ』
『二人ともゴチャゴチャ言わないの』
そう言うと鈴音は裁定を声に出した。
「では兄さん、この議場の皆さんに謝罪して下さい」
「えー、なんで俺が……」
「いいからするんです！　お兄様……それから闇姫ちゃんも」
『えぇー、黒もなのぉ……』
『はい、一緒になって遊んだという闇姫さんも、当然罰は受けてもらいます』
『フェーン……』
『しかたない、闇姫、ごめんな。とりあえず一緒にやってくれるか』
『うん、神楽君が困ってるから黒はお手伝いするねぇ』
闇姫をなだめた俺は議場内を見渡し、一応の謝罪を始めた。

「議場内の皆様、お騒がせいたしまして、大変申し訳ございませんでした」
『ごめんなさい……ペコリ』
俺は変な屈辱感に耐えながら、闇姫と共に深々と頭を下げた。そして悔しさのあまり、こう付け加えた。
「天守近衛長殿、多少は魔法を信じていただけたでしょうか？　万が一ご不満であれば帝から許可を頂き、改めて体感して頂きたいと思います」
そう言うと俺は闇姫に薄ら笑いを浮かべさせて、ようやく立ち上がる事のできた彼の方に視線を向けさせた。
「あっ、あいや、充分です。
そ、それではまだ仕事がありますので、退室いたします」
彼は言い終わるが速いか、動くが速いか、見事な程の素早い戦略的撤退で議場から出て行った。それと同時に宮内侍従長が近づいてきた。
「全く天鳥君、あんな軽い挑発に乗って、君はどうかしているよ。もう少し落ち着きたまえ。
ん、黒鬼闇姫ちゃんって言ったかな。上品な可愛らしいお人形さんだね。
どれどれ」
そう言うと、彼は闇姫を撫でようとして彩華の黒髪とはまた趣が違う、真っすぐで美しい黒髪に手を伸ばした。
『か、神楽君、黒、穢されちゃうよぉ』
闇姫の必死の言葉を聞いた俺は「命の糸」を手繰った。すると闇

姫は間一髪その手をかわして俺の後ろにまわった。

「チッ、主が主なら下僕も下僕か、まあよいか」

そう捨て台詞をはいて彼は議場を出て行った。

『黒は神楽君の下僕じゃないよ、お友達……もしかして黒が主様かもしれないんだよぉ。

のう、我が下僕神楽よ』

『あの闇姫さん、お友達にしておいてもらえると助かるんですが……』

『ハァーイ、やっぱり神楽君はお友達ですぅ。

でも鈴音ちゃんの言ってた事が少しわかったよぉ。あいつ気持ち悪い』

『闇姫ちゃんもそう思いましたか。そんな奴に似てきたなんて、兄さん酷い事を言うでしょう』

『本当にごめん、鈴音』

鈴音の方を見ると、彼女は大石原総長や彩華と一緒にいる。そして彩華と目が合うと彼女が手招きをした。

（あの二人には、もう一度しっかりと謝罪しておいた方がいいな）

『そうですよ、兄さん。直ぐにこちらへ来て下さい』

俺は鈴音に言われるまま、話の輪に加わった。

議場にて　5（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

議場にて　6

「大石原総長、いろいろと騒がして大変申し訳ございませんでした」
俺は話の輪に入って、先ず大石原総長に謝罪をした。

「まあ、大事に至らなくて何よりだった。
鈴音君の話では、帝からもおとがめなしということであるが、儂から一言だけ言っておく。
まあ、もう少し先を見た行動をしなさい。
お前たち兄妹は通常では考えられない程の大きな力を持っている。多少遠回りしても、その遅れを取り戻す事は容易いはず。
今回、その意図がはっきりしない勅令の件もある。その強大な力の使いどころ、決して誤るのではないぞ」
「はい、本当にすみませんでした」
『ごめんなさいですぅ……ペコリ』
「闇姫ちゃんはいつも可愛いな……おっと……いかん……」
『へへぇ、可愛いって言われちゃった』
「とはいえ今回彼らの言動に問題があったのは確かだな。ヘタレであるが故に力によるその場の解決は容易である。しかし彼らのような腰巾着といわれる文官や、それに近い者共は根が深いぞ。後々五月蝿い事を言ってきたり、ネチネチとしつこいから、聞き流すのが一番だったかもしれないな、彩華君」
「って、私もですか。
神楽、お前のおかげで私まで巻き込まれたぞ」
（あれあれあれ？　今回の一件の口火を切ったのは彩華さんだった気がするんですが……）
とりあえず、彩華にも謝っておこう。

「暴れそうになっていた誰かを止めた俺が、最終的に暴れてしまいました。
その結果、彩華さんをはじめ皆さんを巻き込んでしまい、申し訳ございませんでした」
「あっ……」
俺の皮肉がたっぷりと入った謝罪を聞いたとたん、彩華の顔が桜色に染まった。

（よし、勝った）

普段、何かと言いくるめられているだけあって、ここぞとばかりに変な戦勝気分で、少し誇らしげになっていた俺が周りを見ると、不思議そうな顔つきでこっちを見ている闇姫と視線が合った。

『あれ？　神楽君、彩華ちゃんに勝ったのぉ？　何で何で？
謝っていたから、負けたと思ってたのにぃ、いきなり「勝った」って言うから黒、びっくりしちゃったよぉ』
『あのですね闇姫さん、それは勝負に勝ったと言う事ではないのですよ』
『えぇー、じゃあどう言う事なのぉ。黒には意味がわかりませーん』
『うーん、それはだね、自分の予想していた通りになったから、自分自身を褒めたというのか……まあ、そういう事だ』
「くっくっ、もうだめ。
何が『まあ、そういう事だ』ですのよ」
いきなり鈴音が吹き出した。

『あれぇ鈴音ちゃん、どうしちゃったのぉ』
『神楽様も黒鬼闇姫さんも、いい加減にしてくださりませんか。
その怪しい会話が嫌でも耳に入ってくる、私たちの身にもなって

頂きたいですわ』
『銀ちゃんまでぇ。何で何で？　黒、なんか変な事を言っちゃったのぉ』
いきなり吹き出した鈴音を大石原総長と彩華が不思議そうな顔で見つめていた。
無理もない、彼らには俺と闇姫のやりとりは聞こえていないのだから。

「鈴音君、いったいどうしたんだね」
「あっ、すみません。
その……兄さんと闇姫ちゃんの会話があまりに変で、それでつい……」
「いったい何の話をしていたんだ？
どのみち神楽の事だから、ろくでもない話をしていたのだろう」
「そんな事はないぞ、彩華。
俺は闇姫に『勝ち』という言葉について説明をしていたのだ」
「だからそれでなぜ鈴音が吹き出すほど笑えるんだ」
「彩華姉さん、あの時闇姫ちゃんは、兄さんが彩華姉さんに『勝った』ってどういう事かって聞いてたの。その二人の押し問答が可笑しくて……」
「ほう、私に『勝った』と神楽は言いたいのだな。
私としては、決してしまった勝負事の勝敗に何も言う事はない。それはそれで良いのだが、どのような勝負があったのか、わからないままでは私自身釈然としない。今一度はっきりとした結果の出る勝負をしよう」
「……あの彩華さん、深く追求しないで下さい。何なら俺の負けで良いです」
「なんだ情けない……まあ良いか。
とりあえず軍務が残っているので先に退室する。
大石原総長、お先に失礼させて頂きます」

「ふむ」
そう言って会釈をし彩華は退室した。

『なぁんだ、やっぱり神楽君は負けたじゃない』
『闇姫、それは違うよ。こういうのを「負けて勝つ」って言うんだ』
『なにそれ？　まったく意味がわかんないよ』
『この話はまた今度な、闇姫』
闇姫との話をまとめた俺は鈴音に話しかけた。

「さて、俺たちも戻ろう」
「そうね、これ以上ここにいても何もなさそうですわね。
大石原総長、お先に失礼いたします」
「本日はいろいろとご迷惑をかけて本当にすみませんでした。
それでは、お先に失礼させて頂きます」
『大石原のおじさん、またねぇ……ペコリ』
『こら黒鬼闇姫さん、ちゃんとご挨拶をしなさい。
あっ、鈴音様お待ちください。先を急ぎますので、お先に失礼いたします』
『闇姫、鬼姫、それ総長には聞こえないから』
『神楽君、やっぱり意地悪ですぅ』
『神楽様、これは気持ちの問題ですから良いのです』
俺たちはそれぞれ挨拶をすませ議場を後にした。

部屋に戻る途中の廊下で、並んで歩いていた鈴音が神妙な面持ちで話しかけてきた。

「兄さん、少しお話ししたい事があるのですが、お時間頂けませんか？」
「どうした改まって。
ちょうど俺からも伝えておきたい事があったから問題ないよ。

とりあえず街に出てお茶でもしながら話そうか？」
「いえ、あまり他人に聞かれたくない内容なので……それに、この子達を街に連れ出すのも、また別の問題が起きそうですし……私か兄さんの部屋でよろしいですか？」
「ああ、良いよ……って、俺の部屋は駄目だ」
「まさか兄さん、女性を連れ込んで……」
『神楽様、不潔です』
「おい、それは無いって。そもそも闇姫が、そんなことを鈴音達に報告していないだろう
「確かに……甲斐性なし……」
「もういいです……なんとでも言って下さい。
ではなくて、朝出たんだよ、黒くてすばしっこい奴。それを闇姫が追い回すわ、逃げ回るわで……多分想像通りの部屋になっています」
『あいつ凄かったよね。素早いし、追いつくとこっちに向かって「ブーン」って飛んでくるんだよぉ。だから、黒、怖くて逃げ回っちゃたりしたんだよぉ。
でも神楽君、まだ片付けていなかったのぉ？』
『あの闇姫さん。あなたにそれを言われたくなかったんですが……戻ったら一緒にお片付けですよ』
『ハァーイ、リョーカイですぅ』
「兄さん、ご苦労が多いのはわかりました。私の部屋に行きましょう」
俺たちは鈴音の部屋に向かった。
「じゃあ、どうぞ入って下さい」
『ワァーイ、銀ちゃん入ろぉ。神楽君お先ぃ』
闇姫は鬼姫の手を引っ張って、慌ただしく部屋に入っていった。
「相変わらずね、闇姫ちゃん。

さあ兄さんもどうぞ。でも、妹といっても一応は女の子の部屋ですから、それなりの礼儀は守って下さいよ」
「わかってるよ。
そういえば、入隊後鈴音の部屋に入るのは初めてなんだ」
「そうでしたか？　数えきれないほどここにいらしているのに？」
「いつも門前立ち話……必要な用事はだいたい軍務室ですましていたからね」
「それはそれは大変失礼いたしました。
本日はようこそおこしになりました。それではご遠慮なくどうぞ」
俺は鈴音に招かれるまま初入室となった。そしてそのまま居間に通された。
しばらくしてお茶とお菓子を持った鈴音が居間に入ってきて直ぐに口を開いた。

「大丈夫と思いますが、盗聴されている可能性もあります。万が一を考えて、ここから先は彼女達を通していたしましょう」
「ああ、わかった」
俺と鈴音は闇姫と鬼姫を近くに呼んだ。

『わぉ、お菓子があるぅ。黒に黙って食べちゃうなんて神楽君ずるいよぉ。
ねぇねぇ鈴音ちゃん、食べていい？　食べていい？』
『どうぞ闇姫ちゃん』
『ワァーイ、ありがとう鈴音ちゃん』
言うが速いか闇姫は既にお菓子をほおばっている。

『でも本当に不思議よね、この子達……「お人形」といっても、意思があるし、ある程度なら勝手に動く事もできるし、食べる事もできるし、私たちと一緒で生きているんだよね』
『生きているか……確かにな。

でも契約して十年経った彼女達が何者なのか、闇姫に聞いてもろくな答えが返ってこないし……』
『私も時々鬼姫ちゃんに聞いているけど、わからないみたいだよ』
『はい神楽様、鈴音様、残念ながら私達が何の為に作り出されたのか、それについての記録はほとんどございません。
その為か何度思い出そうとしても、なんとか読み取れる記録に書かれた使命として、「契約者様の願いを叶える為のお手伝いをする」ということ以外はわからないのです』
『そうだよぉ。黒達は「不思議ちゃん」なんだよぉ。
でもねでもね黒はね、神楽君のお手伝いをする事が、とっても楽しいんだよぉ』
『あのぉ闇姫さん、手伝ってもらったという記憶が、あまりないのですが……まあ、いつもありがとうと言っておきます。
それともうひとつ、「不思議ちゃん」という言葉も自分自身には使わない言葉ですよ』
『あぁ、神楽君にまた馬鹿にされたぁ……グスン』
『あっ、ごめん闇姫。
まあそれはそれでとして……鈴音、あれはなんとかしようよ』
俺は闇姫の機嫌をこれ以上損ねないため、話題を変えようと部屋の隅にぶら下がっている物を指差した。
清楚な白、淡い桃色や緑、中にはきわどい曲線で小さくまとめられた赤や黒、その一角はさながらお花畑のようであった。
しかし話題変更のための緊急回避とはいえ、この行為は後悔を招く事になるのだが……

指された方を振り向いた鈴音は、顔を真っ赤に染めてそのまま黙って立ち上がり、無言のまま「お花畑」を取り込み出した。
無言のまま言われた事に対して行動するというのは、彼女最大の怒りの現れである。この後支離滅裂な事を言い出すと、かなりヤバい。

『あ、あの鈴音……お、俺も兄と言っても男だし、なにより妹といっても血のつながりが無い、可愛い女の子なんだし……け、健全な男としては、その……気になる女の子のこういう物は、気になるわけで……』

俺はシドロモドロになりながら意味が通じない言い訳を口にした。

鈴音はその言葉を途中で遮るように、振り向いて俺と視線を合わせ、怒りのあまり先ほどの約束を忘れているのか、素で呟いた。

「兄さん、彩華姉さんの事を、どう思っているんです？

私は、兄さんの事が好きなんです。わかっているんですか？」

その瞬間、あの闇姫でさえツッコミを入れる事ができないほど、重く凍りついた空気に包まれた。

議場にて　6（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます

議場にて　7

「って……てか……いくら義妹とはいえ、口に出してはいけない言葉を聞いた気がするんだが……」

「妹、義妹、二言めにはそればっか。

養子縁組したとか、再婚相手の連れ子じゃないです。本当の義兄妹でも無いんです。

戦災孤児として施設で一緒に育てられて、たまたま私が年下で、妹的存在として周りが勝手に扱って、だから妹と言われる事に違和感も無くなって……

名前だって、他の大将達と同じで代々受け継がれた名前をしきたりで名乗っているだけで、家族のつながりの証じゃない。

だからこの気持ちは近親愛なんかではないんです。至極普通の恋愛感情なんです」

そう言うと鈴音の大きな目から一筋の涙が頬を伝わって流れ落ちた。

あまりに唐突な告白に、俺はかける言葉が見つからないでいた。

「兄さんは、彩華姉さんの事が好きなんですか？」

口を閉ざしたままの俺に、鈴音が改めて尋ねてきた。

「……彩華の事をそう聞かれれば、多分、好きなんだろう。でも間違えないでくれ、それは恋愛の対象としてではない。

先が見えてて、一方的に相手を不幸にする事がわかっているのに、恋愛ができるはずもない。

鈴音、お前も契約している者である以上、理由はわかっているだろう。

だから、俺の恋愛の対象となるのは、魔法使いとしての契約の事、

対価の事、そしてリスクの事、全部がわかっている人じゃないと駄目なんだ。つまりは同じ魔法使いじゃないと駄目なんだ」
固まった口をなんとか開いて、ここまで言った俺は、遠回しであるが鈴音に告白している事に気が付いた。
しかし同時に自身の心の中で、もやがかかっていた気持ちを口に出して、はっきりとした形にしてしまった事で、今まで兄妹として鈴音と接してきた俺は、この後どのように彼女と接して良いのか、わからなくなってしまった。
そして兄妹としての関係を壊すきっかけを作ってしまった軽はずみな行為を後悔した。

「兄さん、今の言葉、そんな遠回しでなく、もっとはっきりとした言葉で聞きたかったのですが……何となく気持ちは伝わってきました。まだまだ言いたい事はありますが、私の特別を見てしまった件につきましては許るすことにします」
俺の話を聞き終えた鈴音はそう言って許しを出し表情を少し穏やかにした。

（まったく兄さんは、鈍感というのか礼儀知らずというのか、ガサツというのか……こんなの好きな人に見せる為に決まってるでしょう。
今回はこれを付けた私が勝負している姿を想像しておいて下さい。実物は近いうちに披露いたします）

『鈴音さん、呟いたのか、聞こえるように言ったのかわかりませんが、かなり慎みがないような気がしますよ、今の発言。
まあそう言ってもらえるのは、非常に光栄な事なのですが……』
『えっ！　……あっ！』
鈴音は再び顔を赤く染めて、寝室に逃げ込んでいった。
今回は自分の失言が招いた結果だから、怒りようがない。しかし

しばらくは出てこないだろう。

『キャー！　何をなさるんですか、黒鬼闇姫さん！』

突然、銀界鬼姫の悲鳴が頭の中に響き渡った。

俺はすぐさま悲鳴の聞こえた方を見た。そして同時に頭を抱え込んだ。

その時俺の視線に飛び込んできたのは、鬼姫のスカートをめくりあげて、ニコニコしている闇姫の姿であった。しかし二人とも何故か本物の人形のように固まっていた。

『闇姫さん、聞くまでもないのですが、何をなさっているんですか？……直ぐにその手を下ろしなさい』

俺の言葉で我に返った闇姫は、スカートをめくっていた手を下ろした。

『だってね鈴音ちゃんが、凄くエッチぃパンツを持っていたから、銀ちゃんも凄いの付けているのかなぁって……で、めくってみて黒はびっくりだよぉ。

だって、かぼちゃだよぉ、カボチャ……あまりに予想外な結果だったんで、黒は固まっちゃったんだよぉ』

『黒鬼闇姫さん、あまりの事に固まったのは私の方です。

それにカボチャではありません！　失礼な……これはドロワーズです！』

旧文明で言うところの市松人形に近い形をとっている闇姫と対照的に、鬼姫は西洋のアンティークドールとかビスクドールと言われる類の物に近い形をとっている。当然ドレスを着ておりその中も、それに見合う物を着用していて何ら不思議はない。

「どうしたの鬼姫ちゃん、何があったの？」

鬼姫の悲鳴を聞きつけて、寝室に閉じこもっていた鈴音が、遅れながらも飛び出てきた。

「今の会話を鈴音は、聞いていなかったのか？」

「兄さんごめんなさい、あまり集中していなかったので、聞き流していたようです。

なんか、カボチャがなんとかしか……」

『鈴音様……黒鬼闇姫さんにスカートをめくられたのですわ。それでドロワーズを見てカボチャと……』

『なるほど、そう言う事ですか……闇姫ちゃん、女の子がスカートをめくるなんて、はしたない事をしちゃ駄目ですよ』

『ハァーイ、鈴音ちゃん。でも何で何でぇ？』

『闇姫ちゃんだって、お着物の裾をめくられたら恥ずかしいでしょ』

『あっ、そうかぁ。黒は何にも穿いてないから、丸見えになっちゃう……ほんとだぁ、恥ずかしいや』

『だからね、自分が恥ずかしい事を他の人にやっては駄目なんですよ』

『良ぉく、わかりました。銀ちゃん、ごめんなさい』

『って黒鬼闇姫さんは何も付けていらっしゃらないのですか？』

『お着物なら当然のことですよぉ。

へっへっ、黒、偉いえらい？』

『……闇姫さん、ここは誇るところではありません。

と、いうことで皆さん、パンツ話に区切りがついたところで、本題に入りますよ』

俺は半ば強引に話を振り出しに戻し、真顔で口を開いた。

『本日の軍務会議で勅令が発布された。

内容は次回、帝の戦場視察に俺と鈴音が同行しなさいというもので、わざわざ勅命とする程のものではないと思う。しかし公の場で正式な形で発布されたわけだから、何らかの真意があると思う。

鈴音は先ほど帝と話をしたんだろ？　何か聞いていないか？』
『あれは……ごめんなさい、方便です。
突然消えた闇姫ちゃんを追って議場に行って、そこで見た爆発しそな兄さんを止める為、咄嗟についた方便です』
『……ばれたら総長達にどやされるな……まあいいか、その時は鈴音も一緒だからな』
『はぁーい……』
トーンの下がった鈴音の返事を聞いた俺は元気づける為に付け加えた。

『まあ、感謝はしているから、その時は叱られ慣れている俺が矢面に立ってやるよ』
『ありがとう……』
『まあ、鈴音が知らないなら、俺からの話は以上だ。そのうち帝から何らかの形で、その真意を教えて頂けると思うしな』
そう言うと、俺は鈴音の話を聞く為に視線を向けた。久しぶりに真正面から鈴音の顔を見た気がする。肩程の長さで切り揃えられた、やや茶色の髪の毛が必要以上乱れないように、左右両側を髪飾りでまとめて清楚な雰囲気に包まれている。そして何かを訴えかけられると、断る事ができなくなってしまうほどの目力を持った、大きめの眼がこっちを見ている。
そして堰を切ったように鈴音が話し出した。

『私が魔法使いの契約とその対価を知ったのは、九歳になった時です。
この頃、対価については秘密扱いだったようです。しかし実際は公然の秘密でした。
私も対価について誰かに聞いたのですが、今ではどこの誰から聞いたのか思い出せません。でもその頃の私はませていたのでしょうか、兄さんを好きになっていた。

そこに対価の話を聞いたのです。
普通の人が人生の折り返し地点を迎える頃、兄さんは天寿を全うしたとしても、消えてしまう。そんな事がわかってしまった。
残されてしまう私はそんな事、きっと耐えられません。その時が来たら、自ら命を絶つ……でも、時を同じくして自ら命を絶つつもりなら、少しでも兄さんの役に立ちたい。
そう考えた私はそれから毎日、兄さんと共に歩んでいる闇姫ちゃんにお願いしたのです。「今ならまだ間に合う、私も魔法使いとしてあなた達と契約をしたい」と……彼女は私が十歳になったとき、鬼姫ちゃんを連れてきてくれた。そして私も残された寿命の半分を対価として鬼姫ちゃんと契約したんです。
そして契約の主旨は「兄さんと共に歩み、そして守る」これが私の正義なんです』
鈴音の話が一区切りしたところで、俺は口を開いた。

『馬鹿な兄を持つと、出来の良い妹は苦労するよな。
でも、出来が良くても馬鹿だよお前は……こんな俺の為に莫大な対価まで払って……本当にごめんな、鈴音』
俺はそう言いながら席を立ち、鈴音の隣に移りそして抱き寄せた。

『馬鹿な私が一人で暴走した結果なんです。兄さんが謝る事ではありません。
でも決して後悔はしていません』
『ところでその契約主旨だと、さっき議場で一番危い存在だったのは鈴音じゃないのか？』
『確かに、感情消失状態になりかけていたのですが、闇姫ちゃんの声が薄ら聞こえたんです』
『俺は何も聞こえていなかったけど……闇姫、何か言ったのか？』
『ウゥーん、黒は何にもおぼえていないよぉ』
『じゃあ、鬼姫か？』

『私は鈴音様と同期しておりましたから、私の声ははっきりと聞こえるはずです』
『間違いなく聞こえたんです。「神楽君はもう止まっている」と、だから私は鬼姫ちゃんを引く事ができたのです』
『そうか……何の声かはわからないけど、とりあえずは大事にならなくて良かった。
しかし感情消失状態か……契約の主旨で謳った正義を遂行する為に、邪魔な感情を封印してしまうなんて、本当に厄介なリスクだよ。
それにしても鈴音にしては珍しく危ない嘘をいったり、いきなり鬼姫に武装をさせてたり、理由がわかったよ。
あの時、鬼姫の戦鎚は天守に向けられていたんだ』
『当然です。
私以外、兄さんを馬鹿にする人は許しません！』
『てか、鈴音さんは俺をいじめてもいいわけなんだね。
という話はさておき、俺の契約の主旨を教えておくよ。
単純に「争いを無くす」それだけだから。
まあ、契約したのが七歳だったから深い考えはいっさい無し。でも、どうしたら良いのかわからなくて、実際困っているんだよね。
まあ鈴音も手伝ってくれるし、何とかなるかな』
俺達はその後も冗談めいた話や、世間話を交えながら契約や主旨、そしてリスクについて語りあった。

更けゆく晩秋の夜、ゆっくりと流れる時間の流れに乗って、俺と鈴音は通じ合った気持ちを更に深く確かめ合うように、そのまま身も心も結ばれた。

議場にて　7（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

長々と続いてきた、主に主要人物説明の第一部もようやく終了して、次回より一応新展開です。とは言うものの、まだ未登場の主要人物達が何人も残っているんですが……特に未だに一人も出てきていない敵国の主要人物たちとか……どうしよう……

今後もアップペースやストーリー展開が遅くなりそうですが、お付き合い頂ければ幸いです。

策略　1

「独立魔戦部隊筆頭魔術師天鳥神楽、謁見を賜り、ただいま参じました」
謁見の間に入り、儀礼的な挨拶をすると、扉の開いている奥の部屋から声が聞こえた。そこは、極秘事項をともなう会談を行う為に用意された、謁見の間別室といわれる部屋である。

「神楽来たか。
人払いはすませてある。固い挨拶は抜きだ。
まあ、こっちに入って座れよ」

俺は宮中の施設で育ったため、帝の事は即位する前からよく知っている。
その頃の彼は毎日のように施設に顔を出し、戦災孤児の俺達と遊んでくれた。そして、その立場を笠に着ない、そして気さくな性格の為か、幼い頃の俺は少し歳の離れた兄のように慕っていた。
俺は言われるまま別室に入り扉を閉めて帝の正面に座った。すると彼は開口一番、三日前の軍務会議の事を話し出した。

「随分と派手に立ち回ったようだね」
「申し訳ございません」

「その件については今更何も言わないよ。大石原総長から既に一言二言あったと思うし、重ねて同じ事を言っても仕方ないからね。
まあ俺も事あるごとになんだかんだと言ってくる、宮内や天守があまり好きじゃないから、いい気味と思っている。おっと、不謹慎だったかな。
その上ここで神楽を叱っちゃうと、鈴音ちゃんの言った事が嘘に

なっちゃうし、そうなると彼女の罪を問わないといけなくなっちゃうからね。
可愛い妹……今は恋人か……そんな彼女が罪人になるのは心苦しいだろ」

「お心遣いありがとうございます。鈴音にはよく言っておきます。
しかしその能力……相変わらず帝に隠し事は出来ませんね」

「まあ『他人の心中が見える』なんて気持ちの良いものではないけど、その能力を代々受け継いでいるおかげで、失政を避け強固な国づくりが出来たんだ。
人類の愚かさを露呈しているようで嫌な話だが、この時代も欲に走ったたくさんの国々が戦争を始め、そして潰し合ってしまった。時の流れに乗ってしまったとはいえ残念ながら我が国も、そのたくさんの国の一つにだったのだけどね。
その結果、今ではこの神国天ノ原とバルドア帝国の二つになってしまった。
つまり、あちらも強固な国づくりに成功していたわけだ。もしかすると、バルドアの皇帝ロスディオの家系もなんらかの能力を持っているかもしれないね。
とりあえず皇帝さんの能力の真偽はさておき結局、強い国が残った。そしてお互い決め手を欠いて、そのため戦争は長引いているんだよね」

「そんな事言わないで下さいよ。
私がこうして軍にいるのは、契約の主旨で謳っている通り、争いを無くしたいだけなんですから、帝の持ち駒として使って頂ければ幸いと思っております」
「確かに争いを無くそうとするならば、向こうを潰すか、こっちが潰されれば良いというだけの単純な話なんだ。しかしこの場合、厄

介なのは最高の持ち駒である神楽達魔法使いの存在なんだ」
「最高かは別として、やっぱりそうなってしまいますか……改めて言われると、私たちの存在が戦争を長引かせているようで、心に重くのしかかります」

「そんなに気を落とす事はないよ。神楽達の存在が駄目だと言っているわけではないんだ。要は魔法使いの役どころといっていいのか、平たくいえば使い方の問題だよ。
今まで魔法使いを抱えた国々は、その強力な力を背景に結果だけを求め、一番愚かな選択を行ってきた。
もし我が国がそれと同じくバルドアを潰すという結果だけを急ぎ、神楽達が表立って戦場に出て行ったとしよう。当然向こうも黙って潰されるつもりはないはずだから、お抱えの魔法使いが出てくるだろう。その結果は歴史が証明している通り共倒れだよ。それどころか、今回は魔法使いが四人いるわけだから『この星から人類はいなくなりました。そして争いは完全に無くなりました。メデタシメデタシ』と、シャレにならない事も充分考えられるからな。
俺は自身天寿を全うしたいと思っているし、全ての者がそうであってほしいとも思っている。だからそんな無茶な選択をするつもりはない。
今のところ敵さんも仕掛けてこないところを見ると、皇帝さんもそれをわかっているみたいだね」

「私も自身の目的の達成も見届けた上で、短いながらも天寿を全うしたいと思っています」

「では話を本題に戻そう。
今回の戦場視察は十日後の十月三十日に出立する。目的地は第一砦から第三砦まで順次まわって行くとものする。期間は二十日間を予定しているが、事と次第によっては延びるかもしれぬ。

そしてなにより今回の視察は、争いを無くすため、俺が出来る第一歩になるかもしれぬ。詳しく話す事はまだできないが、そのために、平たくいえば作戦の為に、勅令などという公式な文書を作成したわけだ」

「やはり、意図した事があったのですね。
時を迎えてお話しくださるのをお待ちしております」

「当然だよ。俺は神楽達を一番に信頼しているから、今すぐにでもと思うのだが……まあ、何事にも順序とか準備とかが必要だからな。期待していてくれ。
とりあえず、今日はこんなところだ。次回こうして話が出来るのは、出立後になると思う。長期間の視察になるが準備をしっかり整えておいてくれ。
あっ、それと他の大将達へは明日にでも大石原総長を通して伝えてもらうよ」

「御意に。それでは失礼いたします」
帝の最後の一言は、公称妹と恋仲になってしまい多少なりとも背徳という罪悪感を感じて、他の面々と顔を会わせづらいという、俺の心を見通した帝の気遣いだったかもしれない。
謁見の間別室を後にした俺は鈴音達が待っている軍務室に向かった。

「お待たせ。戻ったよ」
『わぉ、神楽君が戻ってきたぁ。
おっかえりぃー。黒、待ちくたびれちゃったよぉ』
俺が部屋に入ると、闇姫が真っ先に飛びついてきた。
『んっ？　あのぉ闇姫さん、鈴音達はどこに行ったのですか？
はぁ……こうなる事態を避ける為に、鈴音達に監視をお願いして

いたはずなんだけど……』
俺は部屋の惨状を見て溜め息まじりに呟いた。
『ねぇねぇ聞いて聞いてぇ神楽君、鈴音ちゃん達を監視していた黒が、ちょっと目を離したスキにあの二人、消えちゃったんだよぉ。でも凄いよね鈴音ちゃん、黒の監視に気が付くなんて、敵ながら天晴だよぉ』
『えっとですね闇姫さん。どこで間違えてそうなったのかわかりませんが、根本的にその言葉は、単語の順番が間違っています。
正解は「闇姫を監視していた鈴音達が、ちょっと目を離したスキにこうなった」です』
『あれぇ？　監視されてたのは黒だったのぉ？　いつの間にか黒は騙されていたんだぁ。もしかしてあれかなぁ、「敵を欺くにはまず味方から」っていうからね。さっすが鈴音ちゃん、黒はすっかり騙されたよぉ』
『てか闇姫さん、誰も騙していないから、その言葉の用法も間違っています。
とりあえず訊いておきます。
この惨状、どうしてこうなった？』
『あっ、これぇ。そうだよ出たんだよぉ、神楽君。八本も足があって、すっごく素早くて、黒が追いかけたけど隙間に入って、消えちゃったんだ。あれは間違いなく敵の新兵器だよぉ。だってあんな不気味なやつ、黒は初めて見たんだよぉ』
『……もういいです。とりあえず敵の新兵器には「蜘蛛」と名前を付けて下さい』
『ハァーイ、了解ですぅ』
その時、鈴音の執務室の扉が開き、中から彼女と鬼姫が出てきた。
『神楽様、お帰りなさいませ。って！　……』
『兄さん、お帰りなさい。

闇姫ちゃん、ちょっと騒がしかったようだけど、どうしたの……
あっ！　……』
部屋の惨状が目に飛び込んできたのか、二人は固まってしまった。
『こ、これ……ご、ご、ごめんなさい。
だって、おとなしく待っててくれるって言ったから……でも、何がおきたの』
『鈴音、その言葉は闇姫にとって意味が無い、それどころか「自由への解放」を意味しているようなものだ。それを説明しなかった俺も悪かったが……とりあえず、敵の新兵器「蜘蛛」が……に、つられた闇姫が暴れてこうなった部屋を片付けよう』
『黒鬼闇姫さんは、どうしてこう落ち着きがないんでしょうか。全くもっていい迷惑ですわ』
俺は鬼姫や鈴音の文句を聞かされながら部屋の片付けを始めた。
『確かに闇姫ちゃんから目を離したのはまずかったのは認めます。でも兄さんもしっかり躾けないと駄目だと思いますよ』
『ちゃんと躾ているよ。
やり方を教えていなかったのは俺のミスだったが、こうするんだ』
俺はそう言うと戸棚からお菓子を取り出しテーブルに置いた。
『闇姫、おいで』
『なぁに神楽君。おっ！　お菓子発けぇーん』
『いいか闇姫、俺は少しの間ここを離れる、その間このお菓子を守ってくれ。
そして俺が戻ってきたら一緒に食べよう』
『了解了解でぇーす。早く戻ってきてね』
闇姫はそのままお菓子を凝視して、本物の人形のように動かなくなった。

『どうだ、鈴音に鬼姫。おとなしくなっただろう』
呆気に取られている鈴音達を尻目に、部屋の片付けを進め五分程経過したのち闇姫に話しかけた。

『闇姫、お待たせ』
『わぁお神楽君待ってたよぉ、ねぇねぇ、お菓子食べていい、食べていいよねぇ』
『うん、しっかり見張りが出来たからいいよ』
『ワァーイ、いただきまぁーす』
いうが速いか、闇姫は満面の笑みを浮かべながらお菓子をほおばった。

『兄さんそれって……』
『神楽様なんといいますか……』
俺と闇姫のやり取りを見て呆気にとられていた鈴音と鬼姫は、揃って口を開いた。

『……犬ですか？』

『まあ、いいじゃないか。闇姫と付き合い出して十年が過ぎたけど、彼女を静かに待たせる方法は、これしか見つからなかったんだ。
ただし有効時間は五分くらいだ』
『闇姫ちゃん、なんだか可哀想……』
『さて部屋もあらかた片付いたから、ようやく本題に入れるな。
今日、帝から話があったのは……』
俺は帝とした話の内容を鈴音に伝えた。

『そうだ兄さん、私が闇姫ちゃんから目を離す事になったのは、諜報部から連絡が入ったのです。
どうやら勅命の内容がバルドア帝国に漏れているらしいのです。

今回の視察はかなり危ない事になるのかもしれません』
そう言うと、鈴音は不安げな表情で俺の方を見た。

策略　1（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　2（前書き）

１０月３日　地の文を変更しました。

策略　2

『大丈夫だよ鈴音。帝はこういう事態を想定した上で、勅命を発布したと思うよ。
作戦みたいな事も言っていたしね』
俺は鈴音の不安をぬぐい去ろうと、帝と交わした話の内容に多少尾ひれを付け加えた。

『そおだよぉ、鈴音ちゃん。頼りない神楽君だけじゃないんだよぉ。なんてったって、頼れる黒や銀ちゃんが付いているんだよぉ……うんうん、凄い事だよぉ。
だからねぇ、大船にドーンと乗ったつもりでいたらいいんだよぉ』
『って、闇姫さん。大船って……あれ？　間違っていない！
どうした、熱でも出たか？』
『だからぁ、黒は、やれば出来る子だって、何度言わせるんですかぁ、神楽君』
『あのぉ闇姫さん……その言葉は……やっぱりいいです、もう何もいいますまい……』
真面目な会話をしていても、なんだかわからないうち、闇姫のペースに乗せられて、そして振り回されてしまう俺達であった。

『とにかくだ鈴音、闇姫もああ言ってるし、なによりお前は俺を守ってくれるんだろう。
俺は大船に乗ってるつもりなんだけどな……って、あれ？　これじゃ俺自身の不安が無くなったかだけか……』
『そうだね兄さん、私がしっかりしなくちゃ駄目だよね』
『まあなんだ……闇姫は頼りないなんて言ってたけど、俺だってやれば出来る男なんだぜ』
『兄さん、それ自分自身に言わない言葉です』

『あっ、しまった……』

俺は照れ隠しも含めて、鈴音を引き寄せそっと口づけをした。

『わぉ神楽君、やるぅ、かっこいぃ。

よっ、お二人さん、熱いよぉ、熱いよぉ、ヒュッヒュゥー』

『黒鬼闇姫さん、あなたいつの時代の人ですか？　はしたないです。

当然、鈴音様、神楽様、お二方もですわ！

今はまだお仕事中です。そういう事は、お二人の個人的な時間に好きなだけ行ってくださいまし。

全くもって羨ましい……じゃなくて、はしたないですわ』

『そうですよ兄さん。ちょっと恥ずかしかったです。

でも、もう大丈夫です。ありがとう』

突然、俺に口の自由を奪われて固まっていた鈴音が、その拘束から解放され顔を桜色に染めながら我に返った。

その日、帝から大掛かりな作戦行動になる事を遠回しに伝えられたのはずなのだが……それをさておき、神国天ノ原軍本部の一角を淡く、それでいて熱く、ほのぼのとした緊張感の無い空気を作り出す独立魔戦部隊の俺達であった。

一方その頃バルドア帝国軍部では、「敵国トップの戦場視察」という情報の真偽やその意図、そしてその対応をめぐり、熱い議論と緊張感をもたらしていた。

それはまるで、遠く離れたどこかの部隊のそれを横取りするかのようであった。

「まったく何なのよ、今日の軍議は！　何が緊急を要すよ！　いったい何が、キ・ン・キュ・ウなの！　こんな結論なら、ヒヨヒヨ共だけで勝手にやっていればよかったのよ！」

「そんなに怒るなよ、アリエラ」
「ヘリオ先輩は何とも思わないの？　だって、おかしいでしょう、変でしょう。
敵の頭が戦場にノコノコ出てくるんでしょう。鴨ネギよ、カ・モ・ネ・ギ。そんなのお鍋にして、おいしく頂くのがアッタリ前じゃない！
しかもよ、シ・カ・モ、鴨鍋賛成派が六割を超えていたのに、どうしてヒヨヒヨの日和見になっちゃうの？　ホント、どこをどう間違えるとこんな風になっちゃうわけ？　全く皆さん、バッカじゃないの！」
「そんな事を言っちゃ駄目だよ。
どのみち皇帝陛下の決断だし仕方ないだろう。その皇帝陛下もアリエラのいう日和見派だったんだから」
「だから、ダ・カ・ラ、いっくら皇帝陛下でも多数決で決めた結果を変えちゃ駄目でしょう。
一体なんなの！　皇帝陛下って、そんなに……モゴ、モゴ」
あまりに熱くなり、見境なく悪態をつきだした私の口を、ヘリオ先輩の手がふさぎ、そして耳元で囁きます。

「この国は立憲君主を謳ってはいるけど、その実は専制君主制、皇帝陛下の決断は絶対なんだよ。僕たちは当然その事を知った上で使えているんだよ。
だから駄目だよアリエラ、それ以上言ってしまっては、わかったかい」
ヘリオ先輩の、心地よく体に響く低音とこそばゆく耳に触れる息遣いが、高ぶった私の感情の中心を体中に分散させてぼかしてくれました。
そして落ち着きを取り戻した私は首を縦に振ります。
「……モゴ……」

「わかればいいよ」
ヘリオ先輩は口をふさいでいた手をどかしてくれました。
「でもよ、デ・モ、こんな決定をするなんて、皇帝陛下はアリエラ達の力を信用していないんじゃないの」
「そんな事ないと思うよ。
でもね、その鴨鍋行列には魔法使いを護衛として同行させるみたいだから、まともに向き合うのはよろしくないんじゃないかな。多分皇帝陛下も同じ考えだと思うよ」
その時、今まで黙った私たちの話を聞いていた「お人形」達が口を開きました。

『それはどういう意味なのじゃ、我が下僕のヘリオよ。
そこの白輝明姫（しろきあけひめ）ならいざしらず、この金剛輝姫（こんごうきき）様まで、あのいけ好かぬ女共に遅れをとるというのであるか！』
『あらら輝姫ちゃん、今日も元気でいいわね。
でもね、あんまりお姉さんの事を馬鹿にしたような口を利いてると……あの事を言っちゃいますよ』
『うっ……ごめんなさい。
……妾が怒られてしまったではないか、この馬鹿下僕』
『金剛輝姫さん、僕はそんなつもりで……』
ヘリオ先輩の言葉を遮り輝姫ちゃんの声が響きます。

『……何度言ったらわかるのじゃ！
妾を呼ぶ時は「金剛輝姫様」、「金剛様」、「輝姫様」のどれかであると……三つも選択肢を与えておるのに、何年妾の下僕をやっているのじゃ。
ほれ、も一度呼んでみるがよい』
『……金剛輝姫様……』
『長い！』

『……金剛様……』
『堅い！』
『……輝姫様……』
『馴れ馴れしい！』
『僕は一体どうしたらいいのですか』
『主の名前を心を込めて呼ぶ事が出来ぬとは、全くもって嘆かわしい。
もうよい、妾は疲れた。好きに呼ぶがよい』
二人の会話が一段落したところで、輝姫ちゃんの言葉が気になった私が口を開きます。

『ところで輝姫ちゃん』
『なんぞ用か、小娘。
そう言えば先ほど、我が下僕に何やら耳元でいわれていたようじゃが、頭の熱が他に回らなんだか？
良いのお、初々しき事とは、小娘には少々刺激が強かったようじゃのう』
私は改めてヘリオ先輩に囁かれた時の事を思い出すと、急に恥ずかしくなり自分の顔が赤く染まっていくのがわかりました。

『あらら輝姫ちゃん、アリエラちゃんまでいじめちゃ駄目でしょう。
お姉さんの口もいつまでも閉じていると思わないでね』
『わっ、悪かったのお、小娘……あっいや、アリエラ。
さ、何でも訊いてくれ。妾は何でも答えるぞ』
『さあ、もう大丈夫よ、アリエラちゃん』
『うん、ありがとう明姫姉』
私は理由を知らないが、輝姫は明姫をかなり恐れているようで、なんだかんだといっても明姫のいう事はよくききます。
その明姫姉に元気づけられた私は、気を取り直して口を開きました。

『輝姫ちゃんがさっき口にしていたけど、向こうの魔法使いが契約したお人形さんを知っているのかな？』
『よく知っておるぞ』
『あらアリエラちゃん、あの二人なら私もよく知っていますよ。
でもね、私たちと反りが合わないというのか……痛い娘達とは、あまりお友達にはなりたくないわね』
『確かに、あの二人はかなり変わっておるの』

（僕にはあなた達も、変わっているように思うのですが……）
（ヘリオ先輩、それ輝姫ちゃん達にも聞こえるって……）

『なんぞ言ったか下僕よ。も一度はっきりと言ってみよ』
『あっ、いや、僕も変わっているから、その二人とは仲良く出来るかな……って……』
『もう喋るでない！　しばらくこやつは放置じゃ』
輝姫ちゃんに叱られたヘリオ先輩は小さく縮こまってしまいました。
ヘリオ先輩は輝姫ちゃんの事を恐れて……と、いうより女王様のように崇めている気がします。
何でそうなったのか追求したい探究心と、いけない事を知りたい好奇心はあるんだけれども……十九歳と大人の世界に踏み込んでいるヘリオ先輩はさておき、まだまだツインテールが似合う十四歳の私が知るには早い気がします。

『そんなに変わっているんだ。なんだか会うのが楽しみ……になんかしていないんだから！』
『あらアリエラちゃん、でもね、もしあの二人と話す機会があっても、騙されちゃ駄目よ。
痛そうに見えても、結構計算高いからニコニコしながら話ている

うちに気が付くと、とんでもない事に巻き込まれちゃうわよ』
『確かにそうじゃ。あのおとぼけ娘にすまし女、「魔界コンビ」の名前は伊達ではないからの』
『えっ、あなた達の事を「神の贈り物」とか「魔王の使い魔」っていうじゃない、あの話は本当の事なの？』
『あらアリエラちゃん、そんな凄い通り名で呼んで頂けるのは嬉しい事だけど、そうじゃないわよ。
向こうの娘達の名前がね「黒鬼闇姫（くろきやみひめ）」と「銀界鬼姫（ぎんかいきき）」っていうのよ。
ほら黒い鬼の闇の姫とか、冷たい銀世界の鬼の姫とかいかにも「魔界」じゃない。名は体を表すっていうし嫌よね、すごく不気味よね』
『ものは言いようと思うけど、明姫姉』
『あら、そんなつれないわね、アリエラちゃん。
でもね、そんな人たちはおいといて、お姉さん達はほら、白く輝く明るいお姫様とダイヤモンドの輝きを放つお姫様よ。とっても明るく輝いている「天上界コンビ」なんだからね』
私は「何かのキャッチフレーズのような、その通り名は誰が付けた」とツッコミを入れたい気持ちを堪えました。

『って、表裏とか陰陽の存在って名前もだなんて、アリエラは知りませんでした……』
『名前まで陰陽の関係かどうかは知らぬが、本当に反りが合わぬのじゃ。
そもそもあやつじゃ、銀界鬼姫。
何が「黒鬼闇姫さん、なに一人で暴れているんですか」じゃ。
で、黒鬼闇姫の返事はこうじゃ「えぇー黒じゃないよぉ。だってぇ、何かいたんだよぉ」
となって、最後に「私はパートナーである黒鬼闇姫さんを叱ってきます。こんな事をお願いするのは心苦しいですが後をお願いしま

す」となるのじゃ。
パートナーなら最後まで片付けろと、言いたくもなるじゃろ。
全くもってあやつらのおかげで、妾も明姫も散々な目にあった事数知れずじゃ。
いつか必ず、痛い目を見させてやるのじゃ』
『そうね輝姫ちゃん。お姉さんとしても駄目なものは駄目と、しっかりと教えてあげるつもりですからね』
私は先ほどヘリオ先輩が心の中で呟いた言葉を思い出してしまいました。

『ヘリオ先輩の言った事がわかる気がする。
てか、それって反りが合わなとかじゃなくて、いたずらに巻き込まれたとか、尻拭いさせられたとか……そういうレベルのお話ですよね、モ・シ・カ・シ・テですが……で、その変わり者の仲良し四人組のちょっとした喧嘩の末路が人類滅亡って、シャレにならないから』
『あらら、アリエラちゃんにまで変わり者って言われちゃった。お姉さんちょっとショックです』
『あっ明姫姉、ごめん。そんなつもりじゃないんだからね』
『でもいいのですよ。お姉さんはアリエラちゃんの事が好きだから、許しちゃいます』

私は気が付きました。先ほどまで張りつめていた緊張の糸がいつの間にか切れています。いや、そうじゃなく緊張感そのものが消えてしまっています。今まで何度も経験している事だけど、明姫姉達が会話に絡むと不思議と緊張感が消えてしまいます。
私は、ほんのりと優しく温かいこんな雰囲気が大好きです。
でもそんな雰囲気は長続きしない事も知っています。

この日から三日後、詳細な情報がもたらされる事によって、再び

緊張の糸が張り巡らされました。

策略　2（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　3（前書き）

１０月３日　地の文と少々言葉使いを変更しました。

策略　3

「だから何で、ナ・ン・デ、こうなっちゃうわけなの！　全くわからな・イ！」
「軍議のたびに怒っていると身が持たないぞ、アリエラ」
「だって今回・モ、おかしいでしょ。変でしょ・ウ！
なんで、ド・ウ・シ・テ、潜入する強襲部隊からアリエラ達が外されているのよ。
どこを間違っちゃったのかしら。カ・シ・ラ」

軍議を終えて部屋に戻ると同時に、会議中はなんとか我慢できていた私の怒りが三日前と同じく爆発しました。
私の怒りの原因となり、本日軍議で主題となった情報の詳細とは、敵国の頭は十月三十日に、彼らのいう第一砦に向かって出発します。
第一砦までは三日程の道のりで、その道中は領内という事もあり、護衛は魔法使いの二人と近衛隊の約五十人と必要最小限であると、要約するとそんな内容でした。
前回の軍議で日和を決めていた帝国軍上層部に対して、先んじて詳細の報告を受けたアリス・ガードナー参謀がその対応策として、少数編成の部隊で第一砦までの道中を狙い、強襲することを昨日提案をしたのです。
これを受け本日の軍議において、イスカラ・ストントーチ参謀長、そしてナドウッド・ナイグラ元帥も強襲に賛成し、皇帝陛下も強襲案に対して正式に許可を出しました。
もっとも軍上層部の偉い方々のお考えという建前はさておき、本音は「全くうるさい娘だ。だが、これだけ情報があるんだから形だけでも動いておかないと、気まずいかもしれん。とりあえず動いておけば、もしかすると良い結果が出ちゃうかも」と、意味をはき違えた義務感と、甘い見通しといったところでしょう。

「あのおばさん、どんな凄い事をしたのか知らないけど、強襲案をヒヨヒヨ共に認めさせたのは褒めてあげるわ。
でもね、デ・モ・ヨ、人選が気に入らないの！」
「アリエラ、ガードナー参謀はまだ二十代半ばだよ。
おばさんはちょっと言い過ぎじゃないか？」
「アリエラより十歳以上・モ・年上よ、充分おばさんよ。気に入らなければ、オ・バ・ア・サ・ンでいいのかし・ラ。
何さ、ヘリオ先輩までかばっちゃって、あのおばさんにやられちゃってるわけなの。ワ・ケ・ナ・ン・ダ」
「そんな、やられちゃってって……女の子がそんな言葉使っちゃ駄目だよ」
「使ってもいいの！　ヨ・イ・ノ・デ・ス。
でもあのおばさん、こんな意地悪をするなんて、きっとアリエラの可愛らしさや若さに嫉妬しているからなんだ、ナ・ノ・ヨ」
「確かにアリエラは可愛いけど……でも、それが理由というわけじゃないと思う……」
「あれ、ヘリオ先輩もたまにはいい事を言うのね。
でも、デ・モ・ネ、そうなの、意地悪・ナ・ン・デ・ス。あのおばさんの色毒にやられちゃった先輩の頭でも、ちょっと考えればわかるですよね。ハ・ズ・ヨ・ネ！
潜入した強襲部隊がどんな状況に置かれるかなんて、ナ・ン・テ」
私が怒っている最大の理由に、辿り着けないでいるヘリオ先輩へ最大級のヒントを出しました。

「……あっ、そうか」
「ようやく、ヤ・ッ・ト、その毒されたニブチン頭でもわかったよう・ナ・ノ・ネ。
向こうの護衛には魔法使いがいるのに、不思議だよね。デ・ス・ヨ・ネ。

向こうにとっては、強襲部隊の人数は一人だろうが、それこそ帝国軍全軍をあげて強襲しようが、その軍勢に魔法使いがいないなら、数の多い少ないはマッタク、ゼ・ン・ゼ・ン・問題じゃないわけ・ナ・ノ・ヨ。

むしろ、ム・シ・ロ、大勢でお手てつないで、仲良く行進してきてくれた方が、一網打尽にできて都合がいいわけよ。

つまり、ツ・マ・リ・ヨ、無駄な犠牲が出るのがわかっているのよ。だから、デ・ス・カ・ラ、おかしいでしょ、変でしょ・ウ。

この作戦からアリエラ達が外されちゃうなんて、意地悪以外考えられないわ」

「意地悪かどうかは別として、確かに言われてみればだよ。

僕はてっきり、アリエラが戦闘に参加したかっと思っていたから……」

「ヘリオ先輩！　言っていい事と悪い事があるのを知っていますか？　知って・イ・ル・ン・デ・ス・カ・！

今の言葉は凄く失礼です！　シ・ツ・レ・イしちゃいま・ス！

アリエラはそんな好戦的な女ではありません・デ・ス！

アリエラは『戦闘が起きる前に、止めたい』と願っているし、それが主旨なんで・ス！　知ってるでしょう、知って・イ・マ・ス・ヨ・ネ！」

鈍いヘリオ先輩が、ようやく私の怒りの原因をわかってくれました。しかし今まで信頼をしていて、そのうえ私の契約の主旨を知っているヘリオ先輩に、最悪の勘違いをされていた事がわかって、悔しさのあまり涙が溢れ出してきました。

「ア、アリエラ、ご、ごめん。そんなつもりじゃないんだ。だから……その……涙は……本当、ごめん……」

不用意に放った自分の言葉で、目の前の女の子を泣かしてしまったヘリオ先輩は、かける言葉を見つける事が出来ないのか、そのまま黙り込んでしまいました。

その直後、この状況を見かねたのか明姫姉達の口が開きました。
『あららアリエラちゃん、今日も元気いっぱいご機嫌斜めで、お姉さん嬉しくなっちゃうわ』
『明姫、意味不明な事を言っておるでない。
しかし馬鹿下僕が本当に申し訳ない事をした。
妾もこうして頭を下げるでの、なんとか穏便に済ませて欲しいのじゃが、いかがなものかのう、アリエラ。
しかし、この馬鹿な下僕には手を焼いておるのじゃが、まさかここまでとは、全くもって情けないことじゃわい』
いつもながら、微妙に的を外した言い回しと、本心から出ているのかどうなのか、なんともつかみ所のない明姫姉と輝姫ちゃんの言葉でしたけど、少しだけ傷ついた私を優しく慰めてくれます。
『お姉さんは、アリエラちゃんが何を考えているのか一番わかっていますからね。
誰がなんて言っても、何があっても、アリエラちゃんの味方ですよ』
『妾にもしっかり伝わってきておるぞ。
本当にアリエラは優しい娘じゃ。
一応契約というのもがあるでのう。表立って、明姫のように言えぬのが非常に残念じゃ。
さっさと馬鹿下僕との契約なんぞ解除してアリエラと契約し直したいぐらいじゃ』
『あらら輝姫ちゃん、そういう事は思っても口に出しては駄目でしょう。
鈍感で、何度言っても馬鹿な事をしでかしてしまい、とても主様と呼べず、かといって下僕としても残念な契約主の彼かもしれません。
でも、何かの手違い、それとも間違いであっても契約を交わして

しまった以上、せめて必要最低限の取り決めぐらいは守って差し上げないと可哀想ですよ、輝姫ちゃん。最低限でいいのですからね。
ほら見てご覧なさい、ヘリオ君、すっかりしょげちゃって、ふふっ、落ち込んでいるわよ』
『その微妙な間合いでの笑みは……なんだかさらりと、もの凄い事を言っておる気がするのじゃが、明姫。
下僕にトドメをさしたような気がするぞ。
ふう……この一件、明姫が一番怒っていたようじゃの。まあ、無理もない事じゃがな』
『それと輝姫ちゃん、どさくさに紛れて怪しい事を言っていましたわね。お姉さんはしっかり聞いていましたよ。
アリエラちゃんと契約するとかなんとか。
当然、そんな事は許しませんよ』
『ほっ、矛先が妾に……ほ、ほらあれは……その……なんだ……ほれ言葉のあやというものじゃ。
なによりも、アリエラなら妾一人増えたところで、しっかりと受け止めてくれるだけの器はあるじゃろう』
『何が言いたのか、よくわからない輝姫ちゃんはさておき、さあアリエラちゃんも涙を拭いて下さいね』
『うん……ありがとう。
もう大丈夫、だいじょうぶだ……よ』
私は明姫姉に促された通り涙を拭いて、少し軽くなった気分で顔をあげる事が出来ました。

『そうそう、アリエラちゃんには涙は似合わないわね。笑顔が一番似合っているわよ。
お姉さんはアリエラちゃんの笑顔を見ている時が一番幸せなのよ』
『何を月並みな事を言っておる。そんな事はわかりきっているではないか』
『なんですって！　輝姫ちゃん。このお口がそんなひねくれた事を

言うのですか』
　そう言うと明姫姉は、輝姫ちゃんに向かって素早く手を伸ばし、指先で上下の唇を挟んで引っ張ります。
『……ふぉ・ふぇ・ん・ひゃ・ひゃ・い……ふぃひゃふぃふぇひゅ……』
『輝姫ちゃん、それはどこの言葉なんです。何を言ってるか、お姉さんには全くわかりませんよ。もう一度言ってご覧なさい』
　明姫姉は輝姫ちゃんの口を解放しました。

『ごめんなさい……痛いです……』
『そんな事はもういいとして、アリエラちゃん、皆の前で簡単に涙なんか出しちゃ駄目よ』
『えっ、アリエラだって、悲しい本を読んだり、感激する事もあるんだよ。そんな時も駄目なの、明姫姉』
『あらら、うまく伝わらなかったわね。
　涙はね、男を落とすための最大の武器になるのよ。私たちと一緒、最終兵器よ。
　ちょっとアリエラちゃんには早い話かもしれないけどね。
　でもねほら、ヘリオ君見てご覧なさい。アリエラちゃんの涙を見ただけで、あんなになっちゃったのよ』
『あれ？　でもあれは明姫姉が……一応聞こえていたんだよ』
『イイエ、あれはアリエラちゃんの涙で既に自我が崩壊していたのです。お姉さんは最後にちょっとだけ、ほんの少し、わずかに背中を押しただけなのよ。
　だからね、最後の最後までとっておくものなのよ』
『なんだか、あのおばさんみたいで嫌だな』
『でもね、そういう事を少しずつ覚えて大人の女になっていくのよ』
『うん明姫姉、わかったよ。アリエラもがんばっていろいろ覚えて、大人の女になるからね。

でも、あのおばさんみたいにはなりたくないな』
『あららアリエラちゃんは、アリスさんの事が嫌いなのかしらね』
『好きとか嫌いとかじゃないんだよ。
今回の作戦がどうしても納得できないのね』
『アリスさんには、何かしらの考えがあるんじゃないのかしら、軍では一番の切れ者なんですから』
先ほど明姫姉に放置され、落ち込んでいた輝姫ちゃんがようやく我に返り口を開き出しました。

『じゃが面妖な話である事には間違いないのう』
『えっ、輝姫ちゃんどうしたの、真面目だよ。どこか壊れちゃったのかしら?』
『アリエラ、壊れてはおらぬ。妾とて時には真面目に……えい、何を言わすのじゃ。
とにかくじゃ、此度の妾たちの役目というのが少々気になる』
『輝姫ちゃんもやっぱりそう思うでしょう。アリエラ達が皇帝陛下をお守りする為に、宮殿に残るなんておかしいわよ、変だよ。
どう考えても、戦場視察が囮で、別に控えている本隊が宮殿に攻め入ってくるなんてあるわけ・ナ・イ・ワ・ヨ。
あのおばさんだって、そんな事はわかっているはずなの、ナ・ン・デ・ス。
でも、デ・モ・ヨ、それなのにこんな事をさせるなんて、アリエラ達を戦場から遠ざけたいのかしら、カ・シ・ラ』
『アリエラちゃん、相手が絶対に無いと思っている事をするから奇策は成功するのよ。
もっとも今回に限っては百パーセントそんな奇策は使ってこないでしょう。というより、そんなのは策とかのレベルじゃなし、単に勢いで飛び込んでくるだけの無謀ですからね。
そうなるとアリエラちゃんの言っている通り、お姉さん達を戦場から遠ざけたいというのが本音ですわね。

もしかしてアリスちゃんって契約の主旨を知っているのかしらね。
それならお姉さん達が戦場から遠ざけられた理由もわかります。何があっても敵を叩き潰したいと思っている主戦派には、非常に厄介な主旨ですからね。アリエラちゃんどうなんでしょう』
『アリエラは言った事ないけど、もしかすると今までの行動から推測されちゃったのかな？
でも、あのおばさんは立場的にも情報集めが趣味になっているから、何らかの方法で知ったかもしれなよ。
あっ、もしかしてヘリオ先輩かしら、カ・シ・ラ』
私がヘリオ先輩にスパイ疑惑を投げかけると明姫姉達は、彼を注視しました。

『アリエラちゃんはどうしてそう思ったのかしら』
『だってほら、さっき明姫姉が大人の女には男を落とす武器があるって言ってたじゃない』
『あらアリエラちゃん、どこを間違っちゃったのかしら、まだお姉さんが教えていないはずの、はしたない方の武器に変わっちゃっているわね。
それはまた今度、お姉さんが教えてあげると
て、さっきみたいにアリエラちゃんが泣き叫んで喋っているのを盗聴されてたのかもしれないわね。
ふふ、さっきは可愛かったわよアリエラちゃん』
『明姫姉……恥ずかしいよ』
『おぬし達、何をおかしな空気を作り出しておるのじゃ。
それと……これ下僕よ、いつまでも惚けておるでないぞ。
ほれ、どうなんじゃ。アリエラの言った事は本当なのかのう』
輝姫に頭を小突かれたヘリオ先輩はちょっとだけ自我を取り戻しました。そして私たちは固唾をのんで彼に注目し言葉を待ちます。
『……アリエラ……ごめんよ……でも、あんな凄い……』

『うむ、何に対して謝罪しておるのかわからぬが、これは駄目じゃのう。
すまぬが今日のところはそっとしておいてくれぬかのう。こんな下僕でも、一応は妾の契約主じゃからのう』
『なんだかヘリオ先輩、凄い事になっちゃって、輝姫ちゃん、ごめんなさい』
『気にせずともよい。元はこの下僕のしでかした事でもあるしのう。また正気を取り戻したら、今まで通り付き合ってくれればよい』
『うん、当然だよ。
じゃあ、アリエラは、今回の作戦の意図をあのばばあに直接聞いてきます』
そう言った私は、すぐさま部屋を出ていったのですが、作戦の詰めの段階とか、なんだかんだとはぐらかされて、今日は話が出来ませんでした。

それから二日後、強襲部隊の出発日を迎え、つまりは動き出した作戦の変更が簡単に出来なくなった日に、ようやく私はガードナー参謀と直接話をする事が出来ました。

策略　3（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　４（前書き）

１０月３日　地の文を変更しました。

策略　4

「さてヘリオ・ブレイズ中将、アリエラ・エディアス少将待遇、お話できるようになるまで長々と待たせてしまったようですね。なにぶん作戦前は一番忙しい時期でしたので失礼しました。
それで私に何を訊きたいのですか」
参謀室へ通された私たちに、ガードナー参謀は世間話の一つもなしに尋ねてきました。

それにしても何度呼ばれてもしっくりこない称号です。もっとも立派な称号や地位がほしいわけでもないので、なんて呼ばれてもいいのですが……
魔法使いの私は、一般の兵士達より早く正規軍として配属されました。本来魔法使いは、将官の階級と責任を受け持つのですが、幼かった当初は正式な階級が付きませんでした。
それでも責任だけは、しっかり負わされていたのですが……いかにもユ・ウ・ノ・ウ・なオジサマ達が考える事ですね。
しかしそれでは一般兵に対して、示しがつかないということで「少将待遇」という、これまた、いかにもユ・ウ・ノ・ウ・なオジサマ達が考えそうな、中途半端な階級で呼ばれる事になってしまいました。
でもヘリオ先輩は、輝姫ちゃんに頭が上がらないヘロヘロ君なのに中将なんて、不思議です。

「ガードナー参謀、失礼を承知で伺います。
今回の強襲部隊の編成と行動ついて、その意図を教えていただきたいのです」
「エディアス少将待遇、確かにそれは分を超えた失礼な話ですね。
私は参謀として作戦を立てることにより、兵士達をある意味、盤

上の駒のように使える権利を持っています。そして、その兵士達が最も効率よく動いていただけるように、作戦内容を説明する義務も発生します。
ただしそれは、機密保持などの観点から必要最小限の説明となります。
ですから今回の作戦において、エディアス少将待遇の所属する特殊遊撃部隊に、この宮殿の護衛をお願いするにあたり、作戦内容を説明するという義務を必要最小限で行いました。
したがって、今回の作戦内容についてこれ以上、説明をする義務はありません。ましてや内容以上深いところにある意図、つまりは私の考えを晒せというのは致しかねます」
まともに正論をぶつけられて私は返す言葉を失いました。しかし、ただこうして黙ったまま時間をやり過ごすわけにもいきません。
そんな私を見かねたのか、珍しくヘリオ先輩の口が動きます。

「参ったなガードナー参謀、そんな義務とかなんとか、アリエラが意図なんて難しい言葉を使い出したから、そんなかた苦しい返事になったと。ですがね、もっと簡単に考えて下さいよ。
アリエラや私がお訊きしたいのは、向こうの戦力に魔法使いが入っているのがわかっている。それにもかかわらず、何故私たちを強襲部隊に入れていただけなかったのか、もしそれが不可能でも何故、敵の第一砦に最も近いアルダ砦に配置していただけなかったのか、という事です。
今のままでいけば、例え帝国一の精鋭を集めた強襲部隊だとしても全滅は免れません。そしてそれは何の意味も無い無駄な犠牲です。この意見は、誰がなんと言っても、例え帝国軍の勝利を信じる事が出来ない反逆者とされても、変える事はできません。当然そんな事は私が言わなくてもガードナー参謀はわかっているはずです。
しかし、もし私たちが強襲部隊に入っていたり、近くにいればそんな惨状は起きないと思うのです。これもガードナー参謀はわかっ

ているはずです。
ですから、この人選と配置は何故なんです？　となるわけです。
もっとも、どうしてもお話しいただけない理由があるのならば、無理にとはいいません。当然、ガードナー参謀にはそこまで話す義務もなければ、私達にそれを聞き出す権利もないわけですからね」
私は自分の耳を疑いました。理屈で負けて黙り込んでいる私を差し置いて、あのヘリオ先輩が自信たっぷりにものを言っているではないですか。

（あれ？　ヘリオ先輩、どうしちゃったんですか？　本当にあのヘロヘロヘリオ先輩ですよね。偽物じゃない・デ・ス・ヨ・ネ。
もしかして、マ・サ・カ、自我崩壊事件で脳内の回路が作り直されちゃったんですか？
それとも、やれば出来る人だったんですか？　そうなの？　そう・デ・ス・ヨ・ネ）

明姫姉達がこの場にいないのをいい事に、一人ツッコミをしていた私は、初めて見るヘリオ先輩の凛々しい姿……かな……を見て、惚れそうに……なるわけないけど、ちょっと、いや随分引いてしまった、じゃなくて見直しました。

「わかりました。あなた達がそこまで言うならお話しましょう。今後の作戦に影響が出るのも困りますので、ただし決して他言はしないで下さい」
そう言うとガードナー参謀は重い口開きました。

「今回の作戦を立案するにあたり、最初にあなた達特殊遊撃部隊を全面に押し出した作戦を立ててみました。その後机上でシミュレートした結果、どのパターンで行ったとしても、大きな問題が二つ残されてしまうのです。

一つは言わずとしれた、あなた達魔法使いの動きです。向こうの魔法使いと相対し、お見合いになるまではわかります。しかしその後の動きが読めないのです。
こちらの事が全て終わるまで、一切動かないでいてくれるのならば、当然問題はないのです。
しかし無論向こうもそんな事を言っていられない状況ですので、何らかの動きを見せるでしょう。
その結果は、あまり考えたくありません。
せめて向こうの魔法使い達の主旨がわかれば、あなた達と比べて、何らかの対応策が打ち出せるかもしれないのですが……自身の力量不足を感じます」
「えっと、そう言い回すということは、ガードナー参謀は、私達の主旨をご存知だったんですね」
どこの誰から訊いたのか……わかりきった事なので、私はそれ以上は言いませんでした。

「私は作戦を立案するという立場上、兵士の皆さん、特に上に立つ方達の事をよく知る必要があります。
そんな私を一部の方は『聞き耳を立てたり、覗き見が趣味の、オ・ネ・エ・サ・ン』なんて陰で呼んでいるみたいで、少しショックを受けてしまいました。
主に誰が言っているのかは、さておきますが、当然エディアス少将待遇やブレイズ中将お二人の事もいろいろと調べさせていただいております。その中には契約の主旨についても入っております。
それにつきましては、そちらの見た目いい男のブレイズ中将と、大人同士のお付き合いをさせて頂いたら、すぐに教えて下さりましたわ」
「あ、あのガードナー参謀、その話はしない約束では……」
「あら私とした事が、情報ソースを明かすなんて大失態ですわね、これは失礼いたしました」

私はいつも通りの、ヘロヘロなヘリオ先輩に戻ったのを見て、変な安心感に包まれました。

「ヘリオ先輩、コ・ド・モのアリエラは、大人のお付き合いとはどんな事か、深く追求するつもりはありません。したくもア・リ・マ・セ・ン。ソーゾーもデ・キ・マ・セ・ン！

でも、部屋に戻ったら、輝姫ちゃんにしっかり報告いたしま・ス……フ・ケ・ツです」

私がそう言うと、ヘリオ先輩の顔色がみるみる青くなっていきます。そして肩を落としうなだれてしまいました。

「そろそろ続きをお話してもよろしいですか？」

「あっ、ガードナー参謀、お話を中断させてしまいすみませんでした。

一区切りつきましたので、続きをお願いします」

（なにさ、あんたが原因で中断したようなものじゃない・カ・シ・ラ）

「あら、エディアス少将待遇、何か言いたそうですね」

「いいえ、ブレイズ中将があまりに情けなくて……どうぞ、気にしないでお話をお願いします」

「では遠慮なく話を続けます。えっと残された、もう一つの問題でしたわね。

最初に立案した作戦内容を簡単に説明すると、あなた達魔法使いがお見合いをしている隙に、帝、つまり敵の総大将を暗殺するなり致命傷を与えるという事でした」

「えっ、暗殺とか凄く物騒なお話ですね」

「今は戦乱の時代ですから、そんな話はいくらでも、そしてこれからもたくさん聞かされますよ」

私はそんなこと当然理解しています。でも直接耳に入れると、気分が滅入ってしまいます。
少し気落ちしたそぶりを見せてしまった私にかまわず、ガードナー参謀はそのまま話を続けました。

「しかし、現在の帝国軍にそのような都合の良い武器は、残念ながら無いのです」
「都合の良い武器って、何の事ですか？」
「つまりこちらの気配を悟られない距離から、一瞬の間に、一撃で、そして正確に帝をとらえれる武器の事です。旧文明ではそんな武器が、いろいろとあったらしいのです。その技術が失われてしまった現在、都合の良い武器は存在していないのです。
それでも強いて言えば、あなた達魔法使いなら、何とかなるかもしれません。ですが敵と対峙し隙を作るという役目をおっているあなた達には、無理なんです。
当然あなた達のどちらか、若しくは両名を暗殺部隊にまわす事も考えました。でもそれですと向こうの魔法使いを、止める事が出来ないのです。
つまり、この強襲という作戦は成立しないという事になるのです。
向こうの参謀もそれを織り込み済みといったところでしょう」
「では、デ・ハ・何故？　ナ・ン・デ、強襲部隊を出すのですか？
無駄な犠牲となるのが、わかっているじゃないデ・ス・カ！
こんなのは間違ってます。体裁ばかりを気にする軍上層部の横暴です」
私は「間違った事を言っていない」という自信を持ってガードナー参謀を責めたてました。
ですが彼女は顔色一つ変えないで、静かに言います。
「強襲部隊に選ばれた二個小隊二十名の兵士達は帝国軍兵士の禁を犯したのです。にもかかわらず、未だに裁かれていない。もし正当

にさばかれれば、死刑が確定するでしょう」
「でも、だから、ダ・カ・ラ・ッ・テ、それって見せしめの公開処刑じゃないのデ・ス・カ！
しかも、勝手にやってはだめじゃないデ・ス・カ！
そんなのは軍法会議で裁く話じゃないのデ・ス・カ」
「エディアス少将待遇、少し落ち着いて私の話を聞いてくれないか」
ガードナー参謀は私の高ぶった気持ちを落ち着かせようとしたのか、はっきりそう言って一呼吸おいた後、私と視線をしっかり合わせ続けて語り出します。

「裁判官でない私は、当然のことながら禁を犯した彼らを裁く権利は持っていない。
軍法会議への告発も考えたのですが、残念ながらその行為は、彼らを裁くのではなく、昇進を早めてしまう可能性があったため、出来なかった。
それでも禁を犯した二個小隊を見逃す事ができないでいた私は、この作戦で、ある意味合法的に彼らに消えてもらおうと考えたのです」
「だからと言って全滅が当たり前の作戦を立案するなんて……彼らは一体何をしたんですか？」
私は納得いく答えがほしくて、ガードナー参謀に詰め寄ります。
彼女は少しの間を開け、覚悟を決めたかのように口を動かし始めました。

「……あなた達は『キノモ』という名前を聞いた事ありますか？
二百人程が住んでいる……いいえ、住んでいた、辺境の極小さな集落の名称です」
「名前は少し前に何かで……」
「アリエラ、あれだよ、戦況報告書にあった『反逆者の村』だよ。
二ヶ月程前に集落全体が焼失して、確か住民も……生き残ってい

ないとか……反逆を問われ追いつめられた住人達が、自害の道を選び自ら火を放った。その火災に討伐部隊も巻き込まれそうになったとか……」
いつの間にか正気を取り戻していたヘリオ先輩が口を挟んできました。

「報告書では確かにそうなっています。しかし事実は全く違っています」
「へっ、でも、デ・モ・ヨ、報告書って、公文書ですし、皇帝陛下の印もありましたし……何をどう間違えちゃったの？」
「一言で言えば、軍の体裁を保つため、己の保身のために捏造、いや事実そのものをゼロから作り直してしまったと、言った方がよいのかもしれません」
「でも、それは、ソ・レ・デ・ハ……報告書と真逆な……」
そのとき私の頭に浮かんだ惨状は、最も残酷で無惨なものでした。そして私は話の途中で言葉を続ける事が出来なくなりました。

「多分あなた達が今想像している通りの事が起きたのです。
あの事件の真実を話ておきます。しかし今となっては、証拠が一切残っていませんから、信用するかどうかは、あなた達次第です。
あの時、確かに五十人程の反逆者が潜んでいました。確証を得た私は、直ちに討伐部隊を編成して派兵しました。ただし反逆者達の潜伏地はキノモの集落から東に五キロ程離れたところにある建物、旧文明の遺跡でした。
討伐部隊に包囲された反逆者達は、その数を減らしながらも、隙をみて遺跡からキノモ集落に逃げ込みました。そして住民を人質に立てこもり、持久戦の構えを見せたのです。
私はこのような最悪の事態も想定していましたので、討伐部隊の隊長には交渉術と粘り強さに定評のあったトークマン大尉を任命していました。

彼は評判通り、粘り強く交渉をしていました……しかしそれは、はじめの二日間だけ。
交渉を始めて三日目を迎えたときの事です。トークマン隊長に何が起きたのかわかりません。突然彼は部下に向かって命令を出したそうです。
『集落を完全に包囲しろ』『一人も集落から出すな』と、二つ。
その後の事は、捏造された報告書を読んで下さっていれば、何が起きたのかお話するまでも……これ以上私、お話……」
私はあのガードナー参謀が目の前で、大粒の涙を流しながらふさぎ込んでしまう姿を、見る事になるとは思ってもいませんでした。
兵士達を盤上の駒のように考える、いや考えなければいけない立場のためなのか、自分の弱いところを決して人には見せず、気丈に振る舞っていた彼女の本当の姿を、少しだけ見た気がしました。
そして同じくその姿を見たヘリオ先輩がいち早く声をかけます。

「ガ、ガードナー参謀、大丈夫ですか」
「わ、私……、あつ……少し……取り乱して、みっともないところを……ごめんなさい。
まだ……こんな私にも、流せる涙が残っていたのですね」
そう言うと少し落ち着いたのか、ガードナー参謀は話を続けます。

「涙を流すなんて何年ぶりかしら、なんだかスッキリしました。
私の恥ずかしい部分を見たあなた達には、今更隠す事はないわね、ブレイズ中将」
「いや……恥ずかしい部分って……まあ確かに見ちゃいましたけど……」
「ヘリオ先輩！　何を、いったいナ・ニ・ヲ、想像しているんですか！
不謹慎で・ス！　不潔で・ス！　汚らわしいで・ス！」
「アリエラ・エディアス少将待遇、あまり怒らないで下さい。若い

殿方にはよくある勘違いなんですから。
あら狭間な年頃のあなたには、ちょっと早いお話だったからしら」
（ちっ、このおばさん、純真無垢な乙女の前で何を言い出すのか、全く困ったもんだ）
「それはさておき、お話を続けさせていただきます。
今回の強襲は建前はどうあれ、『私怨を晴らす』が本音です。
私にとってこの作戦の成功は、先ほども言ったように、強襲部隊が全滅してくれる事です。
この作戦を立案するにあたり、当然自身の心では葛藤がありました。
でも、あの事だけは許せない。
あの時キノモには、私の恋人……元恋人がいたのです。
彼は三年前、戦闘中に受けた傷により、やむなく軍を去り、生まれ故郷のキノモに戻りました……あの惨劇の原因になってしまった反逆者達の情報は、彼からのものでした……でも……私は……私は……」
ガードナー参謀は先ほどと同じく言葉に詰まり、溢れ出す涙を抑える事が出来なくなったようです。そしてこちらも同じく、そんな彼女を見かねたヘリオ先輩が慌てて声をかけます。
「ガ、ガードナー参謀、もう充分わかりました。
なっ、アリエラももういいだろう。
いらぬ事まで思い出させていまって、ほ、本当に申し訳ございませんでした」
これ以上話を聞く事が出来なくなってしまった私達は、ガードナー参謀が落ち着くのを待って参謀室を後にしました。
ガードナー参謀との話で作戦の意図がわかった私達でした。しか

し、ここまで根深いものだったとは……想像できませんでした。
彼女の気持ちも充分伝わってきました。それでもなお、今ひとつ釈然としないものが残ってしまったのも事実です。
契約の主旨を「闘いが起きる前に止める」としている私なのに、本来起きる事のない、必要ない闘いでさえ、止める事が出来ません。
そんな悔しい思いが、わずかに残された可能性に向かって私を動かしました。

十月三十日、私は作戦通り皇帝陛下護衛のため宮殿に入るとすぐに、強襲計画の中止を直訴するため、皇帝陛下のもとに向かいました。

策略　４（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　5

『わぉ神楽君、すっごい良いお天気だよぉ。
ねぇねぇ早く、起きて起きてぇ』
今日から帝の戦場視察に護衛として同行するのだが……何か勘違いをして、日の出とともに騒ぎまくっている闇姫に、否応なく起こされた。

『あの闇姫さん、鶏じゃないんだから……まだ睡眠の時間はたっぷり残っていますので……おやすみ……』
三時間程しか寝ていない俺は、そのまま布団に潜り込んだ。

『だめだよぉ神楽君、今日から遠足だよぉ。早く起きて、お弁当の用意をしないとだめだよぉ。
あぁっ大変だぁ、おやつ買ってないよぉ、どうしよぉ神楽君、ねぇ起きて起きてぇ』
『闇姫さん……何度も言ってますが、遠足じゃない。
だから、お弁当もおやつも必要無いのです。
ということで……おやすみなさい……』
しかし遠足熱が更に加熱した闇姫は止まらない。そしてついには最悪な事を言い出した。

『えぇ！　だって遠足なのに、お弁当やおやつがいらないなんて、意味わかんないよぉ。
そうだ、鈴音ちゃんにお願いしよぉ。でも銀ちゃんが「あら黒鬼闇姫さん、まったく、はしたないですわよ」なんて言って怒るかなぁ。
でも大丈夫だよねぇ、黒には神楽君がついてきてくれるもんねぇ』
『いつの間に俺まで朝駆けに参加する事になっているですか？　闇

姫さん。
ってか、鈴音はマズい。意味もなく起こされた鈴音の朝はヤバいぞ』
『でもぉだってぇ神楽君、鈴音ちゃんは血のつながっていない妹で恋人でしょぉ。朝起こしながら襲っちゃうくらいした方が、きっと鈴音ちゃんも喜ぶよぉ』
『闇姫さん、そういうお話では……それと随分と派手に勘違いしていますよ。
普通は妹が兄を、姉が弟を起こしながらこっそりと襲うもんです』
その時、扉を叩く音と同時に鈴音の声が聞こえてきた。しかし妄想中の俺は現実と脳内の区別がつかなかった。

「兄さん、起きてるの？　入るわよ」
『そうそう、こんな風に入ってきて、なかなか起きない駄目兄貴の寝顔を見ているうちに悪戯心で、口づけしたり、布団に潜り込んだりしてだな、兄貴が目を開けると……って……あっ！　鈴音さん……おはようございます……』
俺は、自分で起きてきた鈴音の姿を見て、小さな安心感に包まれた。しかし同時に、別の意味でヤバい状況におかれている事に気が付いた。

「兄さん、随分怪しい妄想をしていたようですけど、それは一体どういう事でしょうか。ご説明いただけますか？」
「それは、闇姫が……って、あれ闇姫は？」
『神楽様、黒鬼闇姫さんは、ここにいませんわよ。
しかし、そんないかがわしい妄想を口にまで出しては、いくら殿方といえども少々はしたないですわよ。
でもそうしてほしいのなら、はっきりと鈴音様に伝えておけば良いのですわよ。
鈴音様も快く引き受けて下さりますわ』

『って、鬼姫ちゃんまで何を言ってるのかしら』
目尻をあげた不気味な笑い顔でにじり寄る鈴音、そして恐怖のあまりたじろぎ、じわりと後退する鬼姫。
二人の怒りと恐怖が交錯し、臨界点に達した。

『あぁ鈴音ちゃんと銀ちゃんだぁ、おっはよぉだね』
嬉しそうな声と共に闇姫が、どこからともなく現れた。

『あら闇姫ちゃん、おはよう』
振り向いた鈴音は、満面の笑みを浮かべていた。

『変わり身速っ！
てか闇姫、どこに隠れてたんだ。鈴音達におかしな誤解をされちゃったじゃないか』
『隠れて何かいないよぉ。黒、おやつを探していたんだよぉ』
『おやつって……だから……』
『そうだ、鈴音ちゃん、黒ね、お弁当つくってほしいんだけどぉ』
『お弁当って、どうしたの闇姫ちゃん』
『だってねぇ神楽君がねぇ、自分で遠足って言ってるのにぃ、お弁当もおやつもいらないって言うんだよぉ。
黒、一人じゃ作れないし、困ってたんだよぉ』
『えっとですね闇姫さん、俺の言い方も悪かったかもしれませんが、かなりの確率で言葉の意味を正反対に解釈しています』
『もういいよぉ神楽君、意味わかんないしぃ。
でもぉ鈴音ちゃん、お弁当作ってくれるよねぇ』
『言ってる意味がちょっと……でもいいわ闇姫ちゃん、じゃあ私の部屋で一緒に作りましょうか』
『やったぁ、やっぱり鈴音ちゃんはわかってるぅ』
上機嫌になった闇姫を鈴音が連れて行ってくれたおかげで、静かな朝のひと時が戻ってきた。

俺は出来の良い妹に感謝しながらもう一眠りした。

「兄さん、いい加減起きて下さいよ。もうじきお昼になりますよ」
眠りが浅かったのか、俺は鈴音が扉を開ける音で目が覚めていた。しかしちょっとした悪戯心と、もしかしてあるかもしれない甘い出来事を期待して、なかなか目覚めない駄目兄貴のふりをした。

「早く起きて支度しないと遅れますよ。
それと、闇姫ちゃんが怒ってますよ」
(はい？)
次の瞬間、俺は腹に鈍い衝撃を感じた。そしてそれは二度、三度と繰り返された。

「グゲェ……って、なんだ？」
堪らず目を開くと、俺にのしかかる闇姫の姿が飛び込んできた。そして跳ねた……更に鈍い衝撃を感じると同時に、騒ぎ立てる闇姫の声が耳に入ってきた。

『やったぁ神楽君が起きたよぉ。でもね、黒は怒っているんだよぉ。黒く染まっちゃいそうなんだよぉ』
『闇姫さん、何を怒っているのかわかりませんが、お腹の上で飛び跳ねるのをやめて、ぼちぼちおりてくれませんか』
『だってぇ神楽君がお寝坊さんだからぁ、みんな遠足に出発できなかったんだよぉ。
だからねぇ、お弁当も食べられなくなっちゃんだよぉ』
『えぇっと鈴音、大変申し訳ないお願いですが、闇姫にご説明して頂けませんか。
俺は、もう疲れました』
『そうね。兄さんの下手な説明でいつまでも勘違いしていては、闇姫ちゃんが可哀想だもんね』

そう言うと鈴音は、俺達の話を聞いて怪訝な顔をしていた闇姫に、優しく話しかけた。

『闇姫ちゃん、出発はお昼を食べてからなのよ』

『えぇっ、黒は聞いてないよぉ。神楽君もそんな事言ってなかったしぃ。

……そうかぁ、鈴音ちゃんは神楽君をかばっているんだよねぇ。お兄さんだし、恋人だもんねぇ。

だけど出来の悪いお兄さんとか恋人を持つと、大変なんだよねぇ。でもねでもねぇ、今はこんな神楽君でも、本当はやれば出来る子だって、黒は知ってるんだよぉ。

だからねぇ、永ぁい目で見てあげてねぇ。

それまではいろいろとごめぇわくをかけますけどぉ、よろしくお願いしますぅ……ペコ』

『闇姫ちゃん、どこを間違ったのか、私、何故か元気づけられたというのか……微妙にけなされている気がするんですが、お願いされておきますわ……でも兄さんの苦労……今ならわかる気がします……』

『鈴音、わかってくれたか……てか闇姫さん、あなたは一体何者なんですか？』

『やっぱり神楽君は変だよぉ、黒は黒だよぉ。そんな事を言ってるからぁ、鈴音ちゃんが苦労するんだよぉ』

『ごめんなさい、全て俺が悪かったです』

『うん神楽君、わかればいいんだよぉ。

でもお弁当はどうしよぉ。黒、お腹が空いちゃったけどぉ、お弁当はお外で食べないといけないんだよねぇ。どうしよぉどうしよぉ、せっかく鈴音ちゃんが作ってくれたのにぃ』

『闇姫ちゃん、お弁当の食べ方ついてはちょっと違っているけど……いいお天気だから、外に出てみんなで食べましょう』

『わぉ、さっすが鈴音ちゃん、わかってるぅ。

神楽君も早くぅ早くぅ』
闇姫にせかされた俺の支度が終わると、四人で本殿前広場に出た。そして隅の木陰に陣取り、時々注がれる周りの視線に少し照れながら弁当を食べた。
しばらくすると闇姫が何かを思い出したように騒ぎ出した。
『あぁっそうだ神楽君、大変な事を忘れていたよぉ』
『どうしたのかな闇姫、なんだかまた怪しい事を言い出しそうですね』
『神楽君、失礼だよぉ。それじゃぁ黒がいつも変な事を言ってるみたいだよぉ。
神楽君だよぉ、いつも変な事を言ってるのは神楽君の方だよぉ』
『闇姫さん、何を間違っちゃっうと、そうなるんですか』
『ほらぁ、やぁっぱり神楽君が変だよぉ。
黒は何にも間違ってないんだよぉ。神楽君が間違ったんだよぉ』
『もういいです……全て俺が変という事にしておいて下さい。
で、大変な事って何ですか』
『そうだ神楽君が話を脱線させるから、忘れちゃうところだったよぉ。
おやつ、そうおやつだよぉ。鈴音ちゃんがせっかく用意してくれたのに食べれるのかなぁ。
だって三時だよぉ。三時に食べないと駄目なんだよぉ』
『闇姫ちゃん、大丈夫よ。ここを午後一時に出発するから、ちょうど休憩をするのが三時頃よ。だからその時、こうしてみんなで食べましょうね』
『わぉ、楽しみだなぁ、でも凄いよぉ鈴音ちゃん。何でも知っているんだねぇ。その上神楽君が危なくなると登場する正義の味方だよねぇ。
あっそうかぁ、鈴音ちゃんも神楽君の事を愛しちゃってるからだよねぇ』

気品の問題になるとツッコミを入れてくる鬼姫が、やはり口を出してきた。

『黒鬼闇姫さん、そう言うのを「冷やかす」といって、とってもはしたない事ですわよ。

確かに鈴音様は神楽様を愛しています。曲げようのない事実ですわ。

したがって応援して差し上げるのは当然のお話なのです。でもこういう事はとっても繊細なお話なのです。

鈴音様をご覧なさい。黒鬼闇姫さんに大声で、自分では神楽様になかなか言えないことを、はっきりと指摘されて、あんなにお顔を赤く染めて照れてしまいましたわ。

ですから、静かに温かく見守る……ウゲェ……痛いですわ』

鬼姫の話が途切れると同時に鈍い音が響いた。なんと、憤怒の闘神と化した鈴音の鉄槌が、鬼姫の脳天を直撃しているではないか。

『銀界鬼姫さん、優しい私でもそれ以上は許しませんよ。

そのお口をバッテンのり付けしますわよ』

『ご、ごめんなさい……ですわ』

『わぉ銀ちゃんが怒られているのぉ、初めて見ちゃったよぉ。

あの銀ちゃんを叱れる鈴音ちゃんってぇ、やっぱり凄いよぉ。

神楽君、鈴音ちゃんのお嫁になれてぇ、良かったよねぇ』

『闇姫さん……やっぱりいいです。

鈴音……闇姫が俺をいじめるんだ。こっちに来て「私の嫁に何をする」って、闇姫を叱ってくれ』

近づいてきた鈴音が俺の前で立ち止まった瞬間、頭の中に鈍い音が響き渡った。

『鈴音さん、ごめんなさい』

『では罰として私を腕枕しなさい』

『って、ここでは……周りの視線が……』
『兄さん、仲の良い兄妹の「公然の秘密」ですからいいのです！』

ゆっくりと流れる時間の中、みんなの笑顔に囲まれた俺は、ひと時の幸せな時間を堪能できた。それはきっと鈴音も同じだろう。
とりあえず今は、闇姫の「お弁当は外で食べるもの」というわけのわからないお弁当理論に感謝しておこう。

しかしこの後、視察という名目で戦場に向かう俺達にとって、この時間は長続きしない事はわかっている。

「間もなく帝が参られる。各隊、整列して待たれよ」
宮内侍従長の言葉によって安らぎのひと時は終了した。

『兄さん、始まるんですね』
俺に腕枕をされている鈴音が、不安気な表情でこっちを見た。

『みんないるから大丈夫だよ。
少なくとも俺には正義の味方の鈴音がいるからね』
『全く兄さんは……ありがとう』
『さて俺達も並ぶとしよう。遅れると宮内や天守に嫌味を言われるぞ』
『うん、そうだね』
そう言うと俺達は起き上がり広場中央に向かった。そして少々好奇の視線に晒されながらも列に加わった。
ほどなくして帝が姿を現し、従者達に一言だけ声をかけた。

「それでは道中、よろしく頼みます」

そして帝が籠に乗り込むと、視察団は本殿正面の御門から出発し

た。

『わぉ神楽君、遠足が始まったよぉ』

『あの闇姫さん……やっぱりもういいです……』

策略　5（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　6

帝の護衛として同行した二日目の朝、慣れない枕のためか、珍しく朝早く目を覚ました俺だった。そして目覚めた俺に、いち早く気が付いた闇姫が、大声で朝の挨拶してきた。

『神楽君おっはよぉ！　今日モゲ……』

しかし中途半端なところで口ごもった。

不思議に思った俺が、寝ぼけ眼を擦りながら周りを見渡した。まず目に入ったのは、闇姫の口を青い顔でふさいでいる鬼姫の姿。そして次に可愛らしい寝息を立てて、幸せそうな寝顔の鈴音。

起きがけで状況判断が鈍っていた俺は、その寝顔に目を奪われながら、少しずつ自分のおかれた状況がわかってきた。

『いっ、いかん！　鬼姫、そのまま闇姫を抑えていてくれ！』

『神楽様、承知……』

俺は闇姫と鬼姫の二人を抱え、部屋の外に飛び出した。

意味も無く起こされた時に現れる、黒化鈴音の恐怖を俺と鬼姫は知っている。あれは決してこの世に現れていいものではない。

しかし部屋に戻るにも、天然目覚ましの闇姫を連れたままでは、部屋に戻れない。しかたなく俺達は、休憩所で時間をつぶす事にした。

『ふう、なんとか鈴音の黒化は阻止できたようだ』

『はい神楽様、間に合いました。

それにしても黒鬼闇姫さん、あれほど静かにして下さいとお願いいたしましたのに、困りますわよ』

『だってぇ、銀ちゃん駄目だよぉ、朝の挨拶は元気よくしないと駄

目なんだよぉ』
『確かにそうですが、それは神楽様と二人の時だけにして下さいませ』
『銀ちゃん意味わかんないよぉ。挨拶は元気な方が……あぁっそうかぁ、鈴音ちゃんは神楽君に優しく起こされたいんだもんねぇ。そうか、黒、気が付くのが遅かったよぉ』
『闇姫さん、俺達は鈴音を起こす事を、極力避けて通りたいんです』
『そうですわよ。いくら鈴音様が神楽様を愛しているからと言っても、あの状態は……』
言葉を途中で止めて、固まった鬼姫の視線を追った俺も、振り向いた状態のまま固まった。

『兄さん、銀界鬼姫さん、本当にあなた達は……私もお話に加わって、よろしいかしら』
俺達……主に俺と鬼姫を見下ろし、至極不自然な笑い顔を浮かべた鈴音が、いつの間にかそこにいた。

『そっ、そうだね鈴音。会話は楽しくしないと……目が笑っていないようですが……』
『私が心から笑えないのには、理由があります』
『鈴音ちゃん、おっはよぉ。今日もいい天気だよねぇ。遠足日和だよねぇ』

（闇姫、お前は本当に凄いよ。今の鈴音に……あっ……しまった）

『遅いです。全部聞かせて頂きました。お兄様』
『ご、ごめんなさい、心より謝罪いたします』

こうして慌ただしい朝は過ぎていった。
俺達は朝食をすませ、出発の準備を整えた。

視察団は宿の前で帝の支度が終わると、定刻通り出発した。

「今日も何もないと良いですね。

それと今晩の部屋割りも気になります」

「鈴音、道中はいざ知れず、部屋割りについては、あきらめた方がいいと思う」

「やっぱりですか……」

昨日は途中立ち寄った村での会談が長引き、三時の休憩が遅れた。当然、三時のおやつにこだわっていた闇姫が騒ぎまくった。幸いな事にそれ以外、特筆するような事件は起きなかった。

ただ宿の部屋割りで、経費節減とかで俺と鈴音は同室させらた。今朝の騒ぎが予想できた俺は、財務担当の貝塚に文句を付けにいくと、「兄妹なので問題無いのでは、それとも問題になるような、いかがわしい関係なのか」と、天守近衛長殿に入れ知恵されたとしか思えない、嫌味たっぷりな答えが返ってきた。

『鈴音ちゃんは神楽君と一緒に寝るのは嫌なのぉ？』

『えっと「寝る」って闇姫ちゃん、微妙な意味合いの言葉ですけど、嫌とかじゃなくて……むしろ……って、何を言わすんですか』

『鈴音様、他の方に聞こえない時くらいは、素直に「その腕に抱かれて、一緒に寝たい」と言ってしまった方が……』

『銀界鬼姫さん、やっぱりそのお口は、バッテンのり付けかしらね』

『ごめんなさい』

俺達がそんな馬鹿話をしているうちに、視察団一行は、本日最初の集落に到着した。

戦場視察といっても砦までの道中、いくつかの集落を通る。お忍びならともかく、今回は公である。帝の意向もあって、それぞれの集落で首長と会談をする時間を設けてある。

そしてこの集落でも帝が首長と会談を行っていた。

その時、会場を警護していた俺達に、住人から「不審な集団を見

たと」いう情報がもたらされた。

「兄さん、大丈夫かしら」

「ああ、大丈夫だ。予想通りだよ」

不安気な鈴音を安心させるためにそう言ったが、本当は「聞いた通り」が正解だった。

出発前に軍師の社守静(やしろもりしず)から呼び出された俺は「二日目にバルドア帝国軍の強襲の可能性がある」と聞いていた。確証が持てなかった今までは、いらない不安を煽るのを避けて黙っていた。情報にあった不審な集団は、間違いなく帝国軍の強襲部隊だろう。

ただ、社守軍師はこうも言った。

「万が一、この馬鹿げた強襲作戦があったとしても、あなた達がいる限り、たとえ強襲部隊に魔法使いが入っていても、この強襲の成功はありえない。

帝国側の軍師も、強襲が作戦として成り立たない事を間違いなくわかっている。

それでも、もし強襲を仕掛けてくるのなら、それは派兵された強襲部隊に対して、なんらかの悪意を持っているとか、法で裁けない者を派兵して、敵に裁いてもらうという意味合いを持った作戦となる。

うふふ、神楽ちゃん、強襲が有ると良いわね……おもいっきり、楽しめるわね……うふ……帝国側公認なのよ……ふふ……共同作戦ね……ふふふ……二日目が楽しみね……でも残念だわ、こんな楽しい出し物がありそうなのに、参加できないなんて……誰か変わってくれないかしら、あたしが一緒なら、どんな三文芝居も、最高の見せ物にしちゃうのに……うふふ、可能性の問題よ。

でも万が一、そんな情報が入ったら、あたしの言葉を思い出してね。

神楽ちゃん達が前面で、普通に戦えばそれで終わりよ。ふふ、で

も死体はできるだけ残すようにしてね。帝もそれを望むはずよ。そこだけちょっと頭を使ってね。
あとヘタレの天守達には盾でも持たして、帝の周りを固めさせておけばいいわ」

とりあえず社守軍師の本音というか二重な性格はさておき、軍師として信頼しきっている。そんな彼女の言葉もあって、俺は慌てる事はなかった。
しかし視察団はその情報によって、ざわめき立っていた。
無理もない近衛隊と言っても、基本的に戦闘とは無縁の集団である。もっとも後詰めで座っているだけの俺達も似たようなものであるのだが……常に先陣を切って戦う、彩華をはじめとする神国の優秀な侍や兵士に感謝である。
とりあえず俺は、会談が終わるのを待って、帝の下に参じた。

「話は先ほど、天守から聞いたよ。
あの馬鹿、慌てふためいて会談途中で、割り込んできやがって、全く困ったもんだ」
「彼の気持ちもわからなくもありませんので、その辺りで勘弁してあげて下さい。
ところで、今後の予定はいかが致しましょうか」
「俺は予定を変えるつもりはないよ。神楽はどうなんだ。何か不安でもあるのか？」
「いいえ、特には……」
俺は出発前に社守軍師と話した内容を伝えた。「ふっ、共同作戦か。我らが軍師は全てをお見通しのようだな。いかにも静らしい答えだ。
なら何の不安もないな、予定通りの行動とする。我が身我が命、お前達に預けるぞ、神楽」
「何があってもお守りいたします」

出発予定時間となっても、もたらされた情報によって、ざわめき浮き足立つ一行に、姿を現した帝が一喝する。

「我になんら不安が無いのに、お前達は不安なのか！　いい加減にしろ！」

静まった一行を見渡した後、直ぐに籠に乗り込み、出発の号令をかけた。

一行がしばらく歩みを進めた時、それまでおとなしくしていた闇姫が、怪しい歌と共に騒ぎ出した。

『三時のおやつ、三時のおやつはなんでしょぉ。
ねぇねぇ鈴音ちゃん、今日は三時のおやつができるかなぁ』
『多分大丈夫よ、闇姫ちゃん』
『黒鬼闇姫さん、先ほどお昼を食べたばかりというのに、少々卑しいですわよ』
『だってぇ遠足じゃぁ、おやつは最大の楽しみなんだよぉ』
『あの闇姫さん、もうじき敵襲があると思いますので、もう少し緊張感を持っていただきたいのですが……』
『神楽君、黒はそんなのわかってるよぉ。だからぁ、三時におやつができるか心配なんだよぉ。
だってぇ、もうちょっと向こうに、変な人達がいっぱい隠れているもん。
そんなこと銀ちゃんも知ってるんだよねぇ』
『えっ、鬼姫ちゃん、そうなの？　どうして教えてくれないの？』
『あっ、はい、鈴音様をあまり不安にさせたくなかったもので……』
『もう、いらない事は、一言二言上乗せしてぺらぺら喋るのに、大事な事は言わないのかしら』

『闇姫、どれくらい向こうなんだ？』
『うぅん、神楽君の短い足で十五分くらいだよぉ』
『えっと……まあいいや。とりあえず帝に報告してくる』
そう言うと、俺は直ぐ後ろの籠に駆け寄り、帝に話しかけた。

「今、闇姫たちが、不穏な気配に気が付きました。ここより時間にして十五分ほど先のようです」
「神楽、お前達の会話、聞いてて飽きないよ。
待ち伏せの件もじっくり聞かせてもらったよ。
先ほども言った通り予定を変えるつもりは無い。闇姫ちゃんが楽しみにしている、おやつの時間に間に合うように、好きにやってくれ。それと……」
「帝、ご報告が……」
帝と俺の話を遮るように天守近衛長が割り込んできた。
「天守、騒々しいぞ」
「し、失礼しました。
しかし、この先に怪しい気配が立ちこめております故、進行の停止をお願いしたく……」
「ならん、予定通りこのまま行く」
ヘタレな天守近衛長は、家柄だけで近衛長に選ばれたわけではない。この人並みはずれた気配の察知能力を高く評価された結果である。もしかすると、ヘタレ、そして保身に長けている故に、持ち合わせている能力なのかもしれない。

「しかし、それでは、敵中に飛び込むような……」
「出過ぎた意見は許さぬ。
こちらには天鳥達独立魔戦部隊がいる。さらには、事態を見越した社守からも策も授かっているようだしな、天鳥神楽」
「は、はい、万が一味方が巻き沿いになるのを防ぐために、私達の行動直前に一団の進行を、止めていただきたのです」

「確かにな。それは許可しよう」
「ありがとうございます。それでは合図は私が出しますので、天守近衛長は先方の近衛隊を、すぐさま帝の籠の周りに配置し、盾となって下さい」
「という事だ、天守。わかったら下がってよい」
「御意に」
天守近衛長が戻ったのを確認した帝は、一つ言葉を付け加えた。

「そうそう神楽、奴らを消しちゃ駄目だよ」
「社守軍師もそのようなことを……」
「静は全部知ってるみだいな。
それはさておき、帝国さんの軍師が、向こうじゃ参謀っていうみだいだけどね、何でも公開処刑を望んでいるみたいなんだよね。だからちょっと協力してあげようと思ってね」
「えっと、その話は一体どこから……」
「まあ、俺も個人的な間者を放つくらいしているからね。
とりあえず、後で絵にして向こうに送るつもりだから、死体は原型が残るようにお願いするよ」
「はあ……闇姫、出来るか？」
『当然だよぉ、神楽君、まっかせてよぉ。
ちゃぁんと……違うなぁ……こういうときこそあれだぁ。
こんな事も有ろうかと思って、用意しておいたんだぁ。
うん、最高の決め言葉だねぇ。出来る子なら一度は言ってみたい一番の言葉だよねぇ。
うんうん、黒はやっぱり天才だよぉ』
『あの闇姫さん、どこで覚えたのか知りませんが、間違いなく頼みますよ』
『だからぁ、黒は間違えないんだってぇ。
間違えるのは、いつも神楽君なんだよぉ』
「やっぱりいいコンビだよ。

じゃ、そういう事で任せたよ」
『おぉ、任せてくれぇ帝の兄貴ぃ』

ここまで予定通りの進行を続けてきた一団は、俺の合図によって、待ち伏せ地点の約二百メートル手前で進行を止めた。そして当初の予定通り、天守近衛長はじめとした先行の三十名の近衛隊は、帝の籠を囲う陣形を取った。

この時俺は天守近衛長とすれ違いざまに一言声をかけた。

「帝の守りをよろしく。
それと、魔法を見たかったんだろう。その目でしっかり見とけよ」
「……」
議場での事を思い出したのか、少々青ざめた天守近衛長であった。

そして俺達四人は一団の先頭に立った。

策略　6（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　7（前書き）

今回は描写上、少々残酷な表現を使っています。
苦手な方は、適当なところで飛ばして下さい。

策略　7

俺達は歩みを進め、視察団と敵との中間で足を止めた。

「さてと鈴音、始めようか」

「はい兄さん、いつでもどうぞ」

俺達は「命の糸」を闇姫、鬼姫のそれぞれとつないだ。

普段の俺達は、リスクの一つである感情消失状態を避けるため、「命の糸」を闇姫や鬼姫から外している。そのため自由気ままに動き回る彼女達に……はっきり言って闇姫に、振り回されているわけです。

それはさておき、魔法を使うには、「お人形」達との同期が必要となる。そのためには「命の糸」の連結が必要となってくる。そして連結によって「お人形」の動きを九割九分制御できるようになる。

魔法使いにとっての戦闘状態となった俺は、命令を出した。

「神国天ノ原、独立魔戦部隊筆頭魔術師、天鳥神楽の名において命ずる。

バルドア帝国軍強襲部隊を殲滅せよ。

我らが帝の命を狙ったその愚かな行為、死をもって償わせよ。

ただし、その死体は可能な限り原形を留めさせる事、これは帝からの希望である。

この事を念頭に置き、そして事に対処する。いいか鈴音」

「承知しました」

この感情消失状態は、ある意味戦闘に適した状態ともいえる。普段の俺からは考えられない言葉が、照れる事も無く口からスラスラと出てくる。恥ずかしいと思わないので、照れる事も無いのである。例えば、今の鈴音なら一糸まとわぬ状態でも、どこも隠さず命令を

遂行するであろう。
そしてなによりも今の俺達は、どんなに残虐な命令でも、顔色一つ変えないで実行する事が出来る。例え後になって、最悪の大虐殺と語り継がれる行為であったとしてもだ。
そして今回の命令はそれに近い。全てを消し去ってしまえば、見なくてすむ戦闘の惨状を、今回は結果として残さなければいけない。普段の俺や鈴音では到底出来ない事なのである。

『さて闇姫、今回は全てをなぎ払ったり、埋めたり、焼き尽くしたりは出来ないから、まずは敵の位置を特定しておこう』
『りょぉかいだよぉ神楽君、じゃあ、これだねぇ。
よろしくねぇ』
闇姫がそう言うと、俺の頭の中に古びた魔術書が浮かび上がり、開かれた。そして次から次へとページがめくられ、中程で止まった。
俺達が魔法を発動させるには、契約主である人間が「命の糸」を繰り、「お人形」に「印の舞」をさせる。そして、呪文を詠唱するという手順が必要となる。
浮かび上がった魔術書には、その操る手順と詠唱する呪文が記されている。

『じゃあ始めるよ、闇姫』
俺は「命の糸」を魔術書通り闇姫を繰り、「印の舞」を行った。
そして呪文を詠唱する前に、魔術書に目を通した。
その時、何故だろう、この呪文を見ていると、心が何かを言わそうとする。感情消失状態になっていなければ、きっと何かを言っていただろう。
そんな心を無視して、俺は呪文の詠唱を始めた。

「お空に輝くお星様
私に見せて下さいな

たくさん教えて下さいな
お願いきいて下さいな」
『お星様の千里見聞録』

俺は詠唱が終わった時、誰かの吹き出す声を聞いたような気がした。
そして同時に心の中にある、ちっぽけだが大切にしていた何かが、音を立てて崩れ落ちていった気もした。

『わぉ神楽君、大成功だよぉ。これ使うの初めてだから、心配だったんだよぉ。
でも悪い奴らみんなわかっちゃったねぇ。
右と左に十人ずつ別れて、二十人いるよぉ。
そうだ銀ちゃんにも教えるねぇ』
『そうしてくれ、闇姫。
では鈴音達は、情報を受け取り次第、奴らの退路を断ってくれ』
今の俺は、感情消失状態である。崩れかけた心ですら、普段以上冷静に指示する事ができる。

『承知しました。
では鬼姫ちゃん、どれにしましょうか？』
『こちらはいかがでしょう、鈴音様』
『これは駄目よ。兄さんの話を聞いてなかったの、鬼姫ちゃん。
公開処刑を帝がお望みです。
敵を磔にして、そのまま死体を飾れる物理的な壁がいいわね。
見栄えもいいし、飾る手間も省けるわ』
『鈴音様、凄い事をさらりと言ってますね』
『なぁに？　何か言いましたか、鬼姫ちゃん』
『あっ、失礼しました。
では、こちらは如何でしょう』

『これなら、うってつけね。
準備できたら、すぐに始めるわよ』
『はい鈴音様。いきますわよ、激震』
鬼姫の首飾りが、彼女お気に入りの戦鎚に変化する。それと同時に、鈴音と鬼姫の「印の舞」と呪文の詠唱が始まった。

「大地の民よ
古の契約に基づき
我に力を貸したまえ」
『土石要塞の闘技場』

鬼姫は戦鎚を大きく振り上げた直後、大地に向かって振り下ろす。
重厚な打撃音と同時に、戦鎚が地面にめり込む。その衝撃波は大地と大気を揺るがし、周囲の静寂は弾けとぶ。
直後、鬼姫が叩き込んだ戦鎚を中心とした大地に、白く光る魔法陣が浮かび上がり、放った衝撃波と共に瞬く間に広がる。
敵味方を全てを飲み込んだ魔法陣の膨張が止まると、外周が一段と輝きを放つ。
そしてその光の輪に沿って、大轟音とともに大地が盛り上がり、周囲を完全に囲い込んだ。

『闘技場？　どちらかというと処刑場だな……鈴音組はいい演出を作り出したな。
こっちも負けないようにしないといけないな。
闇姫、鈴音の準備した舞台通り、あの壁に張り付けるよ』
『はぁい神楽君、まっかせてぇ』
俺は、未だに隠れている帝国の強襲部隊に脅しと、こちらの意思をはっきりと伝えるために、口上を述べた。

「我らは神国天ノ原、独立魔戦部隊、筆頭魔術師天鳥神楽と天鳥鈴

音である。
お前達二十名は、卑劣にも非戦闘地域で、我らが帝の暗殺を企てた。これは実行なくとも死罪に値する。
我らは帝の命を承け、今より刑の執行を行う。
お前達は既にこの場から、逃げ出す事は出来ない。
刑は確定している！　我らに対して抵抗は無駄である！　投降は一切認めない！　降伏は無意味である！
お前達に残されている道は、何もせずおとなしく死の罰を受ける、その一択のみである！
なお我らは、帝国の犯した愚劣な行為の始終を、抗議、そして忠告として、お前達帝国の王に包み隠さず報告する。以上」
俺が口上を述べ終え、あたりにひと時の静寂が戻ると、息をひそめていた強襲部隊のざわめきが伝わってきた。

「ト、トークマン隊長、魔法使いがいるなんて聞いてないですよ」
「とてもじゃない、勝負になりませんよ」
「ここは、なんとか退きましょう」
「見たところ登れない高さじゃないです。
とりあえず私が行ってみます」
敵兵の一人が壁を登り出した。確かに高さは五メートル程度と登れない高さではない。しかも礫の混ざっている土壁であるため、手足をかける事もできる。

『鈴音様、壁を登る愚か者がいます』
『そのようね』
『このままですと、楽しみが一つ減ってしまいますよ、鈴音様』
「仕方ないわね。
壁を登るそこ方、直ちに降りなさい。
只の土壁に見えても、中の者を外に出さないための結界ですよ。
魔法も通っています。

敵前逃亡として情けない死に様を晒したくなければ、直ぐに戻りなさい」
「何言ってやがる。どのみち死ぬんなら、にゲェ……」
壁を登りきった彼の足下から石の槍が現れ、股間から頭にかけて貫き、串刺し状態となった。
絶命した彼は元の場所まで転げ落ち、そして止まった時には、頭より突き出た穂先が地面に突き刺さり、逆立ちの形となった。

「あら残念、間に合いませんでしたわ。
でも敵前逃亡兵には。お似合いの情けない最後ですわね」

「ひっ、ひえぇ、まっ、まっ、待ってくれ……おっ、俺達は……はっ嵌められたんだ……そう、だっ、騙されたんだ」
無惨な最後となった自軍兵士の姿を、目の当たりにしたトークマン隊長は狼狽した。
そして悲鳴にも似た叫びと、嘆かわしい程醜い言い訳が、恐怖で静まり返ったこの処刑場に響き渡った。

「おっ俺達は、偵察部隊なんだ。間違っても暗殺など……とっ、とにかく嵌められたんだ」
「全く嘆かわしいよ、言うに事欠いて嵌められたときたもんだ。
どうしたもんでしょうか、闇姫さん」
『そんな事、悪い奴はやっつけるに決まってるよぉ神楽君。
それに悪い奴の言う事なんてぇ黒達には、関係ない事だもんねぇ』
そう言うと闇姫は顔の横で掌を上に向けて、大きくかぶりを振った。

「お前ら、ここにいる黒鬼闇姫さんは、『そんな事は知らない、悪い奴は倒す』と言ってますよ。
どのみち、今更お前達が何を言っても、それはお前らの問題であ

って、俺達には『今、お前達がここにいる』事が問題なんだよ！
闇姫、取って置きを頼むよ」
『まっかせてぇ。
じゃあ神楽君、これをお願いするねぇ。
あぁ、しまったぁ。取って置きすぎて、呪文を直すの忘れてたぁ。
仕方ない、今回はがまんしよぉ』
俺は、魔術書に書かれた文言を見て、なぜか変な安心感に包まれた気がした。

（うん、これなら失った何を取り戻せる気がする）

早速、「印の舞い」を始めた。すると闇姫が舞をしながら鬼姫と話し出した。

『銀ちゃん、鈴音ちゃんの楽しみを取っちゃうといけないからぁ、半分残しておくよぉ。
だからねぇ、勝負だよぉ』
『黒鬼闇姫さん、何を基準に勝負とするのですか。
でも、いいでしょう、ここで私が勝負から逃げて、主である鈴音様が愛する神楽様の前で、恥をかくわけにはいきません。受けて立ちますわ。
えっとこれなんか、鈴音様好みですが、いかがで……』
話が途切れた鬼姫を見ると、不自然な格好で固まっている。そして固めている張本人である鈴音を見ると、感情消失状態なので表情は一切変わっていないのだが……何か黒く渦巻くようなものを感じる気がした。
それはさておき、俺は呪文の詠唱に入った。

「汝が行くは荊棘（けいきょく）の道
汝を穿つは荊棘の戒め

我に仇なし事
今より千の時を刻むまで
悔やみ
そして散るがよい」
『棘刑(きょっけい)の監獄』

詠唱が終わると、闇姫の足下に、若草色に光る紋章のような模様が浮かび上がる。
そこから一本の触手のような何かが、敵に向かって音も無く伸びていく。
突然、触手のようなものは向きを変え、地中に潜り、更に敵兵達を迂回するように、鬼姫の作り出した土壁に向かって伸び出す。やがて土壁まで伸びた触手のようなものは、いく筋にも分裂し、更に土壁の中を這い、敵兵の背後に音も無く迫っていく。
そしてその先端が敵兵の背後に近づくと、土壁から飛び出し、巻き付き、土壁まで無理矢理引き摺ってくる。

「たっ、助けてくれぇ……ひっ、わぁ……」

その戒めから逃げ出す事もできず、引き摺られてきた敵兵が土壁に触れると、更に何本かの触手のようなものが飛び出し、半ば自由を奪われた敵兵に更に巻き付き、完全に拘束し、土壁に磔ける。
そして役目を終えた触手のようなものは、棘刑の使者「荊(いばら)」の戒めにその姿を変える。
敵兵を幾重にも巻き重なる戒めの茎から、鋭く突き出した無数の棘が、武装をも突き破り、肉を穿つ。
だがそれは決して致命傷とはならず、時間をかけて彼らから、生命の循環という血液を奪いさる。

「やっ、やめてくれ……おっ、お願いします……」

自分の無惨な末路を見た敵兵は、悲鳴に似た叫び声で最後の命乞いをする。
しかし一人、また一人と触手のようなものは、無情な処刑執行人として敵兵を捕らえ土壁に磔ていく。

「うぅ……あぁ……」
戒めの茎に口をふさがれ、棘にのどを貫かれた彼らは、激痛の中で呻く事はできても、叫ぶ事も命乞いをする事もできない。
滲み出た血液が、自身を戒めている荊の茎を少しずつ、くすんだ紅色に染めていく。

六人目を磔にしたところで、闇姫が変な事を言い出した。

『どぉ神楽君、すごいでしょぉ。
でもねぇ黒、苦手なんだよねぇ、火とかぁ水とかぁ使わない、こういう魔法は……』

七人目……

『あの闇姫さん、なんだか怪しい一言が聞こえたようですが……』

八人目……

『大丈夫だよぉ、まっかせてよぉ神楽君。
黒に間違いは、ないんだからぁ、やればできるんだよぉ』

九人目……予定では残り一人。
今までもなんだかんだと言って、うまくやってきた……俺と闇姫は揃って口を開いた。

『あっ……最後の一人スカった……』

策略　7（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございました。

策略　8（前書き）

今回も描写上、少し残酷な表現を使っています。
苦手な方は、適当なところで飛ばして下さい。

策略　8

『わぉ外すなんてぇ、黒、びっくりだよぉ。
やっちまったですよぉ、神楽君』
『やっちまったも、なにも、旗立てたのは、闇姫さんですよ。
えっと、鈴音は……間に合わなかったか』
討ちもらした敵兵の討伐を、鈴音にお願いしようとした。しかし鈴音は任されていた九人の殲滅に向けて、既に「印の舞」をすませ、呪文の詠唱に入っていた。

「我に敵(あだ)なす者
棘刺(きょくし)の刑を受けよ」

戦鎚を戦弓に変えた鬼姫が、その戦弓に光の矢をのせて引き絞る。そして詠唱が終わると逃げ惑う敵兵達に向け、一射目を放った。

「おっ、おい何か飛んでくるぞ」
「とにかく逃げろ！」

光の矢は無数に分裂し、結界の土壁に行く手を阻まれた者のところへ、逃げ惑う事に疲れた者のところへと、足を止めた敵兵を見つけると、その形を刺又に変化させて現れ、結界の土壁に押し付け、その自由を奪った。

「たっ、助けてくれ」
「頼みます。何でも話します」
鬼姫が狙いをつけた九人の敵兵全てを土壁に押し付けると、無表情のまま鈴音が口を開いた。

「こんな事になって、皆さん残念ですわね。
いつもなら、苦痛を感じる前に気持ちよく、逝かせてさしあげるのですが……ちょっとだけ不幸でしたわね。
私も最後のご奉仕をしてさしあげられなくて、辛いのよ。だから恨まないでね。
じゃあ鬼姫ちゃん、じっくりと止めを刺していきますわよ」
『承知いたしました。鈴音様』
「では皆さん、ごきげんよう、さようなら」

『千本の鉄杭』

引き絞られた鬼姫の戦弓から二射目の光の矢が放たれる。
一射目と同じく光の矢は無数に分裂し、その姿を細長い鉄杭に変え、土壁に押さえつけられている敵兵に向けて、飛んでいく。

「お願いです、助け……」
「痛……」
「ひぃ、勘弁を……」
鉄杭は正確に、等間隔に、骨をも貫きながら鈍い音を立てて、四肢の先端から心臓に向かって行進していく。
一本、また一本と鉄杭が打ち込まれるごとに、今や処刑場となっている結界内に悲鳴が響き渡る。

「やめてくれ……」
「もう、ひとおもいに……」
鉄杭の行進は、心臓に近づくとその行進を止める。まず左手からの行進が止まり、次は右手、そして左足、最後に右足が止まる。
鉄杭は既に百本程打ち込まれているだろう。
一束の鉄杭によって磔られた敵兵の中には、その激痛に耐えかね、絶命した者もいる。

「……これ以上は……」
「まだ……死にたくない……」
「お願いです……解放して……」

「まだ、元気な方が見えるようですね。
しかたないので、そんな皆さんには、もう少し楽しんでいただきますわね」
鈴音がそう言うと、鉄杭の行進が再開する。
心臓を中心に今度は外側に向かって、円を描くように、一本、また一本と鈍い音と立てて鉄杭が貫く。

「もう……」
更に五十本を数えた時、全ての敵兵は沈黙し、それを合図に鉄杭の行進もようやく止まった。

「この私を相手に、結構長持ちしたわね。手向けに褒めて差し上げますわ。
さて兄さん、残された一人はどういたしましょうか」
俺達は残った一人の敵兵に視線を集中させた。
あまりの恐怖を目の当たりにした彼は、完全に戦意を喪失して、更に逃げる気力も失い、その場にへたり込んでいる。
すると闇姫が妙な提案をしてきた。

『ねぇねぇ神楽君、あいつは天守ヤローに殺ってもらおうよぉ。
せっかく、天守ヤローも槍もってるんだしぃ』
『だけど闇姫、言っても天守は動かないよ。しかもあいつに敵とはいえ、人を殺す事ができるとは思えない』
『大丈夫だよぉ、こんな時のために、ちゃんとあるんだよぉ。
ねぇ銀ちゃん』

『黒鬼闇姫さん、あれを使うのですか？　私はかまいませんが……鈴音様、少々自由を頂いて、よろしいでしょうか』
すこし間を空けて鈴音が答えた。
『……かまわないわ、鬼姫ちゃん。お好きになさい』
『鈴音様、ありがとうございます。
私の方は許可を頂きましたわ、黒鬼闇姫さん』
『ねぇねぇ神楽君、銀ちゃんもああ言ってるし、黒もいいよねぇ、仕方ないよねぇ、汚名挽回だよねぇ』
『闇姫さん、そこは完全に間違っています。名誉挽回、汚名返上です』
『そうなんだぁ。でも黒が間違えるなんて珍しいよねぇ。
神楽君も時には正しい事を言うねぇ』
『俺はいつも正しい事しか言わないぞ。
それはさておき、この一件は、闇姫達に任せるよ』
『わぉ、話っせるぅ。
じゃぁね、じゃぁねぇ、神楽君は、天守ヤローに「今から闘うんだよぉ」って教えてあげてねぇ。
それとぉ、銀ちゃんはあのヘタレ……あっ二人ともだなぁ……えっとぉ名前を知らないヘタレとぉ、天守ヤローのヘタレと、どっちがいいのぉ。
黒はねぇ、天守ヤローを取ろうと思ってるんだよぉ』
『黒鬼闇姫さん……つまり、私に向こうを取れと言ってるわけですわね。
仕方ないわね、よろしいですわ』
『おぉ、さっすが銀ちゃん、話っせるぅ。
じゃあ神楽君、天守ヤローに声をかけてねぇ』
『ああ、わかった』
俺達の戦闘の邪魔になるのを避け、距離を取っていた帝は、戦闘

……いや処刑行為に目処ががつくのを見計らって、俺達の直ぐ後ろまで来ていた。
闇姫と鬼姫が何を行うのか、今ひとつわからなかったが、俺は振り返り、天守本人ではなく帝に話しかけた。

「帝、お話したい事があるのですが、よろしいでしょうか」
「かまわんよ、言ってみろ。天鳥神楽」
「はい、先ほど恥ずかしながら一人討ちもらしました。これについて黒鬼闇姫と銀界鬼姫から提案があったので、それについてお願いがあります」

（見せ物、出し物の類ですが……）

「ほう、それは楽しみでだな」
「それで彼女達は、是非天守近衛長に討取ってほしいと、言っているのです。その許可を頂きたいのです」
「ああ許可するよ。天守命、行ってこい」
「ひぃ、今更私にできる事など、何もございません」
天守は、先ほどの惨状を目の当たりにして、腰が完全に退けている。気持ちはわからないでもないが、味方ながら情けない。

「行ってこい。これは勅命だ！」
「ひぇ、うっ承りました」
「天守近衛長殿、ご協力、感謝いたします。
我らの恥を消し去っていただきたい。それに手柄にもなりましょう。
さて闇姫、話はついたぞ」
『あっりがとぅ神楽君。
じゃあねぇ、これをお願いねぇ。
銀ちゃんも頼むよぉ』

『わかってますわ、黒鬼闇姫さん。
では鈴音様、こちらをお願いします』
俺と鈴音は二人同時に「印の舞」を始めた。

「なるほど、まあそう言う事になるわけだ」
籠から出てきた帝は、屋根に上がり特等席から、楽しそうに観戦を始めた。

（先ほどの惨状の始終も、そうして観戦を楽しんでおられたんですね……）

「汝、我の手で踊れ
汝、我の手で舞え
全ては我の思うまま
汝の糸は我に紡がれた」
『糸操り人』

詠唱が終わると、鬼姫は敵兵に向かい、闇姫は天守近衛長に向かい、それぞれの両掌を向ける。
すると「命の糸」に似たものが彼女達の指先から掌を向けた相手に伸びていく。
その糸は、敵兵、天守近衛長の体をとらえると、四肢の各部に結びつき、彼らの自由を奪った。

「あっ、体が勝手に……」
「ひっ、何だ、何事で……」
闇姫と鬼姫に操られた二人は、自らの意志とは違う何かに体を支配され、一歩ずつ足を進めていく。そして二人は武器を構えた状態で、向き合った。

「帝、二人の準備が整ったようです。
号令をお願いします」
「さすが天守命、正々堂々の一騎打ちか。名は知らぬが、そちらの兵もこの状況で、天晴である。天守に勝てば、これまでの愚行は不問にしてもかまわぬ。
それでは始めい！」
とは言っても出し物の類、闇姫のボケから始まった余興ある。
闇姫と鬼姫に操られた二人の演武が始まる。

敵兵が斬り掛かる。天守が避けて槍で突く。
また斬り掛かる。避けて突く。かなり際どいところで、相手の攻撃を避ける二人であった。

「ひっ、あぶ、危ない……」
「ちょっと、やめてくれ……」

騒ぎ立てる二人をよそに、十手程したところで、天守の槍が敵兵の左腕を貫いた。

「うわっ……」
「おっ俺じゃない……ごめんなさい」
「天守近衛長殿、戦闘中に『ごめんなさい』は駄目ですよ」
次の一手では、敵兵の右太ももを貫く。
その次は、右手を貫く。
鮮血を飛び散らせ、一歩一歩後退していく敵兵を、返り血を浴び、その衣服を徐々に緋色に染めながら追いつめていく天守近衛長。
「おっ、俺じゃない。俺がやっているんじゃないんだ」
「……」
既に敵兵の意識は、無くなっている。鬼姫に操られて動いている

だけの、傀儡と成り果てている。
そして他の敵兵達が磔にされている土壁を背にしたその時、天守の槍が敵兵の心臓を貫き、そのまま土壁に磔にした。
「おっ、俺がやったんじゃなんです。
うっ恨まないでください。
お願いです、ご、ごめんなさい、ごめんなさい……」
天守近衛長の意味の分からない謝罪が、静まり返ったあたりに虚しく響く中、帝国軍強襲部隊の討伐は終わった。
『もう辺りには敵はいないね』
『うん神楽君、完璧にかたずけちゃったよぉ』
周りを確認した俺は、全てが終わった事を帝に報告した。
「帝、少々見苦しいところもありましたが、全て終わりました」
「なかなか面白い見せ物だったぞ、ご苦労だった。
闇姫ちゃんもおやつに間に合ってよかったな。
しかしここは和むには、少々雰囲気が良くない。もう少し足を進めてから休憩するとしよう」
『わぉ帝兄貴ぃ、話っせるぅ。黒、たくさん働いたからお腹が空いちゃったんだよぉ』
「ははっ、もう少しの辛抱だよ」
俺は闇姫との連結を解いて、通常の状態に戻った。
鈴音も、敵兵達が磔てある土壁を残して結界魔法を解き、通常状態に戻った。
「帝国軍の愚行のために少々遅れたが、ただちに出発する。
そうそう、この有様を描き残すように、絵師を派遣するよう伝え

てくれ」
帝の号令がかかると、天守近衛長がまだ正気を戻していなかったが、視察団一行は動き出した。

一行はその後何事も無く宿に到着する。そして俺は今晩も鈴音と同室となる。
なお、この事について鬼姫が鈴音の本音を突くという、いらない一言で鈴音を怒らせるというのは、もはやお約束である。

翌朝、先に目覚めてくれた鈴音に起こされた俺達からは、黒化鈴音の恐怖は消え、平穏な朝のひと時を迎える事ができた。
支度をすませた一行は、予定通り進行する。
途中で立ち寄った集落で会談と昼食を済ませ、最初の視察目的地である第一砦に、予定通りの午後三時に到着する。
俺達は部屋に案内された。中に入ると個室が二部屋ある士官執務室である。俺達はそれぞれの部屋に別れて入った。
しかし不思議と騒がない闇姫に尋ねる。

『闇姫どうしたんだ静かじゃないか、三時を過ぎたけど、今日はおやつどうするんだ？』
『あれぇ神楽君、わかってないなぁ。
遠足はねぇ、目的地に着いたら、大人しくそこを見て回るんだよぉ』
『じゃあ、ここを見て回るか？』
『うん、鈴音ちゃんと銀ちゃんも一緒だよぉ』
部屋を出た俺は、扉越しに声をかけた。

「おーい鈴音、闇姫が砦を一緒に見て回りたいって言ってるぞ」
「はーい、今いきますね、兄さん」
鈴音達が部屋から出てくると、自由時間の俺達は、非戦闘状態の

ため、ゆるい空気の漂う砦内の散策を開始した。

『ねぇねぇ神楽君、お外が見えるところにいこうよぉ。
あそこがいいよぉ。上ろうよぉ。上ろうよぉ』
闇姫が指差したのは見張りの櫓であった。
『あそこは、確かに遠くまで見晴らせるけど、上らせてくれるかな。
でも近くまで行ってみよう』
『神楽君も話がわかるようになってきたねぇ。やるねぇ。うんうん、大人だねぇ』
『全く黒鬼闇姫さんは、あんまりはしゃぐのは、はしたないですわよ。いつまでたっても子供なんですから』
『鬼姫ちゃん、いいんじゃない。私は元気な闇姫ちゃんは好きよ』
『えっ鈴音様、それは私より黒鬼闇姫さんの方が好きという事でしょうか？』
『鬼姫ちゃん、そういう意味じゃないのよ』
『そうですわよね、鈴音様が一番好きなのは神楽様でイタイ……』
やはり、脳天鉄拳制裁はお約束である。

『全く鬼姫ちゃんはどうして一言多いのでしょうかね』
『ごめんなさい』
馬鹿な話を聞いているうちに、見張りの櫓ののぼり口に着いた。
俺は見張りの兵士に問いかけた。
「すみません、上がらせてもらいたいのですが、よろしいでしょうか」
「は、はい、喜んで」
（どっかの居酒屋か……）
間違った言い回しの返事だったが、俺達は櫓の階段を上った。
そして台に立ったその時である。

『……来る……』

闇姫と鬼姫が揃って、緊張感たっぷりに口を開く。

『来るってもしかして……』

俺は闇姫に問いかけた。直感が間違ってなければ大変な事になる。

『うん、白姉ちゃんと金ちゃん』

『神楽様、鈴音様、来ます、白輝明姫（しろきあけひめ）と金剛輝姫（こんごうきき）です』

俺はすぐさま見張りの兵士に伝えた。

「帝国側の魔法使いが来るぞ、すぐに帝と司令部に伝えてくれ」

「し、しかし姿が……」

「彼女達が騒いでいる、間違いない、何かあっても俺が責任を取る。とにかく、すぐに伝えるんだ！　警鐘を鳴らせ！」

俺の叫びを聞いて、兵士の一人が警鐘を鳴らし出し、もう一人は伝音管で事態を司令部に伝える。

けたたましく鳴らされる警鐘に兵士達は、すぐさま防衛の陣を整え出した。

「報告！　帝国軍の襲来の可能性あり！」

「どういうことだ」

「帝国側の魔法使いが迫っている模様です」

その時、警鐘を鳴らしていた兵士が叫んだ。

「帝国側の『お人形』が現れたぞ！」

そして伝音管の兵士も叫ぶ。

「きっ、来ました。二体現れました」

「あっ、み、帝様、お下がりください」
「よい、代われ。
我は天ノ命である。
そこに、神楽と鈴音、うちの魔法使いは、いるか？」
司令部の人間を押しのけた帝の声が、伝音管から響き伝わってくる。

「み、帝様？　……あっ、は、はい」
「ならよい、我らに打つ手はない。彼ら二人に任せよ。
わかったな、天鳥神楽、天鳥鈴音」
「はい、承りました」
緊張する見張り台の兵士に、鈴音が優しく話しかける。
「あなた達は下に、何かあるといけません」
「いや、しかし……」
「私達なら大丈夫です」
「……わかりました、ご武運を」
そう言うと二人の兵士は階段を下りていった。

既に陣形を整えた兵士達は静まり、俺達の一挙手一投足に注目する。
そんな中、最初に口を開いたのは、当然闇姫であった。

『白姉ちゃん、金ちゃん、お久しぶりぃ。
元気だったぁ？　ねぇねぇ、今日は二人だけでどうしちゃたのぉ』
『白輝明姫さん、金剛輝姫さん、あなた方の契約主はどうされたのですか？』
俺は二人の不思議な話に突っ込んだ。
『って、まさか来たのは「お人形」だけなのか？』
『そうだよぉ神楽君。今頃気が付いたのぉ』
『えっと、それってどういう事なんですの、鬼姫ちゃん』

『鈴音様、さすがに私も事情は聞かないと……』
その時、明姫達が口を開いた。
『お願いです。お姉さんの主を、私のアリエラちゃんを助けて下さい』
『ヘリオを……あんな下僕でも妾の契約主である。頼む、力を貸してくれぬか』
このやりとりを知るのは、俺達と帝だけであろう。他から見ると、ただ沈黙が続いているだけである。
それに輪をかけるように、俺はあまりに予想外の出来事に、全く言葉が出なくなってしまった。
高まる緊張の中、無言の時だけが流れていく。

策略　8（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　9（前書き）

１０月３日　地の文を変更しました。

策略　9

「だから、ナ・ン・デ、皇帝陛下の護衛の任を受けたアリエラ達が、張本人の皇帝陛下にオ・ア・イできないなんて、どういう事なのカ・シ・ラ。

アリエラ達って、嫌われちゃってるわけなのカ・シ・ラ」

強襲作戦が発動された十月三十日、私達特殊遊撃部隊は、万が一の事態に備え、皇帝陛下護衛の任を受けて宮殿に入りました。

着任の挨拶と、アリス・ガードナー参謀の個人的な心情はわかるのだが、間違いなく失敗に終わる強襲作戦の停止を直訴するため、皇帝陛下に謁見を求めました。

しかし、前室に控えているイスカラ・ストントーチ参謀長に、何かと理由と付けられて門前払いとなってしまいました。

「そんな事大声で言っては、駄目だよアリエラ。

場所をわきまえないと……一応女の子なんだし……」

控え室に戻る途中、ところかまわず大声で悪態を吐きまくる私を、青い顔で止めるヘリオ先輩でした。

「ヘリオ先輩！　一応？　……一応ってどういう事カ・シ・ラ！

私は間違いなく、カ・ワ・イ・イ・女の子です。それとも、証明が必要です・カ！　パンツ脱いで見せないと駄目デ・ス・カ！」

頭に血が上っている私は結構短絡的な行動をとったりします。

私が自分でスカートをめくり上げると、慌ててヘリオ先輩が止めます。

「わぁ待って待って、ごめん、アリエラ。

可愛い女の子はそんな事はしないよね。

あんまりそういう事は……周りも引いてるよ」

「いいの、イ・イ・ノ・デ・ス、引いても。
それより、ヘリオ先輩は口惜しくないんです・カ。参謀長のあのスリーエルなタ・イ・ド。
なにが『皇帝陛下はご多忙故、儂から伝えておく。お前達はもう下がってよい』よ。まったく何様のつもりなのカ・シ・ラ」
「少々言葉がすぎるぞ、アリエラ・エディアス少将待遇」
「なにカ・シ・ラ！　あっ……元帥閣下……失礼しました」
振り返るとナドウッド・ナイグラ元帥が難しい顔をして立っていました。

「アリエラ・エディアス少将待遇はまだ若いから、いろいろ噛み付きたくもなるだろう。ただ参謀長もあれでいろいろと気を使っているんだ。その事、少しだけでいいからわかってやってくれ」
「はい、しかし……」
「わかっておる、強襲作戦の件であろう。
しかしなアリエラ・エディアス少将待遇、例えそれが愚策であったとしても、既に発動しておる。今更止めるわけにはいかぬ。
そして一部の者のごり押しがあったとしても、皇帝陛下が許可をしたのだ。それに意を唱えるというのは、不敬罪、反逆罪とも取られかねん。
俺としても、出来る兵をむざむざと……口惜しいだろうが、今回は我慢してくれ」
「元帥閣下がそこまで言うのであれば……承知しました」
「そうそう、着任の挨拶の件は明日にでも、皇帝陛下に謁見できるよう、取りはからっておく。
それと……宮殿内とはいえ公衆の面前で、可愛い女の子が、大声で悪態を吐いたり、スカートをめくって「パンツを脱ぐ」なんて言わない事、いいかね」
「あ、はっ、はい、すみませんでした」
一部始終を見られていた事を知った私は、耳が急激に熱くなりま

す。まさに顔から火が出るほど恥ずかしく、うつむいたまましばらく動けなくなってしまいました。

「アリエラ、だから言っただろう。とりあえず顔を上げて、控え室に戻ろう」

いつも私達にいじめられているヘリオ先輩が、嬉しそうな声で言ってきました。私が今、顔を上げる事が出来ないのを、知っているにもかかわらずです。

今、彼から日頃の逆襲を受けているのはわかっています。恥ずかしくて顔が火照り、うつむいている私だが、大人しく逆襲を受け入れる程甘くはありません。そして私は最大級の反撃に出ました。

「ヘリオ先輩は意地悪デ・ス……いつもアリエラ達にいじめられてるからって、なにもこんな時に……」

ヘリオ先輩が涙に弱いのを知っている私は、うつむいたまま泣きまねをしました……含み笑いをしながら……

「ご、ごめんアリエラ、そんなつもりじゃないんだ」

「いいんです。日頃先輩をいじめてるアリエラですから、仕返しされても文句は言えないですね……グス」

「いやだから、仕返しとか……そんなんじゃないんだ。だから泣かないでよ、アリエラ」

慌てふためくヘリオ先輩をよそに、火照りの収まった私は、何事もなかったように顔を上げます。

「さあヘリオ先輩、馬鹿な事をしていないで、控え室に戻りますよ」

呆気に取られて固まるヘリオ先輩をそのまま放置し、私はさっさと控え室に向かいました。

その後、翌日皇帝陛下への謁見が了承されたことが、ナイグラ元

帥の使いから伝えられました。

一夜明け強襲日当日、私達は皇帝陛下に着任挨拶を行うため、謁見の間に赴きました。そして、通された前室には、地方領主の三人が謁見を待っています。

「おかしな話ですよね、ヘリオ先輩。
皇帝陛下の護衛の任を受けたアリエラ達が、ここにいるっていうのは……絶対変ですよね」
「まあまあアリエラ、滅多な事を言っちゃ駄目だよ。こうしていたって、何か事が起きれば、すぐさま皇帝陛下の下に、駆けつける事ができるんだから」
「ヘリオ先輩、へ理屈はどうでもいいのです」
「いや、へ理屈って……」
「ガードナー参謀は、今回の作戦で敵の魔法使いが動きやすいように、アリエラ達を遠ざけたみたいな事を言ってたよね」
「まあ確かに。でもはっきりとではないけど」
「やっぱりアリエラ達は嫌われてるのかな……もしかして、ヘリオ先輩がガードナー参謀を泣かしちゃったからかな……」
「いや、だから泣かしてないって」
「でもよ、でも……ヘリオ先輩は女を泣かせるのが得意ですから……昨日もアリエラは泣かされてるし……恨まれちゃっているのかな？」
「あのアリエラさん、僕に対する認識も泣かせるという言葉の意味合いも、だいぶ違っているようですし、話もかなり脱線してますよ」
「という事は、あれかな？　もしかして、ここで何かが起きるのかな？　間違っても敵は攻めてこないから、それ以外で何か陰謀めいた事が……それをアリエラ達で未然に防いでもらいたいとか」
「あんまり怖い事を言わないで下さい、アリエラさん」
「でも嫌われていないのなら、それくらいしか考えられないよ。こ

んなところに送り込まれるなんて……」
「アリエラ、もしそうなら、ガードナー参謀から何らかの指示があるはずだよ」
「なら、実はアリエラ達が嵌められちゃったとか……」
「だから、それは何の為にですかアリエラさん」
「だって、ヘリオ先輩が女を泣かすから……その仕返しとして……」
「お願いだから、僕をそんな目で見ないでちょうだい。そもそも泣かされてるのは、いつも僕なんだから……現に今も……」
「ヘリオ先輩、馬鹿な事を言ってないで、謁見の順番ですよ」
私達は係の者に先導され、謁見の間に向かいました。

「ヘリオ先輩、シャンとしてよね。アリエラは恥をかきたくないんですからね」
「あ、あぁ、も、もちろんだよ」
謁見中は、あれでも私の上官のヘリオ先輩が主に受け答えをする。口の達者な私は、皇帝陛下が私の言葉を欲されない限り、口を開く事はできません。
非常に残念だがヘロヘロのヘリオ先輩が、できの良い私を抑えて特殊遊撃部隊のリーダーなのです。稀に、らしい事をしますが、イレギュラー、若しくは誤差の範囲です。
案内された謁見の間は扉もなく、思った以上開放的な空間が広がっています。
出入り口両脇に立つ近衛兵に、いったん止められ、ひと睨みされたのち、ようやく広間に通されました。

「やっぱりおかしいよ。護衛任務のアリエラ達が、この扱いだよ。本当にこれって作戦として、話が通っているのかしら」
「駄目だよアリエラ、静かに」
明姫姉達を連れてくる事ができないため、いつもの念話のような会話ができない私は、つい呟いてしまいます。

謁見の間に入ると、正面奥中央の玉座にはバルドア皇帝陛下が鎮座し、両脇に側近が控えています。
私達は左右それぞれ十数名の近衛兵達が整列し睨まれる中を玉座前まで進み、片膝をついて頭を下げました。

「特殊遊撃部隊、中将ヘリオ・ブレイズ、少将待遇アリエラ・エディアス両名は、ナドウッド・ナイグラ元帥の命を受け、バルドア皇帝陛下護衛の任に着任した事を、ご報告いたします」
「ほう、そなた達であったか。報告は受けておる、その役目しっかりと頼んだぞ。
そうそう、明日は、ナイグラ、ストントーチともに茶会に参加するがよい。話しておきたい事もある。沙汰は後ほど使いの者を送る。
本日は、もう下がってよい」
私達は、半ば追い立てられるように、謁見の間を後にしました。

「うぅぅ……」
「アリエラ、まだ駄目だ。せめて控え室に戻るまで、我慢するんだ」
「うぅ……なにさ、ナ・ン・ナ・モゴ……」
我慢しきれず、口を開きかけた私でしたが、ヘリオ先輩の手で天使の口をふさがれました。そして、この小柄で可愛らしい体を、いとも簡単に抱きかかえると、そのまま控え室に向けて猛ダッシュを始めました。

「アリエラ、暴れるな。こら、大人しくしろ……」
「……モガモゴ……ウゥ……アグ」
「わっ手を噛むな……こら、痛いって……」
「？ぅ……」
周りに目もくれないで、ひたすら控え室を目指して走るヘリオ先輩と、周囲の好奇の目に晒されてながらも、この束縛から抜け出そうともがく私でした。

しかし口や頭の勝負なら決してヘリオ先輩には負けない私も、力勝負だけは残念ながら勝てません。
必死の抵抗も虚しく、足をばたつかせ暴れた為に、スカートがめくれ上がり「パンツ丸出しちゃん」という結果を招いていました。とは言ってもこの時点では、そんな事になっているとは、知らなかったのですが……その見事な艶姿で抱きかかえられたまま、控え室まで運ばれてしまいました。
そして部屋の扉を開く為に、私の口を束縛していた手を離しました。

「ヘリオ先輩！　い、いきなり何をするんデ・ス・カ！」
しかしヘリオ先輩は、答えもしないで扉を開くと、すぐに部屋へ飛び込み扉を閉めます。

「ハァハァ……よし、ここなら防音だ、好きなだけ騒げるぞ、アリエラ」
不自然な姿で、いきなり飛び込んできた私達に驚き、呆気に取られていた明姫姉達が、我に返り口を開きます。

『下僕よ、また小娘が何かしでかしたのか？』
まずは輝姫が問いかけてきました。そして答える間も与えず、明姫のツッコミが入ります。
『あららアリエラちゃん、凄く色っぽい格好でどうしちゃったのかしら？』
私は明姫の言葉で、妙にお尻が涼しく感じた理由がわかりました。

「ヘリオ先輩、アリエラのパンツを見せびらかしたかったのです・カ！
ぼちぼち、ソ・ロ・ソ・ロお尻を隠したいのデ・ス・ガ・よろしいでしょう・カ！

それよりナ・ニ・ヨ・リ・モ、その手は、いつまで、ド・レ・ダ・ケ触っているつもりなのデ・ス・カ！」
ヘリオ先輩の抱きかかえる手が、私の胸のふくらみしっかりと掴んでいました。
私の言葉を聞いた彼は、二、三度手を動かし、感触を確かめると、ようやく掴んでいるものの正体に気が付いて、その手から力を抜きました。言ってはならない言葉とともに……

「へっ……あっアリエラ、ごめん気が付かなかった」
「うぅぅ……気が付かなかったって……ヘリオ先輩！　凄く失礼で・ス！
アリエラだって、その程度って、わかってます、キ・ヅ・テ・マ・ス！　ご丁寧に、ワ・ザ・ワ・ザ、言わなくてもいいんで・ス！
でも、ダ・ケ・ド、まだ発展途上なんで・ス！　発達中なんで・ス！
わざわざ確認しないとわからないくらい、小ぶりですみませ・ン！　小さくてごめんなさ・イ！
だから、デ・ス・カ・ラ、そんなつまらないものをいつまで触ってないで、早くおろしてくださ・イ！」
「アリエラ、ごめん。本当にごめん。そんな意味じゃないんだ。だから本当にごめんなさい」
怒髪天を衝く私が可哀想に思えるくらい、ヘリオ先輩は平謝りをしながら、そっと床におろし、私を完全に解放してくれました。
確かに先輩の言動には気分的に、許しがたいところがありました。でも、事の始まりは私の「思った事をすぐに口に出す」という、少々子供っぽい性格に原因があるわけで……あの場で先輩が連れ去ってくれなければ、私は今頃偉い人達に叱られていたでしょう。なんだかんだいってもヘリオ先輩は、私を助けてくれたわけです。
自己反省をした私はヘリオ先輩に声をかけます。

「ヘリオ先輩、ごめんなさい。アリエラは、ちょっと言い過ぎました。
でも、そのうち触ればすぐにわかるぐらい、成長しますから、期待していて下さいね」
「アリエラ……ありがとう……」
『おや小娘、なんぞ良い事でもあったか？
おおかた下僕に平たいそれをごにょごにょされて、気持ちよグゲェ……痛いです……ごめんなさい』
『あ輝姫ちゃんは、ちょっとお口を閉じててね。
アリエラちゃんだって、いろいろ成長して覚えるわよね……操作術も……』
『明姫姉……それ内緒なんだから言っちゃ駄目よ。
でもね本当に酷いんだよ。謁見ってあんなもんなのカ・シ・ラ。
ヘリオ先輩が挨拶をしただけなんだよ。ほんの数分……数十秒だよ。
あっというだよ、入ったらすぐ終わりだもん。
アリエラなんか、皇帝陛下に顔を合わせる間もなく「下がってよい」だもん、文句の一つも出るわよ』
『あらら、アリエラちゃんも皇帝陛下とお話がしたかったの』
『そう言うわけじゃないんだよ。
でもね、なんだか……近衛の人達の目つきも「何をしに来たんだ」みたいで嫌だったし……本当、何の為にここに来たのかな』

護衛の任務と言っても、特にやる事もない私達でした。よくいう厄介払いと言っても良いでしょう。もっと言えば宮殿内に軟禁状態です。
そんな私達に翌朝、皇帝陛下の使いから茶会の時間と場所の知らせを受けると同時に、強襲部隊全滅の知らせも届きました。

策略　9（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　１０（前書き）

１０月３日　地の文を変更しました。

策略　10

「やっぱり全滅か、当然の結果になったね、アリエラ」
「それにしてもよ、報告では全員が土壁に磔って……まるで公開処刑よね。どうしてガードナー参謀の深いところにある意図がわかったのかしら。相手は距離に関係なく、心が読めるのかな。それとも中枢にまで諜報員が入り込んでるのかしら」
「その辺はどうかわからないけど、こうも考えられるよ。
この帝国で、もし皇帝陛下の暗殺計画を実行して捕まれば、事の成否にかかわらず当然死刑だよ。そして、二度と同じ事を起こさないように忠告……いや見せしめのために、公開の場で残酷なやり方で、刑を執行すると思う。それは当然向こうにも当てはまるはずだよ。
もっともそれは、国内における犯罪行為として処理する場合の話だけどね。
他国の者が起こした場合、本来なら捕虜として拘束するのがスジなんだよ。
まあ、そんな事しちゃうと、聴取だ裁判だなんて手間がかかっちゃうし、なによりも自国の罪人達より、条約なんかで手厚く保護されてるから、それこそ処刑なんてできなくなったりするんだ。だからといって、理由をこじつけて無理矢理執行しちゃうと敵国のナショナリズムを煽ったりして、下手すると後の戦況に影響したりするしね。
だから結局は戦場で『公開処刑？　いいえ、全て戦闘行為です』なんて言い訳で、全部処理しちゃうんだよね」
「ヘリオ先輩、何か悪い物でも食べました？　そんな長々と喋るなんて……でも、そうなのかしらね」
「僕もたまには……って、あれ？　ところでアリエラ、あんな報告を受けても騒がないなんて、珍しいな」

強襲部隊が全滅という、私としては一番避けたかった事態になったのにもかかわらず、いつものように騒がない事を不思議に思ったのか、ヘリオ先輩が問いかけてきました。

「ヘリオ先輩、あんなのは全滅前提の計画、わかりきった結果なんですよ。それで何で騒ぐ必要があるんですか？
ソ・レ・ヨ・リ・モ……珍しいって……それじゃまるでアリエラは、いつも騒いでるみたいじゃないです・カ！
ヘリオ先輩は、アリエラをサイレンか何かと思っているのカ・シ・ラ！」
「あ、いや、そういうわけじゃないけど……ほら、昨日とか一昨日とか……」
「ヘリオ先輩、あれはアリエラが全て悪いというわけです・ネ！
それは、タ・イ・ヘ・ン・失礼しまし・タ！　ごめんなさ・イ！
だから、デ・ス・カ・ラ、あんな恥ずかしい姿で、宮中を引き回されちゃったわけなのカ・シ・ラ！
しかも、シ・カ・モ・ヨ、まだ乙女な私の可愛いふくらみまで掴まれて、あれは騒音をまき散らす、アリエラの受けた罰だったのです・ネ！」
「だから違うよ、そういう意味じゃなくて……」
「じゃあ、どういうイ・ミ・なのです・カ！　何度言われてもすぐに騒いじゃう、馬鹿なアリエラにはわかりませ・ン！」

一瞬間が空いたその時、ヘリオ先輩から思いもしない言葉が返ってきました。

「わかりまし・タ！　僕が悪かったで・ス！　ごめんなさ・イ！」
「うぅぅ……まねしないで下さ・イ！　アリエラのオリジナルなんで・ス！」
「それはすみませ・ン！　知りませんでし・タ！」

ヘリオ先輩に私の口まねをされるという思わぬ反撃にあい、議論にならない論議となり、堂々巡りが始まります。そんな状況を見かねたのか、輝姫ちゃんが会話に割って入ってきました。

『下僕に小娘、朝から何を騒いでおる。
そもそも下僕よ、いまだに小娘一人を手込め……手懐けられずになんとする。だから何かと騒がれるのじゃ。
いい加減扱いを覚えて、小娘を卒業させてやればよいの……じゃ、って……ごめんなさい』
急に口ごもった輝姫ちゃんの目に映り込んでいたのは明姫姉の姿でした。

『まったく輝姫ちゃんは、どうしてそんなにお口が軽快なのかしら。
半分くらい縫い付けちゃった方がいいのかしらね、アリエラちゃんはどう思います？』
明姫姉はどこから持ち出したのか、縫い針と糸を手に、輝姫ちゃんに向かい穏やかな笑い顔で、手招きをしています。

『明姫姉、それ怖いから……輝姫ちゃんも反省してるわよねっ』
『はい……海より深く……反省しています』
『あらら輝姫ちゃん、本当かしら？　ちょっとこっちに来てみない。お姉さんは心が読めるから……大丈夫よ、本当に反省しているなら、なぁんにもしないから……ふふ』
『ご、ごめんなさい明姫……ア、アリエラ、妾をかくまってくれ』
そう言うが早いか、輝姫ちゃんは私の後ろに隠れるように回りました。

『ねえねえ輝姫ちゃん、何でアリエラの後ろなの？　普通ならヘリオ先輩じゃないの、一応は契約主なんだから』
『わからぬかアリエラ。あの下僕に明姫の凶行を止めれると思って

おるのか？』
『……なるほど、そうだね』
「信頼されてなくて、すみませ・ン！　情けない契約主でごめんなさ・イ！」
突然私達の耳に飛び込んできたのは、悲痛な叫びとなった、涙目のヘリオ先輩の言葉でした。
「あのヘリオ先輩、その言い方を泣きながら使うのはアリエラ的には、間違っていると思います。怒りながらが正解なんですが……」
「いいえ、いいので・ス！　これで合っているんで・ス！　僕、ヘリオのオリジナルなんで・シュ！
それと、まだ泣いてませ・ン！　涙目なんで・シュ！」
「シュって……輝姫ちゃんごめん、ヘリオ先輩、壊れちゃった」
『あらら、本当壊れちゃったみたいね。
お姉さんもびっくりよ』
『いずれはこうなると思っておったのじゃが……アリエラよ、気に病む事はないぞ。下僕の精神が弱かったのじゃ。とりあえず、今は放置しておくかの』
こうして騒がしい午前が過ぎていきました。ドタバタのあるときは、最後にヘリオ先輩が凹んで終わることが多いのです。
そして今回もそのようになったのですが……この後皇帝陛下に呼ばれた茶会があります。それまでには立ち直ってくれないと困ります。
昼食時間になる頃、ヘリオ先輩は正気を取り戻してくれました。しかし、ここにきてまた凹まれては困るので、優しい私は、全てを我慢して受け答えをしました。

そして午後二時が茶会開始の予定時間です。私達は、警備の都合で何度か近衛兵達に止められる事を考え、午後一時半に控え室を出て、会場である特別談話室に向かいました。
特別談話室は、宮殿敷地内にいくつかある別館の一つに入っています。そこは、特に秘密が必要とされる会談を行うときに使い、室内で話された内容は、当事者が口を開かない限り、決して外部には漏れることがないといわれてます。
別館といっても規模はそれなりのものです。ところがその外観は他の建物に合わせる為のハリボテのようなもので、建物内には部屋が一つあるだけと聞いています。
その部屋は幾重の壁に守られて、外と完全に別れているようです。噂では、何らかの不可思議な力で現次元から、完全に隔離されているとも言われてる程です。

私達は、宮殿から手入れの行き届いた庭園に出て、右回りに外周の歩道を歩き、三つ目の曲がり角を左に折れ、特別談話室のある別館への一本道を進みます。
しかし本日の警備は一段と物々しいのです。一本道に入ると、十メートル程の間隔で近衛兵が歩道の左右に並んでいます。そして私達を嫌な目つきで睨みつけます。プライドからなのか、その目は「皇帝陛下は俺達近衛が守る、お前達に用はない」と言わんばかりでした。

（……こいつら妬んでいるのかしら……）

威圧感たっぷりな百五十メートル程の一本道を終えて、別館の正面玄関に着きました。
当然、ここにも近衛兵がいる。私達の階級は彼らより上であるが、それでもフリーパスとはいかないようです。

そして止められた私達に彼らが問いかけます。

「所属、階級、氏名をお願いします」

実際、特殊なところに所属している私達です。その上、私は一目見れば忘れられないくらい可愛い女の子です。いちいち確認されなくてもわかるはずなのです。

そんな確認は、どこにでもいるような男子の、ヘリオ先輩だけにしてほしいです。

でもこれって、もしかしてスリーサイズとか聞かれたら、答えないといけないのかしら……きっと通してくれないのですよね。建前恐るべしです。

「特殊遊撃部隊、中将、ヘリオ・ブレイズです」

「同じく、少将待遇、アリエラ・エディアスです」

「伺っております。どうぞ」

そう言うと、近衛兵達が玄関の扉を開きます。

（ってか、なんなのここ……）

開かれた扉の奥を見た私の目には、次の扉と警護の近衛兵達の姿が飛び込んできました。

とりあえず別館の中に一歩足を踏み入れました。

すると背後の扉が静かに動きだし、最後に重く、ゆっくりとロックの掛かる音を残して閉まりました。

ガッ……チャン

（ここって、恐怖の館なのかしら……）

そして私達が足を進めると、当然近衛兵達に止められ、先ほどと同じ事を尋ねられ、同じやり取りをします。

「所属、階級、氏名をお願いします」
「特殊遊撃部隊、中将、ヘリオ・ブレイズです」
「同じく、少将待遇、アリエラ・エディアスです」
「伺っております。どうぞ」
そう言うと、近衛兵達が扉を開きます。

（って……これっていじめかしら。間違いないわ、妬みとかじゃなくて、精神的ないじめよ）

心の中で叫んだ私の目には、先ほどと同じ光景が映り込んでいます。

こんな時に明姫達がいてくれたら、ヘリオ先輩に文句を聞いてもらっていたのに……多分ヘリオ先輩も同じ事を思っているかもしれません。もっともヘリオ先輩は、私に愚痴る事はないでしょう。

（そもそも、この短時間で人が入れ替わったり、何かを仕組む事ができるとでも……これは人材の無駄遣いじゃないかしら）

そんな心の声をよそに、このやり取りは合計五回行われました。
そして五つ目の扉が開くと、私の目に今までとは全く違う、重厚な扉が映し出されました。
でも近衛兵達はいたので、六度目のやり取りを何故か期待してしまった。
しかしそういう時に限って何故か、何事もなく、鈍く響く音を立てて、重厚な扉は開かれてしまいました。

（あぁ、どうして、アリエラに言わせて……もう、あなた達を見ると言わずにはいられないの……「同じく少将待遇アリエラ・エディアスです」って……）

ところが開かれた扉の奥には、また扉があります。

そして私は目を疑いました。そこには近衛兵達が立っていないのです。

今の私の脳内では、扉には必ず近衛兵達がいるという情報を処理し、記憶に刷り込んでいました。その結果、記憶と現状の相違で混乱し、固まってしまいました。

「おいアリエラ、呆然として大丈夫か？　調子が悪いのか？」

「あっヘリオ先輩……もう近衛の方達はいないですよね。もう大丈夫ですよね」

「……？　……？」

私の言っている事の意味がわからず、挙動不審な私を覗き込むヘリオ先輩でした。しかし彼が声をかけてくれたおかげで、正気を取り戻す事ができました。

でも刷り込まれた記憶はとうぶんの間、残るわけで……しばらくは扉を見ると、そこに近衛兵達が立ちふさがる幻覚を見そうです。

とりあえず、正面の誰もいない扉に向けて歩みを進めると、やはり背後で今通った扉が重い音と共に閉ざされました。

気を取り直したところで、時間を確認すると、午後二時の五分前でした。

何事もなければ十分もかからない、道のりなのです。意味不明の嫌がらせとしか思えない検問のおかげで、たっぷりと時間を使ってしまいました。

皇帝陛下の執務室からは直通のルートがあるらしいのです。そこなら警備の手も薄いかもしれませんので、十分もかからないと思うのです。しかし今の私達では、間違っても使わせてもらえません。やっぱり今通ってきた近衛団による精神攻撃の一本道しかなさそうです。

早くに出て正解でした。

私達は最後の扉をノックして少し間をおきます。しかし特に返事がありません。

とりあえず私達は、その扉を開いて誰もいないと思われる部屋に入りました。

初めて見る部屋です。広さは約百平米といったところで、それなりの広さがあります。しかし白で統一された壁や天井には、窓が一つもない閉鎖された空間でした。

そのためでしょう、そこには少しでも開放感を与えるようにと、照明のランプが必要以上に設置され、明るく物を照らし出しています。

壁には何枚かの風景画を飾り、床には薄い青色の絨毯を敷き詰めて、少しでも息苦しさを減らし、落ち着けるような彩りになっています。

中央には、本日の茶会に合わせて一台のテーブルを囲むように、五脚のイスが設置されています。

扉のところに立つ私達の正面に、皇帝陛下の肖像画が飾られています。

その時、私達に背を向けて肖像画を見上げるように、一番奥のイスに座っている人影に気がつきました。

間違いなく皇帝陛下です。

ですがこの時、目に映った皇帝陛下の姿に私は不自然さを感じま

した。
それに気を取られた私が、ヘリオ先輩にワンテンポ遅れて片膝をつき、頭を下げると、ヘリオ先輩が口を開きます。
「お待たせいたしまして、大変申し訳ございません。
特殊遊撃部隊、中将ヘリオ・ブレイズ、少将待遇アリエラ・エディアスの両名、参じました。
本日は、私どもにお声をかけていただき、誠に光栄にございます」
「……」
ヘリオ先輩はこちらの問いかけに、何の反応もしていただけない、皇帝陛下を不思議に思ったのか、別の言葉で問いかけます。
「皇帝陛下、いかがなされました？　ご気分を悪くされたのですか？」
「……」
再度の問いかけに返事が返ってこないのを、不審に思った私は、ヘリオ先輩に話しかけます。
「ヘリオ先輩、どう考えても様子がおかしいです」
「確かに……皇帝陛下、いかがなされましたか」
「……」
「ヘリオ先輩、近くにいきましょう」
「うん」
私達は、返事のない皇帝陛下に近づきました。
「えっ！　これは……一体なにが……」
ヘリオ先輩が異変に気づき声を上げます。
「こ、皇帝陛下……」
私の目に映ったのは、胸に二本の剣が刺さった状態で、既に絶命

した皇帝陛下の姿でした。

策略　１０（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　１１（前書き）

１０月３日　地の文を変更しました。

策略　11

「誰がこんな事を……って、こ、この宝剣は……アリエラと僕の……」

私は目を疑いました。

皇帝陛下の胸に刺さっている宝剣は、私達が将官の任命を受けた時に、皇帝陛下より賜った物です。それはある意味、私達を証明する物でもあります。

つまり間違いなく私とヘリオ先輩の物です。

私達は公式の行事で正装する時に限り、この宝剣を帯剣します。しかし今回は正装する機会のない任です。従ってこの宝剣は、私達の執務室に保管してあるはずなのです。

「何で私達の宝剣がここにあるの……？」

私が宝剣に触れようとしたとき、ヘリオ先輩が慌てて止めます。

「駄目だアリエラ、触れちゃ駄目だ」

「でも……これ……私達じゃないよね……」

「何言っているんだアリエラ。しっかりしろ！」

「でも、でもよ、私達の宝剣だよこれ……きっと刺しちゃったんだ……このままじゃ私達、死刑だよ……」

「大丈夫だよ、そんな事は無いよ、しっかりしろ！　いつものアリエラらしくないぞ！」

「でも、私達がやっちゃったのかな……アリエラ、どうしちゃったのかな……明姫姉を呼ばなきゃ……」

「おいアリエラ、いい加減に目を覚ませよ！」

ヘリオ先輩の平手が、正気を失い支離滅裂な事を言い出した私の頬をとらえます。

パシッ！

一瞬の痛みが走ると、私は我に返ります。

その時、扉が開き誰かが入ってきました。

「お待たせして申し訳ございません。皇帝陛下……」

私の目にナイグラ元帥とストントーチ参謀長の姿が映ります。そして目が合うと同時に、ストントーチ参謀長が叫びました。

「お、お前達何をした！」

「私達は何も……入室したら……」

ヘリオ先輩は状況を説明したくても、うまく言葉が出てきません。その上たたみ掛けられるように、ナイグラ元帥が扉を開き叫びます。

「ええい言い訳はいらぬ！　その宝剣はお前達の物であろう！　近衛の者すぐに来るのだ！」

私達にとって状況はまさに最悪です。誰が見ても私達が皇帝陛下の暗殺を行ったとしか思えません。

そして、ナイグラ元帥の叫ぶ声を聞いた近衛兵達が、特別談話室になだれ込んできます。

「ヘリオ先輩どうしよう……やっぱり明姫姉を……」

「駄目だ、絶対に駄目だ。今は事を起こしてはいけない。黙って近衛の指示に従うんだ」

しかし私は、今自分自身に起きている事に対して、冷静な判断力を失っていました。

「来て、白輝明姫（しろきあけひめ）姉」

「あ、アリエラ待つん……間に合わなかったか」

ここでは警護の近衛兵以外武装厳禁とされています。例え護身用の小刀ですら、持ち込みが禁止されている場所です。

私はそこに「お人形」を呼んでしまいました。それが一時の気の迷いだったとしても、一つ重大な罪を犯してしまいました。

『あららアリエラちゃん、なんだかとっても大変な事になってるみたいね。

これはさすがにヘリオ君の仕業では無いわね』

『明姫姉……アリエラは……アリエラはどうしたら良いのかしら……』

『大丈夫よアリエラちゃん、お姉さんはちゃんと考えていますわよ。

今はヘリオ君に輝姫ちゃんを呼ぶように言って』

『うん、わかった』

こうしている間にも、近衛兵達は人数を増やしていきます。そして包囲している私達を取り押さえるため、団長の号令を待っています。

しかし、突然現れた明姫姉の動向を恐れて、何もできないでもいます。

当然の話です。不用意に近衛団を動かし、反撃されると、宮殿、いやこの都市全体を消失しかねない、魔法への恐怖のためです。

「ヘリオ先輩、明姫姉が輝姫ちゃんを呼んでと……」

「しかしアリエラ、これ以上騒ぎを大きくするのは……」

「ヘリオ先輩お願いです。輝姫ちゃんを呼んで下さい。このままじゃ私達は……死刑確定です……無実のまま……そんなんじゃ、口惜しいよ」

「だからと言って、まだ弁解の余地はあるよ」

「いいえ、イッ・サ・イ・無いと思いま・ス。私達は嵌められたん

です・ヨ！　間違いなく、ア・リ・マ・セ・ン！
こんな事、考えなくてもわかりま・ス！
そもそもどうやって手に入れたか知りませんが、私達の宝剣を使うなんて、安直過ぎま・ス！」
今おかれている状況にかまわず、私はいつもの様に騒ぎました。

「やっと戻ってくれたね、アリエラ。
じゃあ、僕も呼ぶよ。
おいで金剛輝姫（こんごうきき）……様……」
ヘリオ先輩のとぼけた態度は、私を完全に正気に戻すための芝居だったようです。

『あらら、ヘリオ君もなかなかやるわね。さすがアリエラちゃんを怒らせたら世界一ね』
『ヘリオ先輩にうまく乗せられちゃいました』
『あら、乗られちゃわなくてよかったわね、アリエラちゃん』
『って明姫姉……それは決してありえません』
『あららアリエラちゃんは、乗られちゃうって意味をわかっているのね、ふふ』
『い、意味って……アリエラはわかりません、へへ』
この緊張感があふれる中、私と明姫の会話を近衛達が聞いたらどう思うでしょうか。
ここでヘリオ先輩に呼ばれた輝姫ちゃんが、不機嫌な表情で現れました。

『こら下僕！　何が「おいで」じゃ！　そこは「おこし下さい」であろう。その上、おかしな間を開けおってからに……』
『……輝姫……様、ごめんなさい……』
『またおかしな間をあけおって……そもそも、妾とお主とは「命を共有する者」であろう。なぜ危機が迫った時、すぐさま妾を呼ばぬ

のか。
妾は信用されておらぬのか』
『そんな事は無いよ。心から信頼してます、輝姫……様』
『これは一から教育が必要かのう。
とにかくじゃ、例えお主のような下僕であっても、万が一の事があれば、妾の悲しみは天をも貫き、大地をも裂くであろう。
アリエラ、これは明姫とて同じ事じゃ。
よいか、しっかりと肝に銘じておくのじゃぞ』
『うん、わかってるよ輝姫ちゃん。
だからアリエラはすぐに明姫姉を呼んだんだ』
『確かにのう。本当にアリエラは素直で良い娘じゃ。下僕よ、アリエラをよく見習うのじゃ。
わかったかの？』
『はい……輝姫……様』
『……下僕よ、一つだけ確認しておく。
お主は、仕置きを受けたいのか、受けたくないのか、どっちじゃ？』
『えっと……受けてみたいような……受けたくないような……お仕置きしだい……』
『ようわかったわい、いろいろ考えておったが、一切やめじゃ！』
『えっ、それは……輝姫……様……』
『輝姫ちゃん……薄々は気が付いていたけど、ヘリオ先輩って……よくいうMって……ア、アリエラはそれがどういう事か、し、知らないんだけどね……えへへ』
『はいはい、皆さん、もっと緊張感を持って下さいね。近衛の方々が困ってますよ』
明姫姉の一言で私達は、今まさに皇帝陛下暗殺の容疑者、いや既に犯人として、近衛兵達に囲まれている事を思い出しました。
しかしその近衛兵達は、二体の「お人形」を前に、どのように対

処していいのかわからず、完全にお手上げ状態になっています。
だからと言って、その職務上「はい、ごめんなさい」と退くわけにもいかないようであり、ただひたすら武器を構え、黙ったまま私達を牽制しているだけでした。
こうなると、私達が何かを起こさない限り、事態の収拾がつかなくなっています。
そして今、私の頭の中には二つの選択肢が浮かんでいる。多分ヘリオ先輩も同じ事を考えていると思います。

一つ目は全てを倒してここから逃げます。結果として皇帝陛下殺しと味方殺し、二つの汚名を持つ最悪の反逆者となり、今後逃げ回るという事です。敵国もそんな私達の亡命は、倫理上の理由で、受け入れてくれないでしょう。
二つ目は諸手を上げて投降します。当然嵌められた私達は、事の真偽にかかわらず、皇帝陛下を暗殺した者として死刑は確定です。
真相を知る私達は、弁解の余地もなく無実のまま処分され、実際に暗殺を企てた者の、シナリオ通りの展開となるでしょう。
私にとっては、そのどちらも当然納得できる結果ではありません。しかし残念ながら今の私に考える事ができるのは、この二つです。
その時、私は明姫姉が言った事を思い出しました。

『明姫姉、考えがあるって言ってたよね。
今のアリエラには、残念な手しか思い浮かばないよ』
『お姉さんにもそれは伝わりました。確かにその二択では、納得できる結果は無いわね』
『どうしよう、近衛兵達も開き直って……』
『じゃあ作戦を説明するわよ。
お姉さんと輝姫ちゃんを、遠いところに飛ばして逃がしなさい。
そしてアリエラちゃんとヘリオ君は、大人しく捕まりなさい』
『えっ！　それって、でも……でもよ……』

『お姉さん達だけ、逃げるわけじゃないから大丈夫よ。捕まるのがアリエラちゃん達だけなら、決して死刑の執行はできないわ。
さっき輝姫ちゃんが言ってたでしょう』
『あの、悲しみは天を貫きとか言ってた、あれの事なの？
でもアリエラは、意味がわからなかったよ』
『あら？　そういえば、アリエラちゃんには、契約してからしっかりと話ていなかったわね。
ちょうど良い機会だから、話しておくわね』
『でも、近衛兵の人が……』
『大丈夫、今のアリエラちゃん達にあの人達の攻撃は、一切通らないから安心して良いわ』
『でも、なんだか可愛そうよ。だって私達の会話が聞けないから、無言のにらめっこしているわけだし、緊張もしているだろうし……なんか、凄く疲れそうだよ』
『あらら優しいのね。じゃあアリエラちゃん、近衛の方々に微笑みながら、武器をおろして休むように言ったらどうかしら』
『うん、そうするね』
私はそういうと包囲している近衛兵達に話しかけます。
私と目が合った瞬間、たじろいだ彼らでした。かといって何もする事もできないで、私の話を黙ったまま聞くことになります。

「近衛の皆さん、私達は今後の事を考えています。まだ時間がかかるので、武器を下ろして一休みしていて下さい。
大丈夫、私達は今のところ攻撃する意思はないですよ。
あ、そうそう、一応忠告しておきますけど、私達に皆さんの攻撃は通りません。
ではこちらの意思決定まで、もうしばらくお待ちくださいね」
しかし満面の笑みで話しかけた私の話は、当然の事ながら無視され、その上「この娘大丈夫か？」的な、残念な人を見るような視線まで浴びました。そして近衛兵達は武器を構えたまま、黙って私達

の様子を見ています。

『明姫姉、やっぱり融通が利かない人達ですね』

『仕方ない事ですわ。それよりアリエラちゃん、説明しますね。

アリエラちゃん達とお姉さん達は、魔法という力を与える、その対価として、残された寿命の半分を頂くという条件で契約をしたわね』

『うん』

『でもお姉さん達はその対価を、最初に全部を頂くわけではないのよ。そうね寿命は燃料と考えるとわかりやすいかもしれないわね。

例えばアリエラちゃんが一秒生きる為には、同時にお姉さんが一秒生きる分の燃料が必要なの。つまり普通の人の二倍、アリエラちゃんは燃料を消費するの。これが残された寿命の半分を頂くという事なの。

ここまでは良いかしら？』

『なんだか、微妙だけど……なんとなく……』

『じゃあ続けるわね。

この寿命という燃料の流れは、契約主のアリエラちゃん達からお姉さん達に、ある程度満たされるまで一方通行で注がれるの。言えばお姉さん達はタンクなのよ。

だから、もしお姉さんに何かあった場合、底に穴のあいたタンクへ燃料を注ぐのと同じで、際限なくアリエラちゃんの燃料が流れ込んでしまうの。その結果は言わなくてもわかるわね。

これが「命を共有する者」という事なの。そして、さっきお姉さんや輝姫ちゃんを逃がしなさいと言った理由よ。

ここまでは、どうかしら？』

明姫が言っている事はわかります。ただ少しだけ気にかかっている事を尋ねます。

『うん、明姫姉の言っている事はわかるよ。だけどもし私達が殺さ

れちゃったら……』
『大丈夫よ、さっきもお姉さんが言ったけど、アリエラちゃん達だけでは、決して処刑されるような事はないわ』
『どうしてなの？』
その時、しびれを切らした近衛兵の一人が、槍で私達を突いてきました。そして一人が動いたとたん、堰を切ったように、囲んでいた近衛兵達が一斉に動いきます。

キィィィン、カァン、カコン……コン……

しかし金属が堅い物に当たった時に発する、甲高く鋭い音だけが虚しく室内に響きます。
どの槍も堅固な結界に守られている私達を、貫く事ができなかったのです。

「ば、馬鹿者！　す、すぐに槍を退け！　万が一魔法使いの二人に、なにかあったらどうするつもりだ！　今後は別命があるまで決して動くな！　よいか」
血相を変えた近衛団長が、命令を待たず強行に出た近衛兵達を戒めました。

『あやつの慌てぶりを見たじゃろう。つまりそういう事じゃ』
『そういう事って……アリエラ、わかんないよ』
『あらら輝姫ちゃんは、余分な事はたくさんお喋りするのに、肝心な事は言わないのね』
『そんな事は無いぞ、妾も言うときは、ちゃんと言うぞ』
『で……結局、どういうことなの？　明姫姉』
『……暴走するの。
もしアリエラちゃん達に何かあったら、お姉さん達は自分の意志に関係なく、暴走しちゃうのよ』

『暴走って……』
『つまりね、もしアリエラちゃんがお姉さんより先に死んだりすると、アリエラちゃんとの契約で、お姉さんが本来少しずつ頂ける事になっている燃料の残りが、一気にお姉さんに流れ込んでくるの。その結果、お姉さんは自分自身の制御をできなくなるのよ。
そしてどんどん流れ込んでくる燃料を、吐き出すために魔力に変換して、ところかまわずまき散らすの。それも一切制御していない魔力を完全に空になるまでね。
普段、完全に制御して使っている魔力でも、簡単に都市が消えちゃうのよ。これが何を意味するかは、あんまり考えたくないわね、アリエラちゃん。
そして空になった時、お姉さんも完全に停止するの。これもまた「命を共有する者」という事なの。
どうかしらアリエラちゃん、わかってくれたかな』
『う、うん大体は……だからあんなに恐れたんだ……知らなかったな……じゃあ、アリエラ一人でも戦場に出て行けば、みんな止まっちゃうね』
黙って私達の話を聞いていたヘリオ先輩が喋り出します。
『アリエラ理屈ではそうだけど、残念ながらこの事を知っている人は少ないと思うよ。アリエラでも今初めて知ったんだろ』
『……あっ、そうか……』
『僕たちが戦場に出て行くと戦闘が止まるのは、あくまで魔法に対する恐怖からなんだよ。
だからさっきの近衛兵達みたいに、極限に達すると開き直って飛びかかってくるんだ』
『さてアリエラちゃん達、そろそろお姉さん達を飛ばしてくれないかしら』
『そうじゃ。近衛共もしびれを切らしておる。次は、奴らを全滅させなければ収まらぬぞ』

確かに命令が無いと動けないとはいえ、かなりじれているように見えます。その表れとして包囲網が幾分小さくなっています。

『でも明姫姉、飛ばすってどこに……』

『そうね、向こうの魔法使いのいる「第一砦」と言われるところへ、お願いするわ』

『へっ？　でも敵陣のまっただ中よ。そんなところに明姫姉達を？　しかも魔法も使えない、完全無防備な状態で？　それって倒してくれって言ってるようなもんじゃない』

『大丈夫じゃよアリエラ。確かに妾達と「魔界コンビ」とは反りが合わぬが、あやつらはそんな事はせぬ。例え契約主が命令しようともだ。もっともあやつらも、そんな事を命令する輩とは契約はせぬがな』

『アリエラちゃん、これは信用してもいいところよ。なんていっても、同じ宿命を受け入れてるのよ。それこそアリエラちゃん達を助けにきてくれるわよ。だから安心して、お姉さん達を送り届けて』

『うん、わかった。明姫姉、輝姫ちゃん、絶対無事でいてね。明姫姉……じゃあいくよ』

『大丈夫よ、必ず戻るから、お姉さん達に任せてね』

『それじゃ頼み……ます……輝姫……様……』

『お主は……まあよい、仕置きは戻ってきてからじゃ』

私達は、明姫達を飛ばしました。それと同時に両手を上げて、取り囲む近衛兵達に投降しました。

すかさず取り囲んでいた近衛兵達に押さえつけられます。

「お前達、この二人に傷を付けるでないぞ！」

近衛団長が叫びます。おかげで、私達の扱いは酷いものではありませんでした。

「き、貴様達、人形をどうした！」
「いない方が皆さん動きやすいだろ、だから消したんだよ」
近衛兵に押さえつけられたヘリオ先輩がそう伝えると、私達は口に何かを詰められました。その上から覆面をかぶせられ、口と目をふさがれます。更に拘束衣まで着せられ、完全に自由を奪われました。
そしてそのまま事情を聴取される事なく、皇帝陛下暗殺という超一級の罪人として、別館の一つ、近衛団詰所の地下にある牢獄に収監されました。
「……やっぱり怖いよ……明姫姉……早く戻ってきて……」

策略　11（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　12

「お人形達を中に通すから、神楽達はすぐにお人形達を連れて会議室に来てくれ」
突然現れた二体の「お人形」を前にして、俺も鈴音も予想外の出来事に呆気にとられていた。そこに帝の命が伝音管を伝わり聞こえてきた。

「帝、よいのですか？　敵の魔法使いを倒す、またとない機会です」
「神楽、お前はそれでよいのか？」
「……」
帝の問いかけに、俺は何故か言葉に詰まった。これには俺自身が驚いた。
厄介な魔法使いの「お人形」が、無防備でやってきたのだ。普通に考えるなら、今倒しておくべきなのだろう。しかしそれを良しとしない、もう一人の俺が「今はその時でない」とマッタをかける。

「わかりました、ただちに連れて行きます」
多少納得できないところがある。しかし今は、心に潜むもう一人の俺を信じる事にした。

『うんうん、そうだよぉ神楽君。やるときは正々堂々、ズルは駄目なんだよぉ。
それに白姉ちゃんや金ちゃんは、困ってるんだよぉ。ここはお友達として、助けるべきなんだよぉ』
『闇姫さん、俺は敵に友達はいないけど……まあ、話のスジが通っているなら、彼女達の契約主を助けるように、帝へ掛け合うよ』
『おぉ神楽君、かっこいい、さっすが黒の契約主さんだねぇ。惚れ直っしゃったよぉ』

『確かに今の神楽様は一段と素敵ですわ。鈴音様が一番愛しているのも頷けますハッ……！』
『鬼・姫・ちゃん……そのお口、どうしてほしいのかしら』
『まあまあ鈴音、落ちつて。とにかく彼女達を迎えに行こう』
『はい、兄さん』
階段を降りようと向きを変えると、闇姫が待ったをかける。

『神楽君ちょっと待ってねぇ。
おぉい白姉ちゃん、金ちゃん、今から黒達が行くから、門のところで待っててよぉ』
『闇姫ちゃん、お姉さん達を受け入れてくれるのですね』
『うん、帝兄貴がどうぞって』
『ありがとう……ありがとうございます』
『じゃあ今から行くねぇ。ちゃんと大人しく待ってるんだよぉ』
そう闇姫が伝えると俺達は櫓から降りて、正門に向かった。

俺達が正門に到着すると、伝音管の前が何やら騒がしくなっていた。

「帝様、本気でおっしゃってるのですか」
「当然だ、天鳥達が到着したら開門せよ」
「しかし……」
事態を見かねた鈴音が話しかける。

「どうなさったのですか？　よろしければ私がお話を伺います」
「えっと、お嬢さんにお話をしても……」
「おい、馬鹿、鈴音様だよ、魔法使いの天鳥鈴音様だよ」
「へっ？　し、失礼しました」
「気にしてません、それよりお話をお願いします」
「はい、帝様が開門せよと……そのうえ敵のお人形を中に入れよと

……」
「それでしたら、大丈夫ですよ。その為に私達が来たのです。
それに、お人形といっても、魔法使いがいなければ、たいした事はできません。
だから安心して下さい。そして私達にお任せください」
そういうと鈴音は深く頭を下げた。

「そ、そんな、鈴音様、頭を上げて下さい。私らなんかに頭を下げないでください」
「いいえ、あなた達の気持ちもわかります。魔法は恐怖そのものでありますし、お人形はその象徴ですからね。だから恐れるなとは言いません。でも少しだけ私達を信じて下さい、お願いします」
「わ、わかりました。と、とにかくすぐに開門します」
慌てて兵士達が開門作業に取りかかる。

（すっげぇ、鈴音はいつの間にそんな人心掌握術を覚えたんだろう）

『兄さん、聞こえてます。そんなんじゃありません！』
『あっ、ごめんなさい……でも鈴音、いつか教えてくれよ』
『だからそんなのではありません！』
『そうですよ、神楽様は既に手に入れてます。だから鈴音様もお心をウビャファフェフェ……』
見ると鈴音が鬼姫の頬を引っ張っていた。

『このお口かしら、おかしな事を言うのは……』
『ひょふぇんひゃひゃい……』
気が付くと周りの兵士達が鈴音と鬼姫を注目している。すると一人の兵士が俺に尋ねてきた。

「あの……鈴音様は、お人形を虐待しておられるのですか？」

「そうじゃないんだ、これも鈴音から鬼姫に対する愛情表現なんだ……はは……いつもの事なんだ……はは」
そうこうしているうちに正門が開きだした。
敵の攻撃に対抗するため、ふんだんに使われている金属によって、重厚かつ強固に作られている門である。それが今、低く重い音を立てて、少しずつ上がっていく。そして俺達が無理なく通れる高さまで上がると停止した。
俺の目に外の風景が映り込む。その中央には二体の「お人形」並んで立っている。それを確認したと同時に、その二体に向かって闇姫が一番に駆け出していく。

『おっ待たせぇ、白姉ちゃんに金ちゃん。久しぶりだねぇ。
さぁ、神楽君達も早くぅ早くぅ』
『あ、こら闇姫、待つんだ』
俺達は駆け出した闇姫を、慌てて追いかけた。そして、二体の「お人形」の前で立ち止まった。

『えっと……形式張ってますが、まずは名前から……』
『やだなぁ神楽君、白姉ちゃんと金ちゃんだよぉ。何度も言ったじゃん』
『あの闇姫さん、そういう事ではなくて、こういう事は儀礼的だけど必要です。彼女達もやりにくいでしょう』
『そうなの？　じゃあ黒鬼闇姫（くろきやみひめ）です。これでいいんだよねぇ』
『相変わらずですね闇姫ちゃん。
申し遅れました。お姉さんは白輝明姫（しろきあけひめ）、後ほどお話しいたしますが、契約主のアリエラ・エディアスはここにはいません』
『なんだかんだとめんどくさいのう。
妾は金剛輝姫（こんごうきき）じゃ。契約主である下僕のヘリオ・ブレイズは、明姫と同じくここにはおらぬ』
『えっと……少々独特な言葉と出で立ちで……あっ失礼、俺は神国

天ノ原独立魔戦部隊、筆頭魔術師天鳥神楽、闇姫の契約主です』
『同じく天鳥鈴音よ。鬼姫ちゃんの契約主です』
『言わずともわかってますわよね。私が銀界鬼姫（ぎんかいきき）という事は、白輝明姫さん、金剛輝姫さん。お二人とも、滞在中は大人しくしていて下さいませ』
全員の簡単な自己紹介を終えたところで、俺が尋ねる。

『ところで闇姫、四人は知り合いなのか？』
『神楽君も人の話を聞いてないなぁ。さっき黒はお友達って言ったよぉ。一回で覚えないと駄目なんだよぉ』
『はいはい闇姫さん、それは失礼しました』
『神楽ちゃん、お姉さんが言うのはスジ違いかもですが、「はい」は一回って習いませんでした？』
『そうであるぞ、神楽。言葉は正しく使うが、良い下僕への第一歩じゃ』
『……えっと明姫さん、輝姫さん……いや、今はいいです。とにかく案内しますから付いてきて下さいね』
喉まで出かけた言葉を押し殺した。俺達は砦内に戻り、兵士達が固唾をのんで見守る中、彼女達を帝が待つ会議室まで案内をはじめた。
その途中、気になっていた事を彼女達に尋ねた。

『えっと、その服は帝国の民族衣装なんですか？』
明姫の黒地の服に白い前掛けの姿は、どことなく納得できた服だった。しかし何とも納得しがたいのが、輝姫の服装である。黒皮のようなもので作られており、体の線を強調するように密着している。言い換えると怪しく艶っぽい服である。
確かに明姫と輝姫は、少女的な闇姫達とは違い、成人女性的な体型をしている。ある意味それに合う服装なんだが……輝姫のそれは少し行き過ぎている気がする。

『あらら神楽ちゃん、違うわよ。これはねメイド服よ』
『メイド？　冥土？　死後の……？』
『嫌ね神楽ちゃん、違うわよ。こっちの言葉では……そうね女性使用人と言うのかしら。
　つまりねお姉さんは、アリエラちゃんにお使えする使用人なのよ。だからメイド服なのよ』
『なるほどね……じゃあ輝姫のもそうなのかな？』
『ほう、妾を呼び捨てにするとは神楽よ、なかなか肝が据わっておるの……まあよいか、こちらも、これから世話になる身じゃ。
　して衣服の事じゃったのう。この妾の服は下僕の好みのようじゃ。何でも女王様とか言ってたかのう。しかし妾の記憶では、このような姿の女王は知らぬ。
　神楽達は知らぬか？』
『知ってたら、聞かないよ。鈴音はどうだ？』
『私も、見た事無い服装だから、気にはなってました。
　でもその服装で女王様って……なんだか淫靡な響きですわ……はっ！　私ったら……』
『そんなもんかのう……まあよいか。下僕に再会したら問い詰めてみるか。
　ところでその様子では、服装の事もそうじゃが契約の事など、あまり聞かされていない様子じゃのう』
『輝姫ちゃん、それは仕方ないわよ。話のできるお姉さん達と違って、なんていっても「魔界コンビ」のお嬢ちゃん達ですからね』
『確かに、会話にならぬからのう……残念な「魔界コンビ」相手では……まことに残念じゃ』
『あぁっ、白姉ちゃんに金ちゃん、そんな意地悪な、憎まれ口をたたいちゃ駄目なんだよぉ。
　鈴音ちゃんに指導されちゃうよぉ。こっわいんだよぉ、この世のものじゃないんだよぉ』

『そうですわよ！　全く何が残念な「魔界コンビ」よ、失礼しちゃいますわ。
さあ鈴音様、こんな方々いつもの様に……お口に……バッテン……のり付け……』
『されたいのかしら、輝姫ちゃん達は……そもそも私をなんだと思っているのかしら。
いいわ、それをお望みなら……全員並びなさい！』
『黒もなの？』
『はい』
『妾達もか？』
『当たり前です！』
『私もですか鈴音様』
『輝姫ちゃんは、それを言う資格はありません！
とにかくゴチャゴチャ言わないで、すぐ並びなさい！』
そして「お人形」達にとって恐怖の時間、鈴音の指導が始まる。

『本当にあなた達は……』

『こ、この妾が震えているじゃと……これが恐怖というものか……体の戦慄きが止まらぬ……今後は姐御と……なにとぞ穏便に……』
『お姉さんも……体中が警報を……この人に逆らっては駄目と……これが恐怖というものなのね……お姉さんも姐御と……お呼びします』
明姫と輝姫はこの時、初めて恐怖を体験したようだ。

『わぉ、さすが鈴音ちゃん。
あっという間に、白姉ちゃんと金ちゃんを制圧しちゃったよぉ。かっくいい』
『そんな事をいってる場合ではないですわよ、黒鬼闇姫さん。あなたもその対象になってますわよ』

『えぇ、黒もなのぉ？　ねぇねぇ鈴音ちゃん、黒もあんな風にされちゃうのぉ』
『姐御って……全くあなた達は……もういいわ。それに闇姫ちゃんや輝姫ちゃんを一生懸命叱ってる私が……自分自身がなんだか可哀想に思えてきたわ』
『えぇ、なんでなんで可哀想なのぉ鈴音ちゃん、黒が慰めるから話してよぉ』
『黒鬼闇姫さん、それ以上鈴音様にツッコミを入れると、黒化するので控えて下さいませ』
『鈴音ちゃんが黒化するってぇ？　黒になっちゃうのぉ？　じゃあ、黒はどうなっちゃうのかなぁ？　銀ちゃん、言ってる意味がわからないよぉ』
『もういいです。輝姫ちゃんに闇姫ちゃんは放置です』
『あの恐怖に打ち勝つとは……恐るべきは「魔界コンビ」じゃのう』
『あらら、でもやっぱり会話にならないのね、ふふ』
鈴音の指導が一段落したところで俺が割って入る。

『さて、話はついたか。帝を待たせてしまっている。会議室に急ぐよ』
俺達は会議室に向けて足を急がせた。
俺はその途中歩きながら、金剛輝姫が言いかけた事を尋ねた。

『輝姫はさっき、服装とか契約とか言ってたよね。それって何の事かな』
『なんじゃ、そのような事は闇姫にでも聞けば良いじゃろう』
『いや、だからさっき明姫や輝姫が言ったじゃないか……会話にならないって……』
『あぁ神楽君、そういうことは言っちゃ駄目なんだよぉ。黒だって、ちゃんとお話しできるんだしぃ、それに会話ができないのは神楽君だよぉ。いつも話しが脱線しちゃうんだからぁ』

『闇姫さん、それは大変失礼しました。
というわけで、どういう事なのかな、輝姫さん』
『仕方ないのう、契約の事については、妾が話すのはスジが違うので控えるぞ。それは闇姫に聞くがよい。
妾達の服装など外観は、契約主であるお前達の願望や望みが基になっておるのじゃ。
先ほども言ったであろう。妾の服は下僕の好みと……つまりじゃ、闇姫の服はお主の願望の表れの様なものじゃ』
『そんなもんかな……俺はあんまり意識してないけど……着物は好きかな……じゃあ鬼姫はどうなんだろう。鈴音の願望なんだろう。でも神国では見かけないからな……』
『私は、小さい頃に本殿の図書館で見た事があるのよ。えっと……ゴシックとかなんとかって言ったけど……すごくヒラヒラしていて可愛いなって……』
『そうね、あれはこちらより帝国側のドレスに近いわね。お姉さんの服だって、フリルを付けるとあんな風になるかもね。でもアリエラちゃんが、素敵なメイドさんが……っていうから、お姉さんはこの服がお気に入りよ』
『えぇ、黒はねぇ、あのねぇ……』
『あら黒鬼闇姫さん、それははしたないですわ……』
『じゃがのうそうはいっても妾は……』
『でも私はね……』
『お姉さんはだから……』
俺は今、猛烈に後悔をしている。自分で服装の話しを切り出してなんだが……俺を除いて全てが女性であった。途切れる事無く続く会話は、会議室の扉を前にしても終わる事が無かった。
とりあえず、打ち解けて仲良くお話をするのは良いとしても……突然、永遠に続くと思われた会話を遮るように、会議室の扉が開いた。

「何を外で騒いでいる。待ちくたびれたぞ、神楽。早く入ってこい」
中から帝が姿を現すと、なかなか部屋に入ってこない俺達を、急かすようにそう言った。それと同時に、会話に花を咲かせていた女性陣が、揃って口に手を当てた。

「お待たせいたしまして、大変失礼いたしました！」
俺達は、何故か息ぴったりに揃って、叫ぶように詫び、そして部屋に入った。

「独立魔戦部隊、筆頭魔術師……」
「堅苦しい挨拶は無しでいいよ。
とは言っても、彼女達とは初顔合わせだから自己紹介くらいは必要かな。それと神楽に鈴音、彼女達が何を言っているのか、『俺にはわからないから』教えてくれよ。
さて、まずは俺からだな。神国天ノ原天命ノ帝（あまめのみかど）、この国の頭となっている。まあ、せっかく我が神国に来たんだ。理由は今から訊くが、力になれる事なら全力を持って助けるよ。とりあえずはくつろいでくれ」
「では私から彼女を紹介いたします。
こちらが白輝明姫、そちらが金剛輝姫です」
紹介が終わると、帝がいきなり核心を突く話をしてくる。

「お前達の国で何が起きたのか、それはこれからゆっくりと聞くとして、お前達の契約主にただならぬ事態が起きた事は察しがつく。そうでなければ、破壊される危険を冒してまで、適地にお前達だけで来るとは思えないしね。
そうそう俺は『命を共有する者』という話はは知っているよ。
では改めて訊こう、帝国で何が起きた」
そういうと帝は、腕を組み目を閉じた。
帝の能力があれば、俺達を介さなくても話はできる。この能力は、

今の時点では伏せておきたいという事は、先ほどの会話で俺達にもわかっている。
彼女達が、これまでの経緯を話し出すと、俺達はその間に入り、帝に通訳をする。そして過程で、驚愕の事実を知る事になる。

策略　１２（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　13

「なんだって！　皇帝を暗殺した犯人として逮捕されたって、いったいどういう事なんだ」
明姫達がここまでの経緯を話し始めた直後の事だった。
明姫からいきなり飛び出した言葉を、俺や鈴音は鵜呑みにはできなかった。

「主君殺しは、帝国側でも最も重い罪じゃないのかしら？　いったいあなた達の契約主は何を考えてそんな事を……」
『全く、お主達はさすが「魔界コンビ」の契約主じゃのう。しっかり話を聞いておったのか？　そんな事で、妾達の通訳が務まるのかのう』
『そうよお姉さんは、何らかの謀略に嵌められて、濡れ衣を着せられたと言ったはずよ。しっかり聞いてよね、神楽ちゃん』
「ごめん明姫、あまりに話が……なんていうのか飛びすぎてというのか……予想外だったから……」
『もっともお姉さん達は、最初からその場所にいなかったから……そもそも、本当に暗殺を実行していないという証拠も無いのです。だから本当に暗殺を実行して、逮捕された契約主の助けをもとめに、ここに来たと思われても仕方ないです……当然、敵なのですから、そこまで疑われるのも覚悟の上です』
『確かにのう、今は妾達を信じてもらうしかないのう』
気落ちしている明姫達を気遣ってか、鈴音が話し出した。

『契約主とお人形は、お互い嘘はつけないわよ。それは例え他のお人形の契約主であったとしても、基本的には同じです。
だって、心に思った事がわかるんですから、こうして話をしている限り、お互い嘘をつく事は簡単ではありません。

ですから、あなた達が言っている、何らかの謀略に嵌められたというのは、事実だと思います』
『当然だよぉ、鈴音ちゃん。白姉ちゃんと金ちゃんは、性格は残念かもぉなだけどぉ、根は良いんだよぉ』
『黒鬼闇姫さん、本人を目の前にして、そんな失礼な事を言っては駄目ですわよ。
そういう事は、本人のいないところで、こっそりと言うものなんですわよ』
『あらら闇姫ちゃん、鬼姫ちゃん。なんだか凄い事を言ってるように、お姉さんには聞こえるわよ。いったい、どうしてでしょうかしら？　体に訊いて、お口を正直にしてもらおうかしら』
『待つのじゃ、明姫。あやつらの口の悪さは今に始まった事ではない。しかも今は、鈴音の姐御がついておる。口惜しかろうが今は我慢するのじゃ』
『……ちっ、命拾いしたですわね。鈴音の姐御によくお礼を言っときな、ですわ』
『ですから、あなた達は私を一体なんだと……』
すると帝が会話に割って入ってきた。

「何をやっているんだ。ちっとも話が進まなくなったぞ。
とにかくだ、バルドア皇帝が暗殺されたっていうのは、間違いないのだな。で、その犯人は彼女達の契約主なのか？」
「明姫の話では違うようです。
何らかの謀略に嵌められたようです。ただ残念な事に確実な証拠はないそうです。
しかし俺達はお人形の契約主として、彼女達の言っている事を信用したい思います。
その前提の上で、一つよろしいですか？」
「ああ、言ってみろ」
「できれば、明姫達の契約主を助けたいのです。

謀略に嵌められたとなると、まともに裁判を開くとは思えません。多分……いや死刑は確定でしょう。
唯一の救いは彼女達がここにいる限り、刑の執行が行えないということです。彼女達もそれを見越して、ここへ送られてきたのだと思います。
ですから……」
「みなまで言わずともわかってるよ。
既に本殿の静宛に光信号を打った。明日の昼過ぎには、彼女達要職の者は、ここに来るだろう。
今後の行動は全て彼女に任せる事にしよう」
「そこまでお考えとは、さすが帝、対応が早いですね。
でも彼女達がいる限り刑の執行は……」
「神楽、今は好機と思わぬか？　皇帝が不在、しかもここに明姫達がいるわけだ。
お前の望みは何だった？　ここで帝国を討ち一つになれば、その望みに向かって何歩も前進できるのではないのか？」
俺は帝に言われて初めて気が付いた。帝は俺達に気遣いながらも、もっと先を見ているのだ。

「確かに……という事は、今後の動きというのは、統一に向けた動きという事なんですね」
と俺は軽く言ってみたものの、長く続いてきたこの戦乱の世が、あと数日で終わるかもしれないという歴史的な出来事と、統一後の世の中を全く想像できないでいた。
しかし、これが成し遂げられれば、戦争は無くなり、しばらくは平和な時代が訪れるだろう。
つまり俺の契約の主旨である「争いを無くす」がほとんど達成できるという事である。
「さて、有意義な話を聞いたのだが、静がここに来るまではゆっく

りしよう。
俺自身、いろいろと考えは有るけど、勝手にやると静が怒るからね。
なあ神楽、この国の女性は怖い……いや強いな」
「確かに……」
俺はつい鈴音を見てしまった。
しかし俺の行動を完全に読み切っていた鈴音の、鋭い視線と言葉の逆襲を受ける。

「怖い女性ですか？　当然私もですね！　よくわかりました。今後はそのつもりで行動いたします」
「い、いや怖いじゃなくて……強いって……もちろん良い意味だよ……帝も、何か一言……」
「神楽は俺に頭を下げろというわけだ」
「いえ、そういう事ではなくて……ほら鈴音が……」
「兄さんは、私が悪いというわけですね！　私が謝ればいいんですね！」
「いや、だから違うって……俺が悪かったです。二人とも勘弁して下さい」
「いや、すまんすまん、鈴音もこの辺りで勘弁してくれないか？」
「えっと、帝がそうおっしゃるなら」
どこで間違ったのか、いったい何故だろう、間に挟まれた俺が謝ったところで、めでたしとなった。

「ゆっくりとこんな話をしていたかったが、好機とはいえ、悠長な事は言ってられないのが現状だよ」
「えっと、それはどういう事ですか？」
「兄さん知らないの？　帝国はこういう事が起きても、一週間もあれば元通りになるのよ」
「神楽、少しは帝国側の事も勉強しろよ。どういう敵と闘っている

のかを知っておかないと、いつまでたっても争いを終わらせられないよ」
「はい、すみません」
「つまりな、帝国はこういう事態が起きても、三日程で次の皇帝が決まって、遅くとも一週間で新たな政治体制が整うんだ。
今は確かに帝国を倒す好機だが、それもこの三日間が勝負というわけだ」
「それにしても、こちらとは随分違うんですね」
「政治体制が我が神国とは違うからね。
神国では政治にしろ軍にしろ、基本的には議会が決定権を持っている。
元来、帝という地位は象徴的な地位だからね。基本的には議会で決定した事を、俺は事務的に処理しているに過ぎないんだ。
だから不測の事態で俺がいなくなっても、大した不都合は起きない。つまり一応継承順位は決まってはいるが、その時の時勢にあった後継者をじっくりと選び出す事ができるんだ。
もっとも、お飾りとはいえ議会と軍部の最高責任者として、暴走を抑えるために絶対的拒否権や、ご都合主義的な決定権を持ってたりするから、後継者選びは早い事にこした事はないけどね。
ところが帝国は違う。全ての決定権を皇帝が持っているんだ。それこそ議会で決まった事を、皇帝の一言で覆るなんて日常茶飯事らしい。
だからこそ皇帝の後継者は素早く選び出さなくてはいけないんだ。何も決まらなくなってしまうからね。
でもそれをあざ笑うかのように、皇帝は短命なんだ。
考えてみろ、神国と同じ約二百年前に立国した国の王様がこっちは七代目だが、向こうの次期皇帝は十五代目になるんだ。その歴史の中には、即位後半年もしないうちに暗殺された、乳飲み子の皇帝もいたという。全く嘆かわしい事だよ。
バルドア帝国皇帝は一個人として持っている力があまりに強大す

ぎる。
下劣な輩共が、その強大な権力に取り入ろうと画策された謀略に巻き込まれ、ほとんどの皇帝がその犠牲となっていったわけだ。
同じく国を預かるものとして、深く考えてしまうよ。
もっともそのために、素早く後継者を選び出せる制度の構築ができたのだと思う。皮肉な事だよ」
「体制が、そんなに違っていたのですか。自身の勉強不足を恥ずかしく思います」
「そうですわよ、兄さん。もっと勉強してくれないと、私まで恥をかきます」
この面子ではどう転んでも最後は、俺が悪者になってしまうようだ。

「今日のところはこんなところかな。いずれにしても明日、静、大石原それと彩華が合流してからの話だ。
それとお人形の二人は、当面神楽達に預けるから、しっかり面倒みてやってくれ」
「承知いたしました」
彩華の名前が出た時、一瞬たじろぐ俺に、鈴音の突き刺すような視線が飛ばされたが、何事も無かったようなそぶりで返事をした。
そして俺達は会議室を出て、士官執務室に戻った。
執務室に入り、くつろいでいると明姫達の質問が始まる。

『ねえ神楽ちゃん、お姉さんの質問を聞いてもらっていいかしら』
『それは、構わないけど……怪しい事は無しだよ』
『お姉さんはいつだって、真面目な事しか訊かないわよ』
『明姫の言う通りじゃぞ、お主達は妾達を残念な「魔界コンビ」と同一視しておるじゃろ。それは間違っておる上、妾達にしてみれば少々心外であるぞ』
『あぁ金ちゃん、また黒達を馬鹿にしてるぅ。そんな事言っちゃ駄

目なんだよぉ』
『黒鬼闇姫さん、文句の言い方が間違っていますわよ。
それでは、残念なところまで認めていますよ。百歩譲って「魔界コンビ」は良いとしても、けっして「残念な」を認めてはいけないのです。
ですから、この場合はまず「誰が残念なのよ」から入らないといけませんわ』
『銀ちゃん、言ってる意味がわからないよぉ。
別にいいんだよぉ残念って言われても、神楽君達がそう思ってなければいいんだからぁ。
それにねぇ、最後は鈴音ちゃんが決めてくれるから、大丈夫だよぉ』
『あの闇姫さん、俺は残念とは……思ってないですよ……多分……ところで、なんだかまともな事を言ってますが、大丈夫ですか？』
『兄さん、それは闇姫ちゃんに失礼です』
『そうだよぉ神楽君、黒の言う事はいつもまともだよって、何度も言ってるよぉ』
『ようわかったわい。お主らは全員残念じゃ……』

『何だって！』
『何ですって！』
輝姫の話を遮るように、俺達は口を揃えて言った……闇姫を除いて……
『だからぁ、そんな事はどっちでもいいんだよぉ。だってみんな「天然ちゃん」なんだしぃ、神楽君は、やれば出来る子なんだからぁ』
『……』
そして闇姫の一言で一同沈黙であった。

『神楽ちゃん、そろそろお姉さんの質問を初めていいかしら？』
『あっ、ごめん明姫、どうぞ遠慮なく』
『先ほどの方、帝って、皇帝と同じ立場の方ですよね。そんな方と神楽ちゃん達は、いつもあんな風になんだか気楽に、そして楽しそうにお話をしているのかなって、それが凄く不思議に思ったの』
『妾もそう思ったぞ。そもそも皇帝は、そう簡単に話をできる方ではなかったしのう。
　ほれ、ようアリエラが怒っておったのう。それを必死に妾の下僕がなだめておった』
『そうね……アリエラちゃん達、どうしているかしら』
『大丈夫だよ、明姫。俺達がすぐに助けにいくから、もうしばらくの辛抱だよ』
『そうよ、帝はわかってくれてるし、社守静軍師（やしろもりしず）も、二人の救助を織り込んでくれるわよ』
『今日初めて会ったお姉さん達の言い分を信じてくれて……感激です』
『白姉ちゃん何言ってるのぉ、黒達はお友達なんだから当たり前だよぉ』
『そうですわよ、ですから私達の事を間違っても「残念な」なんて言わない事ですわ』
『鬼姫ちゃん、その話をぶり返さなで！　闇姫ちゃんに今度は「不思議ちゃん」て言われるわよ』
『あの、何度も会話に割り込んですみません。お姉さんの質問の答をお願いしたいのです』
『そうじゃ、妾は焦れておる。全くもって残念組じゃ……』
『金剛輝姫さん、あなたは私達に喧嘩を売っているのですか？　はしたないまねはおやめになって下さいませ』
『鬼姫ちゃん、売られても、いちいち買うんじゃありません』
『妾から一つよいかのう、どうも輝姫（きき）と一鬼姫が紛らわしくていかん。妾を呼ぶときは輝姫様と呼ばぬか？』

『呼びません！　いっそ金輝姫と呼びましょうか！』
『ご、ごめんなさい、鈴音の姐御』
鈴音の迫力ある視線と刷り込まれた恐怖に負けた輝姫である。
『あの、いつになったらお姉さんの質問に答えてくれるのかしら……』
『明姫ごめん、他に割り込まれる前に、俺が今すぐ話すよ。
えっと、俺達は戦災孤児なんだ。
この神国天ノ原では、「子供は国の宝」という言葉が有るんだ。だから戦災孤児に限らず、何らかの理由で親元を離れた子供は、国が面倒みてくれるんだ。それで俺達は何カ所かある施設のうち、本殿内の施設に引き取られた。
本殿内という事もあって、帝は即位前、その施設に毎日のように顔を出して、俺達のまるで兄貴のように遊んでくれたんだ。結果、その名残というのか、まあ即位されてからは、お互いそれなりに気を使っているけどね。
と、こんな訳だけど』
『いい関係なのね。国が変わると本当に何もかも違うのね。帝国では、弱い者は淘汰されて当たり前だったから、ちょっと信じられないわね。
アリエラちゃんもこの国に仕えれば、あんなに怒りんぼにならなかったわね、きっと……』
『そんなに短気なのか？』
『そうじゃないけど、まだちょっと幼いところが有るかもね。これ以上は、会ってからのお楽しみよ』
『じゃあ金輝姫ちゃんの下僕さんはどうなの？』
『鈴音の姐御、その呼び方は……なんとかならんかのう』
『じゃあ、姐御をやめてよ』
『いや、これはその敬意を込めてそう呼んでいるのじゃ。じゃからやめる訳には……』

『じゃあ、私もそうするわ。で、どうなの下僕さんは』
『まあ、ヘタレじゃ。会うのを楽しみにするほどの価値はないぞ』
『そこまで言われる契約主って……』
俺と鈴音は、つい口を揃えて言ってしまった。

『ところで、今晩はどうするんだ。どこで寝てもらおう』
『そんなの決まってるよぉ神楽君、黒が白姉ちゃんも金ちゃんもまとめて面倒みるから大丈夫だよぉ』
『闇姫さん、それは俺の部屋で寝るという事ですか？』
『そうだよぉ。神楽君も可愛いお人形達に囲まれてウッキウキィのデッレデレェだよねぇ』
『あの闇姫さん、何かを勘違いしてますよ』
『そうですわよ、黒鬼闇姫さん。神楽様はお人形より鈴音様とイッジョニ……痛いのです……ごめんなさい』
今やお約束である、鈴音の鉄拳制裁が鬼姫の脳天を直撃した。
『本当に鬼姫ちゃんは……一言余分なんだから』

あいかわらずのドタバタを繰り返した俺達の、慌ただしい一日は暮れていった。

一夜明け、午後に社守静軍師をはじめ、大石原厳総長（おおいしのはらげん）、山神彩華（やまのかみあやか）侍大将が到着すると、すぐに軍議が始まった。

策略　13（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます

策略　１４

「既に戦略的、戦術的な勝敗は決した。この後は一手一手詰めていくだけ。
作戦と言っても、圧倒的な戦力での力押しとなる」
社守軍師の呟くような声が、静まり返った会議場に小さく響きながら、作戦の説明に入った。

「この軍議後、直ちに独立魔戦部隊の両名は帝国本拠地である『トゥルーグァ宮殿』に向けて出発してもらう。これには山神彩華侍大将を始めとして侍一個小隊を護衛として随伴する。道案内は忍女が合流地点で待機している。
それと同時に第三砦から侍二個小隊を『トゥルーグァ宮殿』に向かわす。
双方現地にて合流後、独立魔戦部隊筆頭魔術師、天鳥神楽を隊長とし、『トゥルーグァ宮殿』を制圧する。
なおこの部隊を今作戦における主部隊とする。
ふふ……いいわね神楽ちゃん、一番乗りよ……うふふ……男の子って、征服したときの達成感が好きなんでしょう……ふふ……あたしは女だから、征服されちゃうふりをする喜びは知ってるけどね……うっふ……鈴音ちゃんや彩華ちゃんもきっと……ふふふ……」
「社守軍師……、征服する喜びは認めますけど、一応会議中ですので、この辺りでご勘弁を……」
俺がそう言って、議場を見渡すと引き合いに出されて、その上「ふり」は図星だったのか、鈴音と彩華が照れくさそうにうつむいていた。その姿を見たとき、俺はちょっとだけ寂しくなった。

「少々取り乱したようで失礼した。
さて、後方支援、陽動については、第一砦から第三砦まで、それ

ぞれ別命ある部隊を残し、主力部隊全てを直前の帝国側砦まで進軍させ、こう着状態を作り出す。
　それと同時に、陽動として第一砦、第三砦から一個大隊を別動隊として送り込む。それぞれ山中の迂回道を使い帝国砦を迂回、その後帝国領土内を走破し、帝国内の軍勢を引きつける。
　陽動部隊は、余分な戦闘は一切無用である。足を止める愚を犯してはならぬ。速力こそ最大の武器であり、帝国軍を翻弄せよ。そして一番重要なのが、敵を引きつけたのを見計らい、部隊を転進させる時機の見極めができる隊長を要すること。転進が早すぎれば陽動、囮の効果はない。遅すぎれば部隊は挟撃され全滅する。それをふまえた上で、適任者を選び出すこと。以上」
　社守軍師が作戦の説明を終えると、大石原総長が質問する。

「社守軍師、敵砦の戦力が陽動部隊討伐に向かう事はないのか？」
「うふふ……心配ないわよ、総長さん……ふふ……あたし、本殿を出る前に、帝国の間者にこう言ったの……うふ……『帝国のお人形が投降したの、だからこの機に帝国の三つの砦を落とします』って……ふふふ……そおしたら、その間者、慌てて報告に行っちゃったわ……ふふ……だからね、陽動とわかっている部隊に、本隊を向かわせたりしないわよ……それに、周りをこっちの主力に囲まれたちゃってるんだからね……ふふ」
「社守軍師……その、主力部隊も帝国側に比べて人数的、さらには地形的にも不利だが大丈夫か？」
「失礼しました、大石原総長。また取り乱していたようです。
　それにつきましても、私の間者がそれぞれの砦に『軍事政権樹立のため、軍上層部によって皇帝が暗殺された。その犯人として、帝国の魔法使い達が濡衣を着せられ逮捕された。今、敵の魔法使いが現れたらなす術なし』と触れ回っております。
　それこそ砦を包囲した時点で、投降してくる可能性もわずかですが、有ります。

また、これは包囲作戦開始とともに各所で流布いたします。奴らにとって皇帝暗殺の一件は、まだ帝国領民に隠しておきたいこと。こちらが黙っていると、我らの進攻によって殺害されたとするはずです。したがってここは先手を打ち、こちらから先に噂として広めてゆきます」

「なるほど、用意周到じゃな。

帝、いかがなされますか」

「よし、作戦の発動を許可する。各責任者はただちに人選を開始せよ。社守軍師の承認を得た後、各所に通達せよ。なお光信号の使用を認める。

天鳥神楽をはじめとする主部隊は現地で加わる、第三砦からの二個小隊の人選がすみしだい、帝国本拠地『トゥルーグァ宮殿』に出発せよ。

敵砦攻略の主戦力部隊は、明日午前六時に出発する。

陽動部隊は、行動開始地点で待機の後、敵砦包囲完成の知らせを受けた後、行動開始せよ。以上である。

この作戦の成功により、長きに渡り続いた戦争は終結するであろう。

ここに至まで、俺達は多くのものを失った。

よいな、既に勝敗は決しておる。蛮勇は犬死にと同じである。生きてこそ、次の時代へ行けるのだ。

そして敵を思いやれ、無駄な血はこれ以上必要ない。

皆で生きて、次なる時代を謳歌しよう！」

「おぉ！　天ノ原、弥栄！　弥栄！　弥栄！」

帝の言葉を聞き終えると、議場内いるもの全てが立ち上がり、一斉に声を上げた。

それを合図に軍議が終わり、準備のため早々に議場から退室しようとする俺達を彩華が止める。

「神楽、小隊選出後、社守軍師から承認を頂きしだい詳細を伝えに行く。それまで部屋で待機していてくれ……」
「ああ、了解した。
ん、他に話が有るのか？」
「あっ、いや……」
「兄さん、ほら早く戻りますよ」
「あっこら鈴音、ごめん彩華、後でな……」
彩華のもの言いたげな態度が気になったが、会話に割り込んできた鈴音に腕を引っ張られて、強引に連れ出されてしまった。
そして俺達は部屋に戻り出発の準備を始めた。

「まあ、準備っていってもな……ところで鈴音、さっきのは、その、なんだ……彩華にちょっと失礼だったのでは……」
「あら、そうでしたかしら。それはすみませんでしたわ。
でも兄さんはいつものんびりしてるから、準備が遅くなると作戦に影響しちゃいますからね」
『神楽様、鈴音様のお気持ちもわかってあげて下さい。
愛する方が目の前で、最大の敵とお話しているんですよ。防衛本能がハッ……』
突然口ごもった鬼姫の視線の先には、当然目尻をつり上げ、不自然な笑みを浮かべる鈴音がいる。

『本当に鬼姫ちゃんは、いつになったらお口の聞き方を覚えるのかしら』
『ご、ごめんなさいです』
と、ここで毒気を抜く、闇姫の怪しい歌声が耳に入ってくる。
『おやつ、おやつ、三時のおやつを持ちましょう。神楽君、おやつ持ったぁ？』
『出たな、食いしん坊闇姫、でも今回闇姫達は、俺達が呼ぶまでこ

こでお留守番だよ。それと明姫達は契約主を開放したらすぐ呼ぶから、それまで待っていてくれ』
『えぇじゃあ黒達はおやつは無いのぉ、お弁当も無いのぉ』
『そこは大丈夫、食堂のおばちゃんに、闇姫達が来たら、特別なのを出すように言っておいたから』
『わぉ神楽君、さっすがわかってるぅ』
『黒鬼闇姫さん、本当にあなたは、はしたないですわよ。白輝明姫さんや金剛輝姫さんも笑ってますよ』
『あらら、お姉さんは笑ったりしませんよ』
『お主らが残……いや痛い娘達とわかっておるでのう』
『えぇ金ちゃん何を言ってるのぉ、わけわかんないよぉ。だって黒はどこも痛くないんだよぉ、痛いのは銀ちゃんなんだからぁ。だってねぇ、いつも鈴音ちゃんに「ゴン」って、されてるからねぇ』
『黒鬼闇姫さん、あなたは馬鹿にされている事がわからないのですか』
『えぇ、そうなのぉ。全然気が付かなかったよぉ。
じゃあ、そんな事言っちゃいっけないんだよぉ、鈴音ちゃんに怒られちゃうんだよぉ』
『闇姫ちゃん、私は怒りません。もうあきらめています』
その時、扉を叩く音が聞こえる。
「どうぞ」
「失礼する」
扉を開けて彩華が入ってきた。

『鈴音様、超弩級の敵が来襲です』
『鬼姫ちゃん、何か言いましたか』
『いいえ……ごめんなさいです』

「先ほど、私を筆頭に六名、独立魔戦部隊の護衛部隊として申請通り承認された。あわせて第三砦からの二個小隊十二名も承認された。

集合は裏門前に午後五時十五分、出発は午後五時半、少々早いが、それまでに夕食はすませておくよう。
それと神楽……いえ失礼、全てが終わってからにする。
何か質問はあるか？」
「いや、特にはない。道中の護衛、しっかり頼むね。それと……言いたい事は……」
「兄さん、食事に行きましょう」
「あっこら、彩華も一緒にどうだ」
「私はまだやる事がある、遠慮しないで行ってくれ。では後ほど」
「さあ、兄さん行きますよ」
またもや俺は鈴音に引っ張られて、部屋から強引に連れ出されてしまった。

「こら鈴音、彩華がまだ部屋に……彩華、ごめん……」
『鈴音ちゃん、黒達を忘れてるよぉ』
『早く来ないと置いてっちゃうわよ』
彩華に対する鈴音の敵対心はかなりのものである。まあ、気持ちはわからない事もないのであるが、この先同じ部隊としてやっていけるのか少々心配でもある。

早めの夕食をすませた俺達は、集合時間少し前に向かった。
到着すると、既に彩華達侍小隊は揃っていた。そこには帝と社守軍師も出向いていた。そして俺達を確認すると帝が口を開く。

「今更、激励というわけじゃないが、期待通りの報告を待っているよ」
「はい、必ずご期待に応えます」
「うん、頼んだよ。それと静からも話があるようだ」
「先ほども触れたが、皇帝暗殺の企ては、軍上層部によるものである事で間違いない。

宮殿制圧時、その首謀者達をできるだけ捕らえてほしい。それと同時に、皇帝一族の確保もお願いしたい。
これは統一後、反旗をひるがえす者の大義名分を奪うために必要となる。
もっとも既に、皇帝一族の血筋の者を連れ出して、逃走している可能性もあるので、できる限りでよい。
まずは宮殿制圧に全力を注いでくれ。
うふ……神楽ちゃん、成功した暁には、あたしからもの凄いご褒美をあげちゃうわ……ふふ」
「社守軍師、お話はわかりました。
ほら兄さん、だらしない顔はやめて下さい！」
「えっと……さて、時間かな……皆さん張り切って行きましょう」
怪しい妄想を抱いていた俺は、いろいろとごまかすために、出発の号令をかけた。

「なにそれ」
ここにいる全員の冷たい視線にさらされながらも、時間通り砦を出た。
そして道案内の忍女と合流し、山中の道なき道を夜の闇にまぎれて進んだ。

途中三時間程の仮眠を取り、明け方には宮殿のある都市トゥルーグァ近くまで辿り着いた。しかしここからは平地となり街道を進むため、俺達は帝国領民、彩華達侍は武器を持ち歩くため帝国警備兵の服装に着替える。

「帝国領民の服って可愛らしいわ。ちょっと羨ましいわね。
ねえ兄さん、似合うかしら？」
「うん似合っているよ。俺の方は？」
「なんだか、見慣れない格好だし……変です」

「鈴音さん、そんなきっぱりと……せめて……しかし俺達一行って不自然に見えるけど、こんなんで大丈夫かな？」
「確かに、神国でこんな一行を見かければ、私なら間違いなく尋問するがな」
「彩華、あんまり怖い事言うなよ」
「しかし神楽、そのために社守軍師が手を打っているのだ」
「まあ、確かにね」
「さあ兄さん、早くこっちでご飯食べますよ」
「だから引っ張るなって、こら鈴音、彩華に失礼だよ」
「いいんです、兄さんは私のものですから。それにこんなところを帝国民に見られたら、それこそ不自然です。だから彩華姉さんには遠慮してもらうのです」
「気にするな神楽……鈴音の言う事ももっともだ」
笑顔でそう言いながらも、目が笑っていない彩華が気になった。そして鈴音は俺と彩華が穏やかに話をする事が、どうにも我慢できないらしい。そんな焼き餅を焼く鈴音に引っ張られて、衣服と一緒に用意されていた朝食を食べた。

時を同じくして、社守軍師の打った潜入支援策の一つ、「皇帝の暗殺」という噂の流布が発動されていたため、辺りは早朝にもかかわらず、騒然としていた。
そのため街道は警備兵や領民達が行き交い、平時なら怪しい一行に見える俺達は、うまく紛れ込む事ができた。

「兄さん、本当に大丈夫かしら」
「鈴音、あんまりおどおどしていると逆に怪しまれるぞ」
「じゃあ、腕組んでもいい？」
「何故……」
「だって……ちょっと怖いんだもん」
「まあ、仕方ないな、でもあんまり引っ付くなよ」

「でも、これくらいの方が恋人同士みたいでしょ」
「……しかし……」
「これでいいの！」
俺は後ろから刺すような彩華の視線を感じながら、鈴音と腕を組み歩いた。
そして俺達は、ほどなくしてトゥルーグァに入った。

策略　１４（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　15

「皇帝陛下はご無事なのか？」
「皇帝陛下が暗殺されたって本当なのか？」
「クーデターが起きたらしいぞ」
「近衛の方々、何か知らないですか？」

俺達が宮殿前の広場に到着すると、噂を聞きつけた帝国領民達が集まり、その真偽を確かめようと、近衛達に詰め寄りちょっとした騒ぎになっていた。
おかげで俺達は目立つ事無く、第三砦から派兵された部隊と合流できた。
しかし侍達は変装のため帝国警備兵の出で立ちである。当然領民達から噂について質問攻めにあっている。
もっともそれに答える義務はないので、適当にあしらい俺達は宮殿正門付近まで足を進めた。ここでようやく俺達の不審な行動の気が付き、こちらに向かってきた近衛兵達に止められ、そして尋問を受ける事となる。

「ここは一般警備兵に無縁のところ、一体何用だ。
所属と氏名を明かせ！」
「ほう、私に名乗れと……この黒髪、名刺代わりにならぬか。神楽に比べて、私はまだまだだな」
「彩華、それでわかったら、ここまで来れないよ。それに俺も一人じゃ、無名だよ」
「確かにな。ふっ、お互い、まだまだのようだな」
「兄さん、こっちです。兄さんの席はここなんです」
突然鈴音が腕を引っ張り、俺と彩華の会話を遮る。
「って、こら鈴音……引っ張るなって……」

「貴様ら何をゴチャゴチャやっている。さっさと名乗らんか！」
しかしさすが彩華の選んだ精鋭達である。この状況に置かれても一切動じる事無く、俺達の漫才……いや、やり取りを面白がって見物している。

その一方、宮殿正門で神楽達が起こした騒ぎを知ってか知らずか、宮殿内も騒ぎとなっていた。

「何故じゃ、どうしてこうなる。これでは俺達が反逆者ではないか」
「ストントーチ参謀長、これは予想の範囲である。そもそも皇帝陛下暗殺に関しては、噂として広まっているにすぎない。
確かに最終で予想外の動きが重なったが、まだ充分巻き返す事はできる。
既に皇帝の嫡子は逃がしておるしな。
俺達も敵の攻勢が始まる前に退去するぞ」
「そもそもあやつじゃ。ガードナー参謀じゃ。あやつの計略が最終段階で全て裏目に出おったのが原因じゃ」
「あら、全ては私に非があると、ストントーチ参謀長殿はおっしゃりたいのですか」
ガードナー参謀が旧謁見の間に入ってくるなり反論をはじめる。

「確かに、最終の読みを間違えたのは認めます。
私はあの場面でヘリオ・ブレイズ中将、アリエラ・エディアス少将待遇が逃亡を選ぶと考えておりました。そうすれば神国の魔法使いといずれぶつかり、忌々しい者どもを消し去れると考えていたのです。
結果は見事裏切られました。今も言ったようにこれについては、私の力不足でした。
だからと言って、全てを押し付けられても困ります。

あれ以降、私は対応策を打ち出す任から外されていたのですよ。
今、進行している事は、あなた達の打ち出した対応策が有効に働いていない事を、意味しているのですよ。もっとも対応策を打ち出していたのですか？　何もしていなかったのでは？
そもそも新皇帝が擁立されるまで、敵襲が無いなど……」
「ガードナー参謀、口がすぎるぞ。立場をわきまえよ」
「これは失礼いたしました、ナイグラ元帥閣下。
さて、必要とされていない私は、出て行きます。
そうそう、先ほど物見からの知らせが届いたのですが、どうやら宮殿正門前に神国の軍勢が来たようですわ。何でも敵ながら帝国兵のあいだにまで名の知れた女侍と、魔法使いらしい者もいるとか……では、ごきげんよう」
「あっ、待つのだガードナー参謀……」
しかし、ナイグラ元帥の制止に耳を貸す事なく、彼女は出て行った。

ガードナー参謀が宮殿を後にした頃、宮殿正門前では、相変わらず緊張感の無い会話を続ける神国の軍団であった。しびれを切らす近衛兵達をあざ笑うかのように、彩華と近衛兵達の押し問答が続く。

「本当に私を知らないのか？」
「だから所属と名を名乗れと言っている」
「だが、私に名乗らすと、お前達が後悔するぞ」
「何を訳のわからん事を言っている。そもそもお前達一般警備兵の名を聞いて、なぜ近衛の俺達が後悔するんだ。とにかく名乗れと言っている」
「だから、黙って私達を通した方が良いと思うぞ」
「なあ彩華、おかしな押し問答をやめて、名乗ってやれよ」
「いや神楽、そうは言っても、自分で名乗るのは照れくさい」

「なるほどそういう訳ですか、彩華さん……何でしたら俺が変わりましょうか？」
「だから、兄さんの席はここなの！」
「こら鈴音、引っ張るなって……そうだ、いっそ呼んじまおうか」
「いやまて神楽、呼ぶのは私が名乗ってからだ」
「じゃあ、腹を決めたか？　いよいよ名乗るのか？」
「馬鹿、茶化すな、やめろ神楽、緊張するではないか」
「なあ、貴様らいい加減にしてくれ、しかも領民まで混ざって何を考えている。これ以上は我慢できんぞ、逮捕するしかないぞ」
しびれを切らした近衛兵が強行に出ようとしたとき、彩華が名乗りを始める。

「わかったわよ。照れくさいが仕方ない。
私は神国天ノ原、侍大将、山神彩華だ。
そしてここに控えるは、私が選び抜いた精鋭達十七名。これでよいのか」
「俺は神国天ノ原、独立魔戦部隊、筆頭魔術師天鳥神楽だよ。
さあ、おいで黒鬼闇姫」
「私は神国天ノ原、独立魔戦部隊、天鳥鈴音です。
いらっしゃい銀界鬼姫ちゃん」
俺達が名乗ると、空白の間ができる。無理もない、近衛兵達にとっては俺達がここにいるという事が、非現実的な事態なのである。

「はい？　って……」
「ちょ、ちょっと待って、そんな冗談は……」
「なんで神国軍が……って、しかも山神彩華って……それに魔法使いまで……」
「……いや待て、お人形がいないぞ」
『やっほぉ、来たよぉ神楽君』
『お待たせいたしました、鈴音様』

「げっ、現れた……って、やっぱり本物……」
「……と、とにかく……敵襲！　……敵襲だ！」
「大騒ぎになってしまった。だから、黙って通せと言ったのだ。
ところで神楽、彼らは私の名前を知っていたようだ。魔法使いと一括りにされたお前と違ってな。
まあ、私も捨てたもんじゃないな。神楽も私を見習い、精進しろよ」
「えっと……彩華さん、なんと言いますか、論点が間違っているような気がしますよ」
「そうですわ、彩華姉さん。私達は訳のわからない事で有名になろうと思っていませんわ。
兄さんも、今は隊長なんですから、情けない姿を見せないで下さい」
『さすが鈴音様、愛の鞭でございますね』
『鬼姫ちゃん、出てくるなりそれですか。よっぽどお口が暇してたんですね』
『ごめんなさいです』
緊張感のない俺達はさておき、周りは近衛兵達の叫びを聞き、広場に集まっていた帝国領民達は混乱状態となっていた。辺り構わず走り回る者、泣き叫ぶ者、わめき散らす者、全く動けなくなってしまった者など、その様子はさながら地獄絵図であった。
そんな中でも近衛兵達はその人数を増やし、領民達を制する事もしないで、俺達の包囲をはじめる。

「近衛兵達め、今は領民達を落ち着けるのが先決だろう。
全く……俺達が領民の混乱を治めないと駄目だな。
闇姫、手伝ってくれ」
『りょーかぁい、どぉーんとこいだよぉ』
俺は「命の糸」を闇姫とつなぎ、これから述べる口上の効果を魔力によって増幅すると同時に、照れを抑える。

「静かに！　皆さん落ち着いて下さい」
俺の第一声が広場に響き渡り、領民達のざわめきが途切れる。今俺の声は魔法によって音量を増幅すると同時に、民衆を落ち着かせるための暗示が乗せてある。もっとも人心を掌握する魔法は、非常に高度なもののため、これだけの人数には効果は薄い。したがってこの暗示も、無いよりましといった程度のものである。

「我は神国天ノ原、独立魔戦部隊筆頭魔術師、天鳥神楽である。
まずは我ら、帝の言により無用な戦闘をかたく禁じられておる。よって戦闘の意思なき者には、手を出さぬ事を約束する。領民の方々は落ち着いて行動するがよい。
此度の我らの目的は戦闘にあらず。
巷を流れる噂は真実であり、今もなお無実の罪で拘束されている帝国の魔法使いを、我らの仁と義をもって、解放する事にある。
近衛の者は直ちに武器を退き、この門を開門せよ！　我らの望みは無血の開門、そして解放である！
その上で我らの正義は、敵主君といえども謀殺した輩を決して許さぬ。それに加担し、我らの行く手を阻む輩も同罪である。我らは刀となり遠慮なく成敗いたす。
今一度言う。我らの望みは無血の開門と解放である！
今より五分待とう。返答無き場合は、強行させていただく」
俺の口上が終わると、彩華が侍達に告げる。

「お前達、刀を下ろせ。我らは招かざる客だ。一歩下がらねば奴らも休めぬ」
「しかし、よろしいのですか」
「大丈夫だ、今は神楽達が守ってくれておる。
我ら護衛としては、情けない事だがな」
彩華がそう言い終わると、侍達は刀を鞘に納めた。

「さて近衛の方々、我らは武器を納めたぞ。お主達も納めぬか。
それともこのまま五分を待って、敵として私に斬られるか？
先に言っておくぞ、私を斬れると思っているのなら、それは間違いだ。私は強いぞ」
「あっ、こら彩華、近衛達を挑発するなって」
「何故だ？　私はこういう台詞を一度言ってみたかったのだ」
「その彩華さん……強いのは認めます。でも何もこの場で言わなくても、いいと思うのですが……」
「何を言う神楽、緊迫した場面だからこそ、いいのではないか。
それともなにか、訓練中に言えとでも」
「いやだから、そうじゃなくて……そういう事は、敵を挑発するべき場面で言ってもらわないと……今は挑発する時ではないです」
「兄さん、いい加減おかしな漫才はやめて下さい！　近衛の方達も対処に困っています。
それに兄さんの席はここです。何度も言わせないで下さい」
「こら鈴音、引っ張るなって」
「ほう鈴音、お主の漫才こそ、近衛の方々が反応に困っているぞ」
「なんですって、例え彩華姉さんでも……」
「わぁ待った、待った、二人とも待った。侍の皆さん方も困ってますよ。
とにかく話の続きは帰ってからお願いします」
「わかりましたわ、早く終わらせましょう」
「わかった、一気に片付ける」
俺はこの時、この任務が一生続く事を願ってしまった。

『ねぇねぇ銀ちゃん、今のは大人の会話なのかなぁ。黒は全くついて行けなかったよぉ』
『愛と憎しみが交わる、ドロドロとした大人の恋愛関係のお話ですから、黒鬼闇姫さんにはちょっと難しいかもですわ。

今のところは鈴音様が一歩出てますが、彩華様の攻勢もこれからのようですわね。今後の展開が見逃せませんですわ』
それぞれの思いがこもった五分間であった。

「さあ、兄さん五分経ちましたよ」
「神楽、しっかり頼むぞ」
生き生きとした二人と反対に俺は、おかしな重圧に押しつぶされそうである。
とは言っても、今は作戦を先に進めるしかない。しかたなく俺は闇姫に「命の糸」をつないだ。

少々時間を遡り、神楽が正門前で領民達の混乱を鎮め口上を述べだしたころ、宮殿内では新政権樹立の構想が完全に瓦解した軍部に、追い打ちをかける知らせが入る。

「ただいま光信号により報告がありました。
国境の主要三砦が神国軍により包囲された模様です。砦内においても例の噂の真偽を巡り、兵士達が浮き足立っております。更には魔法の恐怖に怯え、戦闘にならない状況になっている模様。事の真偽と援軍の要請が入っております。
それから更に領内二箇所で、大隊規模の神国軍が蹂躙している模様です。これに対し追跡をかけておりますが、未だにその軍勢を捕らえる事ができません」
黙って報告を聞いていたナイグラ元帥が、静かに口を開く。

「ストントーチ参謀長、ここまで矢継ぎ早に手を打たれては、いかんともしがたい。
わずかな狂いがここまで響くとは……儂らは鉄の意思を持って決起したはずが、脆いものであるな。

残念だが、ここは一旦退くしかないの。
伝令、全ての兵達にはこう伝えよ。『長きに渡り続いた戦争は、まもなく終結するであろう。折りをみて投降せよ。我らは必ず決起する、その時まで堪えよ』と、頼んだぞ」
「ナイグラ元帥閣下、捕らえた魔法使い共はどのようになされますか？」
「捨てておけ。奴らは人形と繋がっておる。連れて動く訳にはゆくまい。かといって始末もできぬし、人質にもならぬし、全く困った存在だ」
「了解いたしました」
そう言うと伝令の兵は下がった。

「神国の奴らが、人形を破壊してくれればよかったのだ。
今更愚痴を言っても仕方無いな」
「ナイグラ元帥、残念です。
せめて新皇帝が擁立できておれば……今は魔法使いに攻め込まれる前に、退去するのが得策でありますね」
「儂らについてきた兵には辛い思いをさせるが、彼らの涙は新皇帝を擁立し再決起の後、笑顔に変わろう」
「事には波があります故今は引き潮時、必ずや満時が訪れるでしょう」
「儂らについてくる者どもに伝えねばな。
のろしを準備せよ。ここを放棄する」

この言葉を最後に、ナイグラ元帥をはじめとするクーデター首謀者達と、それに追従する兵士達は、地下に張り巡らされた脱出路の迷宮に、次々とその姿を消していった。
その頃、宮殿正門前では、約束の五分を過ぎたため、神楽が近衛兵達に返答を求めた。

「約束の五分を過ぎた。ただちに開門せよ。
返答無き場合は、押し通らせてもらう。
今一度言う、ただちに開門せよ」
問いかけに対して返答が無い。

「なあ神楽、様子がおかしいぞ。
なんと言うか、人の気配をほとんど感じない。
そもそも物見の塔に人影が無いのはおかしいぞ」
「確かにそうだな。ちょっと確認してみるか。
闇姫、中の様子がわかるか？」
『神楽君、それならお星様に聞けばいいんだよぉ』
『って、あれですか？』
『そうだよぉ、これよろしくねぇ』
『他に……もういいです……』
わき上がる怪しい感情を抑え、俺は「印の舞」を行い、呪文の詠唱をする。

「お空に輝くお星様
私に見せて下さいな
たくさん教えて下さいな
お願いきいて下さいな」
『お星様の千里見聞録』

『どうだ、闇姫』
『神楽君、失敗かなぁ。中には、黒が数えれるくらいしか人がいないよぉ。みんなどうしちゃったのかなぁ』
「やっぱりか。
近衛の方々、中はもぬけの殻のようだぞ。お主ら見捨てられたん

じゃないのか？　俺達は何もしないから、確認してこいよ」
「そのような戯れ言、騙されぬ」
相変わらず、仕事熱心な近衛兵達である。

「気が進まないけど、俺達で門を壊すしかないか……」
「じゃあ、仕方ないわね。鬼姫ちゃん、門を斬っちゃって」
『承知いたしました』
「ちょっと待て鈴音、その役目は私が適任だ」
「私が先に申し出たのです。彩華姉さんは、大人しくしていて下さい」
「斬るなら私の仕事だ」
「いいえ、鬼姫ちゃんです」
「ええい、もう……どけ、近衛ども！」
「鬼姫ちゃん、やってしまいなさい！」
双方退かず、彩華は刀を鬼姫は巨大な両手剣を同時に抜き、そして振り下ろした。
二人の放った二本の斬撃が、たじろぐ近衛兵達の間をすり抜け、宮殿正門に向かって一直線に飛んでいく。そして二本の斬撃は音も無く、金属で作られた門に切り込みを入れ消える。

グァッターン。グァァーン。ドグォゴォーン。

広場を地響きで揺らしながら、三つに切り分けられた重厚な門が崩れ落ち、俺達の目の前に宮殿への道が開いた。

策略　15（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　１６（前書き）

１０月３日　鈴音視点の地の文を変更しました。

策略　16

「さて、兄さん行きますよ」
「神楽、さっさと行くぞ」
鈴音と彩華そういうと俺の腕をそれぞれ引っ張っぱる。
「ちょっ、こら二人共、引っ張らないで……とにかく落ち着いて行動してくださいよ」
だが二人は俺の話を無視して引っ張っていく。そのまま崩れ落ちた正門手前まで来ると、両脇に立つ近衛兵達が半ば涙目で、話しかけてくる。
「な、なんと言う事だ……」
「正門を……」
「いったい、何をしたんだ……」
そんな戦意を完全に喪失した近衛兵達に、彩華が足を止めて一言いう。
「斬った」
「……斬ったって……」
「あなた達が開けてくれないから、仕方なくですわ」
「それに、この程度の芸当ができる輩は、貴様らの軍にもおるだろう」
「……そんな奴は……」
「いや頭、神国の侍でも、こんな事できるのは頭ぐらいですよ。帝国の軍勢に手練がいると言っても、ここまでは……」
「こら頭はやめろ、普通に呼べぬか」
「例えば、山神の姐御ですか」
「いや彩華の姉貴だよ」

「うーん、単に姐御とか姉貴」
「山姉とか彩姉なんか」
「案外、彩華ちゃんとか」
「こら貴様ら、最後の方は主旨から外れたぞ。素直に山神大将とかいえぬのか……全く……」
「はい、大変失礼いたしました、彩華ちゃん！」
侍達が一斉に口を揃えた言ったとたん、彩華の顔が赤く染まる。

（……これは怒っているのかそれとも照れているのか……）

「き、貴様ら、全員ここに直れ！　刀の餌にしてくれるわ！」
「あっ、こら彩華、落ち着け、今は一応敵前だぞ。とにかく落ち着くんだ。深呼吸をするんだ」
「……ふう……」

（おっ、珍しく素直に言う事を聞いたぞ）

「どうだ、落ち着いたか」
「……ふう……いや、すまん、あまりの事に取り乱した」
「神楽の旦那、命拾いをしました。ありがとうございます」
「旦那って……まあいいや、先を急ごう」
このやり取りを見せられ、呆気に取られている近衛兵達を尻目に足を進めたその時である。

「待て、貴様ら、待つんだ！」
目の前に飛び出した近衛兵の一人が、俺達を制止しようと剣を構えた。どうやらこの近衛部隊の隊長みたいだ。

「ほう、今なお私を止めると……いい度胸だ」
彩華がそう言うと同時に刀を抜き、構えた。

しかし向き合った瞬間勝負はついたようだ。
「……山神彩華か……噂は確かのようだ、俺には万に一つも勝ち目がないな」
そういうと近衛兵は剣を下ろし道をあけた。
「ほう、一瞬で力量の差を見極め剣を退くか。なかなかできる芸当ではないな。
どうだ今降らぬか。悪いようにはせぬ」
「ありがたい申し出だけど……今は断らせていただく。その魔法使いの兄さん程ではないが、こんな俺にも、ちっぽけながら正義ってのがあるからな。
そうは言っても帝国が無くなったら、身の振りは考えるよ」
「そうか、残念だ。できれば先の案内……まあ、よいか。
今はここを通らせてもらう。構わぬな」
「ああ、案内は勘弁だが、行ってくれ……しかしこんなんじゃ、どっちが味方だかわかんねえな。
さて俺達は、領民達を誘導しよう」

混乱も落ち着き、無用な戦闘もなく、宮殿敷地内に入った俺達であった。しかし手厚い歓迎もなく、当然案内人も出てこない状況である。
宮殿内の敵兵がほとんどいない事に確証を持った俺は、追撃に対する防衛として侍達二個小隊を正門に残した。

「これじゃ、首謀者達は既に逃走した後だな。今更宮殿に行っても仕方ない。先に契約主達を探そう」
「そうね、兄さん。でもどこかしら。そもそもここにいるのかな？
首謀者達に連れ去られたのではないのかしら」
「よいか鈴音。契約主達は、皇帝暗殺の濡衣を着せられ、無実の罪

で捕まっておる特別な罪人なのだ。当然首謀者達の目の届く範囲にいるはず。
人質として連れ出すにも、お人形とつながっておる。隠者の奴らは連れ回す訳にいかぬ。その上始末する事もできぬしな。
したがって間違いなくここにおる。
そんな事は少々考えればわかるはず。その神楽ボケした頭を、たまには働かせてみるのもよいぞ、鈴音よ」
「何ですって！　日照りが続くと頭の冴えも良くなるようね、彩華姉さん」

「なんと申した！」
「鬼姫ちゃん！」
『承知しました、鈴音様』
彩華は刀に手をかけ、鬼姫は戦鎚を取り出した。

「わぁ、だから二人とも、そういうのは全てが終わってから、じっくりと平和的に解決しましょう」
一瞬の間を置き、彼女達の間に漂う緊張した空気が解けた。

「……ふっ、神楽がそう言うなら、ここは一旦納める。よいか鈴音」
「わかってます。兄さんのためです」
「神楽……」
「兄さん……」
「最後まで見届けろよ」
「最後まで付き合っていただきます」
「ってか何故俺が……」
この作戦は決して終わらせてはいけないという事が、今の俺には完全に理解できる。

「でもそんな簡単に居場所はわからないよね……へへ」

「神楽、何を言っている」
「そうよ兄さん、私達の話を聞いてなかったの？」
「話って……聞くって……一体何を……」
二人の口が揃って開く。

「兵の詰所だ」
「兵の詰所に決まっているわよ」
「てか、なんであの会話でその答えが出てくるんだ？　そもそもそんな簡単に見つかっては……困るし……」
「神楽、何をゴチャゴチャ言っておる。
そもそも詰所には四六時中兵がいて、一番警備と監視がしやすいところだぞ。鈴音もっと言ってやれ」
「はい彩華姉さん、普通そういうところの地下には、監獄が有りますわ」
「息ぴったりの回答、ありがとうございます。今後もその調子で、仲良くして下さいね」
「何を言ってる神楽、私達はいつでも姉妹のように仲が良いぞ」
「えっと、先ほどの一件は……仲が良いとは……」
「兄さん、何を言ってるの？　いくら仲が良い姉妹でも、たまには喧嘩くらいしますよ」
「そうだぞ神楽、たまの息抜きのようなものだ」
「息抜きってお二人さん、普通の姉妹喧嘩って、武器に手をかけませんよ」
「あれは彩華姉さんと私の意思疎通の一つで、お互いを信頼する証です」
「そうだ、しかも行き過ぎが有れば、神楽が止めてくれるからな。鈴音も私も安心して憂さが晴らせる」
「それは、たいそう信頼をして頂き、ありがとうございます。
さて、噂の詰所はどの建物に有るのかな？」
『神楽君、あれだよぉ』

闇姫が、ここから三つ奥の建物を指をさしながら言った。

「えっと闇姫さん、何を根拠に……理由を聞くのが怖いのですが……伺いましょう」

『だってぇ匂いがするんだよぉ。おいしそうな食べ物の匂いがするんだよぉ。だからぁ、きっと誰かいるんだよぉ』

「犬ですか……そんな事と思った……」

「神楽、闇姫はなんと」

「三つ目の建物が詰所と……食べ物の匂いがするからと……」

「兄さん、どのみち先に進む訳ですから、行って覗いてみましょう」

「それもそうだな、行こうか」

俺達は手前の建家から、覗き込みながら足を進めた。

「手前は二つとも近衛兵達の兵舎のようだったな。さて次は闇姫お薦めの建家だ。確かになんだか良い匂いがしてきたな」

俺達は今までの建家の出入り口とは違う、大きく開かれた扉のない出入り口から中を覗き込む。

目の前には三十畳程の広さの部屋が広がる。中央には大きな机が一つと、それを囲むように二十脚程のイスがある。そして一番奥には、腰程の高さの細長い机が据え付けてあり、厨房機器が設置されている隣の部屋との仕切となっている。良い匂いの発生源はここのようだ。

「ここが詰所かな？　作りは食堂だよな」

「でも兄さん、詰所と食堂や休憩所を兼ねた施設かもしれません」

「神楽、奥も覗きに行くぞ」

『黒も賛成だよぉ。奥には絶対おいしいものが有るはずだよぉ。いっくよぉ』

『黒鬼闇姫さん、完全に目的を間違えてますわよ。全く、はしたないですわ』

「さあ兄さん、か弱い女性達を先頭にさせるつもりですか」
「こら鈴音、押すなって、そもそも彩華は俺の十倍は強いぞ」
「ほう、神楽には私が凶暴に見える訳だ」
「いや、そういう意味じゃないんだ」
「まあいい、全てが終わったら、それも含めてじっくりと話そう。違う一面の私が見れるかもしれぬぞ」
「全く、いつも兄さんがおかしなツッコミを入れるから、話が進まなくなるんです。
さっさと動いて下さい」
「って俺か？　こら鈴音押すなって」
「いつも引っ張るなって言うから、押すんです」
念のため出入り口に侍を二人残す。そして部隊は鈴音に押し込まれた俺を先頭に、建物の奥へ進む。すると廊下の突き当たりに、下に向かう階段があった。

「当たりかな」
「神楽、これだけの建物だ。倉庫代わりの地下室くらいあってもおかしくないぞ
とにかく降りるぞ」
今度は彩華にせかされた俺達は、それぞれそこに置いてある洋灯を手に取り、火をつけて階段を降りた。
一階分降りたところで階段は終わり、奥に続く通路が現れた。

「さあ兄さん、どんどん進んで下さいよ」
「わかってるよ、だから押すなって」
「あの神楽の旦那、俺達が先頭行きましょうか」
気を利かしてか侍が話しかけてきた。

「あっ、大丈夫だよ。それにこういうところは、しんがりの方が危ないからね」

「旦那も面白い事を言いますね。
じゃあ、俺達は後ろを警戒しながら、ついていきます」
そしてまた鈴音に押される俺を先頭に、奥へと進んでいく。するとまた下へ向かう階段が現れた。

「やっぱり当たりかな。いかにもな作りだしね」
「兄さんが口を開くと長くなります。さっさと行って下さい」
「こら押すなって、落ちるだろう」
一階分階段を下りると、また階段は終わり通路になった。
俺達は通路を更に進む。

「普段なら、要所要所に警備の兵がいるんだろうけど、みんな逃走したのかな。俺達にはありがたい事だね」
「神楽、また階段だ。一体どれだけ下るんだ」
そんな事を繰り返し地下五階まで下った時、目の前に金属製の扉が現れた。
見た目ほど重厚な作りでは無かったのか、俺が取っ手を回すと、軽い音と共に簡単に扉は開いた。
中を覗くと、鉄格子の壁が目に入る。

「どうやら大当たり、間違いないみたいだ。闇姫、やったね」
『神楽君、そんなの当たり前の事で、なんで喜んでるのぉ。黒に任しておけば、間違いないんだよぉ』
『了解です、闇姫さん。今後も正確な導きをお願いします』
『神楽君、それって嫌味っていうやつだよねぇ。
黒だって、時には怒るんだよぉ』
『闇姫さん、なんだかいらついてますね』
『黒はお腹が減ってるんだよぉ。そういう時の黒は、怖いんだよぉ。黒がもっと黒くなるんだよぉ』
『それは困ったな。闇姫はお腹が空いたか……そうだ、これをあげ

るよ』
俺は携帯食料を取り出し、闇姫に渡した。
『おぉ、良いもの持ってるんだぁ。さっすが神楽君。黒の手懐け方をよくわかってるねぇ。やるねぇ』
『って闇姫さん。手懐けるは自分自身に言わないですよ』
「兄さん、闇姫ちゃん、何をしているのですか。皆さん待ちくたびれてますよ。いい加減に核心部に向かって行きますよ」
「悪かった。だから押すなって……」
その時、奥の方からガチャガチャと金属のぶつかる音が響きながら近づいてくる。どうやら残っている……いや見捨てられた二人の近衛兵のようだ。

「貴様ら何者だ」
「俺達は神国天ノ原の者だ」
「馬鹿な……」
「あなた達、見捨てられたみたいですわ」
「何を言うか」
「上には誰もおらぬぞ」
「戯れ言を……」
「帝国の魔法使いはこの奥にいるのか？」
「知っていても、貴様らに……なに！」

ゴン！　ガン！　……ガシャン……グシャン

俺の両脇を侍達が素早くすり抜け、鈍い金属音を響かせ、二人の頭部に刀の峰を打ち込んだ。鉄兜で守られているとはいえ、その衝撃はかなりのものだったらしく、二人はその場に崩れ落ちた。それを見た侍は手際よく縄で拘束した。

「旦那、見てると危なっかしいんで、申し訳ないと思いましたが、手を出させていただきました」
「ああ、気にしないでくれ。この奥に契約主がいる事がわかったからね。
それにしても見事な動きだね。機会があったら手ほどきしてほしいよ」
「旦那、だめですよ、俺達の仕事が無くなっちまう」
足を進め、丁字路の突き当たりで左右を見ると、それぞれに小さな窓がついた扉が一つあった。
俺達はまず右側の扉の前まで行き小窓から覗いた。
四畳半程の広さの部屋の中央にぼろ布のような小さなかたまりがある。しかしよく見ると、人の形をしている。ぼろ布に見えたのは拘束衣のようだ。その外観は鈴音よりひと回り、いやふた回り近く小さい。多分白輝明姫の契約主だろう。

「おい！　大丈夫か？　助けにきたぞ！」
俺が小窓から話しかけると、小さく体を動かし反応した。しかし声は聞こえない。頭に被されている覆面が、目隠しと猿ぐつわになっているのだろう。

「とにかく扉を壊して助け出そう」
「兄さん、ちょっと待って」
「なんだ」
「彼女達がここに拘束されてどれくらいになると思います」
「明姫達が来たときからだろう、二日いや三日目か」
「多分、これまであの格好のままよ……お手洗いとかにも……拘束衣の中は……」
「あっ、俺達は向こうを見に行ってくる。こっちは鈴音と彩華に任せる。っと彩華、とりあえずあの扉だけ斬ってくれ」
「鈴音ではなく、私なのだな、神楽」

「えっ、あっ……あの彩華さん、今は一応緊急事態ですので……えっと鈴音には、なんだ……鬼姫に……そう、ほら、下着とか取ってきてもらわないと……男物も頼むよ」
「今は何も言ってません。全て終わってからのお楽しみに取って置きますわ、兄さん」
「えっと、とにかくお願いします」
俺達男四人と彩華に闇姫は、もう一方の扉の前に行き、小窓から中を覗いた。やはり同じように、拘束衣を着せられた人が横たわっていた。

「神楽、下がっていろ」
俺が下がると彩華の斬撃が監獄の扉を切り裂いた。

「では神楽、私は鈴音を手伝いに戻るぞ」
「ありがとう、彩華。
さて闇姫、今から俺の部屋に飛ばすから鬼姫の手伝いをしてきてくれ。それと秘密のおやつ箱からなにか食べ物を持ってきてくれるとありがたい」
『神楽君、なんで黒の秘密のおやつ箱を知ってるのぉ。覗いちゃ駄目なんだよぉ』
『だって、ちょっと前に闇姫が嬉しそうに見せてくれたんだよ。「これ黒の秘密のおやつ箱だから黙って食べちゃだめなんだよぉ」ってニコニコしながら』
『覚えてないなぁ……まあいいかぁ、今回は許すよぉ。じゃあ行ってくるねぇ、よろしくぅ』
『頼んだよ、闇姫』
俺は闇姫を自室まで飛ばした後、監獄内に入り、横たわる人物に話しかける。

「俺は神国天ノ原、独立魔戦部隊、筆頭魔術師天鳥神楽です。

白輝明姫ならびに金剛輝姫の願いを受け、契約主であるあなた達を助けにきました。あなたはヘリオ・ブレイズですか。ここまで理解できたら、首を一回縦に振って下さい」
すると横たわる人物は一度うなずいた。
「今から覆面を外します。目はゆっくりとあけて下さい」
俺はそう言うと、洋灯の明かり一つを残し、ヘリオ・ブレイズの覆面を外した。そして彼の口から猿ぐつわを外し、詰められているものを取り出した。
彼はゆっくりと目を開け、辺りを確認した後、口を開き弱々しい声で話す。

「皆さん……敵である私達を……ありがとう……本当にありがとうございます。
……ゴホッ……ところで……皇帝陛下暗殺の……ゲホッ……」
「三日ぶりに声を出すのだ、無理をしては良くない。今は休みなさい。
今、俺達のお人形が着替えとなにか食べ物を取りに行ってる。着替えて落ち着いたら、金剛輝姫を呼ぶといい。彼女も喜ぶよ。
それと皇帝暗殺は……首謀者達は残念ながら取り逃がしたようだが、神国の俺達がここにいる。この意味はわかるね」
彼が一つ頷いたところで、俺達は闇姫達の到着を待った。

彩華が牢獄の扉を斬った頃、鈴音の方も鬼姫が扉を斬り終わっていた。

「さて鬼姫ちゃんは、私の部屋から着替えの下着を取ってきてね。兄さんの部屋から男物も取ってきてよ」
『鈴音様、いよいよ例の凄いのを……彩華様は強敵ですから、ここ

で勝負をかけるのですね。しかし神楽様のは見た事無いので……行けばわかるのでしょうか……と、鈴音様……なに怒って……』
『鬼姫ちゃん、何を勘違いしているのかしら。
何で私が適地のど真ん中で、いかがわしい格好で勝負をしないといけないのかしら？　そもそも鬼姫ちゃんは何を聞いていたのかしら？　これはお口だけじゃなくて、お耳も指導が必要かしら』
『すみません……ごめんなさいです。
ところで大きさはどうでしょうか』
『確かに……下は良いとしても上はねぇ……とりあえず、一番小さい物を持ってきてね。あと大きなタオルを何枚か。服は前に着ていた物がしまってあるから、それを持ってきてね。それと男物も適当に、鬼姫ちゃんならやれるわね』
『大丈夫……かと……では、お願いします』
怪しい打ち合わせが終わると、私は鬼姫ちゃんを部屋に飛ばしました。

「お前達、何をゴチャゴチャやっていたのだ」
「えっ、彩華姉さんわかったの？」
「いや、そんな雰囲気が漂っていた」
「そのうち彩華姉さんには、何を話しているのか、わかっちゃいそうですね」
「それはそれで面白そうだ。さて入るぞ」
解放された牢獄に彩華姉さんと共に足を踏み入れ、横たわる人物に声をかけます。

「私は神国天ノ原、独立魔戦部隊、魔術師天鳥鈴音です。
白輝明姫ならびに金剛輝姫の願いを受け、契約主であるあなた達を助けにきました。あなたはアリエラ・エディアスですか。ここまで理解できたら、首を一回縦に振って下さい」
するとその人物は、待ってましたとばかりに何度も首を縦に振り

ます。

「えっと……返事は一度で大丈夫です。明姫ちゃんに言われませんでしたか。

それでは今から覆面を外します。慌てないでゆっくりと目をあけて下さい」

先ほどの件もあり、私は注意を促します。

ゆっくりと覆面をめくり上げると、まだあどけなさが残る顔が徐々に現れます。

と、ここで彼女の見開いた全開の目と私の目が合いました。

（……こいつ絶対に素直じゃない……）

などと思う心の叫びはさておき、私は完全に覆面を取り、猿ぐつわを外しました。その時、彼女は口から何かを吐き出し、解放された口で騒ぎ出します。

「一体なんなの、ナ・ン・ナ・ノ・ヨ！

なんで、ド・ウ・シ・テ・私がこんな目に遭わなきゃいけないのカ・シ・ラ！

あんた、何にか聞いていないのカ・シ・ラ！

……ゲホッ……ゲホッ……ゴホッゴホッ……アァ……なんなの・ヨ！　……ゴホッ……」

私は猿ぐつわを外した事を後悔しました。

「お前、アリエラと言ったな。馬鹿ものが、三日程まともに喋っておらぬのだぞ。

いろいろと言いたい事があるのもわかるが、一気に喋ると、喉を潰すぞ！

申し遅れたが、私は神国天ノ原、侍大将山神彩華だ。

しかし、助け出した者にその態度は、気に入らぬ。この礼儀知らずが！　しっかり詫びてみせろ！」
「彩華姉さん、まあ落ち着いて下さい」
「ご、ごめんなさい……ゲホッ……助けてくれてありがとうございます……ゴホン」
彩華姉さんに諭され、アリエラちゃんの口調が変わりました。

（……案外素直なのか……）

「やればできるでないか。まあ今はしっかり休むがよい」
「あの……ヘリオ先輩は……皇帝陛下のゲホッ……」
「無理しなくて良いわ。ヘリオ・ブレイズは、一緒に来た兄さん……男達が助けてるわ。アリエラちゃんの今の身なりを、男達に見せる訳にはいかないでしょう」
「皇帝暗殺の首謀者達は、残念だが取り逃がした」
「えっと天鳥鈴音さん……山神彩華さん……お気遣いありがとうゴホン……帝国はどうなったのですか」
「無理に話さなくて良いわよ。後でゆっくり話しましょう」
「今、神国の私達がここにいる。それが全てを物語っている」
アリエラちゃんは一度頷くと静かになりました。

「もうじき私達のお人形が着替えと食料を持ってくるわ。
着替えと軽く食事をすまして落ち着いたら、白輝明姫ちゃんを呼ぶといいわ。彼女もアリエラちゃんが呼んでくれるのを待ってるわよ」
「本当に皆さん、ありがとうございます……コホン……敵である私達のために……明姫姉……もうちょっとの辛抱だよ……ケホッ」
そういうとアリエラちゃんの目から、一筋の涙が流れ落ちました。

策略　１６（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　17（前書き）

10月3日　鈴音視点の地の文を変更しました。

策略　17

俺は闇姫を呼ぶために一度部屋から出た。するとちょうど鈴音も通路に出てきた。
それを見かけた俺は鈴音達の方に歩きながら話しかける。

「おーい鈴音、そっちはどうだ。なんだか騒ぎ声が聞こえたけど、大丈夫か？」
「あっ兄さん、大丈夫です。アリエラちゃんがちょっと混乱したみたいでしたが、もう落ち着きました。ヘリオさんはどうですか？」
鈴音もこっちに歩きながら答える。

「大人しいもんだよ。
さて、ぼちぼち準備はできてるだろうから、闇姫達を呼び戻すよ」
「はい、兄さん」

「おいで黒鬼闇姫」
「いらっしゃい銀界鬼姫ちゃん」
俺と鈴音の「命の糸」がそれぞれ光の玉を作り出し、やがてそれぞれの「お人形」の姿に変わる。

『神楽君、持ってきたよぉ』
『鈴音様、こちらでよろしいですか』
『二人ともありがとう。じゃあ闇姫、すぐに持って行こう』
『りょおかぁい、鈴音ちゃん、銀ちゃんまた後でねぇ』
俺達はヘリオ・ブレイズがいる牢獄に戻った。

「お待たせした。着替えと軽い食べ物を持ってきた。
今、拘束帯を外すから」

「ありがとうございます……つ……」
束縛から解放され、自由に身動きを取れるようになった彼であったが、まだ動けないでいる。無理もない、同じ体勢で三日を過ごしたのだ。体の各部が固まっているのであろう。

「時間はあるから、少しずつ体を馴染ませていくといいよ。
何なら少し手伝おうか」
「あ、いや、これ以上ご迷惑をかけるのは……」
「遠慮せずとも、私が体をほぐすお手伝いいたします。
少し痛むかもしれませんが、我慢して下さい」
一人の侍がそう言うと、ヘリオ・ブレイズにタオルを掛けて、四肢を動かし出した。時々痛みのためか、顔が歪んでいたが、しばらくすると口を開いた。

「ありがとうございました。随分楽になりました。あとは自分でやれます」
「では、着替えと食べ物はここに置いておきますので、ゆっくり着替えて下さい。俺達は外に出てます」
俺達は牢獄を出て、通路で待つ事にした。するともう一つの牢獄から賑やかな女性達の声が、通路に響き耳に入ってきた。

「ふっ、元気のいいお嬢達ばかりだな……」

神楽の耳に賑やかな声が届いた頃、鈴音と彩華は、賑やかに騒ぎ立てるアリエラに苦戦していた。

「痛い、イ・タ・イ・の！　アリエラは今、動きたくないので・ス！　まだ動けないんで・ス」

「せっかく拘束帯を外したのに……アリエラちゃん、ゆっくりでいいから体を動かしましょう」
「鈴音、三日もこの格好だ。体が動かないのも仕方あるまい。
だが、アリエラよいか！　あまりだだをこねると、この刀で服を切り裂き、己の恥ずかしい姿を皆の前に晒すぞ！」
彩華姉さんは刀を鞘から抜き、アリエラちゃんの拘束衣に突きつけました。

「ひっ！　ご、ごめんなさい。もう少し待って下さい」
「あ、彩華姉さん、落ち着いて下さい。アリエラちゃんが怯えてます。刀を納めてください」
「ふっ、鈴音……あまり甘やかすでないぞ」
そう言うと、彩華姉さんは刀を鞘に納めました。

「鈴音……の姐御、助けていただき、ありがとうございました」
「あのアリエラちゃん、明姫ちゃん達と同じ呼び方ね。ふっ……でもね……姐御はやめましょうね」
私は満面の笑顔でアリエラちゃんを睨み……いえ、微笑みかけました。

「ひ！　ご、ごめんなさい」
「こら鈴音、アリエラが怯えておるぞ」
「じゃあアリエラちゃん、怯えついでに、体を動かしましょうね。この優しい鈴音姉さんが手伝ってあげますわ」
「鈴音、それ、すごく怖いぞ」

「ひえっ！　鈴音の姐……姉さん、許して下さい……彩華の姐御、助けて下さい……」

「頭の次は姐御ときたか……鈴音、構わん、やっちまいな！」

私はアリエラちゃんの拘束衣の留め金を外して、彼女の上半身を引っぱり出しました。
そして、あらわになってしまった部分にタオルを掛けてから、彼女の上半身をゆっくりとほぐすように動かします。
「あ……い、痛い……す、鈴音……姉さん……痛い……許して……でももう……体が馴染んできました……もう……アリエラ一人で大丈夫です」
「もういいの？　なんだかちょっと、張り合いが無いわね。
じゃあ足の方をしましょうか？」
「あ、足は……その……すごく……汚れていますので……それに、だいぶ動くようになってきてますので……」
「気がまわらなかったわ、ごめんなさい。
じゃあこの忌々しい服だけは脱がしちゃうわね。このタオルを腰に巻いておきなさい。
彩華姉さん、私がアリエラちゃんを支えますから、服を取っちゃって下さい」
「承知した」
「じゃあ行きますよ。一、二、三、はい！」
私達は、アリエラちゃんから忌々しい拘束衣を、完全に取り去りました。
「あぁ、ちょっと待って、見ないで下さい。タオルをしっかり巻きます……」
慌ててタオルを巻こうとするけど、上手く巻けないアリエラちゃんを見て、彩華姉さんが私に声をかけます。

「鈴音、私達は外で待とう。例え同性でも今の姿は見られたくないだろう」
「そうね。アリエラちゃん、着替えはここに置いておきますね。ゆっくりでいいからね。落ち着いたら声をかけてね」
そう言って、私達は牢獄外の通路に出ました。

俺の耳に届いていた、女性陣の賑やかな声が止まると、鈴音と彩華が通路に姿を現した。
それに気が付いた俺は歩み寄り話しかける。

「アリエラはどうだった」
「あっ兄さん、大丈夫よ。最初はやっぱり騒いだけど、今は落ち着いてるわよ。
ちょっと素直じゃないところがあるけど、そう言う年頃かな。でも可愛い娘よ」
「神楽、あの娘の事が、いろいろ気になるようだな。まさかと思うが年端も行かぬ娘も、守備範囲ではなかろうな。犯罪は許さぬぞ」
「彩華さん、なんだかもの凄く勘違いされているようですね。とりあえず、言ってる意味がわかりません」
「アリエラちゃん、なんと言うのか、まだ少女なの」
『兄さん、子供って言っちゃだめよ。間違いなく怒るわ』
『……』
「そうだな、神国なら初等教育を卒業したくらいだから、十二歳と言ったところか」
「彩華姉さんひどいです。アリエラは十四歳です。見た目が小さいからよく間違われるだけで・ス」
なんだかんだといっても女性である。年齢の話には敏感なのか、部屋の中からアリエラが反論する。

「それは失礼した、アリエラ」
「えっとところで、この衣服は鈴音姉さんのですか？」
「そうよ、なにか不都合がありましたか」
「貸していただいてなんですが……これはちょっと嫌みに……いや、発展途上の乙女には、厳しい冗談で・ス」
「冗談って……？　アリエラちゃん、どうしたのかしら」
「このブラは鈴音姉さんのですよね」
「新品じゃなくてごめんね。私が前に付けていた物だから、ちょっと不快かな」
「いえ、不快とかでは無いのですが……間違いなく嫌味ね……」
　呟きを交えてそう言うと、まだまともに動かない足を引き摺り、下着姿のアリエラがうつむいて出てきた。

「アンダーはちょうどなんだけど、カップが合わなくて……その……スカスカなの、大丈夫かな。見て……って……」
　アリエラがそこまで言って、自分の胸から正面に視線を上げたその時、俺と目が完全に合ってしまった。

「キャー！　イヤー！　なに見てるんで・ス・カ！」
「あ、いや見てって、ごめん」
「何言ってるんです・カ！　見ないで下さ・イ！　なんで、ド・ウ・シ・テ、男がいるんで・ス！　誰なんで・ス！」
「アリエラちゃん、兄さんです。私達に話があってここにきてたの、ごめんね。
　とにかく、アリエラちゃんは中に戻って。
　兄さんも兄さんです！　なにデレ顔しているんですか？　後で私のを見せますから、向こうに行って下さい！」
　鈴音がそう言った直後、沈黙のひと時が訪れた。その沈黙を彩華が切り裂く。

「ほう鈴音、今言った事をもう一度言えるか？」
「私、何にかおかしな事を言いましたか、彩華姉さん。
えっと、アリエラちゃんに兄さんだと伝えて、部屋に戻したのと。デレ顔の兄さんを追い返そうとしただけですわ」
「ならよい。それ以上思い出す必要も無い。
神楽も先に聞いた事は全て忘れ、おかしな期待を抱くでないぞ。なんなら私が実践してやる」
「えっと、完全に論点がわからなくなってますので、俺は戻りますね……はは」
アリエラと衝撃の初対面をすませた俺は、追い返されるように戻った。アリエラの方は鈴音が上手くなだめてくれたようだ。

しばらくの間、俺が通路で侍達と世間話をしていると、ヘリオ・ブレイズが出てきた。
先ほどのアリエラと同じく、まだ完全に動かないようで、少し足を引き摺っている。

「皆さん、お待たせしました」
「俺達の事は気にしないで下さい。それより、まだゆっくりしていてもいいですよ」
「多少痛みは残っていますが、もう大丈夫です。
それよりアリエラの騒ぐ声が聞こえてましたが、ご迷惑をかけているのでは？」
「彼女、なかなか元気ですね。でも今のところこっちの女性陣に、懐柔されているようです」
「あの、アリエラを懐柔しているとは……それは凄い人達ですね」
「とりあえず、向こうに行こう」
歩き出すと同時に俺は鈴音に声をかける。
「鈴音そっちはどうだ」

「ちょうど今、着替えも終わりました。私達もそちらに行きます」
俺達は互いに歩み寄り、全員が顔を合わせた。
すると彩華が口を開く。

「神楽、先の段取りがあるので、非礼と承知で先に名乗らせていただく。
私は神国天ノ原、侍大将山神彩華」
「あなたが……あ、失礼、私はバルドア帝国特殊遊撃部隊隊長ヘリオ・ブレイズ中将です。
此の度の救出、心より感謝いたします。
以前戦場であったときは……いやこの話はまたの機会にでも……」
「では神楽、私達は先に上がって救出成功の件を連絡しておく。その足で宮殿に向かうとする。よいか」
「承知した。彩華、まだ完全に決した訳じゃないから、充分気をつけろよ」
「ああ、言われるまでもない。ではお先」
そう言うと彩華達侍は、縛り上げていた近衛兵達を引き起こし、地下監獄から出て行った。

「さて、続けて自己紹介といこうか。
俺は神国天ノ原、独立魔戦部隊、筆頭魔術師天鳥神楽です。この娘が俺のお人形、黒鬼闇姫です」
「同じく、天鳥鈴音です。こちらは私のお人形、銀界鬼姫ちゃんです」
「フーン、明姫姉が言っていた『魔界コンビ』ね。確かに邪悪そうだわ」
「駄目だよアリエラ、そんな事言っちゃ……助けてくれた方達に失礼だよ」
「なにさ、ヘリオ先輩まで、敵の肩を持っちゃって、今日のところはまあいいわ。

ところで神楽さんだったけ、責任とってよね」
「えっとアリエラさん、責任って一体なんのですか？」
「とぼけない・デ！　さっき見たでしょう、アリエラのハ・ダ・カ！　ダ・カ・ラ、責任とって、アリエラの嫁になりなさ・イ！」
「イって言われても……しかも嫁って……」
「兄さん、いつまでこんな少女に、言いくるめられているんですか？　シャキッとしなさい！
それとアリエラちゃん、これは私の物です。差し上げる訳にはいきません。そもそもアリエラちゃんが見られたのは下着姿であって、裸じゃありません。それで嫁なら、兄さんは既に私の嫁です！　いいえ、嫁以上です！」
「ひぇっ！　ご、ごめんなさい、鈴音姉さん。
でもきょ、兄妹なんだから、一緒にお風呂ぐらい……来て、白輝明姫……鈴音姉さんが……いじめるの……」
「あらアリエラちゃん、私達は本当の兄妹じゃないわよ。血もつながってないし、縁組みもないわよ。
それからこの私が、明姫ちゃん達を手懐けていないとでも……いいわ、明姫ちゃんや金輝姫ちゃんに確認なさい」
ほぼ完勝の鈴音が、目を細めて軽く見下すようにアリエラに言った。

「輝姫……様を……金輝姫ちゃんって……とにかく……おこし下さい、金剛輝姫様……」
鈴音の言葉に反応したヘリオ・ブレイズが輝姫を呼んだ。

『アリエラちゃん、無事でなりよりよ。お姉さん安心したわ』
『下僕よ……なんじゃ……元気じゃったのか……』
『明姫姉……ありがとう』
『輝姫……様、お手数をお掛けしました。ありがとうございます』
『あららアリエラちゃん、涙浮かべて、お姉さんに会えた事が、そ

んなに嬉しかったの』
『うん、凄くうれしい。でもね、鈴音姉さんにいじめられたの……』
『あらあらそれは困ったわね。
でもね……駄目よ、アリエラちゃん。鈴音の姐御には決して逆らっては駄目。あのお方が黒と言ったら、お姉さんは黒鬼闇姫になります』
『明姫姉も……鈴音姉さんに勝てなかったの……』
鈴音の言う通り明姫もその魔手に落ち、落胆を隠せないアリエラであった。

『えぇ白姉ちゃん、駄目だよぉ。そんな事したら黒が二人になっちゃうよぉ。神楽君が困っちゃうんだよぉ。
でもねぇアレリラ……違うなぁ……アリレラ……』
『アリエラです！　ア・リ・エ・ラ！』
『何怒ってるのぉ？　アリちゃん。
だからねぇ、鈴音ちゃんは、今はあんなんだけどぉ、本当は優しいんだよぉ』
『そうですわ、アリエラ様。鈴音様は本当にお優しいのですわ。
確かにその愛深き性格故、時々恐怖をまき散らし暴走いたします。しかし既に女の喜びを知ってしまったためか、お一人寝のときのその姿、見るに耐えないほど、イダ……イダジイデス……ごめんなさい』
相変わらず鬼姫の一言に、強烈に反応する鈴音であった。

『鬼姫ちゃん、あなたは私にとって、恐怖をまき散らす暴走口車です』
『さすが「魔界コンビ」じゃのう。見ていて飽きぬ。
ところで明姫、大切な事を忘れておるぞ』
『お姉さんとしたことが……アリエラちゃんに会えたのが嬉しくて、忘れていましたわ。

神楽ちゃん、鈴音ちゃん、今回はお姉さん達のわがままを受け入れて、契約主を助けていただき、本当にありがとうございました。このご恩は忘れません』
『妾からも……あのような下僕達じゃが、ほんに……言葉にできぬ……』
『明姫、輝姫……礼はいらないよ。俺達はそれ以上の、見返りを頂いたと思うしね。
それでも礼が言いたいのなら、あとで帝に言ってくれ。
そうそう二人には、このまま一緒に来てもらうよ。構わないだろう』
『ああ、僕はいいけど、アリエラはどうなんだ』
『うん……でも、でもよ、明姫姉達を呼んだんだよ』
アリエラの返答は何かもの言いたげであった。

『それは私達と一戦交えると、言う事かしら、アリエラちゃん』
『そ、そんなつもりじゃ……ただ、逃げる事もできるかなって……』
『どこに逃げるの？　あなた達を嵌めた連中の手によって、今までの帝国はもう無くなってるわ。それともその連中のところに行くとでも……連中が受け入れるかしら』
『アリエラは静かに暮らしたいなって……』
『まあ鈴音、アリエラを追いつめないであげなよ。
さてアリエラ、俺もそうしたいから、気持ちはわかる。
だが酷な話だがそれは無理だ。俺達は個人としては、あまりに強大過ぎる力をもっている。
どこにも属さず静かに暮らすとしても、俺達を利用しようと言い寄ってくる輩は、湧くように出てくるだろう。
そいつらを排除するにも、この力は強大過ぎるんだ。
確かにこの力があれば、排除する事は簡単だろう。だが力には、それ以上の力をもって制するというのが、世の常だ。
中には他に取られるくらいなら、潰してしまえと、とんでもない

兵力を送り込んでくる輩もいるかもしれない。
つまり俺達がいるところには、必ず争いが起き、そして拡大していくだろう。
だから俺達は静かに暮らすにしても、俺達自身が強大な勢力に属さなければいけないんだ』
『でもよ、それって、こうやって何かの時に、争いの場に出て行かなければ、いけないって事でしょう。結局争い事に利用されちゃうのよ』
『確かにな。今は戦時中であり、しかも俺達は軍属だ。
だから命令があれば、当然それを遂行する。だが、帝国が事実上崩壊した以上、今後はどうなるか……俺は想像できない。
しばらくは、この反乱を起こしたものを追いかける事になるだろう。そして加担する輩の討伐も行うであろう。
しかし、それをアリエラ達に強要する事もできない。今まで同じ帝国の軍人であり味方だったわけだからな。その意味では戦闘にかり出される事無く、静かに暮らせるかもしれない。
だけど同時にそんな時だからこそ、所在を明確に、はっきり言って、目の届くところに置いておきたいんだ』
『結局はアリエラ達を、監視下に置いておきたいんだ』
『アリエラ、あんまり突っかかったり、おかしな勘ぐりはよくないぞ』
『なにさ、ヘリオ先輩は意気地がないんですね。こういう時だから、言いたい事ははっきり言っておいた方がいいので・ス！』
『アリエラちゃんは、本当に元気ね。でもね、こういう話は、今ここでする事じゃないと、私は思うの……兄さんもそう思わない。それと……アリエラちゃんもよ』
『まあ確かにな』
『ひっ！　ごめんなさい鈴音姉さん、大人しく従います』
『アリエラちゃんは何か勘違いしちゃったわね。
いいのよ言いたい事は、はっきりと言ってもらっても……でもね

私は、ぼちぼちここを出たいなって、思っただけですからね』
『ひぇっ！　ごめんなさい、アリエラが引き止めてしまいました。許して下さい』
『それじゃ、ここを出よう』

俺達は来た通路を戻り建物の外に出た。そして外に控えていた侍達から報告を受ける。

「宮殿の制圧は、先ほど終了いたしました。
現在最終確認中ですが、内部に残っていた人員は非戦闘員が十名程、宮殿前の庭園中央の広場に集められております。
なお一個大隊がこちらに派兵されたと、連絡を受けております。主部隊は到着まで待機との事です」
「大隊の事は表の近衛兵達に伝えておけよ。無用な戦闘を避けるようにと」
「承知しました」
報告を受けた俺達は、庭園中央の広場に向かった。そこで彩華と合流する。

「神楽、遅かったな」
「待たせたか、彩華。様子はどうだ」
「やっぱりもぬけの空だ。残念だが仕方ない。
ところでアリエラ、お前達の持ち物が残っているのではないか？
取りに戻るか」
「お気遣い、ありがとうございます、彩華姉さん。ではそうさせて頂きます」
「悪いが明姫達はここで待っていてくれ。一応念のためだ。気を悪くしないでくれ」
彩華、アリエラ、そしてヘリオの三人は宮殿内に入っていった。

彼女達が荷物を抱えて戻ってきた頃、派兵された大隊が到着した。思った以上に早い到着だった。多分社守軍師が見越して組み込んでいたのだろう。

こうして俺達主部隊は、目的であった契約主の救出、そして宮殿の制圧を終え、作戦は終了した。

「さて神楽……約束を……」

「兄さん……忘れてませんよね……」

「最後まで見届けろよ」

「最後まで付き合っていただきます」

「いくぞ鈴音」

「望むところ彩華姉さん、鬼姫ちゃんお願い」

『承知しました』

「だから二人とも……その物騒な物はしまって下さい！」

策略　17（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

策略　１８（前書き）

今話は第二部「策略」の最終話ということで、ネタバラシ的なお話となっております。特に初めての方は、ご注意下さい。

ネタバラシとか、たいそうな事を言っちゃいましたが、タイトル通り「よくある話」ですので、過度な期待は厳禁です。

策略　18

俺達の作戦が終了して、三日程経過した。
宮殿陥落、帝国軍部と政権崩壊などの話題は、既に帝国内を駆け巡り、領民達のほとんどが知る事となっていた。ありがたい事に、今のところ大きな混乱はない。
これも社守軍師の情報戦略の効果だろう。俺達は侵略や占領を目的とした敵軍としてではなく、皇帝を暗殺し反旗を翻した謀反人達を追い払った、義勇軍的な扱いを受けているようである。
そして残されていた議会の連中や文官達は、あの手、この手を使って、早くも取り入ろうとする。保身に長けた連中はどこにでもいる。こういう輩は好きではないが、情報集めには重宝する。
俺達はこうして集められた情報を基に、皇帝一族を探し出し、一時拘束をした。しかし、残念ながら第一継承権を持つ後継者は、やはり逃走した後であった。今後帝国再興を企む輩の、旗印にされるであろう。

帝国領内での戦闘はほぼ終結し、懸念されていた反抗勢力は、今はなりを潜めている。
残念な事に、現在なお帝国主要三砦では、戦闘は続いている。しかし彼らにも帝国崩壊の情報は伝わっているため、約半数の兵達が投降し、その数は時と共に徐々に増えてはいる。

こうしてバルドア帝国は、事実上その歴史に終止符を打ち、神国天ノ原に併合されつつあった。

そんな中、帝の本隊がトゥルーグァ宮殿に到着する。警護にまわった彩華の話では、途中物を投げつけられる程度の事はあったようだが、その他たいした混乱の無い道中のようであった。

「道中、お疲れさまでした」
「おう神楽、かた苦しい挨拶は抜きだ。しかしこういう様式は初めて見るが、ここが皇帝のイスという物か」
「聞くところによりますと、ここが謁見の間のようです。皇帝はここでその玉座に座り、陳情などを聞いていたようです」

「俺は思うのだが、陳情にくる者達より高い目線で話を受けるのは、実際どうなのかな。彼らと同じ目線でこそ、その真意がわかると思うのだが、神楽はどう考える」
「私は……それを意見する立場に無いのですが、帝のお考えはよくわかります。しかし、目線を揃えるという事は、陳情に来る者達と同じ水準の、生活をしないといけない事になります。
王は王にふさわしい立場があってこそ、王と思います。ですから相応の物言いは、当たり前と思っております」
帝と俺は謁見の間から奥に続く通路に入り、歩きながら話をした。

「なるほど、神楽は立場相応の物言いが必要と思っている訳だな。ところで契約主達の様子はどうかな」
「はい、当初は環境の急展開により混乱していたようですが、今はすっかり落ち着いております」
「ならば明日にでも、直接話を訊きたい。詳細は後で使いの者を送るよ」
帝が足を止め、とある部屋に入った。

「承知いたしました。
ん……ところでそちらの方は、どういったご関係の……あっ失礼、初めて拝顔……しますので……」
帝に続いて部屋に入った俺は、奥に立っている人物が気になった。体の線から女性というのはわかるのだが、顔に仮面を付けているた

め素顔はわからない。

「驚かしたか、すまんすまん、到着直前に彼女から、この部屋にいると連絡があってな。

紹介しておくよ。彼女は二守瑠理（ふたつもりるり）、俺の直属の忍女だよ。そうだな、特別諜報部隊筆頭といったところかな。

本来忍には名は無いのだが、彼女はその立場上必要と判断し名乗らせた。忍大将の音無道進（おとなしどうしん）と同じ理由だよ」

「わかりましたが……」

「仮面が気になるか、まあ初対面だし当然だな。

あまりいい話ではないが、彼女には内偵を頼む事もあるのでな、素顔を晒す事はできないのだ。先ほどまで、神楽のすぐそばにいたかもしれんよ」

「そのような冗談を……はは……」

「それはさておき、そんな訳で仮面を取らぬ無礼は許してやってくれ。あと声も同じ理由で勘弁してやってくれ」

「いいえ、理由があればこそですので、無礼などとは思っておりません」

俺がそう言うと二守は軽く頭を下げた。

「今回の作戦において、瑠理は最大の功労者と言ってもよいだろう。彼女がいち早く、皇帝暗殺の情報をもたらしてくれたおかげで、静が素早く対応し、一気にここまで落とす事ができた訳だ。

当然立案された作戦に沿って、それぞれの役割をしっかりと果たしてくれた、神国の兵士達があってこその勝利だけどね。

俺は良い家臣達に恵まれたよ」

「そう言って頂けると幸いです」

「そうそう瑠理の存在は内密に頼むよ。忍の中でも超一級の隠密だからね。

どんなに功労があっても、公に恩賞や褒美を取らしてやれないよ」

瑠理はその時「そういう物はいりません」と言わんばかりに首を横に振った。

「はい、心得ております。それでは私はこれで」

そう言うと俺は部屋を後にし、自室代わりに使っている部屋に戻った。

しかし何故だろう、この三日間、俺の部屋には三体の「お人形」がいる。当然それに伴いヘリオとアリエラもいる。

「あの……お二方、何故この部屋なんですか？」

俺が試しに問いかけてみた。

「アリエラは鈴音姉さんの部屋に行ったら、銀界鬼姫さんに追い出されたんで・ス」

「これだけ部屋があるのに、別の部屋で過ごそうと思わないのですか」

「えっと天鳥さん、僕達が逃げるという事を考えないのですか」

「ヘリオ・ブレイズさん、本当に逃げるつもりなら、とっくに何らかの行動を起こしているでしょう」

「まあ、確かにね」

「とりあえず、この話題はさておき、明日帝がお二人と話をしたいと言ってました。詳細は後ほど使いの者が伝えにきます」

「それって会っても、数分で終わっちゃう訳かな。なら行きたくないよ」

「アリエラさん、これは正式な会談と思ってもらって構いません。断るなら、正式な理由をお願いする事になります」

「でも……」

俺もアリエラくらいの年の頃は特に理由も無く、ただ単に「めんどくさい」とか「うっとうしい」などと思って、公式の行事などに参加したくなかった。だから気持ちはわからないでもない。と、俺

が勝手に想像しても、アリエラには何かしらの理由が有るのかもしれない。

『だいじょうぶよアリエラちゃん。お姉さん達も帝兄貴とはお話したけど、皇帝陛下とは違いますわ』

『確かに、帝兄貴は気さくな方だったのう。妾はああいう男が好きじゃよ。下僕よ、よく話を聞いて、見習うがよいぞ』

「明姫姉達がそう言うなら……わかりました」

「帝兄貴って……闇姫か……まあ、良いか。ヘリオ・ブレイズさんもよろしいかな」

「はい、問題ないです」

「ではそれはそれで良しとして……部屋だけどせめてアリエラさんは、女の子なんだし……」

「いいえ、いいんで・ス！　あんな恥ずかしい姿を見られた以上、神楽さんには嫁になってもらいま・ス！」

「アリエラ、恥ずかしいって……何を見られたんだ？」

「ヘリオ先輩は黙っててくださ・イ！」

「その話をぶり返すと、鈴音が……遅かった」

「兄さん、まだもめてるんですか！　アリエラちゃんもいい加減にしなさい！」

「ひえっ！　鈴音姉さん、ご、ごめんなさい」

「……」

こうして俺達の賑やかな夜は更けていった。

その頃、帝の寝所では、二人の女性に挟まれた帝が、その女性達と静かに会話の時間を過ごしていた。

「この数日のために、十年の長きに渡り大義であったな……」

今より十年ほど前、天鳥神楽が「お人形」と契約し、神国初の魔法使いとなった。この時「魔法使いは表裏一体で現れる」という言葉通りに、仇敵バルドア帝国にも魔法使いが現れた。
過去何度か繰り返され、その度に悲惨な結果を招いた、魔法使い同士の戦闘を知る前帝は、過去の轍を踏まぬよう、この計画が立案させた。
自軍の魔法使いをいかに勝たせるのではなく、帝国の魔法使いを自軍の魔法使いの手で、懐柔させるための戦略として……結果として、それは帝国を崩壊させるシナリオでもあった。

「……そして、仲の良い姉妹をお互いの任務のためとは言え、長く引き離してしまった事は心苦しく思うよ」
帝は傍らで仮面を外して寄り添う瑠理に言葉をかけた。

「いいえ、充分楽しませてもらいました。特に静ちゃんにはね」
「私も瑠理姉さんとの知恵比べは楽しかったです」
帝を挟み、反対側で寄り添う静が答えた。

「私も甘いわね。だってね、途中を凌げば最後は逆転できるようにしていたの。静ちゃん、わかったかしら？」
「それとなく気が付いていましたが……瑠理姉さんの掌で踊らされてたようですね」
「もっとも、負け続けちゃうと帝国参謀の地位から外されちゃうから、四分六で神国が勝てるように設定していたのよ」
「ふふ……瑠理姉さん、あたしもそれを考えて……うふ……調整していたわ……ふふふ」
「裏静ちゃんも相変わらずね。
おかげで長く参謀を務める事ができた訳だし、軍上層部を上手く反逆に誘導できたわ。

あいつら、ちょっとお尻を蹴飛ばしたら、すぐその気になっちゃってね、ふふ。勝手に段取りを進めちゃって、うふふ。
最後に計画書を見せられて『どうだ』なんて聞かれたから、『良いんじゃないんですか』って返事したの、ふふふ。
そりゃそう言うわよね。クーデターを失敗させるために、あたいが組もうとした計画と全く一緒なんですから、ふふ。手間が省けて喜んじゃったわよ、うふふ。
予定通り最後は全てが裏目に出て、計画が吹っ飛んだときのあいつらの顔……泣きそうな顔であたいに責任を押し付けようとしちゃって、うふふ。
全く！　ああいう奴らがやりそうな事ね！　いい加減にしろってのの！
でもあの顔、静ちゃんにも見せたかったわ。
それにね、あたいが最後に見限って出てくる時に言った最後の言葉、えへへ……『ごきげんよう』って、自分自身笑っちゃったわよ、ふふふ。『どこぞのお嬢様じゃないわよ』ってね」
「うふ……いいな、羨ましいな……ふふ……あたしもやりたかったな……ふふふ……帝、次はお願いよ……うふふ」

「あの二人とも、ぼちぼち表の性格に戻って下さいね。魔女の会話みたいで、聞いてるこっちが怖くなるよ」

「取り乱したようで、失礼しました。
それにしても瑠理姉さん、魔法使い達が上手く動いてくれましたね。
あの二人、結構くせ者に思えるけど」
「そうね、確かにアリエラちゃんは鋭いわね。だけどまだ子供よ。言いたい事があっても、ツッコミたくても、言葉が足りないのよ。その上、言葉にできないから、感情的になっちゃうのよね。
どちらかというとヘリオちゃんの方が、くせ者だったわ。それな

りに落ち着いているし、アリエラちゃん程じゃないけど鋭いわよ。
でもね決定的な欠点があるの。彼は女性に泣かされるタイプよ。私は彼から『契約の主旨』を聞くために、色技を使っちゃったけど、泣きでも充分落とせたわね。もっとも色技を使ったおかげで、後々御しやすくなったけどね」

「アリエラちゃんは、瑠理姉さんの話を聞く限り、鷹に思えるけど、宮殿警護なんて任務をよく引き受けましたね。強襲部隊にくっついてくるんじゃないかと、ヒヤヒヤしてましたわ」
「アリエラちゃんは、言動や行動でそう思われやすいのよね。でもわかりにくけど、あの子の本質は鳩なのよ。
それは『闘いが起きる前に止める』という、あの子の契約の主旨にも表れてるわね。
それにね、アリエラちゃんって可愛いところがあって、突っ走るだけ突っ走って、最終的にはヘリオちゃんの判断に、従っちゃう事が多いのよ。
私は、ヘリオちゃんを懐柔しちゃったから、そう言う意味では扱いやすかったわ。
でも暴走少女一人のため、最終段階を台無しにされちゃうのは困るから、あの二人がそれなりに納得して、宮殿警護をするように手は打ったけどね。
そのために疫病が流行だした集落一つと、犯罪に手を染めた兵を集めた部隊を、もっともらしい理由をつけて全滅させた……
私は、全く罪の無い人達の住む集落一つを、公文書上では『反逆者の村』にしてしまったのよ。
疫病の流行拡大を防ぐために、犠牲になったのとでは……今思い出しても、心が痛むわ……」
「瑠理姉さん……気に病む事はありません。その時の判断は間違っていません。私でも同じ事をしました」
「瑠理よ、今更、帝国の公文書に何の意味があるというんだ。後の

世に正しく伝わればいいんだ。
いずれにしても、アリス・ガードナーなる人物は、もう存在していないわけだしね」
「はい、でも少し寂しいです。
この計画が立案された十年前、忍女の私が生まれて初めて名乗った『アリス・ガードナー』と言う名前が……存在が消えてしまった訳ですから……」
「今のお前には『二守瑠理』という神国天ノ原の名があるじゃないか。
それとも不満かな」
そう言うと帝は瑠理を抱き寄せる。
「不満はありませんわ、うふ。帝が抱きしめて下さるなら、あたいはそれで満足ですわ、ふふふ」
「ふふふ……ずるいですわ、瑠理姉さん……うふふ……あたしも、抱きしめて下さい……ふふ」
「ですからお二方、表のままでお願いします」
「どうも駄目ね……気分がハイになってくると、抑えきれなくなっちゃうわ、うふ」

こうして帝と天才姉妹の熱い夜は過ぎていった。

一夜明け、俺達魔法使いの四人は、帝との会談を行うため、用意された場所に向かった。
予定の時間より少し早くに到着し、帝が現れるのを待った。
「天ノ原の近衛兵達は、警護に立たないのですか？」
辺りを見渡したヘリオが口を開いた。

「神国では、いつもこんなもんだけど」
「僕達には考えられないよ、ねえアリエラ」
「……扉ごとに立っている近衛兵がいない……うそだ！　どこに消えたの？　お願いだから出てきて……アリエラは……困ってます」
アリエラは幻と闘っているようだ。
「俺もついこの前知ったんだけど、帝国の主君の代替わりは、きな臭い話が多いようだね。対して神国の帝は今まで全員が、自ら引退して代替わりしてるんだ。持っている権力や権限が違うんだろうね。だから……とは言わないけど、わりと開かれているんだ」
俺達がそうこう話しているうちに予定時間を回り、少々気になり出したところで帝が姿を現し、会談が始まった。
主たる内容は、ヘリオ・ブレイズ、アリエラ・エディアスの処遇である。
帝は当然、神国軍に入る事を強く進めた。これに対して、ヘリオ・ブレイズは概ね了承する。
その一方、アリエラ・エディアスは決めれないようである。魔法使いであり、強大な力を持ってはいるが、まだ十四歳の少女である。
戦争中は自らが持つ力のため、仕方なく軍に身を置いていたのであろう。
その事を知ってか知らないでか、帝も答えを急がなかった。
そして当面の間、俺と鈴音が身柄を預かる事になった。
宮殿開門から一ヶ月が過ぎると、三砦の戦闘も完全に終わり、旧帝国領のほとんどが、神国天ノ原の統治下となった。
今の俺達の仕事と言えば、時々旧帝国の残党が引き起こす、反乱まがいの騒ぎを鎮圧する程度となった。

策略　１８（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございました。
前書きにも描いたように、ようやく第二部の最終話となりました。
主たる内容は薄く、余分な話はたっぷりと、気づいたら予定の倍近いものとなってしまいました。
なにぶん薄っぺらな内容ですが、感想など頂けたら幸いと思います。
次回より新展開を迎えるのですが……何かと不安がつきまとっております。

狗と呼ばれて　1

長きに渡る戦時中、神国、旧バルドア帝国ともに領土内において、大きな戦闘は幸いにもなかった。

特に、帝国屈指の参謀アリス・ガードナーを名乗った二守瑠理と、神国最高の司令塔、社守静軍師が、兵の運用を任された頃から、戦線はこう着し戦域は徐々に縮小していった。

終戦のかたちまでわかっている二人にとっては、戦後の復興までを見越した兵の運用を心がけ、悪戯な戦火の拡大を防ぐ事が最重要課題であった。

その甲斐もあって、敗戦国である旧バルドア帝国においても、戦後の復興作業のスピードは速かった。

しかし、酷い話でもある。

双方の兵隊が自国の勝利を信じて闘い、そして多くの命が散ったこの戦争が実は、出来レースとして行われていたわけである。

この事を知っているのは、天命ノ帝、瑠理、静、そして忍大将音無道進の四人である。

結局この戦争は、このわずかな者の掌の中で動いていた事になる。

決して他言できない事実である。

とは言っても、この戦略がなければ戦争は更に長引き、戦火は拡大し、戦闘による被害は双方かなりのものになっていただろう。そう言う意味では、この戦略は正しかったとも言えよう。

神楽や鈴音も本来なら、このシナリオの主人公として、真相を知る権利はあった。だが魔法使い同士「お人形を通じて、相手の心の

声が伝わる」という特性があるため、知らされる事はなかった。
終戦当初は統治体制の変化に混乱していた旧帝国領民たちも、瑠理や静をはじめとする神国頭脳集団が素早く打ち出した対応策により、時間の経過とともに落ち着きを取り戻した。

そして終戦から半年程が経ち、完全といかないまでも、ほとんどの者が平穏な生活に戻っていった。
ただ残念な事に今でも、旧帝国残党による反抗戦が、小規模ながら行われている。

反抗戦の鎮圧が一段落した俺達は、いったん本国に戻った。
そんなある日の事であった。

「アリエラは決めまし・タ！　軍に入って、怖い鈴音姉さんの下で働きま・ス！」

突然、俺の軍務室に入ってきたアリエラが、何の前置きもなく言い出した。
それは彼女が怒っている時に使う、語尾を強調する独特の言葉遣いであった。

（俺なんか言っちゃったか？　アリエラが怒るような事はしてないし……ヘリオか？
でもアリエラ、怖いって……鈴音が知ったら……俺も怖くなってきた……）

アリエラ達が神国に来た時に、帝から神国正規軍に入隊を勧めら

れたのだが、その時アリエラは返事をしなかった。それ以来、俺達は返事を強要した事はない。それどころか、話題にすら出した事がなかったほどだ。
軍に携わる事を拒否していたようにも思えるそのアリエラに、どんな心境の変化があったのか、まさか今まで返事に悩んでいたとも思えない。

「アリエラ、どういう心境の変化なんだ？
それとも、ヘリオに何か言われたのか？」
俺はアリエラの唐突な申し出に、問わずにはいられなかった。

「心境の変化もなにも、何となくなんで・ス！　それにヘリオ先輩は関係ありませ・ン！
アリエラの気が変わらないうちに、手続きを済ませて下さ・イ！」
「何となくって……手続きはすぐ出来るけど、そんな理由でいいのか？　なんだか怒ってるみたいだし……」
「いいんで・ス！　怒ってませ・ン！　さっさと手続きを済ませて下さ・イ！」
「わかったから、騒がないでくれるか。
書類作成が一段落したら、大石原総長のところに行こう。それでいいだろう」
アリエラに別の理由があるのは何となくわかっていたが、俺はそれ以上追求はしなかった。
とは言ったものの……軍務関係の書類や報告書の作成しているため、部屋は静まり返っている。

……

正面には不機嫌そうな顔をしたアリエラが座っており、俺の仕事に区切りがつくのを、待ちわびるかのように、黙って見つめている。

俺が書類から目を離し、頭を上げると嫌でも視線があう。するとただでさえ重苦しい空気の重圧が増していく。堪り兼ねた俺は話しかける。

「アリエラ、どうも見られていると、はかどらないのだが……」
「じゃあ、アリエラの用事を先に済ませてくれませんか」
「でもな……この書類も、できるだけ早く大石原総長に提出したいから……そうだ！　鈴音を呼ぼう。うんそれがいい。あいつは書類仕事が速いから、きっと終わっているだろう」
「あっ、いえ鈴音姉さんは……」
「何だアリエラ、怯えているのか？　おかしな事をしなければ、鈴音も怒らないよ」
「お、お、怯えるなんて……アリエラが怯える訳ないじゃないですか。そりゃ、ちょっとは怖いですけど……あっいえ、そうじゃなくて、鈴音姉さんにご迷惑をかける訳には……」
「なんだ、俺なら迷惑かけてもいいんだ」
「いえ、そう言う意味でも……」
「大丈夫だよ。この書類を片付けるのに、どのみち鈴音を呼ぼうと思っていたから。
あいつもそれを織り込み済みで、仕事を片付けているよ」
そう言うと俺は闇姫を呼ぶ。

『神楽君、おっはよぉ』
「闇姫、鈴音を呼んできてくれるか。『アリエラも待ってるよ』って」
『りょおかぁい』
そう言うと闇姫は、嬉しそうに部屋を出て行った。そして再び部屋は静まり返った。
「アリエラ、ところで明姫は？」

「お部屋でお留守番です」
「ふーん……」
（……会話が続かねえ……）
正面に座るアリエラは先ほどとは違い、ややうつむきその態度はおどおどしている。
その時、扉を叩く音が響く。
コンコン
「兄さん、入りますよ」
「ひっ」
鈴音が入って来る姿と同時に、アリエラの引きつる様な表情が俺の目に映った。
「おはよう鈴音、朝から悪いね。ちょっと書類を手伝ってくれるか？」
「言われなくてもわかってます。そのつもりでした。
あらアリエラちゃんも早くから、兄さんに呼び出されたの？」
「ひっ、いえ違います鈴音姉さん。アリエラは別に用事があったので……」
「そう、その用事が何だったかの前に……私が話しかけると怯えるその態度、ぼちぼり何とかならないかしら？　ちょっと気分的にもね……おわかり」
「ひっ、ひえっ、ご、ごめんなさい。許して下さい。アリエラが悪かったです」
「ほらまた……それって本心からかな、それともわざとやっているのかしら。
これじゃ、私がアリエラちゃんをいじめてるみたいじゃない。そ

う思わないアリエラちゃん」
「鈴音さん、それっていじめているようにしか見えませんが……とにかく、それ怖いからやめましょう」
「ちっ……兄さんが言うならしかないわね」
俺はあまりに怯えるアリエラが可哀想になり、助け舟を出した。

「で、アリエラちゃんは兄さんに、どういった御用でしたの」
「軍に入りたいそうだ」
「えっ、どうしちゃったのアリエラちゃん」

『それが俺には「何となく」としか、答えてくれないんだ。鈴音にならと思ってね』
『わかったわ兄さん、もう一度脅しをかけてみるね……ふふ』
『社守軍師ですか』

「鈴音姉さん、いえ……何となくなんです」
「アリエラちゃん、その理由は本当の事なの？　そんな理由で戦場に立って、命のやり取りをする訳なの？　アリエラちゃんは人の命を、何となくで奪えちゃうんだ」
「ひっ、そ、そんな事はありません。
アリエラだって、今まで何人もの人の命を奪って……許される訳でもないのに、何度も何度も謝って……でも、一度だって、何となくなんて……」
「でも不思議よね。今回は『何となく』で、軍に入隊しちゃうんだ。しかも今から闘うのは、アリエラちゃんにとって、今まで味方だった人達よ。
私はアリエラちゃんが、本当の理由を言ってくれないのなら、軍に入るべきではないと思うわ。
確かに軍に入隊する理由は、人それぞれよ。
親の後を継いでとか、食べるためにとか、それこそ中には合法的

に人を殺せるから、なんて言う人もいます。もっとも、そんな人は長生きできないのが世の常なんですが……でもね、何となくが理由で入隊した人は、今までいないと思うわ。
そもそも『何となく』と理由を言う人は、『何となく』の後ろに何かが付くと思うの。例えば『何となくかっこいい』、『何となくやってみたい』なんてね。で、突き詰めれば、後ろにつく言葉が理由になってるのよ。『何となく』は照れ隠しみたいなものかしら。
だからアリエラちゃんも『何となく』の後ろに何か付くと思うのよ」
少しの沈黙をおいてアリエラが答え出した。

「なんだかアリエラ自身、恥ずかしく思えたの。だって、前は軍でお仕事をして、報酬を頂いて、それで生活していたの。
でも今は、何もしていないのに、毎日食べる物に困らないし、お部屋もある。それにお小遣いだって……そういう事がなんだか無性に恥ずかしく思えてきたの」
「アリエラ、勘違いしちゃ駄目だよ。それは、この神国では当たり前の処遇なんだよ。
ここでは『子供は国の宝』と言われているんだ。だから子育ての第一責任は当然生みの親にあるけど、国は第二責任者として、子供を育てる責任を負っているんだ。
だから、アリエラが学生になろうと思えば、いつでもなれるようになっているし、しっかりと教育を受けれるように、生活の援助は行われるんだ。
ただしその制度に甘えていると、手痛いしっぺ返しが待っているけどね。国は生みの親みたいに甘くないんだよ。
もし、さっき言った事が理由で軍に入るなら、俺は学生になった方がいいと思うよ。
軍に入るならその後でも、充分間に合うと思うしね」

「すっごい国だったんですね。帝国では『弱い者は淘汰される』っていう考え方でしたから……」
「それはある意味、強い国づくりになるかもしれないけどね。ただし誰にも負けないカリスマ性を持った者が、統治している時に限っての話だと思う。
だけど今回のような……いや、帝国の歴史を見る限り、その方法があっていたとは思えない。多分三代目辺りで方針を転換しないと駄目だったと思うよ。なにせ三代目以後、まともに帝位継承をできた皇帝はいないからね」
「鋭い分析をするんですね。これじゃ帝国は勝てない訳です」
「はは、これは社守軍師の受け売りだよ。
さてアリエラ、鋭いと褒められついでにもう一つ。
理由はさっきのだけじゃないだろう？
一番の理由は『契約の主旨』がらみだよね。ちなみに俺達はアリエラ達の『契約の主旨』は、社守軍師から聞いて知ってるよ」
「アリエラ達の事、そこまでわかっているんですね。
これじゃ隠し通す意味が無いですね」
「アリエラが素直に話してくれたら、俺達のも教えるよ。軍に入隊したら、この部隊で動く事になるだろうし、背中を預ける事になるからね」
俺がそう言うとアリエラはようやく真の理由を話し出す。

「あの戦争が終わって、アリエラ達魔法使いがこの国に集まった訳よね。
例え新たな国が攻めてこようが、一瞬にして跳ね返せるほどの力が、ここに集結している訳なのよね。
その話を知っている人達は、絶対歯向かってこないと思ったの。
だからアリエラは、もう軍に入って戦闘しなくてもいいと思った訳なの。
でも、デ・モ・ヨ、アリエラ達を知っている人達が、今でも戦闘

をしているのよ。アリエラ達が出て行けば、簡単にペチャンコにされちゃうのが、わかっているのにもかかわらずよ。
最初の頃は、いろいろと理由もあるから仕方ないかなって、我慢をしていたけど……最近になって、アリエラも戦場に出ろって『契約の主旨』が言うの、アリエラが出て行かなければ『闘いが起きる前に止める』ことなんて出来ないって……だから軍に入ろうと思ったの」

「えっと……『契約の主旨』が喋るかどうかは別にして……やっと本音を話してくれたね。明姫を連れてこなかったのも、それを見破られないようにするためだったんだね」
「うん……」
アリエラは小さく頷いた。

「さて『契約の主旨』を話す約束だったね。とりあえず俺は『争いを無くす』、それだけなんだ。単純だろう。
鈴音の番だぞ、約束したんだから話てやれよ」
「いいのかしら、アリエラちゃんが怯えないかしら」
「ひえっ、鈴音姉さん……な、何を言うつもりですか？」
アリエラは、どうにも鈴音が怖いようだ。これで鈴音の「契約の主旨」を知ったらと思うが、嫁と言われなくなりそうなので有りである。

「私の『契約の主旨』はね『兄さんと共に歩み、そして守る』なのよ。だからね、兄さんにちょっかいを出すと大変よ。これを知ってなお、嫁なんて言ったら……ふふふ……」
「ひっ、ひえっ、鈴音姉さん、ご、ごめんなさい。アリエラは二度とそんな事は言いません。い、今までの無作法、ゆ、許して下さい」
涙目で謝るアリエラであった。まあこれはこれで可愛いので有りである。

とりあえずアリエラが、今後いっそう素直になってくれる事を期待しよう。

その後、書類作成を終えた俺達は大石原総長の下に行った。そして、アリエラの入隊届けを正式に提出し受理された。

「本当によかったのか、アリエラ」

「はい、神楽……兄さん」

その言葉を聞いた鈴音の目尻がピクリと上がる。

「アリエラちゃん、嫁の次は兄さんと来ましたか……」

「ひっ、で、でも、鈴音姉さんのお兄さんなんだから、ア、アリエラからすれば神楽兄さんになるんです」

俺としては「嫁」などと、訳のわからん呼び方をされなくなっただけマシなため、黙っていた。

「で……兄さんは何と呼ばれたいんですか？」

「へっ？　何で俺に話を振るかな……アリエラ、その件については、鈴音とよく話し合って決めてくれ」

こうして怪しい火種とともに、既に配属されていたヘリオ・ブレイズに加え、アリエラ・エディアスの、独立魔戦部隊への配属が正式に決定した。

狗と呼ばれて　1（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

狗と呼ばれて　2

アリエラが正式に配属されて、間もなく一ヶ月になる。
現在アリエラは、軍部教育機関で教習を受けている。
もっとも完全缶詰の教習ではないので、こっちに戻ってくると、俺達のところにきては独特の口調で騒ぎ立てる。そうしてストレスを発散させると、鈴音に叱られながらも嬉しそうに戻っていく。このところ鈴音にいじめ……いや、叱られる事に、ある種の快感を覚えたようだ。
それはさておき、スケジュールは一ヶ月ほどなので、終盤の今頃は過酷な野外教習を、可愛らしい悲鳴を上げながら、こなしている頃だろう。

そんなある日の朝、俺が軍務室に行くと、珍しく目覚めが良かったのか、部屋には掃除をしている鈴音の姿があった。

「あ、兄さん、おはようございます」
「おはよう、鈴音。もう来てたのか……早いな」
俺は言葉の合間に思わず「珍しく」と付けそうになったが、機嫌良さそうな鈴音の顔を見ていたいという気持ちが勝ったため、何とか堪える事ができた。

「はい、ちょっと早くに目が覚めましたので……ところで兄さん、彩華姉さんから通信文が、先ほど届きました。
先に目を通させて頂きましたが、ヘリオさんの様子がおかしいようなんです」
そういうと、鈴音の機嫌良さそうな顔が曇った。
残念ながらここまでのようである。

「ん？　通信文には何とあるんだ？」
「えっと……時々惚けたりして、軍務全般に身が入っていないようですね。
今のところ、特に失敗などは無いみたいですが、このままだといずれは……と、彩華姉さんも心配しているようです」
「そうか……ヘリオ本人から直接話を聞かないと何ともだけど……合流できるのはまだ先だな……」
ヘリオは現在、彩華の部隊に一時編入されている。そして神国領バルドア内で、警察任務にあたっていた。

「大きな失敗をする前に、こちらに戻してもらう訳にはいかないのかしら」
「たぶん彩華から同じ様な報告が、大石原総長や社守軍師に届いているはずだから、何らかの対応はすると思うよ」
「なら良いのですが……」
「俺にもヘリオの様子に思い当たる事があるから、後で総長達に報告してくるよ。
もっとも社守軍師なら、そんな事は気づいていると思うけどね」
「兄さん、それはどういう事なんですか？」
「鈴音も、ヘリオの契約の主旨を知っているだろう」
「はい、確か『自分の信じているものを守る』というものでしたよね。それの何が関係しているのですか」
「俺も最初は何とも思わなかったけど、よくよく考えてみると、彼の契約の主旨は俺達三人と決定的に違うところがあるんだ」
俺がそう言うと、鈴音は黙って考え出す。

……

「あっ！　そうか、わかりました兄さん。願いの対象の違いですね」
「そう、それだよ。俺やアリエラは『戦闘』、鈴音は『俺』と、対

象が明確なんだ。それに対してヘリオは『自分の信じるもの』と、対象が不明確なんだよ。
もっと言うと、本人次第で対象が変わってしまうんだ。それこそ昨日と今日で、全く違うものが対象になる事だって、考えられるわけだよ。
もっとも自分が信じるものなんて、コロコロ変わるもんじゃないけどね」
「信じるものか……確かに、そうですね。
今回はそれと逆の事が起きてしまった、という事なんですね」
「そう、ヘリオ本人が帝国の何を信じて守っていたのかは、俺は聞いていないからわからない。
もしかするとそれは、帝国とは全く関係の無いものだったのかもしれない。
いずれにしても彼自身、守るものが無くなってしまって、戸惑っていると思うんだ。
いきなり神国の何かを信じて守るなんて、無理だろうしね」
「何だが辛そうな話ですね。
私達は何かしらの目的があって、この力と契約して、そして使う。その目的が一時的とはいえ無くなってしまった訳ですから……」
「でも鈴音、まだそれが本当の原因かは、わからないけどね。少なくとも何らかの影響はあると思うよ。
ところで闇姫達は何か知らないか？」
今までいろいろ見てきたであろう「お人形」達に、いち早く話を聞けば良かったのかもしれないが……経験上、その返答には何かと不安の多いお二方である。

『神楽君、聞くのが遅いよぉ。黒、危なくへそが曲がっちゃうところだったよぉ』
『そうですわ。神楽様、それに鈴音様も、契約の事をお知りになりたいのでしたら、何はともあれ、それを一番理解している私達に、

尋ねていただければよろしいのですわ』
『神楽君も鈴音ちゃんも水臭いよぉ。黒達は何でも答えちゃうんだよぉ。遠慮しなくていいんだよぉ』
『それは失礼した。じゃあ遠慮なく尋ねるよ。
俺の知る限り今までの歴史上、魔法使いが契約の主旨を達成したり、目的を失ったという話は聞いた事が無い。
そうなった場合どうなるんだ？』
すると二人揃って口を開く。

『そんなのぉ、わからないよぉ』
『それは、わかりませんですわ』

しばらくの沈黙と重い空気が漂う

『……あのですね、お二人さん……何といいますか……契約について何でも知っているのではなかったのでは？』

『黒はそんな事、言ってないよぉ』
『私も言った覚えはありませんわ』

『……ズバリ否定したお二人とも……随分へそが曲がっているように思えますが……』
『神楽君、何言ってるのぉ？　黒は知ってる事なら、何でも答えるよぉ。でもねぇ、さすがの黒でも知らない事は答えれないんだよぉ』
『当然私もですわ。知っている事は理解してますが、知らない事は理解できませんわ』
『えっと……とりあえず、へ理屈はさておき、お二人の歴史にはそう言う事が無かったという事なんですね』
『違うんだなぁ神楽君。黒達はねぇ、契約主と別れると全部忘れちゃうみたいなんだよぉ。

だからねぇ、もしかしたら、そういう事があったかもしれないかもだよぉ』
『みたいって……契約主が変わると記憶が消えちゃうのか？』
『神楽様、そうだといえばそうですが、違うといえば違うのですわ。
朧げながら、前にも同じ様な事があったという記憶はございます。しかし誰といたかとか、その時の契約主は誰だったとかいう記憶は一切無いのです。
そもそも私達自身、延々と受け継がれた体なのか、全く新たに作り出されたものなのか、わからないのです。
今回は気が付くと、黒鬼闇姫、白輝明姫、金剛輝姫、そして私、銀界鬼姫が同じお部屋にいたのです。ちょうどこの執務室とそっくりなお部屋です。
そして、神楽様や鈴音様達に呼ばれるまで、時を過ごしていたのです』
すると鈴音が寂しげな表情で口を開く。

『なんだか寂しい話だわ。
こうして鬼姫ちゃん達と過ごしている時が、契約が終わると忘れ去られちゃうんでしょう。
そして気が付くとお部屋に閉じ込められて、同じ事の繰り返し。……でもそうじゃないと鬼姫ちゃん達は、契約主を失った悲しみを、いつまでも引き摺らないといけない訳よね。それに時の流れと共に、その悲しみが増えちゃうもんね』
『いいえ鈴音様、今までは神楽様が先ほどおっしゃっていた通り、多分契約の主旨が達成できた事は無いと思われます。
したがいまして、それができれば、何かしら違う形となるかもしれませんわ』
「いずれにしても、ヘリオについては闇姫達もわからないという事だね。
やっぱり直接話を聞かないと駄目かな……」

「そうですね、兄さん。
今はこの書類を片付けましょう」
「頼りにしてますよ、鈴音さん」
「私が兄さんに優しいからって、甘え過ぎです」
『そうですよ神楽様。鈴音様は甘えたいんですハッ！』
『鬼姫ちゃん、ここにきて何を言い出すのかしら』
『ごめんなさいです』
こうして俺達は書類を片付けた後、大石原総長の下に向かった。

部屋に通された俺達に、厳しい表情の大石原総長と、普段より一段音量を上げた社守軍師がやり合う姿が飛び込んできた。

「ですから、そこを曲げてお願いしているのです」
「だからと言って社守軍師。あと二週間ほどではないか」
「彼は今、危険な状態と思われます。山神侍大将の報告でも、その兆候は現れております。
一日も早く本国への帰還を指示して下さい。もし聞き届けられないようでしたら、帝から勅命を賜る事も考えております。
決して脅しなどではなく、それだけ重大な問題と思っていただいて、構いません」
「ふむ……」
大石原総長は大きく溜め息をついて腕を組んだ。そして視線を俺達の方に向ける。

「お前達もヘリオ・ブレイズの件で来たのだろう。どう思う？」
「はい、話を全て聞いていた訳ではございませんので、重複する点があるかもしれません。
先ずは、できるだけ早い時期に、充分目の届く範囲に呼び戻す事をお勧めいたします。
彼の契約の主旨は……」

俺は先ほど軍務室で鈴音達と話した事を伝えた。
「……以上の理由により、彼は現在、非常に不安定な精神状態になっていると思われます」
「なるほど、社守軍師と同意見か……よしわかった、帰還させる事にする。同じ魔法使いと軍師が揃って言うんだ、それが最良策と言えよう」
「聞き届けていただきありがとうございます」
社守軍師と俺達は揃って頭を下げた。
すると大石原総長が表情を緩めて口を開く。

「その代わりと言っては何だが、一つ儂からの要望を聞いてくれぬか」
「昔から総長は、ただでは退かないお方でしたから、覚悟はしておりましたわ」
社守軍師が「やっぱり」と言わんばかりに答えた。

「そう身構えなくてもいいだろう。
なに難しい事ではない。ヘリオ・ブレイズの代わりにアリエラ・エディアスを派遣したい」
「大石原総長……アリエラですか……ですが、今は教習中ですし……確かに帝国軍としては動いていたと思います。しかし神国軍としては、全く経験がありません。少し経験を積んだ上での方が、よろしいのではないでしょうか」
俺は少々焦りながらも、遠回しに考え直すように答えた。

「教習もあと二日間で終わる。それに見ず知らずの部隊に入れる訳じゃないよ。　山神侍大将に預ける予定だから、安心して見守ってやれば良いのではないかな」
「まあ、山神侍大将ならアリエラも大人しく従うと思います。
しかし大丈夫かな」

「何か心配する事でもあるのか、天鳥筆頭」
「山神侍大将は警察任務ですよね」
「そうだが、それが何か」
「いえ、取り越し苦労なら良いのですが……これまで帝国の領民達を守ってきたアリエラが、取り締まる側に立つ訳です。
彼女が元々目立たない立場の兵士なら問題ないと思います。しかし、嫌でも目立つ魔法使いだったわけです。つまり『帝国の魔法使いが、終戦とともに神国に寝返った』と、彼女に対する反発が心配なんです。
山神侍大将も守ってくれるでしょう。ですがアリエラはああ見えて、案外繊細です。その……精神的なダメージが気になります。
案外ヘリオ・ブレイズも、その辺りが一番の原因になっているかもしれません」
「神楽ちゃん、過保護ね……ふふ……大丈夫よ……うふふ……アリエラちゃんは、負けないわよ……ふふふ……あたしが言うんだから、間違いないわよ……えへ……」
「えへって……社守軍師、その……根拠がよくわからないのですが……」
「兄さん、アリエラちゃんは大丈夫です。彩華姉さんに預けておけば大丈夫です。
それに兄さんより、よっぽど図太いですよ」
「鈴音も……その根拠が……わかりました。皆さんがそういうなら、お任せします」
「天鳥筆頭、女性陣の説得に応じたか。
ではアリエラ・エディアスは、教習終了翌日より、神国領バルドアにおいて、山神侍大将の下、警察任務に就くものとする。
それとヘリオ・ブレイズについては、直ちに帰還命令を出しておく。以上」
なんだかんだと言われて、結局丸め込まれた感は否めなかったが、

大事に至らずにすみそうであった。
そして俺達は総長の部屋から退室した。

「兄さん、随分アリエラちゃんを心配してましたが、何か特別な理由でもございますのかしら」
「特別な理由って……鈴音さん、なんだか不機嫌そうですが、そういう話題はやめましょう」
「なにさ、案外繊細とか言っちゃって……でもね兄さん、騙されちゃ駄目ですよ。あれは演技みたいなものですからね」
「えっと……鈴音さん、随分と敵対心剥き出しの意見をありがとうございます」
「そうやって言う事自体、既に騙されているんです！　もっともアリエラちゃん自身、演技をしている事に気が付いていないかもしれないわね」
「鈴音さん、言ってる事の意味がよくわかりませんが……」
「兄さん、アリエラちゃんは今、不安なのよ。守ってくれる人がほしいのよ。
前はその役目をヘリオさんが受け持っていた。なんだかんだと言いつつも頼っていた訳ね。
でも今はそれを兄さんに求めているのよ。だからそれを、アリエラちゃんからの恋愛感情と勘違いしちゃ駄目って言いたかったのよ」
「ふっ、何だそんな事か。鈴音、俺を見くびるなよ。
安心しろ、俺には鈴音がいるじゃないか」
「に、兄さん……そんな事、今言わなくても……」
「さ、部屋に戻ろう」

鈴音に言われなければ、アリエラの態度を危なく勘違いをするところであった。少々残念と思いつつ、我ながら上手い事を言えるようになったと思わずにはいられない、部屋までの帰り道であった。

狗と呼ばれて　2（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

狗と呼ばれて　3

ヘリオ・ブレイズの帰還指令が出てから、二日経った日の夕方の事であった。

ドン・ドン・ドン

「はーい、どうぞ」

激しく扉を叩く音に、鈴音が答える。

ドン・ドン・ドン

「鍵は掛けてないですよ、どうぞ、入って下さい」

ドン・ドン

「鈴音、手がふさがっているのかもしれない。開けてやってくれ」

「はい」

快い返事と共に鈴音が扉を開けた。

ガチャ、ドサ……

「キャー！」

自分の方に向かって倒れてくるものに驚き、鈴音は悲鳴と同時に、頭を両手で覆ってへたり込んだ。

それを見た俺は慌てて鈴音に声をかける。

「何だ！　どうした鈴音！」

「に、兄さん……アリエラちゃんが……」

「何だって」
俺は鈴音に近づくと、埃まみれのアリエラが倒れて込んでいた。
「おいアリエラ、どうした。大丈夫か？」
俺はうつ伏せのアリエラを、抱え上げながら仰向けに起こし、そして問いかけた。
するとアリエラはうっすらと目を開き、か細い声で返事をする。
「か、神楽兄さん、す、鈴音姉さん……ただいま教習より……戻りました。
でも……もう駄目かも……神楽兄さんの……腕の中で逝けるなら……アリエラは幸せです」
そういうとアリエラは静かに目を閉じた。そしてその体から力が抜けていった。
「えっ、ちょっ、こらアリエラ、訳わからんこと言ってないで……おい、傷は浅いぞ！」
俺は、抱え上げていたアリエラの小さな体を、そのままお姫様抱っこした。そして鈴音の羨ましがる様な、それとも嫉妬に燃える様な、とにかく複雑な視線の弾が飛び交う中、長椅子まで運び寝かせた。
そのとき一瞬、アリエラが「ニヤリ」と笑ったように見えたのは、気のせいだったのだろう。
「一体何なのでしょう。帰ってくるなり騒がしいわ」
冷静な判断を取り戻した鈴音から、厳しいツッコミが入り出す。
「落ち着けよ鈴音、今は静かじゃないか」
「兄さんはアリエラちゃんに、甘過ぎです！
この娘はこのまま放置です。さっさと仕事を片付けますよ」

俺は鈴音に言われるまま、アリエラをそのまま寝かせて、仕事に戻った。
すると五分もしないうちに、紙をめくる音と、ペンを走らす音だけが響いていた部屋に、アリエラの可愛らしい寝息が、静かに響き始めた。

「随分疲れれてたようだな。本格的に寝ちゃったよ」
「私も覚えがありますわ。あの野外教習は辛かったし……魔法使いだからとか、なんとか理由をつけられて、他の人の五割り増しの荷物を背負わされた覚えが……今考えると、いじめよね」
「俺は鈴音の荷物を半分持ってやれって、重量を増やされたな。アリエラもやられたのかな」
「ところで兄さんは、またアリエラちゃんにやられましたね」
「えっと、やられましたねって……」
その時俺の脳裏にアリエラの「ニヤリ」がよぎった。

「あっ！　あれか……」
「私は兄さんを見くびっていた訳ではないですし、最初に慌てたのは私ですし、今回は許して差し上げます。
ですが、一つ条件をつけます」
「なるべくお手柔らかにお願いしますよ」
「私を……なさい」
突然声が小さくなった鈴音は、耳まで桜色に染めてうつむいた。

「はい？　よく聞こえませんでしたが」
「私を……こしなさい」
「鈴音さん、ですからはっきりとお願いします」
「あぁんもう！　鈍いわね！　おひめさまだっこ！」
「わかりましたよ、お姫様。ところでそれは、今ここでするのです

か」
「そ、それは……後でお知らせします。とにかく私が望む時です」
「了解です。
ところで、アリエラはこんなんで大丈夫かな」
俺は、教習で疲れきったアリエラが、彩華のいるトゥルーグァに、無事に辿り着く事ができるのか心配だった。

「兄さんは、まだアリエラちゃんの事が気になるんですか」
「だって、明日から彩華のところに行くんだろう。三日間歩く訳だよ、こんなんで大丈夫かなって思ったんだ。しかも鈴音が同行するんだろう。
途中で『おんぶして』なんて言い出しそうだよ」
「それは困るわね。どうしましょう兄さん」
「今から大石原総長に相談してみるよ。
とりあえず鈴音は、アリエラが起きるかもしれないから、ここにいてくれ」
「わかりました」
部屋を出た俺は、既に一般業務も終わり、職員のほとんどが退所をして、静まりかえっている庁舎内に、足音を響かせながら小走りで、大石原総長の部屋に向かった。

総長室に着いた俺は、扉脇の札で大石原総長が在室なのを確認し、扉を軽く叩いた。

コンコン

「……どうぞ」
中から秘書官の、いつ聞いても無愛想な返事が返ってくる。
それを確認した俺は扉を開けて中に入る。

「天鳥神楽筆頭魔術師です。
至急、大石原総長にお話したい事がありまして、取り次いで頂けませんか？　明日のアリエラ・エディアスの件と言って頂ければ通じると思います」
「……しばらくお待ちを」
俺を一目した秘書官が、無愛想にそういうと席を立って、総長の執務室に入っていった。
すると、すぐに扉が開き、秘書官に呼ばれた。

「……どうぞ」
そう一言いうと、秘書官は自分の席に戻った。
そして俺は執務室に入り扉を閉めた。

「失礼します。
遅くに申し訳ございません」
「アリエラ・エディアスの事と聞いたが、どういった事かな」
「先ほど、アリエラが教習より戻ってきたのですが、疲労困憊の様子で明日よりの任務にも、支障をきたす可能性があります。
できれば二、三日、いえ一日でよろしいのですが、休みを取らして頂けないかと、お願いに伺った次第です」
俺がそう言うと、大石原総長は腕を組み、目を閉じ、しばらくの後に口を開いた。

「今は戦時中や緊急時と違って一応平常時だ。時間にもゆとりがあるのでな。
アリエラ・エディアスが回復してからトゥルーグァに向かうがよい。同行する鈴音も共が疲労困憊では辛かろう」
「お気遣いありがとうございます」
「しかし神楽、お前は本当に甘いな。
この件は、アリエラのためか、それとも鈴音のためか……まあ深

くは追求せぬが、鈴音の気苦労が手に取るようにわかるわい」
「大石原総長、言ってる意味が……はは」
「神楽よ、あまり鈴音に気苦労をかけるなよ。
とは言っても無理かのう。可愛らしい女子に囲まれておる上、お前は若いからな。今のうちに存分に楽しんでおけよ」
「あの……楽しんでとかって……周りで見ている人達の事ですよね。
とりあえず、今日のところは……失礼します」
ばつが悪くなった俺は総長室を後にして、再び静まり返った庁舎内に足音を響かせながら、鈴音の待つ軍務室に戻った。

「ただいま、鈴音。了解とれたよ」
俺は総長室での話を、組み立て直して鈴音に話した。

「兄さん、お疲れさまでした」
「ん、結局アリエラは目を覚ましていないか」
「どうしましょう」
「まあ、無理矢理起こすのも可哀想だし、今晩はここで過ごすか」
「はい、喜んで」
「って鈴音さん、居酒屋じゃないのですから」
「とりあえず、晩ご飯を用意しますね」
「ありがとう、腹ぺこだよ」

食事を済ませた俺達は、交代で風呂にも入り、就寝準備を整えた。

「兄さん、約束覚えていますか」
「抱っこの件か？」
「はい」
「どこまで運ぶんだ」
「そんなの決まっているじゃないですか……うふ」
「でも、アリエラが起きるぞ」

「大丈夫です。アリエラちゃんは決して朝まで起きませんわ」
「……鈴音、何かしたのか？」
「あら、私はなぁんにも、していませんわよ。
そんなことより……えへ」

こうして俺達の怪しい夜は更けていった。

朝を迎え、俺が目を開けると、既に鈴音が機嫌良さそうに身支度をしていた。それを見た俺は胸を撫で下ろした。

「おはよう、鈴音」
「あ、兄さん、おはようございます」
「そういえば、アリエラはどうなんだ？」
「先ほど見てきましたが、全く動いていません」
「それって、動いていないではなくて、動けないのでは……まあいいや」
俺は起き上がり身支度を整えると、軍務室の長椅子で寝ているアリエラの様子を見に行った。
そしてアリエラの顔を覗き込むと、既に目を覚ましているようだ。ただ鈴音の言う通り、全く動いた形跡がない。

「おはよう、アリエラ。体の調子はどうだい」
「お、おはようございます、神楽兄さん。でも、デ・モ・ヨ、動けませ・ン。
アリエラが言う事を、アリエラは全く聞いてくれませ・ン！　どういうことカ・シ・ラ」
「教習で、かなりしごかれたようだね。
教習中は緊張とかで案外気にならないけど、終わって緊張の糸が途切れると、一気に疲労が押し寄せくるからね。
でも、すぐに動くようになるさ。少しの辛抱だよ。なにかあった

ら、俺か鈴音に言うといいよ。それとも医務室に行くか？」
「お気遣い、ありがとうございます。神楽兄さん。でもアリエラは、大丈夫です」
「それならいいけどね。
そうそう、早ければお昼頃にはヘリオ・ブレイズが戻ってくると思うよ」
「……そうですか……でも、予定より早いですね」
「彼は今、精神的に疲労しているみたいなんだ。その報告を受けた総長達が、早めに戻した方が良いと判断したようでね」
「やっぱりですか……」
「やっぱりという事は、予想していたんだね。
それでアリエラは知っているのか？　彼が守っていたものを」
そう言いながら俺は、床上へ直に座った。するとアリエラは、首をまわし頭を俺に向けて、話し出す。

「アリエラも、ヘリオ先輩から直接聞いた訳ではないので、確実ではないのですが……」
「よかったら教えてくれないか」
「構いませんけど、神楽兄さん。一つお願い……」
そこまでアリエラが言ったところで鈴音が軍務室に入ってきた。

「ん？　どうしたアリエラ、お願いって」
「……ひっ！　何でもありません」
「あらアリエラちゃん、おはよう。お話ができるようになったのね。私に構わず続けて下さいね」
鈴音は突き刺すような視線で、アリエラを牽制してそう言うと、手際よく軍務室の掃除を始めた。とは言っても、アリエラの言葉を聞き逃さないために、しっかりと聞き耳は立てているようである。
「さてアリエラ、続きをお願いするよ」

「あ、はい、えっと……ヘリオ先輩はあんなヘロヘロに見えて、実は正義感がすっごく強いんです。
いつも困らせているアリエラなのに、守ってくれるんです。だから最初は、アリエラだと思っていたんです。
でも、デ・モ・ネ、違ったみたいなんで・ス」
「確かにね。アリエラを守る事だけなら、よかったんだけどね」
「ヘリオ先輩は、個人というよりもっと大きなものを、守りたいと思っていたみたいなんです」
「それは皇帝やその一族っていう意味かい」
「いいえ神楽兄さん。ヘリオ先輩はバルドア帝国そのものを守りたかったと、アリエラは思っています」
「それは俺も予想していた事だけど……確かにそれを平然と言えるだけの力を、俺達は持っているしね」
「でも、デ・モ・ヨ……ヘリオ先輩が一番信じるからこそ守りたかった国に、最後は裏切られるような形になって……しかも、シ・カ・モ・ヨ、それで結果として国が無くなっちゃった訳だし……それに、ソ・ノ・ウ・エ、敵だった人達に助けられて……
でもその神楽兄さんや鈴音姉さんのおかげで、今では前と同じように生活できてます。だからこそヘリオ先輩だけじゃなくて、アリエラも複雑なんです」
そう言うとアリエラは、俺の方に向けていた頭を戻し天井を見つめた。その目尻からは一筋の涙が流れ出していた。

「その気持ちがわかるとは言わない。だけど、俺も複雑なんだ」
俺はその涙をハンカチで拭き取りながら声をかけた。

「神楽兄さん、ありがとうございます」
「そうだ、アリエラ。彩華のところに行って警察任務にあたる、派遣命令を聞いているだろう」
「きょ、今日出発ですね……ひえっ！　アイタタタ……でも、早く

しないと鈴音姉さんに……」
アリエラが、まだ自由にならない体を起こそうとしたが、まだ無理のようだ。
「アリエラちゃん、時間はあるから無理しなくて良いわよ」
「ひっ！　鈴音姉さん、ごめんなさい。い、今すぐに準備します」
いきなり鈴音に顔を覗き込まれたアリエラは、慌てて起き上がろうとしたが、どうにも無理なようだ。
そして今にも泣き出しそうな顔と、「お願いですから叱らないで」と懇願するような目で、鈴音を見つめた。
「だから大丈夫よ。二、三日延期してもらいました」
「鈴音姉さん、ありがとうございます」
「私じゃないわよ、兄さんよ。
昨日のアリエラちゃんの様子を見て、それはもう心配で心配で、堪らなくなったのでしょう。
アリエラちゃんが寝付いたあと、私をほったらかしにして、大石原総長のところへ延期の申し出に行ったよ。ねえ、兄さん」
「何だか言葉の端々に棘を感じるぞ。
まあそう言う事だ、二、三日ゆっくり休みなさい。
それにヘリオも帰ってくるから、話を聞いてやってくれ」
「神楽兄さん、鈴音姉さん、本当に、ありがとうございます」
アリエラはそう言うと、先ほどまでの泣き出しそうな顔から一変、笑顔を浮かべ、なにやら軽やかな歌を口ずさみ始めた。
「ところでアリエラちゃん。教習が終わってから、お風呂にも入らずにここに来たんでしょう」
「あ、はいそうですが……教習が終わって嬉しくてつい……」
「そんな埃まみれで汗臭い女の子は、兄さんに……嫌われますよ。
それに服や下着だって汚れいるんでしょう……はしたない……」

「ひっ……」
アリエラは短い悲鳴を上げ、自分の匂いをかぎ出した。そして俺の方を向くと一言いった。
「に、臭いますか？」
「えっとアリエラさん、そう言う事は異性に聞かないで下さい」
すると鈴音が手を叩きながら割って入ってきた。
「はいはいアリエラちゃん、はしたない事はやめて、今から私とお風呂に入りますよ」
「ひえっ！　な、何で鈴音姉さんとですか」
「アリエラちゃん、あなた一人じゃまだ動けないでしょう。それとも私とじゃ嫌かな？　兄さんとなら入るのかな？」
「ひっ！　ご、ごめんなさい、そんなつもりで言ったんじゃないんです」
「わかりました。じゃあ兄さんは、アリエラちゃんをお風呂場まで連れて行って下さい。
私は着替えを用意したら、すぐに向かいます。
それからアリエラちゃん、お風呂に入ったら、体をほぐしてあげますからね……ふふふ」
「ひえっ！　鈴音姉さんそれは……それだけは……許して下さい……お願いします」
まだ午前中という事もあって、風呂場には鈴音とアリエラの二人だけである。
アリエラの移動役を鈴音から仰せつかった俺は、時々アリエラの怪しい悲鳴が聞こえてくる外の廊下で、鈴音に呼ばれるまで待っている。
しばらくの後、鈴音に呼ばれ風呂から上がって、グニャグニャに

なったアリエラを抱え、俺は軍務室に戻った。
アリエラは鈴音がほぐした甲斐あって、多少は楽になったようだ。しかし、まだ動き回る事はできないようだ。

「アリエラちゃん、どうかしら、ちょっとは楽になったかな」
「は、はい」
「それはよかったわ。じゃあ今晩もお風呂でほぐしてあげるわね」
「ひっ！　そ、それだけは、ご勘弁を……許して下さい」
「フーン、そうなんだ、遠慮するんだ。
まあいいわ、どうせアリエラちゃんは一人じゃ動けなさそうだから、されるがままよね……うふ」
鈴音は、小悪魔じみた目つきでアリエラ睨み、一言いった直後、俺の方に向き直し一言付け加える。

「兄さん、アリエラちゃんって、本当に可愛いわね。
私、見ていると、どうしてもいじりたくなっちゃうわ……ふふ」
「だから鈴音さん、それ怖いからやめましょうね」

そして俺達は軍務室でヘリオ・ブレイズの到着を待つ事にした。

狗と呼ばれて　3（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます

狗と呼ばれて　4

コン……コン……

「ヘリオ・ブレイズです。ただいま戻りました」

重苦しく扉を叩く音と共にヘリオ・ブレイズが戻ってきたのは、午後三時を回った頃であった。

「どうぞ、入って下さい」

鈴音が声をかけると、ゆっくりと扉を開けた彼は、うつむき加減でその表情も暗く、引け目を感じているようである。

やはり任務を途中で打ち切られ、帰還指示が出た事を気にしているのだろう。先に帰還報告をするために寄ったであろう司令部でも、何か言われたのかもしれない。

「そんなところで扉を開けっ放しのまま立ってないで、早く入って下さい」

扉のところで、いつまでも立っているヘリオを見かねた鈴音が、もう一度声をかけた。

「鈴音さん、すみません。では遠慮なく……」

「遠慮なくって……ここはヘリオさんのお部屋でもあるんですよ」

「そ、そうですね。すみません……」

ようやくヘリオは扉を閉めて室内に入ってきた。

どうにも、この度の事が気になっているのか、必要以上に他人行儀になっている。

自信なさげなおどおどとした視線で、俺と鈴音を一目した後、重

く口を開く。

「此の度の件、天鳥神楽筆頭魔術師をはじめ皆さんには、大変ご迷惑をおかけしました事を、先ずは、お詫びします。

本当にすみませんでした」

入室したヘリオは改まって、謝罪し深々と頭を下げた。

「ヘリオ・ブレイズ、頭を上げなよ。俺達は迷惑とは思ってないよ。なにより、今回の一件はある意味起きるべくして、起きたと思っている。

それがある程度わかっていたにもかかわらず、未然に防げなかった俺にも責任があるしね。

詳しい話は後でも良いけど、とりあえずかいつまんでで良いから、理由を聞きたいがどうかな。

それとも、しばらく休んで、落ち着いてからにするかい。俺は構わないけどね」

「お気遣いありがとうございます。僕は大丈夫です。

ところで……アリエラはどこに……まさか何かをしでかして……」

俺の言葉を聞いて頭を上げたヘリオは、左右を見渡し、姿の見えないアリエラが心配になったのか尋ねてきた。

「ヘリオ先輩、失礼で・ス！」

「えっ！」

アリエラの声と同時にヘリオの体が「ビクッ」と動く。

彼の背後の長椅子で、横になっていたアリエラが、彼の視界に入らなかったのだろう。

その死角から、突然アリエラの声が聞こえて驚いたのか、引きつった表情に変わったヘリオが、声の出所に視線を向けた。

「ア、アリエラ、居たんだ……」

「居たんだじゃないんで・ス！　でも、デ・モ・ヨ、体は痛いんで・ス！
だけど、ケ・レ・ド・モ、アリエラが小さいからって、見えないほど小さいのカ・シ・ラ！
しかも、シ・カ・モ・ヨ、何かしでかしたって、どういう事です・カ！　アリエラはヘリオ先輩じゃないんで・ス！
うぅぅ……痛い……」
「大丈夫か、アリエラ……」
アリエラは大声を出すだけで体が痛むらしく、おかしなうなり声をあげた。そんな彼女を覗き込んだヘリオは、引きつった表情から一変、心配げな表情に変わった。そして俺に理由を尋ねてきた。

「神楽さん……アリエラはどうしちゃったんですか？」
「あれだよ、教習だよ。昨日終わって戻ってきたんだ。緊張が途切れて、一気に疲れが出たんだと思うよ」
「なるほど……あれは僕も辛かったですよ。特に最終の野外教習は、心身ともに応えました」
「俺や鈴音もそうだったよ。
ところで、帝国では教習はどうだったんだ。あったんだろう？」
「一応ですね。形だけのようなものでした」
「形だけか……なるほどね……」
俺はそう言うと、ちらりと鈴音を見た。

「あら兄さん、何か言いたいようですね」
「えっ、あ、いや、何でもない……」
アリエラには、鈴音のようなたくましさが無いと、俺は思っていたのだが、決して口には出せないと悟った。

「帝国では、上になればなるほど、泥臭い事を嫌う……いや、でき

ない雰囲気になってしまうのです」
「それって、階級が上がると訓練とかしなくなるっていう事か」
「全くとか全員ではないのですが、はっきり言うと、そうです。
多分特権階級とか、貴族という言葉に原因があったと思います」
ここで私はそんなんじゃないと言わんばかりにアリエラが口を挟んできた。

「でもよ、デ・モ・ネ、アリエラは真面目にちゃんと訓練を受けていまし・タ！　毎回お休みはしなかったで・ス！」
「アリエラ、それは僕も知ってるよ。
だけどね、訓練そのものの質が違うんだよ。
そもそもアリエラは、訓練が終わった後に寝込んだ事無かっただろう」
「うっ……確かにそうだけど、それは……ここの教官が意地悪だったんで・ス！　それに、しばらく激しく動いていなかったから、体が鈍っていただけなんで・ス！」
「アリエラちゃん、その辺にしておかないと、また体が痛くなっちゃいますよ」
「ひっ！　わ、わかりました鈴音姉さん」

「さてアリエラも落ち着いた事だし、ヘリオ・ブレイズ、少し話てもらえるかな。無理にとは言わないけどね」
俺が言うと、ヘリオは重そうな口を開き、ゆっくりと話を始める。

「はい……実際ショックだったんです。
僕自身、ある程度予想はしてはいたのです。でも……それでも、面と向かって言われると……思っていた以上のショックだったんです。
今まで、僕自身を必要としてくれていると思って、守ってきた人達に……」

「一体、何と言われたんだ？
これはアリエラにも関係がある話なんだ。本来ならヘリオと入れ替わりで、アリエラが派遣される事になっていたんだ。
今ここにいるのは、さすがにこの状態では無理だからね、二、三日延期してもらったんだよ」
「そうだったんですか……アリエラ、ごめんな……」
「ヘリオ先輩、謝らなくてもいいんで・ス。どのみち派遣される訳だったんだから、早いか遅いかの違いだけなんで・ス」
「アリエラは優しいな。そう言ってくれると僕も気が楽になるよ。
それにアリエラは僕より、ずっと強いから大丈夫だよね」
「で、ヘリオ・ブレイズ、誰になんて言われたんだ。
話の内容からすると、裏切り者とか言われたのかな」
「平たく言えばそうです。
彼らは『狗』と……一部の領民や兵士達ですが……もともと帝国に対する愛国心が強い人々だと思います。
彼らは僕達の起こしたあの騒動で、帝国が瓦解していく中、上手い事立ち回り、神国に取り入ったと思いるのです。
その上、神国の警察として、旧帝国領民を取り締まっているわけですから……」
ヘリオの言葉を聞いたとき、俺の心の何かに触るものが沸き上がり、声を荒げた。

「ヘリオ・ブレイズ、お前は間違った解釈をしているぞ！
お前はあの騒動の首謀者なのか？　違うだろう！
お前やアリエラは、領民達と同じく巻き込まれた一人であるのだろう。
ましてや、議会の連中や文官達みたいに、要領よく立ち回ったわけでもあるまい。
その上警察をやっているからだと、帝国には警察が無かったのか？　それとも少しでも態度がおかしい奴、ちょっとでも反抗的な輩

を、逮捕しまくっていたのか？
……あんまり嘗めた事、言ってんじゃないよ！」
（ヤバッ……頭で考えるより口が動いちゃったよ……こりゃ言い切るしかないな）
「……守ってきた人々に『狗』って言われてショックだったてか……気持ちはわからんでもなけど、今更その程度のことで任務が手に付かなくなるくらい、落ち込むとは思えないね。
確かに、顔をあわす民衆のほとんどから言われれば、落ち込みもするだろう。
でも実際は、おかしな愛国心を持つ一部の輩に言われる程度なんだろう。
そいつらは、事あるごとに旧帝国領民のナショナリズムを煽って、反抗運動を拡大しようとしている輩なんだろう。
もっと言えば、そいつらは旧帝国を崩壊に導き、そして今はこの神国に対して反抗戦を行っている、あの首謀者達に繋がっている連中だろう。
ヘリオだってわかっている事だよね。
そんな輩に裏切り者扱いされたとしても、落ち込んだり凹むとは、到底思えない。
それは本当の理由であるはずがない。
全くいい加減にしろって言いたいよ。
アリエラもそうだったけど、ヘリオも一緒だよ。完全に信用しろとは言わない。でも、もう少し心を開いてくれても良いんじゃないか。
……今回の件、契約の主旨がらみなんだろう」
静まり返った部屋に俺の荒げた声が響き、そして残響が消えると、

部屋の空気は固まっていた。
ヘリオはもちろんの事、アリエラ、そして鈴音まで、まばたき一つしないで、俺を見て固まっている。
どうやら少々きつく言い過ぎたようである。
日頃見せた事のない俺の素顔を、一つ披露してしまった。しかし鈴音まで固まるとは思わなかった。

「ぼちぼち答えてくれないかな、ヘリオ・ブレイズ」
俺は改めて返事を迫った。
先ほどまでは、「落ち着いてからで」などと言っていたのだが、建前の理由を聞かされて、歯止めがかからなくなっていたようだ。

「先ほどはすみませんでした。
確かに神楽さんの言う通り、契約の主旨に関係しています。
だからと言って、先ほどの話は全くのデタラメというわけでもありません。
今回の一件は、契約の主旨と先ほどの話が、連動して引き起こしてしまったようなものです」
「先ほどは俺もきつく言い過ぎたようで、すまなかった。
やはり契約の主旨がらみか……アリエラにも一応聞いてはみたが、何を守っていたのかまでは、知らないようだった。
なあ、せめて戦場での相方には……あっ、俺が口を出す事でもないか……」
突然思い出した、偉そうに言っている俺が鈴音と契約の主旨を交換してから、まだ一年も経っていなかった事を……そして中途半端に俺がそこまで言うと、ヘリオが語り始めた。

「当然神楽さんは、僕の契約の主旨を知っていますよね。
『自分の信じるもの』なんて自己中心的で、ちょっと恥ずかしいのですが、前は帝国というものを守っていたんです」

「その辺りまでは、俺もアリエラに聞いたのだけれど、あまりにも抽象的過ぎて、何と言うのか、想像できないんだ」

「確かにそうですね。

僕のいう帝国というのは、例えば領民であったり、同じ戦場の兵士達であったり、領土であったり、欲張りなのかもしれませんね。

でも、貴族とか特権階級とか、それこそ皇帝陛下などは、守る者には含んでいなかったのです。

だからと言って信じていないと、いうことでは無いのです。

当然、国に仕える兵士の義務として、その方々を守るという責任をはたしてました」

「それはわかるよ。俺も兵士として、国をまとめる者達を信じなければ、自分の国なんて守れないからね」

「僕は、親から『弱い者はしっかりと守ってさしあげなさい。でも強い者は自分を自分で守れるから強いのです。だから必要以上、手を貸さなくても大丈夫』と教えられました。それがいつの間にか、僕自身の正義となっていったのです。目上の人達を除外していたのは、だからでしょうね。

でもあの騒ぎの時、僕は信じるものを失ってしまったのです。

信じていた人達から、あのような仕打ちを受けて、信じるどころか、敵であった神楽さん達に助けられて……何だかわからなくなってしまったんです。

だからと言って申し訳ないのですが、神国やここの人々、もっと言えばそれこそ僕達を助けてくれてた神楽さん達を、今すぐ信じる事ができるかというと、それもできない。

今の僕はこの力を使うための目的が無いんです。

そんな心の隙をつくように、あのような一言が重く響いてしまった」

ヘリオの語りに区切りがつくと、鈴音が口を開く。

「ヘリオさん、今まで通りバルドアの人々を守ってさしあげる事は、出来ないんでしょうか。
例え統治の体制が変わったとしても、領民達の本質は変わる事ないと思うのです」
「鈴音さん、僕もそう思ったのです。でも国という体制に裏切られてから、駄目なんです。
人々の考えが変わったわけではないのです。そんな事は当然わかっているんです。でも自分でも驚くくらい、それを心が拒否をするんです」
「それで、鬼姫はなんて言っているんだ」
俺は闇姫達とした話はさておき、もう一人の当事者である鬼姫の事も気になっていた。

「鬼姫……様は、『しっかりしろ』と……それに類する言葉以外、他には特に何にも言いません」
「そうか……鬼姫達も知らないと考えるのが妥当か……」
「それは、どういった事でしょうか」
「契約の目的を達成したり、今のヘリオみたいに、目的を失ったりした場合、どうなるのかを、闇姫達に聞いたんだ。それで……」
俺は、先日彩華からの報告書を読んだ後、契約について闇姫達と話した事をヘリオに伝えた。

「……という事で、彼女達『お人形』にもわからないらしいよ」
「そうですか……それじゃ鬼姫……様達もきっとわかりませんね」
「まあ、この話はゆっくりとつめてみよう。
今日のところはもう戻って休むといいよ」
「はい、ではそうさせていただきます」
「長々と引き止めて悪かったね」
「失礼します」

ヘリオ・ブレイズは軍務室を出て行った。
まだまだ問題はあるが、とりあえず今はこの部隊に慣れてもらい、信頼関係を築いていくしかないようだ。

「おっと、もうこんな時間か。
鈴音、食事を運んでもらう手配をしておいてくれ」
「わかりました」
「それと、アリエラは今晩はどうする。
ここに泊まるか、それとも自室に戻るか」
「ご迷惑でなければ、このままここでお願いします」
「俺は構わないよ。鈴音も良いだろう」
「そうね……ふふ、あとでまた一緒に、お風呂に入りましょうね、アリエラちゃん……ふふふ。
じっくり眠って、朝まで目が覚めないように、しっかりとほぐしてさしあげますね」
「ひえっ！　鈴音姉さん……ご勘弁を……それだけは許して……アリエラは何を聞いても、決して朝まで起きませんから」
「あらアリエラちゃん、なんだか聞いちゃいけないものを、聞いちゃったみたいね。
気になるお年頃だから仕方ないわね。
まあいいわ。今晩の入浴が凄く楽しみ……ふふ」
「鈴音さん、何だか凄く怖いですよ、それ……それに、あなたも気になるお年頃でしょう？」

『やっほぉ神楽君、黒、お腹すいたよぉ。ご飯まだかなぁ』
『出たな、食いしん坊軍団筆頭闇姫。
今鈴音が手配するからもう少し待っていてくれ』
『鈴音様、相変わらずアリエラ様には手厳しいですわね』
『あらら鈴音の姐御、あまりアリエラちゃんを可愛がらないで下さい。お姉さん、妬けちゃうわ』

『妾もちと、腹が空いたのう』
『てか鬼姫まで、ヘリオは放置か？』
『下僕か、ありゃ心配はいらぬ。よって放置じゃ。いやむしろその方が下僕も喜ぶ』

鈴音とアリエラのやり取りから端を発し、いつの間にか奥にいたお人形達が加わり、結局いつもの通りとなってしまった。
たまには静かな時間を過ごしたいと思っていた俺だが、それは鈴音とアリエラが出発するまで、望めないと悟ったひと時であった。

狗と呼ばれて　４（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

狗と呼ばれて　5

「アリエラちゃん、ぼちぼち出発しますよ」
「はい、いつでも大丈夫です」

ヘリオ先輩が戻ってきて二日が経ち、教習の疲れと筋肉痛から動けないでいた私も、すっかり回復しました。

というわけで、これから神国領バルドアに向かうのですが、心配事や不安が無い訳ではありません。
ヘリオ先輩みたいに「狗」と言われて、落ち込んだり、ショックで仕事が手に付かなくなる事はないと思います。
と言っても私だって一応繊細な乙女ですから、多少の不安はあります。

でも、なんだかんだと言っても心配事ナンバーワンは、これしかないでしょう。

鈴音姉さんと彩華姉さんの、怖い……いえ、とっても優しい姉さん達にしばらくの間、囲まれて生活を送るのです。
あの恐怖……いえ、優しさに、幼気で儚い乙女な私の心は、耐える事ができるのでしょうか。
しかも、神楽兄さんが同行しないのです。歯止めのかからなくなった姉さん達に、あんな事やこんな事されても、止めてくれる人がいないのです。

「……うん、アリエラは負けません」

「アリエラちゃん、なにぶつぶつ言ってるの、早く来なさい」

「ひっ！　ご、ごめんなさい鈴音姉さん、直ちに行きます」

「アリエラ、気をつけてな。鈴音よろしく頼むよ。あと彩華にもよろしく言っておいてくれ」

「兄さん……ちょっと寂しいですが、行ってきます。

アリエラちゃんは安心してまかせて下さい」

「アリエラ、心ない言葉を真に受けるなよ」

「わかってます、ヘリオ先輩。行ってきます」

落ち込んでいたヘリオ先輩も、今ではすっかり元通り……かな……になって、神楽兄さんと共ににこやかに送り出してくれました。

私が思っていたより、早い復帰に驚きました。これも神楽兄さんに怒られて、ヘリオ先輩なりにいろいろ反省をしたのでしょう。これなら私も手のかかるヘリオ先輩を、安心して神楽兄さんに預けて出発できます。

神国天ノ原の都、本都を出て半日ほど歩いたところで、私達は昼食と休憩のために集落に立ち寄ることにしました。そこで私は改めて、民衆から鈴音姉さんへの信頼の高さを知る事となりました。

ここまでの道中でも、私達と出会うほとんどの人達が、会釈をしたり、一声掛けてくれました。もっとも私達ではなく、鈴音姉さんに対してですが……その度、鈴音姉さんは朗らかに答えていました。それは多分神楽兄さんや、彩華姉さんでも同じなんでしょう。

そして集落に近づくと、何人かの人が街道沿いに並んでいるのが見えました。すると向こうもこちらの姿を確認したのか、数名の者が駆け寄ってきます。

途中私達を抜かしていった方が伝えたのでしょうか、間違いなく

私達……いや、鈴音姉さんの出迎えだったのです。

「天鳥鈴音様、銀界鬼姫様。お疲れさまです。
えっと……こちらは……」
「わざわざのお出迎え、ありがとうございます。
こちらは、アリエラ・エディアスと白輝明姫です。此の度、私と同じ部隊に配属となった魔法使いです」
「こちらがそうですか。
さて、首長も皆さんのご到着をお待ちしております。
お荷物をお持ちいたします。どうぞ遠慮なさらず、お預け下さい」
「では、お願いします」
鈴音姉さんは、こっそり「仕方ない」という顔をして荷物を預け、私にも促します。

「アリエラちゃんも、甘えさせて頂きなさい」
「は、はい。
えっと……お願いします」
「アリエラ様、どうぞ遠慮なさらず」
いきなり「様」で呼ばれた私は、顔から火が出るほど恥ずかしくなってしまいました。

「あら、お顔を真っ赤にして照れちゃって、可愛いわね、アリエラ様」

鈴音姉さんの有無を言わせぬ口撃が、私を捉えます。するとそれに呼応するように、駆け寄ってきた方々が次々と、小刻みな口撃をしかけてきます。

「アリエラ様、お顔の色が優れないようですが……」
（それはあなた達が……）

「アリエラ様、お熱でも……」
（いいえ、火照ってるだけです）
「アリエラ様、病み上がりと……」
（な、なんでそんな事知ってるの……）
「アリエラ様……」
（……ああ、もう勘弁を……）
「アリエラ様……」
「アリエラ様……」
（……おぉほほほ、そうよ、私が女王アリエラ様よ。皆の者ひれ伏すがよい。おぉほほほ……）
「さあ、行きましょう。
妄想少女一人の為に、首長殿を待たせては申し訳ないです」
「あの鈴音様、よろしいのですか」
「放置で構いません。甘やかしては駄目です」
冷たく言い放たれた鈴音姉さんの言葉で、私は妄想から現実に引き戻されました。そして徐々に小さくなる鈴音姉さんの姿を、ちょっぴり涙目で追いかけました。
「ああん、鈴音姉さん、アリエラを置いていかないで下さ・イ」
そうこうしながら私達が集落の入り口へ到着すると、そこには首長をはじめ、地域議会の方々、集落を代表する旦那衆など、そうそうたる顔ぶれの出迎えが待っていました。

「ここの首長、柏木です。
天鳥鈴音様、銀界鬼姫様、此の度は、お立ち寄りいただきありがとうございます。何も無いところですがゆっくりしていって下さい。
して、そのお二人は……」
「柏木首長、手厚いお出迎え、ありがとうございます。
それと、長居は出来ません故、お気遣いは無用でございます。
えっとアリエラ、自己紹介しなさい」
「は、はい、私、アリエラ・エディアスです。それとこの『お人形』は白輝明姫です。
此の度、天命ノ帝の命を承り、独立魔戦部隊に配属となりました。今後ともよろしくお願いします」
今でこそ私は、周りの方々の心遣いもあって、普通の暮らしができています。それでも少し前まで帝国の魔法使いだった事に、今なお負い目を感じているのも事実です。
それも関係があるのでしょう、私は自己紹介を終えると、深く頭を下げました。

「頭を上げて下さい、アリエラ様。
いろいろと思い悩む事もあると思います。
しかし、どのような経緯をお持ちでも、帝をはじめ、国を導く方々がお認めになったのです。
ここでは堂々と過ごして下さい」
「柏木首長、ありがとうございます」
私は、柏木首長の温かい言葉に甘える事にしました。

その後、私達は昼食をとろうとしたのですが、持て成したいとする集落の方々に、最初は遠慮していた鈴音姉さんも、最後は押し切られました。
こうしてあまり望んではいない接待を受けた私達は、大勢の方々に見送られ、集落を後にしました。

「鈴音姉さん、こちらではいつでもあのような歓迎を受けていたのですか？」
あまりの歓迎ぶりに驚きを隠せない私は、鈴音姉さんに問いかけました。
「いつもという訳じゃないけど、そこそこあるわね。多分、私達の警察力に対する期待みたいなものかしらね。
アリエラちゃんは、ああいうのはどうなの？」
「こんなアリエラを歓迎してくれるのはありがたいと思います。
でもアリエラ自身、まだ褒めていただける事をした訳ではありませんので、複雑です。それに苦手です」
「確かに歓迎していただけるのは、気分的にも悪くはないわね。でもそれ以上は、負担にもなっちゃうわね。
ああいう事は、帝や総長に受け持っていただきたいわ
しかしあれを避けるために、お忍びというのか、静かに本都を出てきたのに、どうしてわかったのかしら。困るわね」
「鈴音姉さん、『お人形』を連れて歩いていれば、誰が見てもわかりますよ」
その言葉を聞いた瞬間。鈴音姉さんの顔が曇りました。私はツッコンではいけないところにツッコミを入れてしまったようです。
「そうよね、アリエラちゃん。そんな事に気づかないなんて……私って馬鹿よね……
アリエラちゃんは私の事、そう思っていたわけなんだね」
「ひっ！　ひえっ！　……」
時既に遅しです。今夜もまた、鈴音姉さんから恐怖の寵愛を受ける事を決定づけたようです。

でも、見逃してくれるかもしれないと、一縷の望みをかけて、とにかく私は話題を変える事に専念します。

「と、ところで……鈴音姉さん達は、民衆達に信頼されているのですね。実際にこうして出歩いて、改めて感じました。

この神国では、国の指導層や軍は民衆達と距離が近いと思います。

アリエラのいた帝国では、歓迎されるなんて事は、一度も無かったです。

当たり前ですよね。皇帝は力で領民達を押さえつけて、私達はその恐怖の中心にいた訳ですから、距離だって凄く離れていたと思います」

「アリエラちゃん、今はもう神国の魔法使いなのよ。さっきみたいに、皆さん受け入れてくれるわよ。そんなに嘆く事はないわ」

「ありがとうございます、鈴音姉さん。そう言ってくれると、気が楽になります。

でもこの先バルドアに入ると……今でも領民達の間では、軍、特に魔法使いに対する恐怖は、根付いていると思います」

「それは仕方ない事よ、アリエラちゃん。

今後の私達の行いを見ていただき、信頼してもらうように努力するしか無いわ。

いずれにしても解決には、時間のかかるお話ですわ。

でもねアリエラちゃん、民衆の方々から怖がられる分、私がやさーしくしてあげますわ……早速今晩から……ふふ」

「ひえっ！　そ、それだけは……許して……鈴音姉さん……あ、あれ、アリエラ、何だか体がすっごく軽いな……つ、疲れもないです」

「あら？　照れちゃって可愛いわね……うふ」

こうして私は、鈴音姉さんの優しさに包まれて、街道を進んで行きます。

相変わらず私達と出会う方達のほとんどが、会釈をしたり、言葉をかけてくれたりします。ただ、先ほどの集落の歓迎ぶりをふまえ、休憩は集落に立ち寄らず、人目につかない適当なところでとる事にしています。

私達がこの日の宿に予定していた、軍の中継施設に到着したのは、日の長いこの時期、傾いたとはいえまだ日が残る、午後七時を少し回ったところでした。

私達は、そのまま食堂で夕食をとったあと、部屋に入りました。

宿を軍の施設にしたのは当然、昼間のような騒ぎを避けるためと、わかっています。

でも私はふと思ったのです。

「鈴音姉さん、あの騒ぎを回避するなら、明姫姉や、鬼姫ちゃんを本都に預けておけばよかったのでは？」

すると鈴音姉さんは、顔をしかめて私を見ながら口を開きます。

「それは駄目よ。兄さんに迷惑をかけれないわ」

「ひっ！　ごめんなさい、鈴音姉さん」

迫力に押されて、何も悪くないはずなのに謝ってしまう、私自身が情けないです。

「アリエラちゃん、何を謝っているのかしら。私何かしちゃったかしら？」

「ひえっ！　何でもないです。つ、つい癖というのか……アリエラはいつも鈴音姉さんに叱られていますので……」

「あらごめんなさいね、怯えさせちゃったわね。いいわ、お詫びに後でその分上乗せして、優しくしますわ」

恐怖のあまり私の口からは、一切の言葉が出なくなってしまいま

した。

「それはさておき、兄さんには闇姫ちゃんがいるのよ。それに優しいから負担をもの凄くかけちゃいそうなの」

『鈴音様、わかります。黒鬼闇姫さんは確かに、何を考えているかわかりませんですわね。付き合いの長い私ですら、行動が読めませんわ。

でもやっぱり鈴音様は、神楽様の事を一番にお考えですね。これもやっぱり愛するがギュゲ……痛いです……ごめんなさい』

それは、いきなりでした。鈴音姉さんの鉄拳が見事に鬼姫ちゃんの脳天に落ちたのです。

『本当に鬼姫ちゃんのお口は……これだから、兄さんに預けれないのです』

『あらら、鬼姫ちゃんのお口が悪いのは、昔からよ。お姉さんはよくわかっていますわ』

『明姫姉なら預けても大丈夫だとアリエラは思うけど……』

『アリエラちゃん、駄目です。明姫ちゃんは一人なら大丈夫でしょう。

でも鬼姫ちゃん達といると、けしかけちゃうのよね、明姫ちゃん』

『鈴音の姐御……お姉さんは、そんな事……いえ、そうかもです……ごめんなさい』

「と言う訳よ、アリエラちゃん」

「納得です。確かにこれじゃ神楽兄さんが大変ですね」

話しが一区切りついたところで、鈴音姉さんが怪しい笑みを浮かべます。

「さてアリエラちゃん、お風呂に行きましょう。今日の女性は私達だけですから、他に遠慮する事なく楽しめますわね……ふふ」

「ひえっ！　ア、アリエラは後で……きょ、今日は疲れも……」

「あらアリエラちゃん、私と一緒じゃイ・ヤ・と言う訳ですね。よぉーく、わかりました。」
「ひっ！　ご、ごめんなさい。ご一緒させてください。ア、アリエラのお願いです」
「あら、そこまで言うならご一緒しましょう。アリエラちゃん、行きますわよ」
私は「命の糸」で操られる「お人形」のように抵抗できないまま、浴場に連れて行かれました。

頭からは拒否しなさいと、私の体中を命令が駆け巡っているのです。
でも……でも、駄目なんです。もう私の体は、その命令を受け付けないんです。
頭からの命令を無視して、口が勝手に動くのです。
「もっとして下さい」と……

そして体も求めてしまうのです。

あの心地よく優しい鈴音姉さんの指使いを……

あれ以来、癖になってしまったあのマッサージを……

こうして鈴音姉さんからの恐怖……いえ、優しさいっぱいの寵愛を受けた私は、心地よい疲れとともに寝床に入り、朝まで目覚める事はありませんでした。

狗と呼ばれて　5（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

狗と呼ばれて　6

「うんん……もう朝なのね……」

カーテンの隙間から差し込む朝日で、私は目が覚めました。
そして静かに体を起こし、伸びをしながら体を五回ほど左右にねじったあと、「ペタリ」と前屈をしながら十まで数えます。

「……八、九……十。よし目覚めの体操、終わり。
何だか凄く熟睡できたな……それに、何だか体が軽い……早くに寝たからかな……」
呟きながら体を起こしたその時、隣のお布団で寝ている鈴音姉さんの天使のような寝顔が、私の目に映り込んだのです。

「……そうか……鈴音姉さんのあれが……なんだかんだと言っても、アリエラの事を気遣ってくれてるんだ。
やっぱり優しいです。今度から鈴音お姉様とお呼びいたします」
時間を見ると、そろそろ予定していた起床時間になります。

「鈴音お姉様……モゴ、モゲ……」
私が鈴音お姉様を起こそうとしたその時、背中に何かの重みを感じると同時に、私の口はふさがれてしまいました。そして背後から耳元で囁く声が警告します。

『い、いけません、アリエラ様。鈴音様を起こしてはなりません。
手を離しますが、決して騒ぎ立てないで下さい。よろしいですか？』
どうやら背中の重みは鬼姫ちゃんだったようです。正体のわかった私が首を縦に振ると、その小さな手でふさいでいた口を解放して

くれました。

『アリエラ様、大変失礼いたしました。緊急事態につき、ご容赦いただきたいです』

『何だかよくわかりませんが、どうしたのですか、鬼姫ちゃん』

『昨夜アリエラ様は早々に寝付かれてしまい、お話する機会がなかったので、このような無作法となってしまいました。

鈴音様は、不用意に起こされる事を快く思いません』

『えっとそれって、目覚めが悪いって事ですか』

『そう言う訳ではないので、困るのです。

例えば、自分で起きたり、緊急事態で起こされたり、そんな時は凄く目覚めが良いのです。

しかし、不用意に起こされたりすると……』

『すると……』

『アリエラ様、今までで一番怖かった時の鈴音様を、思い浮かべて下さい』

『……ひっ！　ど、どうしても思い出さないと駄目なんですか……』

がんばって思い出そうとした私でしたが……

（うぅぅ……無理……絶対無理です）

思い出そうとするだけで、変な汗が流れでてきます。

『わかりました。無理にとはいいませんわ。

結論からすると、それすら天使の優しさに思えるほどの変貌をとげるのです』

『ひっ！　ひえっ！　そ、それは……た、助かりました。

鬼姫ちゃん、ありがとうございます』

『いいえ、それはアリエラ様だけの問題ではございませんので……

それにここには、対鈴音様最終兵器の神楽様もいらっしゃりません。
そう言えば、最近は神楽様に起こされるのは、大丈夫みたいなんです。
これもやっぱり愛故の事でしょうか。そもそも愛する方に醜い姿を晒すなんて……』
鬼姫ちゃんは喋るのを突然やめました。そして、その恐怖に怯えるような瞳に映り込んでいたのは、すっかり目覚めた鈴音お姉様の姿でした。

『朝から快調ね、そのお口……鬼姫ちゃん。
それとアリエラちゃんも、おかしなお喋りをしていないで、さっさと支度なさい』
『ひっ！　ご、ごめんなさい鈴音お姉様……直ちに……』

こうして私達の朝は慌ただしく過ぎていきます。
そして支度をすませ、朝食を頂いた後、私達は施設を出発しました。

ちょうど正午にさしかかる頃、歩みを進める私達は、旧国境付近にある神国の軍事施設「第一砦」に到着しました。
この地域は戦闘区域となっていたため、周辺には集落はありません。
しかし終戦後は、交易のため行き交う人々が増えたこともあって、この「第一砦」は検問所の機能と共に、一部の施設を民間にも解放しています。そのため軍事施設と言えども、ちょっとした街のような賑わいがあります。

「結構人が多いわね。変に騒がれる前に裏へ回りましょう、アリエラちゃん」

人気を鼻にかけたような少々嫌みなこの言葉も、鈴音お姉様が言うと至極当たり前に聞こえます。

「はい、鈴音お姉様」

私達は正面の出入り口に続く道からそれて、軍専用の出入り口に向かいました。

「ところでアリエラちゃん、今朝から気になっていたけれど……」

「何でしょう、鈴音お姉様」

「それ……その『お姉様』って、いったい……アリエラちゃん、あなた私におかしな……そのなんて言うのかしら……恋愛感情？　かな……そう言うものを持っているのかな」

普段、あれだけ怖い鈴音お姉様が、はにかみながら私に問いかけてきました。

それはまさに、もの凄いギャップ攻撃です。思わず、「そうなんです好きです。愛してます。お姉様ラブなんです」と喉まで言葉が出かけました。

でもそう言いたい気持ちを「グッ」と堪えて言います。

「いいえ、そう言う意味の『お姉様』では、なくて……そう言う意味って、どういう意味なのって聞かれても困る訳で……でもアリエラは鈴音お姉様の事が好きで……その……敬意を込めてというのか……」

「わ、わかりました。この事についてはもう何も言いません。好きに呼んで下さい。

ただし、おかしな誤解を招くような事はしないで下さいね」

「は、はい、鈴音お姉様、ありがとございます」

こうして変に騒ぎにならないように、密かに砦に入った私達は、

食堂で昼食をとり一休みしたあと、同じくこっそりと砦を出発しました。

ほどなくして私達は旧国境線を超えて、神国領バルドアに入りました。

ここまで進むと旧帝国領民の割合が増えて、さすがに鈴音お姉様に挨拶などをする人は減ってきます。

それどころか、私達と出会う人々の見る目が恐怖におののいていたり、私達が近づくと避けるように道をあけたり……そんな行為の割合が増えてきます。

戦争が終わって、支配体制が民衆寄りの神国天ノ原に変わっているのにもかかわらずです。

これが帝国の強いてきた、恐怖や力による領民支配の結果なのでしょう。

私が帝国軍にいた頃、民衆は私達を恐れいてました。しかし、ここまで露骨な態度をとられていた訳ではありません。

当然私達は、押さえつける側に属していた訳ですから、そういう事を感じとる感覚が、鈍くなっていたのかもしれません。

それでも帝国を守っていました。もっと言えば領民達を守っていた訳ですから、多少なりとも信頼や尊敬があったのでしょう。

それが神国に負けてしまった今、領民達の信頼や尊敬を失ってしまった訳です。残された恐怖のみが暴走して、態度となって表れているのかもしれません。

ヘリオ先輩ではないのですが、こういう態度を直に感じると凹みます。

「はあ……」
無意識に出た私の溜め息が聞こえたのか、鈴音お姉様が語りかけてきました。
「思っていた以上に、心に突き刺さるわね。
どうせそう思われているなら、いっそうの事、徹底的に脅しまくっちゃおうかしらね、アリエラちゃん」
「鈴音お姉様、それ冗談に聞こえないです」
「あら、それは失礼いたしました。
でもこれは凄く根深い問題のようね」
「アリエラの知る限り、力の支配体制は初代皇帝の頃から、延々と続いているのです。特に帝国の拡大政策後に併合された地域ほど、根深い問題として残っていると思います」
「歴史と共にという訳ね。
と、いう事は、ここの領民達は、軍に対して過敏に反応する訳なの？」
「いいえ、そう言う訳でもないのです」
矛盾した私の答えを、鈴音お姉様は見逃さなかったようです。
「そうよね。どう見ても私達、魔法使いに対して恐怖を抱いている感じよね。
ならば、帝国初の魔法使いであるアリエラちゃん達は、何らかの理由を知っているわよね……ほら、隠さないでお姉様にお話しなさい」
鈴音お姉様は「隠し事は許さないわよ」的な鋭い視線で私を睨みつけます。こうなるともう私は話さない訳にはいきません。

「ひっ！　か、隠すつもりは一切なかったというのか……話すきっかけがなかったっというのか……あれ？　何を話そうと……
……えっと、何か大切な事を……忘れて……あっ！」

その時、心の奥底に封印されていた私の記憶が、その封緘を破って鮮明に蘇り、脳裏に映し出されました。
それと同時に足がすくみ、立ち止まってしまいました。

忘れようとしても、決して忘れられない忌まわしい記憶……いえ、忘れてはならない出来事。
でも、真っすぐ向き合う事が出来なかった私は、いつの間にかその記憶を封印する事で、自身を守っていたのです。

「急に立ち止まって……先を急ぎますわよ。
って、どうしたの、アリエラちゃん。」

「……ご、ごめんなさい……本当にごめんなさい……許して下さい……アリエラを許して下さい……ご、ごめんなさい、ごめんなさい……」

「ちょっ、ちょっとアリエラちゃん、どうしちゃったのよ。
えっと、私がいじめすぎちゃったかしら」

『今しばらくアリエラちゃんを、そっとしておいてくれませんか、鈴音の姐御』
『明姫ちゃん……それはこの件に関係した事かしら』
『はい、そうです。
直にもとに戻ると思いますが……ちょっと心の傷口が開いてしまったようです。

たぶんこの機会に、全てを鈴音の姐御にお話するつもりだと思いますので、この件に関して詳しくは、アリエラちゃん本人から聞いて下さるようお願いします』

「……ごめんなさい……ごめんなさい……
許して下さい……アリエラは……」

その直後、私の視界は暗闇に包まれてしまいました。

「うぅん……」

「アリエラちゃん、大丈夫？」
『お姉さんが付いていますわ、アリエラちゃん』

（何だろう、私を呼んでる鈴音お姉様と明姫姉の声が聞こえる。
あれ何してるんだろう私……）

わずかに聞こえる鈴音姉様達の声を道しるべに、現実と記憶の狭間でもがいていた私は泳ぎ出しました。
すると封印された記憶に心を蝕まれ、どこかに飛ばされていたような意識が、少しずつ現実世界に戻ってきます。

ゆっくりとまぶたを開くと、戻ってきた視界には、優しく微笑む鈴音お姉様と、心配そうに覗き込む明姫姉の顔が映し出されます。

「ようやく気が付いたわね、アリエラちゃん。よかったわ」
「ア、アリエラは、一体何が……」
「もうしばらく、こうしてなさい」

どうやら私は、突然思い出した事実に耐えきれず、気を失ってしまったようです。
そして鈴音お姉様は、倒れた私を道ばたの木陰まで運び、膝枕で休ませてくれていたようです。

「鈴音お姉様、ご迷惑をかけてごめんなさい」
「ええ、本当アリエラちゃんは、手がかかりますわ。
いつも騒ぎ立てるし、私の事を必要以上に怖がるし、ちょっと目を離すと兄さんにちょっかい出すし……困ったもんです。
でもね、遠慮なくいつでもどうぞ」
「鈴音お姉様……ありがとうございます。
それと……神楽兄さんの指定席を使わしていただき、ありがとうございます」
私はささやかな反乱を起こしました。

「ア、アリエラちゃん！　何を言い出すのかしら……本当に手がかかるわね」
「ひえっ！　ご、ごめんなさい」
あっけなく鎮圧です。

「そろそろ動けるようになったかしら、アリエラちゃん」
「はい、もう大丈夫です」
「じゃあ、先を急ぎましょう
それから先ほどのお話は、アリエラちゃんの気持ちに整理がついてからでいいわよ。
でも、今後の事もあるから、なるべく早くにお願いしたいわね」
「はい、本当にお気遣いありがとうございます」

私が予想外の事態に陥ったため、私達が今夜の宿に到着したのは、

辺りがすっかり暗くなってしまった、午後八時を回ったところでした。
今晩の宿も軍の中継施設ですので、食事はいつ何時でもとることができます。私達は遅い夕食をとったあと、部屋に入りました。

「さてアリエラちゃん、先ほどバツをまだ与えていませんでしたね。あれで終わりと思っているなら、大間違いです」
「ひえっ！　……先ほどって一体……あっ！」
いろいろと思い当たる節があったのですが、あの「ささやかな反乱」が駄目だったようです。

「ちょうど入浴にはいい時間ですわ。当然一緒に入りますわね」
「ひっ！　は、はい……当然ご一緒します」
いけない事とわかっていても、やっぱり拒否できません。
そして今夜も操り人形のように浴場に連れてかれました。

こうしてまた一歩、私は、いけない領域に足を踏み込んで行くのです。

こんなに若いのに……スポーツの選手でもないのに……マッサージを受ける事が楽しくなっちゃうなんて……

「あぁアリエラ、いけない娘になっちゃいそう」

お風呂から戻ったグニャグニャの私は、そのままお布団に潜り込み、すぐさま夢の世界に旅立ちました。

狗と呼ばれて　6（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

狗と呼ばれて　7

「アリエラちゃん、起きなさい、朝よ」
「うぅぅん……？　……あっ、鈴音お姉様、おはようございます」
今朝は私より先に起きた鈴音お姉様に、優しく起こしてもらいました。
体を起こし、いつもの体操を行うと目の前の鏡に映る自分の姿が目に入ります。
「うぅぅ……髪が爆発している……」
このところ毎朝の事なんです。
鈴音お姉様にあんな事や、こんな事をされて、グニャグニャになってお風呂から出てくると、髪を乾かす間もなく、寝てしまう事が原因だってわかっているのです。
「あらアリエラちゃん、もの凄い髪型ね」
悪びれるそぶりが全くない鈴音お姉様の言葉に、「誰のせいでこうなったと思ってるの・ヨ！」などとは決して言えない私です。
「ア、アリエラは、髪を乾かす前に寝ちゃいました……疲れてたのかな……そ、それに寝相も悪いかな……へへ」
「アリエラちゃん、へらへらしていないでこっちにいらっしゃい」
「ひえっ！　な、何でしょう、鈴音お姉様」
何かをしてしまった覚えのない私は、胸の不安を抑えつつ、鏡のそばに立っている鈴音お姉様の下に行きます。
「ここに座って」

「はい」
私が鏡の前に座ると鈴音お姉様は、手に持っていたブラシで私の髪をとかしだしました。
そして語りかけてきます。

「ごめんね。私ついアリエラちゃんが可愛いからいじりすぎちゃうのね」
「鈴音お姉様……いじりすぎるって……いいんです、アリエラの可愛さが原因なんですから……へへ……」
誰かに髪をといてもらうのは、軍に入隊する以前に、お母さんからしてもらったのが最後かな……凄く久しぶりです。
暖かみを感じながらその気持ちの良さに、今目覚めた私でしたが、再び夢の世界に引き戻されそうになります。

「馬鹿な事を言わないの」
「ひっ！　ごめんなさい」
気持ちの良さにぼやけていたので、何を言ってしまったのか、はっきりと覚えていない私でした。しかし鈴音お姉様の一言で現実に戻ります。

「こういう事、私の夢の一つだったわ。
……前に私……施設にいたって話したでしょう。
でもね、最初私は人見知りが激しかったの。戦争で両親を失った直後だったから、他人が信じれなかったのでしょうね。
気が付くといつの間には一人になっていたの。今思えば馬鹿みたい、周りは同じ年頃の子供が集まっていたのにね……」
鏡に映る鈴音お姉様は、視線を落とした少し寂しげな表情でした。
それでも私の髪をとく手を休めずに語り続けます。

「……でもそんな中、兄さんと、彩華姉さんは、そんな私の事を気にかけてくれていたのかな……何かあるごとに、声をかけてくれたの。
最初はうっとうしかった……けれどいつの間にか嬉しくなってね……気が付いたら、すっかり打ち解けて、周りから『妹』なんて呼ばれるようになっていたの」

鈴音お姉様の表情は話しを進めていくにつれて、普段の明るい表情に戻っていきます。

「……あの頃、よく彩華姉さんに、こうして髪をといてもらったな……すっごく気持ちよかったな……
だからね、私も妹や……娘に……同じ事をしてあげたいなって……何言ってんだろう。私には妹も、それに娘どころか、お嫁さんにもなってないのにね……
……アリエラちゃん、時々でいいから、髪をとかさせてね」
「鈴音お姉様……アリエラでよければいつでも言って下さいね」
「ありがとうね、アリエラちゃん……」

そう言った言葉とうらはらに、鈴音お姉様は再び寂しげな表情に戻っていました。

「こういう事、考えたことがあるかしらアリエラちゃん……私達って、子供を産んでも良いのかな……いえ、作ったり産んだりは良いのですが……あっ、決して『いたす』事がとかじゃなくて……その後育てるという事を考えると……」

「す、鈴音お姉様……ア、アリエラはその……いたして……あっ、まだ……処……いえ……乙女、なので……子供を作るとか……産むとか……その実感が……」

「ご、ごめんなさい、アリエラちゃん、おかしな事を聞いちゃって……

その……戦争が終わってこれからは、どんどん平和に向かって進んでい訳でしょう。

だからついこういう事を考えたりするの……

それに私達ってほら、残されている時間が……だからこそ、好きな人と……その……『いたす』とよけいに考えちゃって……」

ここまでがんばって、鈴音お姉様のお話に付き合っていた私でしたが、最後には未知の領域に踏み込んだ話しになってしまい、不本意ながら返答が出来なくなりました。

もっとも鈴音お姉様も、私相手にどこまで踏み込んでよいのか、ためらいながらお話をしていたようです。

私はもちろん、鈴音お姉様も恥ずかしかったのでしょう。お互いに頬を赤く染めて、非常に不自然なやり取りになっていました。

「……さて、この話しの続きは、アリエラちゃんが『いたす』まで、取って置きましょうね。

髪もまとまったし、朝ご飯を食べて出発しましょう」

「鈴音お姉様……『いたす』って……」

私がいつ誰と「いたす」かは、さておきます。

支度をすませ朝食をとった私達は、施設を出発して、目的地の旧帝国トゥルーグァ宮殿を改築したバルドア庁舎へと、街道を進みます。

左右を木々に囲まれた山間の道を抜けて、視界が開けた平坦な道になってくると、行き交う人も増えてきました。

この辺りになると、神国天ノ原から来ている人が結構いるのでし

ょうか、私達に声をかけてくれる人が再び増えてきました。
そしてトゥルーグァに近づいていくほど、旧帝国領民の人々の態度も変わってきました。中には挨拶をしてくれる方も、ちらほらですがみえます。

「アリエラ様、今後もよろしくお願いしますね」
「ひえっ、あ、ありがとうございます。が、がんばります」
がんばって笑顔を作ろうとしているのですが、慣れないためか、どうにも引きつります。

「ほらアリエラちゃん、あなたが怯えてどうするのよ。
皆さん応援して下さっているのよ。もっとしっかりとしなさい」
「ひっ！　は、はい」
どうやら私達対する信頼は、まだ残っているようです。

「とても小さな事ですが、この積み重ねも信頼を得るために必要ですよ。
もっと自然な笑顔が作れるように、今晩から特訓かしらね」
そう言った鈴音お姉様は、満面の笑みを浮かべました。

（鈴音お姉様……その心と裏腹の笑顔で何人の人を泣かせてきたのですか……）

『アリエラちゃん、それ全部聞こえてますよ』

『へっ……ひえぇぇぇ！　ご、ごめんなさいです。ゆ、許して下さいです。お願いです。
明姫姉……鬼姫ちゃん……』

『お姉さん、いつも言ってますわよ。

口は災いのもとって……可哀想ですが、試練です』
『そうですわアリエラ様、私が何故鈴音様に怒られているのか、いつも見てて知らない訳ではないですわね。
一度しっかりと、教えて頂かれるのが良いと思いますわ』
『ひっ！　そ、そんな……鈴音お姉様、お助けを……』
『駄目よ！　アリエラちゃん！　覚悟なさい！
でも私、今晩が楽しくなりそうよ……ふふ』
再び満面の笑みを浮かべると、鈴音お姉様はそう言った。

その後も、今晩の事を考えると不安がいっぱいで、いっそうギクシャクした私の笑顔を、鈴音お姉様の素敵な笑顔でフォローしながら、街道を進んで行きます。
こうして私達は、ほぼ予定通りの午後三時を少し回ったところで、バルドア庁舎に到着しました。
今では、鈴音お姉様達が斬ったという分厚い金属製の正門の修復も終わっていて、外観は以前の姿を取り戻しています。

現在ここは、バルドアの地域政府や議会があり、また軍をはじめ各省庁が入っています。
一応は中枢となっていますので、この正門前で、私達はチェックを受けて中に入ります。
「えっと……彩華姉さんはどこだろう……」
敷地内に入った私達は、彩華姉さんの居場所を聞いていなかったのです。
「あっ鈴音お姉様、侍の方がみえます。あの方なら……アリエラ、聞いてきます」

そう言った私は、小走りに侍の方へ近づいて尋ねました。

「すみません、お尋ねしたいのですが……」

「ん……なんだ……って、あんたあの捕まっていた魔法使いの娘さんだね」

この侍さんは、地下牢に収監されていた私達を、助けてくれた方でした。

「あの時は、ありがとうございました」

「別に礼はいらないよ。任務だったしね。

ところで何だったかな」

「あっ、はい、彩華姉さんがどこにいるのか知りませんか？」

「それなら俺が案内しますよ。ちょうど同じ方に行くところだったから、ついてきて下さい」

「お願いします。

鈴音お姉様、こちらの方が案内して下さるそうです」

私がそう言うと、鈴音お姉様は走ってきて、開口一番。

「アリエラちゃん、大声でお姉様はやめて頂けないかしら。おかしな関係に思われてしまいます」

「ご、ごめんなさいです……これもバツの対象に……許して下さい……」

「ア、アリエラちゃん、なにおかしな事をいってるのかしら」

『今その話しをしては駄目よ！　よけい変に思われるわ』

「ひっ！　は、はい」

先ほどの侍さんが、少し離れて困った顔をしてこっちを見ています。

「大変失礼いたしました。改めて案内をよろしくお願いします」
「鈴音様……あの娘さんとどういったご関係で……いえ、あの娘さんの言動が、少々気になったもんですから……」
「関係と言われましても……普通の先輩後輩関係ですわ……はは」

私を見る鈴音お姉様の視線が、かなり怖いです。

今の私は様々な要因で時間の経過が怖くなっていました。でも流れる時間は決して止まりません。
普段と変わらず進む時間のまま、私達は侍さんに案内されて、彩華姉さんの軍務室に到着しました。

「ここが山神侍大将の軍務室です。それでは」
「助かりましたわ、ありがとうございました」

私達は侍さんにお礼を言ったあと、軍務室のドアをノックします。

コン、コン

「どうぞ、入って下さい」
私達は秘書官に言われるまま、前室に入りました。

「天鳥鈴音様、アリエラ・エディアス様、銀界鬼姫様、白輝明姫様ですね。到着次第すぐに通すように仰せつかっております。
どうぞ、こちらです」
さすが秘書官といったところでしょうか、てきぱきと物事を進めていきます。

通された奥の部屋で、私達は彩華姉さんと久しぶりの対面をしま

した。

「独立魔戦部隊魔術師、天鳥鈴音、ならびにアリエラ・エディアスの両名、ただいま着任いたしました。

……

……何してるの、アリエラちゃんも挨拶なさい」

「ひっ！　ご、ごめんなさい。

アリエラ・エディアスです……えっと……な、何かとお手数をかけますが、ご指導下さい」

「二人ともよろしくお願いするよ。

さて形式張った挨拶はこれぐらいにして、このあとは予定は入れてないから、ゆっくり話しでもをしよう。

とりえあず鈴音、アリエラ、それと『お人形』達も久しぶりだな」

「そうですね、彩華姉さんが本都に戻ったのは三ヶ月前ですので、それ以来ですね」

「ところで鈴音は、アリエラの付き添いだけではなかったか？」

「それは『取り急ぎ大変な任務はないから』と、兄さんがねじ込んでくれたのです。

私もアリエラちゃん一人じゃ、心配ですからね」

「鈴音お姉様、心配って……アリエラだって、がんばればそれなりに出来るんです」

「心配と言えば、ヘリオはどうなのだ？

軍務の一つとはいえ、私の報告書で本都に戻されてしまったのだからな」

彩華姉さん問いかけに鈴音お姉様が答えます。

「戻ってきた当初は、かなり凹んでいたわ。でもそれは戻された事に対してではなくて……そうですね……自己嫌悪と言ったところか

しら……
彼の話しですと、守るものを失ってしまったと……」
「守るもの？　わからんな……今までと同じものでは駄目なのかな」
彼華姉さんは、訳がわからないようです。

「彩華姉さん、それは　魔法使いならでは事情というものですよ」
「あれか『契約の主旨』というものだな」
「はい……ただ、彼の場合はそれがちょっと変わってまして、それであんな風になってしまったのです」
「変わっていた？」
「私はそれを話す立場にはないので……」
「鈴音お姉様、お話しておいた方が良いのではないでしょうか」
「そうかもしれませんがアリエラちゃん。でもね、こういう事は、本人が話すべきと私は思っています。
それは彩華姉さんもわかってくれると思います」
「そうだよアリエラ。私とて、無理に話しを聞こうと思ってはいない。
私にとって、どうしても必要な事なら、既に耳に入っていると思う」

「それにアリエラちゃん、あなたのお話もまだ聞いてないわね。そろそろお話してほしいのですけど」
「ん、あの件か鈴音」
「はいそうです。どうかしらアリエラちゃん」
二人は私が気を失った理由を今すぐにでも聞きたいようです。

「って、なんで彩華姉さんまで知っているんですか？」
「あらアリエラちゃんには言ってなかったかしら。
私達にはたいていの場合、忍女が同行しているのよ」
「へっ？　それって護衛？　は、ないか……じゃあ監視？　なの…

…」
「ある意味そうかもしれないわね。でもね、連絡要員と思った方が良いわね。
だから、あの時も彩華姉さんに連絡しておいたのよ。
それでどうなの、お話してくれるかしら」
「す、鈴音お姉様……もうちょっと、もう少しだけ待って下さい」
「まあいいわ。それこそお風呂場なら、簡単に教えてくれそうですからね……今晩にでも聞いちゃおうかしら……ふふ」
「ひっ！　そ、それは卑怯です鈴音お姉様」

「なあ鈴音、さっきから気になっていたが、『お姉様』って呼ばれているけど……アリエラとそういう関係か？」
私の使う敬称が気になったのか、彩華姉さんがツッコミを入れてきました。

「へっ！　彩華姉さん……いやですわ。違いますわ。あれはアリエラちゃんが勝手に言ってるだけです。
ほらごらんなさい、勘違いされちゃったでしょう、アリエラちゃん」
「ひっ！　鈴音お姉様……わ、わかりました。じゃあ彩華姉さんもこれからは彩華お姉様とお呼びします」
「へっ？　アリエラ、どうしてそうなる。
私の恋愛感情は正常だぞ」
彩華お姉様は、私にいきなり『お姉様』と呼ばれて、困惑しているようです。

「だって、彩華お姉様も鈴音お姉様と同じくアリエラにとっては、凄く尊敬する人なんです。
だから決めました。これは何を言われても譲りませ・ン」
「だからと言って……せめて『お姉さん』にしてくれないか」

「駄目ですよ、彩華姉さん。
なんてたって、この私を今でも『お姉様』って呼んでいる訳ですよ。
いろいろ試しましたが何をされても、こうなったアリエラちゃんは退きませんよ」
「いろいろ試したって……鈴音……何をしちゃったんだ……」
「何をって……それは……そうだ、彩華姉さんも今晩一緒に入浴しましょう」
「それは構わんが……鈴音……何をしたのか、何となくわかった……逆に『お姉様』って呼ばせちゃってる訳だ」
「よかったわねアリエラちゃん。今晩は三人で入浴よ。楽しみが増えちゃった……ふふ」

「ひっ！　ひえぇぇ……」

時間の経過を恐れる私を置き去りのまま、お姉様達のつきない話は続きます。
こうして無情にも時は流れていきました。

狗と呼ばれて　7（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

何だかこのところ、随分と脱線しています……すみません。

なんとか軌道修正しないと……

狗と呼ばれて　8

「起床時間だぞ、ほら鈴音、アリエラ、いつまで寝ておる」
「うぅぅん……彩華お姉様……おはようございます……」
今朝は彩華お姉様の声で目覚めた私です。でも何だか聞いてはいけない名前が、聞こえたような気がするのですが……

いつものように体を起こして、伸びをしながら体をひねったその時……私の視界に見てはいけないものが飛び込んできました。

「す、鈴音お姉様……おはようございます……」
「……」

今まで見た事のない鈴音お姉様の凄い視線が、固まった私に突き刺さります。

「ア、アリエラじゃありません……彩華お姉様です……」
「……おはよう……アリエラちゃん……彩華姉さんは……」
「む、向こうの鏡の前で……」
私の言葉が終わる前に鈴音お姉様は起き上がり、彩華お姉様のところに無言のまま行ってしましました。
いったい何が始まるのでしょう。変に期待をしてしまいます。もっとも何かが始まってしまったら、私では止める事は出来ないです。

「……どうしよう……」

とにかく私は、そのスキに着替えることにします。すると鈴音お姉様の声が聞こえてきました。

「アリエラちゃん、こっちいらっしゃい」
って、わ、私を呼んでる……
「ひっ！　は、はい……」
不安いっぱいな私は仕方なく……いえ、喜んで鈴音お姉様のところに行きます。
「アリエラちゃん、今朝も凄い髪型になっちゃってるわね。
髪を乾かしてから寝ないと駄目よ。
ここに座りなさい」
当然原因は、昨晩お姉様達二人のおもちゃにされたためです。
でも何も言い返す事ができない私の選択肢は、素直に従う事だけの一択です。
「……でも毎朝これなら、良いかも……へへ」
「何ぶつぶつ言ってるの、アリエラちゃん」
「ひょえ！　何でもないです」
「最近、独り言が増えてるわよ。とにかく早くしなさい」
こうして支度をすませた私達は、朝食をとったあと、彩華お姉様の軍務室に入りました。
「さて今後の予定だが、鈴音とアリエラの二人で、一週間ほどこのトゥルーグァを見回ってもらおう。私も加われるときは一緒に回る。
それで良いかな」
「はい、私は構いません、アリエラちゃんも大丈夫よね」
「は、はい……」
私は先日の件もあって、全く不安が無い訳ではありません。

でも、トゥルーグァの人達は辺境の集落と違って、私達……いえ、私に対する恐怖心も薄らいでいるようなので、見回り程度の事なら充分こなせると思いました。

「それと当面の間、私服での巡回とし、これに伴い『お人形』達は留守番してもらう」

「彩華姉さん、それはどのような意図です」

私と同じく疑問に思ったのでしょう、鈴音お姉様が問いかけます。

「まずは一民間人として、この土地に慣れてくれということだ。アリエラは元々ここにいた訳だが、その当時とは随分様変わりしている事もあるだろう」

「そうですね。

まだしっかり見たわけでないですが、領民達は以前に比べて、恐怖が消えたというのか……

それに神国との交易が増えたためでしょう、行き交う人々も多く、街は以前より活気があるように思います。

でも……」

「アリエラ、民衆が魔法使いを恐れるなら、その存在をわかりにくくすればよい話だ。

『お人形』がいなければ、魔法使いだと案外わからないものだぞ。今は、民間にいらぬ不安を煽りたくないからな」

「確かにそうですね。必要ならすぐに呼べるわけですし、私はそれで構わないけど……

でも、アリエラちゃんは元々帝国の有名人だから、顔でわかるのじゃないかしら」

鈴音お姉様の一言は、私にとって少々辛い言葉でした。

「……鈴音お姉様、それは大丈夫です。アリエラは領民の方達の前

に立った事が、ほとんどありません。
だって当時は……明姫姉を連れたアリエラを見るだけで……」
言葉に詰まった私に、二人のお姉様が言葉をかけてくれます。
「それ以上は、いいのよアリエラちゃん。
また気を失うと困るわ」
「アリエラ、私はそうなった理由が早く知りたいのだ」
「へ？」
本当に情け容赦のない優しいお姉様方です。
「……わかりました、お話します」
「アリエラ、ああ言ったが今じゃなくても良いんだぞ」
「そうよ、もっと落ち着いてからでも良いのよ」
やっぱりお姉様達は優しいです。
「いいえ、ここでアリエラがお仕事をしていくうえで、避けて通れません。それにお姉様達には、知っておいて頂くのが良いと思います」
「アリエラがそう言うなら、しっかり聞いておく」
「そうね……でも無理しないでね」
そう言うと、二人のお姉様は私の話しに耳を傾けます。
「アリエラが明姫姉と契約したのは、今から六年ほど前の八歳の時です」
「えっ！　じゃあ先に契約したのはヘリオさんなの？」
「はい、そうです。それが何か」
「いえ兄さんの闇姫ちゃんの対極なら明姫ちゃんと思っていたから

……だからちょっとね。
あっ、ごめんなさい、話しを続けてね」

「は、はい、えっと……なぜ明姫姉がアリエラの前に現れたのかは、わかりません。明姫姉に聞いても、『呼ばれたから』としか答えてくれません。
その頃のアリエラは、毎日のように耳にする戦争の話しに嫌気していました。
それに『アリエラが誰にも負けなければ』とも考えるようになっていました。
でもだからと言う訳ではないのでしょうが……こればかりは、どうしてかは……」
「確かに兄さんも言ってたわ。なんで闇姫ちゃんが現れたのか、わからないって……」
「そうですね、本当に『お人形』達ってわかりませんね……」

「こら鈴音、話しの腰を折るでない」
「あっ、ごめんなさい彩華姉さん。アリエラちゃん、続けて」

「えっと……アリエラが明姫姉と契約をしてから、一週間もしないうちに軍の人が来て、半ば強引に入隊させられたのです」
「えっ！　八歳の幼い女の子が軍に……確かにそれだけの力は持っているけど……
でも、私の入隊は十二歳だから、幼いという意味では変わないか……」

「あれ？　ところで鈴音お姉様はいつ契約を？」
「私もアリエラちゃんと同じ六年前……もうじき七年になるわね」
「じゃあアリエラみたいに、契約してすぐに軍に入った訳でないのですか？」

「私達は前にも言った通り、国が管理している施設にいたから、はっきり言えば監視はされていました。
それに帝は、魔法使いを戦場へ出す事に否定的でした。
でもアリエラちゃん達が戦場で確認された事をきっかけに、対抗策として私達も入隊することになったのです」
「やっぱりアリエラ達に原因があったのかな……」
「そうじゃないわよ、問題あったのは、幼い子まで軍に登用する帝国の体制よ」

トントン……
机を指先で小突いて彩華お姉様が口を挟む。

「えっと鈴音にアリエラ……私としては、そろそろ本題を進めてほしいのだが、どうかな？」
それは、何度も話しの腰を折る鈴音お姉様や、その度に受け答えをして、話しを止めてしまう私に対する、彩華お姉様からの最終警告にも聞こえました。

「あっ！　何度もすみません彩華姉さん。
アリエラちゃんもごめんなさいね」
鈴音お姉様も一応自覚があるようでした。

「あっ、いいえ……では続けます。
アリエラが入隊して、実際に戦場へ出るまでの二年間は、先に入隊していたヘリオ先輩と共に、帝国領内を回っていたのです。
それは帝国の力による支配を見せつけ、また恐怖を与える黒のシンボルとして、反乱行為などを押さえつけてきました。
それはアリエラの契約の主旨に沿ったものでしたので、その時は何も疑問に思っていませんでした。

それにまだ幼かったアリエラは、上の人達に褒めてもらえる事が嬉しかったのです」

「そうよねアリエラちゃん、私もその気持ちがわかるわ。それくらいの年頃って、大人に褒められる事が嬉しかったのよね」

「ゴホン……」

鈴音お姉様の反応に、彩華お姉様が牽制します。

「そ、そうですね……えっと……でも今になって考えてみれば、帝国の力による支配体制の弱体化が、既に始まっていたんだと思います。

それを証明するかのように、アリエラ達が配属された当初、小さかった反乱活動は、日増しにその規模を徐々に拡大し、それに伴い戦闘行為も増えてきました。

もっとも戦闘行為と言っても、投石やこん棒程度の武器を使ったものでしたので、制圧は難しくなかったのです」

「そこはアリエラ達の仕事じゃないだろう。警察はどうしていたのだ」

「コホン……彩華姉さん……」

彩華お姉様に牽制された事を根に持っているのか、すかさず鈴音お姉様が反撃します。

「あっ、すまぬ……」

「えっと……

でも一年ほど経った頃でしょうか、反乱活動は組織化してきたのです。

反乱活動に、地方の軍人も加わるようになって、手に持つ物はそれまでの『武器らしいもの』から、『武器』に変わってきました。

こうなってくると、警察軍も本腰を入れて乗り出してきて、武力衝突も本格的に始まりました。
やがて反乱活動を行う者達を『逆賊』と公に呼ぶようになって、私達に下る命令も『反乱活動を制圧せよ』から『逆賊を粛正しろ』に変わっていきました」

「アリエラ、ちょっと待て、帝国は九歳の子供に粛正命令を出したのか？」
「それはちょっと無謀な気がするわね。
そもそも反乱活動を抑えるにしても、いくら力を持っているからって、子供を使わなくても……」
さすがに粛正という言葉は黙って聞くことが出来なかったのでしょう。お姉様達は思わず、意見を口にしました。

「当時の帝国では、皇帝陛下のおっしゃる事は絶対だったのです。アリエラも幼少の頃から、そう教育を受けていましたので、粛正という命令に疑問はありませんでした。
その頃のアリエラにとって『逆賊』は、手心を加える必要がない、完全なる敵でしたので……
だけど今でもアリエラにはわからないのです。彼らが何故反旗を翻していたのかが……」

「洗脳教育か……恐るべしだな」
「アリエラちゃん……なんだか可哀想……」

「えっ！　いやアリエラだって、彼らが体制に反発していた事くらいわかりますよ。
で、でも……その……本当にそれだけだったのかなって……」

「今となっては、知り様のない事だな。

ただ、今でも各地で起きている反乱活動につながっているようにも思える。
いずれにしても、この話しはまたの機会だな。
話を本題に戻してくれアリエラ」

「あ、はい……えっと、そう『粛正』と言っても、基本的には警察軍が主体でしたから、アリエラ達が直接行った訳ではないのです」

「何だ、そうだったの。変に心配しちゃったわ」
「いえ、実は当時のアリエラは『粛正』の意味を理解していませんでした。
一応は調べたのですが……へへ」
「アリエラちゃん……やっぱり残念な娘だったのね」
「うぅぅ……残念って……鈴音お姉様……酷い……」
「こら鈴音……それを言ってやるな。
とにかく先を続けてくれ」

「うぅぅ……残念なアリエラが話しを続けま・ス。
……えっと……粛正が始まって、それから半年ほどした頃です。
既に『逆賊は粛正』という話は広がっていましたので、目立った反乱活動は減ってきました。
ところがそれにもかかわらず、『オウノ』という集落で大規模な反乱活動が始まったのです。
辺境の人口三千人ほどの中規模集落でした。そこに帝国全土から千人ほどの『逆賊』が集結して集落を乗っ取り、住人を人質に取ったのです。
当然、粛正命令が下され、アリエラ達は『オウノ』に向かいました。
でも時既に遅しです。アリエラ達が出て行っても反乱活動は止まりませんでした。むしろ恐怖心を煽ったため、話し合いや投降を拒

否させてしまったのかもしれません。
進展しない事態に軍上層部が出した結論が『手段は選ばない』でした。
そして現場の指揮官は、アリエラ達に『殲滅せよ』と……」
私は先日封印が解けた記憶をたどりながら話を進めていました。
でも徐々に言葉が重苦しくなって、詰まってしまったその時です。
鈴音お姉様が「一休みしなさい」と言うように、話しを始めました。

「その話、聞いた事があるわ。
帝国内の事件だったけど、神国にも衝撃が走ったのよ。
なんて言っても、同じ事が出来る、兄さんや私がいたからね。
私達は軍の監視下にあったとはいえ、周りの目はやっぱり怯えるようになったわ。
……辛かったな……人に会うのも嫌になって……
でも、彩華姉さんや私と同じ立場の兄さんまでが、落ち込んでいた私を支えてくれたの……」
「私も鈴音ほどではないが、ある意味異端の目を向けられた事があるからわからんでもない。
ところで鈴音、その話は……その……照れるから、私のいないところでしてくれ」
「わかりました、照れ屋の彩華姉さん」
「こ、こら鈴音、何を……
まあいい……どうだアリエラ、続けれるか？」
本当このお姉様達の人格が、よくわかりません。
やっぱり優しいのでしょうか……
「はい、大丈夫、続けれます。
ふぅ……」

私は一つ深呼吸をすると、話を続けました。

「鈴音お姉様のお話ですが、アリエラが引き起こしたものです。
あの時、アリエラは初めて大きな魔法を使ったのです。
その結果『オウノ』は……地図から消えてしまいました。
今、現地はガラス状の物質が広がる荒れ地になっています。
……大勢の人々の魂を閉じ込めるように……
ふう……」
言葉が重苦しくなってきた私は、もう一度深呼吸をして間を取ります。

「……あの時の彼ら『逆賊』の行動は、アリエラの契約の主旨に真っ向から歯向かうような行動でした。
アリエラの頭の中は『なぜアリエラがいるのに、闘うのをやめてくれないの』という思いでいっぱいだったのです。
そして明姫姉とつながった時、行動を止めていた理性が消えて、アリエラは契約の主旨に向かって暴走してしまいました。
そんなアリエラの状態が、明姫姉に影響したのでしょう。使った魔法も暴走してしまったようです。
でもアリエラは全く覚えていないのです。どんな印を行ったのか、何を詠唱したのか、そもそも明姫姉はどんな魔法を使わせようとしたのか……
もしかすると、それは魔法ではなく感情消失を打ち破った感情が、明姫姉を通り現象として具現化したのかもしれません。
アリエラ達を包んでいた白い光が消えて、視界が戻ったそこには、太陽の光を受けてキラキラ輝く大地に立つ、私とヘリオ先輩、そして『お人形』だけが残って……」

「そしたら……みんな、消えて……どこいったの……」

「アリエラちゃん、大丈夫」
「アリエラ、もう無理して話さなくてもよい」
蘇った記憶が私の脳裏に、最後の殺伐とした場面を映し出します。
「……悪い人達も……何も悪くない人達も……味方の人達も……みんな……いなくなっちゃった……へへ……どこに行っちゃったのかな……へへ……
……ごめんなさい……アリエラを許して下さい……ごめんなさい、ごめんなさい……」
「ちょっとアリエラちゃん、大丈夫？」
「どうしたアリエラ！　しっかりしろ！」
「……へへ……なんでいなくなっちゃたのかな……アリエラがやったのかな……
でもね……みんな、アリエラの言う事を聞いてくれないから……仕方ないよね……」
「彩華姉さん、これは多分先日同じです」
「気を失った時とか」
「はい、今回も多分……」
鈴音お姉様の推測通り、私はそのまま気を失ってしまったようです。
私が気を取り戻したのは、午後三時を回った頃でした。
目を開けて周りを見ると、彩華お姉様の軍務室のようです。そして目覚めた私に気が付いた鈴音お姉様が声をかけてきました。
「大丈夫アリエラちゃん。また気を失っちゃったわね」
「鈴音お姉様……何度もすみません」

その時、ドアが開いて彩華お姉様が入ってきました。

「ん、アリエラ目覚めたようだな。気分はどうだ」

「彩華お姉様、ご心配かけました。もう大丈夫です」

「ならよいが、決して無理はするなよ」

「はい……そ、それでお話の続きを……」

どこまで話したのか定かではない私でした。でも、最後まで話さなければという使命感から言葉が出ます。

「アリエラ、何を言ってる。また気絶でもして、私や鈴音に迷惑をかけるつもりか？」

「そうよアリエラちゃん。私はバツの楽しみが増えちゃうから、構いませんけどね」

「ひえっ！　これって、やっぱり……」

「あら、何を今更言ってるのかしら。

大丈夫って、大見得切ったのは誰だったかしらね」

「ひっ！　ご、ごめんなさい。ゆ、許して下さい……」

「こら鈴音いい加減にしとけよ。またアリエラが気絶するぞ」

一瞬で集落を消し去り、領民三千人、逆賊千人、そして警察軍二千人の命を奪い去ってしまった九歳の私の心が、その記憶を封印しなければ立ち直れなかった事を……

しかし記憶を封印した事により、その後私に向けられる恐怖に怯える視線の意味がわからず、私は領民達との接触を極力控えるようになった事も……

多分お姉様達は、これ以上私が話さなくても、わかっていたと思います。

狗と呼ばれて　8（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

狗と呼ばれて　9

「アリエラちゃん、いつまで寝ているの、起きなさいよ」
「ふぁぁぁ……鈴音お姉様……おはようございます」
「アリエラちゃんもたまには早くに起きて、私を起こしてほしいわね」
私を起こした鈴音お姉様が、鏡を見ながらさらりと言いました。
目覚めの体操を始めた私は、前屈をしたまま固まります。
「ひえっ！　それは……特別禁止事項ですので……」
「ほら、またぶつぶつ言ってる。
とにかくこっちきなさい。毎朝その髪型じゃ、透けるように綺麗な銀髪が台無しよ」
鈴音お姉様に髪をといてもらう事が、このところ毎朝の日課になっています。
鈴音お姉様の下に向かうために、私は目覚めの体操を切り上げました。
私が封印していた過去の出来事を、お姉様達にお話してから一週間が経ちました。
初日こそ気を失うという私の失態で、中止になってしまった見回り任務も、その後は私の不安をよそに、何の混乱もなく終了しました。
もっともこの一週間は、鈴音お姉様と世間話をしながら、街中をウロウロしていただけですので……これを任務と言って良いのでしょうか。

実際街中を歩いてみると、彩華お姉様の言った通り、お人形を連れていない私達が、魔法使いと気付かれる事は、ほとんどありませんでした。
ほとんどというのは、私に気付いた大半の方は、帝国の元軍人さんであったり、終戦間近まで軍の施設に出入りしていた人達など軍関係者でしたので、変に怯えたり、騒ぐ事無く静かにやり過ごしてくれました。

とは言うものの、神国から来ている人達には、お顔だけで鈴音お姉様とわかるようでした。
実際これには驚きでした。
前に鈴音お姉様が言っていた、小さな事を積み重ねて、民衆の信頼を得た結果なんだと思います。

それとは逆に私は、恐怖を与えていた存在ですから、顔も背けられていたようです。きっと、お人形が私を見分ける目印となっていたのでしょう。
だからお人形がいないと、私だと気付かれない。
おかげで、こうして私単独なら、嫌な視線に晒される事は無いのですが……

「アリエラちゃん、何ぼんやりしているの、早くしないと遅れるわよ」
「ご、ごめんなさい。今行きます」
私は慌てて、鈴音お姉様の下に行き、鏡の前に座りました。

そして今日からは、正式に警察軍として行動します。
正式とは言っても、今までと同じく街中を回るだけなんです。た

だ昨日までと違うのは、今日からは制服を着用するのです。
それは一見しただけで、警察軍……つまり神国軍とわかってしまいます。

支配体制が神国天ノ原に移ってから、帝国軍は解体されました。
しかし失業政策と言いますか、希望者は審査の後に神国軍に編入されました。ですから現在の神国軍に、バルドア人がいてもおかしくはないのです。

一般的な兵士に関してですが……

「あらアリエラちゃん、浮かない顔してどうしたのかしら、何か悩み事でもあるの？」
私の表情が曇ったのを鈴音お姉様は見逃しませんでした。

「い、いいえ……」
鈴音お姉様に負担をかけたくなかった私は、つい否定しました。

「アリエラちゃん、何かが起きてからでは遅いのよ。今話せる事なら教えてちょうだい」
私は、鋭く突いてくる鈴音お姉様に押し切られるように、不安を話す事にしました。

「ご、ごめんなさい鈴音お姉様、隠すつもりは無かったのですが……
えっと……制服を着るという事は、一見して神国の軍関係者だってわかる訳ですよね。
アリエラはどう見てもバルドア人です。それに一般の兵士にも見えません。
ですから、その……明姫姉を連れていなくても……」
「正体が、魔法使いとばれるのが怖いのかしら、アリエラちゃん」

「は、はい……で、でも怖いというより、不安なんです」
「いろいろとお話を聞いているから、気持ちはわかるわよ、アリエラちゃん。
でもね、いつまでもそれでは駄目だと思うの」
「で、でも鈴音お姉様……まだアリエラは……」
「心の傷だから、簡単に割り切れないのはわかるわ。それに時間も必要でしょう。
でもこれは、アリエラちゃんだけの問題じゃないのよ」
私は鈴音お姉様の言いたい事が、何となくだけどわかっていました。
人々に受け入れられるのでは無く、私が今を受け入れなければ駄目という事を……

「そ、それはわかっているのですが……」
「どこまでわかっているのか疑問です。
アリエラちゃんには、ちょっと厳しい事を言います。良いかしら」
「……はい……」
「アリエラちゃん達が逃げてばかりで、バルドアの人々に信頼してもらえない限り、神国民の兄さんや私は、バルドアの人々に決して信頼してもらえないのですよ」
「……」
正直、鈴音お姉様の言葉は、私の心に突き刺さりました。

「いずれにしても、今すぐどうにか出来る問題ではありませんね。
これから私達と、ゆっくりと解決していきましょう」
「は、はい」
「さて、ちょっと遅れちゃったわね。急いで支度しなさい」
私達は少し慌てて支度後、朝食をすませ彩華お姉様の軍務室に入りました。

「彩華姉さん、おはようございます」
「彩華お姉様、おはようございます」
私達が口を揃えて挨拶をすると、彩華お姉様は明らかに不機嫌な顔をしています。

「……遅い！　三分過ぎてるぞ」
「ご、ごめんなさい」
「謝罪はいらん、理由は」
「アリエラちゃんがだだをこねまして……あっいいえ、悩みを聞いていましたので……」

（鈴音お姉様……だだをこねたって……酷いです）

「何だ、いつものか」

（しかも彩華お姉様……いつものって……それ、だだをこねたに対して言ってますよね）

「はい」
「……仕方ないな……」

（えっ！　はいに、仕方ないって……そんな……アリエラは素直な乙女です）

その時、鈴音お姉様からの恐怖の声が聞こえてきます。

『素直なアリエラちゃん、お人形はここにいますよ』
『ひっ！　ご、ごめんなさい』

「どうしたアリエラ。顔色が悪いぞ、まだ何か心配事でもあるのか」
「い、いいえ、大丈夫です彩華お姉様」
間違っても、今晩何をされるかが心配とは言えませんです。

「さて、今日からは制服を着用しての巡回となる。当然、誰から見ても警察軍だとわかる訳だ。
何かとあるかもしれぬが、責任ある行動をとってくれ」
「はい、承知しました」
「了解しました、彩華お姉様」

「ところで鈴音、お前から申請されていた『銀界鬼姫』の同行だが、少々気になる事もある、一、二日様子を見よう」
「それは構いませんが、彩華姉さん気になる事とは……やっぱりアリエラですか」
「ああ、制服を着れば軍とわかる。しかもバルドア人であり、あの特徴……正体に気付く者も出てくるだろう。
その時のアリエラの反応に不安があるのでな」
「彩華姉さんは優しいですね。
そんなの、とっとと渦中に放り込んでやれはいいのです」

「ひっ！　鈴音お姉様……そんな……」

「馬鹿、優しいのはお前だろう鈴音。
鬼姫を連れて、当面の注目を自分に向けようとしたんだろう」
「へっ？　そうだったんですか？」
「か、勘違いしないで、そ、そんなんじゃないわよ。
制服を着ると、軍とわかって何かを仕掛けてくる連中がいるかもしれないでしょう」

なにげに顔を赤くして照れる鈴音お姉様は、やっぱり可愛いです。

それにしてもアリエラが話をしなくても、お姉様達は、既にアリエラの悩みを見越していたとは……「お姉様ズ」恐るべきです。

「当面は、様子見も兼ねて気軽にやってくれ。
……ただし節度ある行動を心がける事」

こうして私達は、初めて警察軍の制服を着た巡回が始まりました。
任務は当然、地域の治安維持活動となる訳です。ただし一般の警察官より軍に近い私達は、反抗活動の抑止や制圧に重点が置かれています。

でも今の私達……ほとんど丸腰なんです。

一応、帯剣はしているのですが、はっきり言って私は剣を使った事はありませんし、当然習った事もありません。
それどころか、ちっちゃくて軽い体で、その上可愛い私が、こんな重くて物騒な物を振り回せるとは思えません。

彩華お姉様は一体何を考えているのでしょうか……

「鈴音お姉様、剣を使った事ありますか？」
「無いわ」
「へっ……」
鈴音お姉様にはっきりと否定されて、不安が更に膨らみます。
私達は事が起きた時に、どう対処して良いのですか……

そんな不安をよそに、私達が街に出てから二時間ほどが経過しました。
私に対する領民達の反応は、今のところ心配していた程ではありません。多分ここが大きな街という事もあるのでしょう。

それでも時々私の素性に気が付いて、怯える視線のまま固まったり、逃げていく人もいます。その多くは辺境から来ている人達でしょう。

このまま、少しずつでも良いから、人々との信頼を取り戻していきたいです。

「アリエラちゃん、あれ……」

私が思いを巡らしていると、鈴音お姉様が遠くを指さして声をかけてきました。

「へっ？　って、あれは……」

私がその方向に視線を向けると、赤色の狼煙が上がっているのが見えます。

「反抗活動の合図よ！

行くわよアリエラちゃん」

そう言うと、鈴音お姉様は狼煙の方に向かって走り出しました。

私もそれについて行きます。

同時に街の各所から、警笛の甲高い音色が鳴り響き出して、嫌でも警戒心を煽ります。

ピリリリー　ピリリリー

「慌てないで行動して下さい」

「こっちです、安全は確保しています」

警笛の音と同時に一般の警察官が、狼煙と反対方向に民間人の避難誘導を開始します。

こういう事が時々あるためでしょう、人々は決してパニックになる事無く、整然と指示に従い行動します。
私達は避難してくる人々の隙間を縫って、狼煙の方面に向かいました。

約十分走ったところで、狼煙の上がった地点に到着しました。
そこは商店が三十軒程集まった施設で、先に到着した警察軍が、別れて施設の出入り口をふさぎ、包囲しています。

「ここはどなたの指示を仰げば良いのですか？」
鈴音お姉様が、その場にいた侍さんに尋ねます。

「指示ってそんな事も……って、す、鈴音様、どうしてここに……」
振り向いた侍さんは、まさかの人物がいる事に驚いたようです。

「私は現在このアリエラとともに、山神侍大将の下、警察軍としての任務を仰せつかっています。本日より正式に着任しました」
「失礼しました。えっと、分隊長の山城となりますが、まだ到着しておりません」
「では到着次第取り次いで下さい。
それで、中の様子はどうなんですか」
「はい、現在忍女が偵察中です。二十から三十人規模のようです」
「わかりました、私達はここで待ちます」

十分程して、待機していた私達に忍女からの情報が入りました。
賊は二十三名、施設の店主十名と客四十六名を人質に取り、中央の広場に立てこもっているようです。爆発物は確認されてはいないですが、多分持ち込んでいるとの事でした。
ちょうどその頃、分隊長の山城が到着したようです。
彼は鈴音お姉様の姿を見つけると、すぐさま近寄ってきました。

「これは鈴音様、初日から大変な事になってしまい、未然に防げぬ我らの不徳のいたすところです」
「そんな事はございません。ところで山城分隊長、私達は何を……いいえ、皆様のお邪魔になるようなら控えております」

（鈴音お姉様、それ脅迫ですか？）

「そ、そんなお邪魔など、滅相もございません。是非一線に立って頂きたい」
「それはありがたい言葉です。ただ私達、剣を携えておりますが、皆様のように使う事は出来ません。
一線に立つのは構いませんが、これでは丸腰のようなもの、少々不安がございます。
……呼んでもよろしいですか？」

（って、この流れ……呼ぶ事になっちゃうんですね……）

「どうぞご随意に、私共にそれをお止めする権限はございません」
「ありがとうございます。
聞いてましたねアリエラちゃん。山神侍大将に叱られる時は一緒ですわ」

（って、鈴音お姉様、それって私が一人で叱られるっていう事ですね……でもそれで良いんです、アリエラはお姉様達のおもちゃですから……）

「は、はい……でも……良いのかな……」

「ほら、ぶつぶつ言わないの！　さっさとしなさい。

いらっしゃい銀界鬼姫ちゃん」
「あっ、本当に呼んじゃった……こうなったら、わかりました。
来て白輝明姫姉」

私達それぞれの前に作り出された光り輝く球体から、先に現れたのは鈴音お姉様の銀界鬼姫ちゃんでした。

『鈴音様、本日はお呼び頂き、誠にありがとうございますですわ』
『鬼姫ちゃん、何を訳のわからない挨拶してるの』

そして続いて私の前に白輝明姫姉が現れました。

『あららアリエラちゃん、お姉さんを呼んじゃって大丈夫なの？
あとで叱られない？』
『明姫姉……グスン、もう良いんです。アリエラ一人が悪者になれば、全てが丸く収まるんです』

お人形が揃ったところで、鈴音お姉様が楽しそうに口を開きます。

「さてこれで準備よしと……山城分隊長、私に一つ考えがあります。もしよろしければ、実行してみたいのですが……」
私は鈴音お姉様の言葉を聞いて、ある意味不安になってきました。

「お任せいたします」

（って、そこは断りましょうよ、分隊長……）

「なにぶつぶつ言ってるのアリエラちゃん」
「ひえっ！　な、何でもありません」

「やる事は簡単よ。アリエラちゃんと私の二人だけで、一線に立つわよ。良いかしら」
「ひっ！　す、鈴音お姉様……良いのですか？　本当にそれで良いのですか？
ア、アリエラは正気を保てないかも……」
「そのために私が付き添うのですよ。私じゃ不安かしら」
「いいえ……そんな事は……」
『アリエラちゃん、ここは鈴音の姐御を信頼しなさい』
『う、うん……わかった明姫姉……』
私は明姫姉の説得もあって、しぶしぶ了承しました。

「じゃあ決定よ。
あっ、山城分隊長、皆さんは後方支援をお願いします」
「それは構いませんが、お二人で大丈夫なんですか？」
「いずれにしても、彼らの武器では私達に傷一つ付けられません。
それにちょっと試しておきたい事もありますので……ご無理を言いますがよろしくお願いします」
「承知いたしました」

そして私達は、施設の正面出入り口前に、警察軍の作り出した包囲線内へ入りました。

するとそれに気付いたのか、それとも偶然時を同じくしてか、賊のリーダーと思われる人物が、盾を持った仲間五人に守られて出て来ました。

「ひっ！　鈴音お姉様、出てきました……大丈夫でしょうか」
「何言ってるの、あれは要求を伝えに出てきたのよ。
明姫ちゃん、しっかりとアリエラちゃんを守ってあげてね」
『承知していますわ、鈴音の姐御。私の可愛いアリエラちゃんには

傷一つ、付けさせませんわよ』
『ありがとう、明姫姉』
「とにかくアリエラちゃん、正気をしっかり保つのよ」
「は、はい、がんばります」

こうして不安たっぷりな私を差し置いて、反抗活動の取り締まりが始まりました。

狗と呼ばれて　9（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

狗と呼ばれて　１０

「我々は『ナイグラ機関』である。
悪帝により支配され自由を失った民衆を解放し、諸悪の権化である帝国主義の者共に、正義の鉄槌を下すために決起した」

（何だか難しい事を言い出しちゃったな……）

「体制は変わったといえ、今なお形ばかりの民主主義を押し付ける者どもに、我らの要求を伝える。
現在不当に投獄され、非人道的な扱いを受けている我らの同志、百五十四名を即刻解放する事。
帝国主義で凝り固まった頭でも、色よい返事が出来るように、今より三時間程くれてやる。
なお我らは確固たる信念と正義で行動している。よってネゴやブラフは一切通用しない、以上だ」

演説の残響が消ると、彼は静まり返った現場を見渡しました。そして警察軍の作る壁の前に立っている、私達に視線を向けて口元を緩めました。

『ひっ！　す、鈴音お姉様こっち見てる……』
『なに怯えているのアリエラちゃん』
『い、いいえ、怯えている訳ではないです』

実のところ私は、彼の不気味な仕草に怯えてしまいました。でもちょっとだけ強がってみました。

『じゃあ、堂々としてなさい。皆さん見てるのよ。

ところでさっき、ぶつぶつ呟いていたわね』
『あっ、その……何だか難しい事を言ってましたが、アリエラには難し過ぎて意味がわからないなって……』
『アリエラちゃん、あの程度の言葉の意味がわからない残念さんなの？』
『ざ、残念さんって……いいえ、そうじゃなくて鈴音お姉様……あいつら言ってる事とやってる事が矛盾しているんですよ』
『よくそこに気が付いたわね、アリエラちゃん。
民衆の味方だって言いながら、民衆を人質にしているのですからね』
『アリエラだってそれくらいは気付きま・ス。だから言ってる意味がわからないので・ス』
『じゃあアリエラちゃん、試しに彼らに尋ねてみたらどうかしら。面白い理屈が聞けるかもね』
『へっ？　何だか楽しそうですね。やってみます』

とは言ったものの、緊張感が漂い静まり返っている現場です。彼らに話しかけるきっかけが中々つかめません。

『アリエラちゃん、どうしたの』
『うぅぅ……きっかけが……』
『ほら、がんばって、話しかけないと駄目でしょう、ほら、さあ、ほらほら、どうしたの』
『うぅぅ……』

鈴音お姉様が面白がって突いてきます。

「おい、魔法使いのお嬢さん達、そこに突っ立ているだけで良いのか？
既にカウントダウンは始まっているぞ。

我々としても、無駄な犠牲は避けたいと思っているが、それはお前達『狗』どもの返事次第だぞ」

タイミングよく向こうから、静寂を破って話かけてきました。

「い、狗って、失礼しちゃいま・ス！」

『アリエラちゃん、向こうのペースに乗らない』

『は、はい』

『とにかく、短気を起こさないでしばらく我慢してね』

鈴音お姉様の制止で、私は冷静になりました。

しかし相手の挑発の一言目で、熱くなるなんてまだまだです。

「まあ良いですわ、何とでもおっしゃって下さい。

ところでお兄さん方は、民衆達の味方なんでしょう、正義の味方なんでしょう」

「ふっ、お子様にはそれくらい噛み砕いて説明しないと、わかりにくかったかな、ははは」

「うぅぅ……」

『こらアリエラちゃん、我慢しなさい！』

『で、でも……あの人酷いよ』

『何情けない事を言ってるのよ。これは挑発合戦なのよ。先に熱くなった方が負けよ』

この勝負は……熱くなりやすい私が圧倒的に不利です。

「で、でもよ、正義の味方のあんた達が、何で、ド・ウ・シ・テ、民衆を人質にしているのカ・シ・ラ」

「おっ、これはこれは、痛いところを突かれちゃったなあ。一本とられたよ、お兄さん参ったよ」

「いいぃ……」

『だからアリエラちゃん、いちいち反応するんじゃありません！』
『だって、だって、あいつアリエラを子供扱いするんだよ』
『そのままじゃない』
『ひっ！　鈴音お姉様までそんな事を言って酷いです』
『あっ、ついうっかり……ごめんなさいね。
でも、もう少しだけ我慢してね』

鈴音お姉様の相変わらず厳しい言葉が、私に突き刺さります。
そして不自然なほど、私に時間を稼がせようとする鈴音お姉様ですが、先ほどから何かをしているようです。
よくよく見ると、いつの間にか鬼姫ちゃんがいません。
彩華お姉様に叱られるのが嫌で、戻してしまったのでしょうか。
心配な私は尋ねます。

『鈴音お姉様、鬼姫ちゃんはどこに？』
『ようやく気付いたのね。
今、兄さんのところにお使いに行ってもらってるわ』
『へっ？　買い物ですか？』
『訳のわからない事を言ってるんじゃありません。
遠隔魔法の準備です。もう少し時間がかかるから、話をつないできなさい』
『は、はい』

叱られるのは私一人じゃないと思うと、変な安心が沸き上がります。

それにしても同じ魔法使いなのに、私は遠隔魔法という言葉すら知りませんでした。
詳しくは後で教えてもらう事にして、今は時間を稼ぐ事に専念します。

「何さ、アリエラの事を子供扱いして、失礼しちゃいま・ス！
そもそもアリエラの質問に答えていないわよ」
「何だ、急に威勢よくなっちゃったな、お嬢ちゃん。
おっと、質問の答えだったね。
それは、あいつらが帝国主義の者共の物品を売買していたからさ」
「ちょ、ちょっと、そんな理由なの？　それだけの理由であんた達は、命を奪う対象にしちゃうワ・ケ・ナ・ノ？　それって変よ、おかしいで・ス！」

「チッ！」

ガコーン！

「うわっ！」

彼が舌打ちをした直後、すぐ隣で盾を持っていた彼の仲間が吹き飛びました。どうやら、怒りに任せて盾を蹴飛ばしたようです。

ガラン　ガラン

そして持っていた盾が手から離れて、出来の悪い打楽器のような濁った金属音を、静かな現場に響かせながら、踊るように床を何度も激しく跳ね回ります。

ガンガン……

やがて盾のダンスが終わり、残響も消えて静けさが戻ると、彼は鬼神の形相で私を睨みつけます。

「ひっ！」

あまりの形相に思わず怯んだ私に向かって、彼は震える声を荒らげて怒りをぶつけてきました。

「お前に……お前にそんな事を言われたくないんだよ！
お前が何をしたのか、忘れたとは言わせないぞ！
言ってみろよ、五年前、お前が何をしたのか。遠慮するなよ、言ってみろ！」

「へきっ……」

彼の言葉は、私から心の闇を引きずり出しました。
そして何も言い返せない、いいえ、何も言えなくなってしまった私に、彼は更なる追い打ちをかけてきました。

「おいおい、何も言えなくなっちまったのか？　全く情けないな。
お前、本当に『オウノ』を消し去って、一瞬で六千人以上の命を奪った『銀髪の白鬼』か？
黙ってちゃわかんねえぞ！　何か言えよ、魔法使いのお嬢ちゃん」

「ひくっ……ご、ごめんなさい……ごめんなさい……」

『アリエラちゃん、もうちょっとで良いから、がんばって正気を保ちなさい』

鈴音お姉様の声が頭中に響き渡り、逃避しかけた私を現実へと引き戻します。
しかし彼の怒りの演説は、止まる事が無く、私を責め立てます。
「黙りの次は謝りだっしちゃったよ。困ったお嬢ちゃんだね。
けれどな今更謝ってもらってもね、遅いてぇ言うんだよ！
お前が消し去った六千人が、それで帰ってくる訳でもねぇし、誰も喜ばねぇんだよ！」
「へくっ……」
「しかもだ、その後も腐敗しきった末期症状の政権の下で、離れて行く人心をお前のその恐怖伝説で押さえつけてきたわけだ。
そのあげく戦争が終わりゃ、さっさと主君替えちまうってか、見事な『狗』ぶりだな。
おっと失礼、今じゃ警察様で立派に『正義のお狗様』ってか、ふざけてんじゃねぇよ！」
「ち、違うんで・ス……」
「はっ、違わねぇよ。
長い物に巻かれて腐敗体制に加担する、それだけが取り柄の『狗』共がいる限り、俺達は正義を貫くための行動を続けるんだよ！」
「違うで・ス……アリエラは『狗』じゃないんで・ス……だって違うんで・ス、そんなの間違っているんで・ス……」
『アリエラちゃん、しっかりしなさい……』
畳み掛けられた今の私には、鈴音お姉様の声ですら、頭の中を通

過するだけの環境音となってました。
『……ここまでかな、よくがんばったけど限界ね。
休んでいなさいねアリエラちゃん』
鈴音お姉様に言われるまでもなく、思考が停止状態の私は、そのまま立ち尽くしていました。
そんな私と交代した鈴音お姉様が、冷ややかに話し始めます。
「さてと、この娘は少々お子様なところがあって、ご迷惑かけちゃったようね。
でも私の妹分ですから、これ以上壊されても困りますわ」
「なんだ、選手交代でお姉ちゃん登場か？　とは言っても、お前もお子様の範囲内だろう」
「あら、はっきりと『お子様』なんて言われると、傷ついちゃうわ。
これでもそれなりに大人と思ってますし、結構需要のある年頃ですわよ」
「需要って言われてもね、お嬢ちゃん。俺は悟りを開いたオヤジ共と違うから、わかんねぇよ。
それにお兄ちゃんラブのお前に、そんな需要は不要だろ」
これまで双方の牽制し合う言葉が、惚けた私の耳に入っていました。しかし彼のこの言葉をきっかけに、挑発合戦が本格化します。
「へっ！　な、何でそんな事知ってるのよ。そんな事を皆さんの前で言うのは、やめてよ……
なんてね……ふふふ。
私がそんな事を言うとでも思ったのかしら？
残念ね、あなた、調べが足りないわよ」
「ちっ、さすがはお姉ちゃんといったところか。場数が違うってか」

さすが鈴音お姉様です。彼の口撃をさらりと受け流します。
それと同時に、私に話しかけてきました。

『アリエラちゃん落ち着いたかしら、少しお話できない？』
『ほえ……は、はい……』
『まだちょっと心配ね、仕方ないか……いいわ明姫ちゃん、しっかり聞いてね』
『はい鈴音の姐御、何でしょう』
『もうしばらくすると、闇姫ちゃんの魔法で賊の位置が特定できます』
『鈴音の姐御、ではいよいよですわね』
『そう、明姫ちゃん達には施設内の賊をお願いしたいのだけど、間に合うかしらアリエラちゃん。
早く正気を取り戻してくれると良いのですが……とりあえず明姫ちゃんは、そのつもりで準備をしてね。
私はもう少し時間を稼ぎます』
『わかりました鈴音の姐御。それではお姉さんは、アリエラちゃんに話しかけて見ますですわ』

そう言うと鈴音お姉様は、彼に対してにこやかに微笑みながら口を開きました。

「ねえ、あなた達の『ナイグラ機関』って、旧帝国のあのナイグラ元帥が頭なのかしら？」
「そうだが、それが何か」
「ではお礼を言っておかないといけませんわ」
「何を訳のわからん事を言っている。お前達のように腐敗した帝国主義共に、礼をいわれる覚えは無いぞ」
「あら、どうしてかしら？　だってバルドア帝国最後の皇帝を暗殺

したのは、ナイグラ元帥じゃない。
おかげで戦争が早期終結した訳だし……目出たし目出たしよね」
「お、お前、根も葉もない事を言うな！　侮辱は許さんぞ！」
先ほどまで冷静にやり取りをしていた彼が、鈴音お姉様に煽られて熱くなってきたのか、静かな現場に再び彼の怒鳴り声が響き出しました。
「あら、侮辱とかじゃないわよ、さっきも言ったでしょう、これはお礼よ、お・れ・い」
「な、嘗めた口きいてんじゃないぞ！」
「月並みだけど、あんたみたいな不潔野郎を舐める訳ないじゃない、汚らしい」
「汚らわしいだと、そんな言葉、腐敗にどっぷり浸かった女に言われたくないぜ」
何を言われても冷静に受け流しながら、相手を煽るその話術、鈴音お姉様は凄いです。
「そうそう、もう一つお礼を言っておかないといけないわね。
負けが決まったナイグラ元帥さんたら、守るべき民衆達を見捨てて、兵隊つれて一番に逃げちゃったわね。
しかも何も知らないアリエラちゃん達に、全ての罪を押し付けて……情けないったらありゃしないわよ。
でもおかげで、よけいな流血も避けれたし、それはそれで良かったとしておきましょうね」

「ぶ、侮辱するな！」

「ですから、これは侮辱ではなくお礼ですわ。
何度も言わせないで下さい」

「な、嘗めた口きいてんじゃないぞ！」

冷静さを失った彼は、同じ言葉を繰り返すだけになってきました。
すると鈴音お姉様は、再び私に話しかけてきました。

『アリエラちゃんはどうかしら？』
『ふぁい……ご迷惑おかけしました。もう大丈夫です』
『アリエラちゃん、無理をしていない？』
『はい、鈴音お姉様のやり取りを聞いていたら、元気が出てきました』
『わかったわ、その元気、今晩までしっかり取って置くのよ』
『ひえっ！　そ、それはバツのお話ですか？』
『当たり前よ』
『あらアリエラちゃん、今晩もお楽しみなんて、お姉さん妬けちゃうわ』
『あ、明姫姉まで……』

その時、突然私達の前に光の玉が現れ、お人形の形になっていきます。

『お待たせぇ、鈴音ちゃん、アリちゃん、白姉ちゃん。
すぐに始めるよぉ。黒からの贈り物を受け取ってねぇ』

現れた黒鬼闇姫ちゃんがそう言うと、「印の舞」を始めました。

『お星様の千里見聞録……
白姉ちゃん、どうぞぉ』

闇姫ちゃんがそう言うと明姫姉を伝わり、私の脳裏にも賊の位置が、はっきりと映し出されました。

『こ、これは凄い……どうなってるのかしら』
『アリちゃん、お星様はみんな見てるんだよぉ、そんなの決まってるんだよぉ』
結果を見せつけられた私は、闇姫ちゃんの怪しい理論に、すっかり納得してしまいました。

『黒鬼闇姫さん、私にもお願いしますわ』
『りょおかい銀ちゃん』
いつの間にか姿を現した鬼姫ちゃんにも、情報を受け渡したようです。

「さてとあなた達、せっかく三時間も時間頂きましたが、諸般の事情により、今からお答えいたしますわ」

「お、おいそのお人形は何をした」

「何をしたって良いじゃない、いずれにしても皆さんには、残念なお知らせしかないのですから。
要求は一切飲めません。
それと、ここからは出る事も出来ません。
では、さようなら」

鈴音お姉様と私は、それぞれ「命の糸」をつなげました。

狗と呼ばれて　１０（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

狗と呼ばれて　１１

「ちょ、ちょっと待て！
残念なお知らせって、何だ！
な、何を勝手な事を言ってるんだ！」

賊のリーダーらしい男は、いきなり私達が打って出るとは思っていなかったようです。
明らかに焦りの色がにじみ出ています。

「あら、私の言葉が理解できませんでしたか？
それともお子様にご説明するような、もっと噛み砕いたお話しでないと、ご理解頂けないのでしょうか。
でも、困りましたわ。あれ以上は、どう噛み砕けば良いのでしょう、私に教えて頂きたいですわ」

鈴音お姉様は、起伏のない口調で淡々と話します。それが彼の焦りと怒りを更に煽る事になります。

「お、お前、馬鹿にしているか！」
「あら、そう聞こえてしまいましたかしら。
それはそれは大変失礼しました。
私、馬鹿にしているつもりは、一切ございませんわ」
「要求は飲めないだと、だいたいお前のどこにそんな権限があるんだ。
勝手な事、言ってんじゃないぞ！」
「勝手と言われましても……私は、こう見えて大将扱いですから。
現場ではかなり突っ込んだ事まで、判断出来る権限を持ってますわよ。

ちなみにあなた達をここから出さないというのも、私の判断ですわ」
「それは立派な事で……でも、こっちはその要求は飲めねえな」
「それは残念ね。穏便に終わらそうと思ってましたが、仕方ないですわね」

ここまで賊相手に話をしていた鈴音お姉様は、話し相手を私に切り替えます。

『アリエラちゃん、準備は出来てますか』
『はい、準備の方は大丈夫ですが……
逮捕が前提ですよね……』
『そうです、つまり生け捕りが前提です。
何か問題でもあるのですか、アリエラちゃん』
『明姫姉が言うには、今のアリエラがピンポイントで狙えるのは、一度に八人が限界みたいです。
鈴音お姉様、どうしましょう』
『情けないわねアリエラちゃん。
いいわ、正面の護衛五人と東門の三人をやりなさい。西門の三人と広場の十一人は私がやりますから』
『では賊のリーダーはどうするのですか?』
『あらアリエラちゃん、気付いていないのかしら、彩華姉さんが来ている事に』
『へっ?』

私が振り向くと、警察軍の中央で腕組みをした彩華お姉様と視線が合いました。
目尻をつり上げた不機嫌そうな表情で、私達を睨みつけています。
私は慌てて視線を正面の賊に戻し、鈴音お姉様に問いかけました。

『うぅぅ……彩華お姉様、何だか凄く怒っていませんか？』
『当たり前じゃない。私達は彩華姉さんの命令を無視して、暴走したようなものですから。
この一件が一段落したら、いろいろとされちゃうかもね』
『……』

私はこの時、何かがこみ上げてくる気がしました。それはある種の恐怖と言ってもよいでしょう。もし明姫姉とつながっていなければ、あまりの恐怖に耐えきれず、気絶していたと思います。

『とにかく、一人ぐらい彩華姉さんに残しておかないとね。
わかったら、始めますわよアリエラちゃん』
『はい』

鈴音お姉様と私は一瞬見合いました。しかし鈴音お姉様に譲られるような形で、私から先に動きます。

『鈴音お姉様ありがとうございます。
行くよ、明姫姉』
『了解ですわ、アリエラちゃん』

そして私は「印の舞」と同時に詠唱を始めました。

「我は古の封印を解き放つ者
八首の竜王よ
我が召還に応え給え
天壌の恵みをもたらす力を持って
穢れを清め滅ぼせ」
『豊穣への人身御供』

アリエラが詠唱を終えると、明姫の影が渦を巻きながら膨れ上がっていく。
そして渦の流れが止まると、影は禍々しくも雄々しい姿の八首の竜へと変化をとげる。
顕現した八首の竜は全ての鎌首をもたげ、紅玉のような真紅の目で、獲物を確認するかのように一睨みする。

「な、何だあれは！」
「ちょ、あれは竜？」

突然目の前に現れた、伝説の生き物に賊達が慌てふためく。

「何であんなものが……へっ！　体が動かない」

その直後、アリエラが狙いを定めた賊達の動きが止まる。俗に言う「蛇に睨まれたカエル」状態である。

施設正面でアリエラ達と対峙している賊達は何が起きているのかわかっている。しかし東門の賊達は、突然体が動かなくなってしまった。

「か、体が動かない」
「な、何事が……」
「何が起きたんだ」
「だ、誰か、助けを……」

何が起きているのかわからず、かろうじて動く口で助けを求める

だけである。

『アリエラちゃん、固めるだけなんてお上品なのね』

『へっ？　そ、そうですか』

「お、おい、お前達大丈夫か？」

賊のリーダーが、私の魔法で動けなくなってしまった仲間に、慌てて声をかけます。

「あ、あの竜に睨まれてから、体が動かないのです」

「お、お前、何をしやがった」

「あら、ちょっと魔法を使っただけですわ。

あまりちょろちょろされても、逮捕するのが面倒ですから」

意識を集中している私の代わに鈴音お姉様が答えます。

「お前ら……ただですむと思うなよ！」

「それは怖いですわ。

でも、私も仕事をさせて頂きますわよ」

そう言うと鈴音お姉様は、振り向き彩華お姉様に話しかけます。

「彩華姉さん、こちらの方はお任せします。私は残りの賊を片付けますわ」

「こ、こら鈴音、勝手に……仕方ない。

山城分隊長、あの暴走女子が全ての賊を固めたら直ちに突入し、人質の解放と逮捕に踏み切るぞ」
「承知しました。直ちに両翼に伝えます」
「鈴音、派手にやりすぎるなよ」

「わかってますわ彩華姉さん。
それでは鬼姫ちゃん、いきますわよ」
『承知です、鈴音様』

鬼姫ちゃんはその手に巨大な槍を持ちました。
そして鈴音お姉様は、「印の舞」と同時に詠唱に入りました。

「古より語られし
偉大なる魔槍よ
彼の者共を穿ちたまえ」
『影国からの刺突』

鈴音が詠唱を終えると、鬼姫は手に持つ槍を空に向かって投げた。
鬼姫の手を離れ勢いよく上昇する槍が、飛行の頂点を迎えると、推力を失い穂先を下に向けその場に一瞬止まった。
すると一本の槍がいく筋かに分裂する。
その数、十四本。
それぞれが個別に意思を持つ様に、鈴音が狙いをつけた賊めがけて、方向を修正しながら落下を始める。

ドス　ドドス　ドドドドドス

十四本の槍は、ほぼ同時に鈍い音を立てて地面に突き刺さった。
その全てが賊本人ではなく地面に映る影、それもちょうど心臓の位置を、正確に捉えて突き刺していた。

鈴音達がいる正面からでは、その様子はわからない。しかし確かなのは、影に槍を突き立てられた賊達は、完全に体を拘束され、更には激痛が体中を駆け巡っている。

「うぅぅぅ……」
「あぁぁぁ……」

突然訪れた拘束と激痛は、彼らから言葉さえ奪い去り、その現場には低いうめき声だけが響いている。
既にその激痛に耐えかねて、動かない体のため立ったまま、気を失っている者もいる。

広場に集められている人質も、突然の出来事にどのように対処して良いのかわからず、誰一人その場から逃げ出そうとしないで、苦しむ賊達を見つめるだけであった。

『鈴音お姉様、これって何だか凄く残酷です』
『あら、これくらいはっきりとわからせないと駄目よ』

「さてと、彩華姉さん完了です。いつでもどうぞ」
一区切りついた鈴音お姉様が彩華お姉様に話しかけます。

「了解した鈴音。全く無茶をして……

山城分隊長、両翼に突入命令！」
「承知しました」
山城分隊長は直ちに伝令を送り、突入が開始されました。
とは言っても、内部の賊達は既に私達が固めていますので、それぞれを縛り上げ、それと同時に、人質を安全な場所に誘導していくだけの事です。

「さて、残るはあなた一人です。
悪い事は言いません、投降しませんか？」

「はん、なにぬるい事言ってんだよ」
彼はそう言うと、上着を脱ぎ捨てました。
その体には爆発物が巻き付けてあります。
しかし鈴音お姉様は、それを見ると表情を緩めて言いました。

「それを今更どうするのかしら？
人質もいないし、脅しにならないわよ。
もしかして自決用なのかしら」

「どうとでも受け取ってくれ」

『鬼姫ちゃん、簡易結界だけは準備して』
『大丈夫です鈴音様、いつでも発動できます』

「鈴音、あれは私の獲物だろ」
突然話しかけてきた彩華お姉様に、鈴音お姉様は驚く事もなく、淡々と返事を返します。

「当然ですわ、彩華姉さんにおまかせしたのですからね」
「それでは片付けるか」

「一応言っておきます。彼は爆発物を……」
「問題ない、だが万が一の時は頼むぞ鈴音」
「承っておきますわ、彩華姉さん」

彩華姉さんは私達と話を終えると、賊のリーダーに向かって足を進めていきます。

「そ、それ以上、ち、近づくんじゃねえ！」

体に巻いた爆発物をみせてもなお、堂々と歩みを進める彩華お姉様に、怯えるように彼は制止を求めます。
すると足を止めて彩華お姉様が冷たく言い放ちます。

「これ以上は、近づきたくない。
気持ち悪い」

（そんな事を言って足を止めるなんて……彩華お姉様も彼を煽るのですね）

この時、剣を使わないアリエラにはわからなかった。
当然の事だが彩華が足を止めたのは、賊の彼が気持ち悪いからという、言葉通りの理由からではない。
それは万が一彼が動きを見せた時に対処出来る距離、彩華の間合いの最外縁である。そして言い放った言葉は、彼にそれを気取られないための迷彩であった。

「言う事欠いて、気持ち悪いと来たか……

本当お前達は口が悪いな。
見てくれはそれなりに評価できるが、性格がこれじゃ残念だな」
「お前に褒めてもらおうとは思ってない。
それこそ気持ち悪い」

相変わらず、彼を怒りの炎に油を注ごうとする彩華であった。しかし彼の言葉でそんなやり取りに終止符を打った。

「ちっ！　ったく下らねえ。
こうなった以上は仕方ないが、それでも俺は最後まで要求を通すための行動を行う。
例え、この命を散らす事になってもな」
「私はもう一度、投降を勧めるつもりだったが、そこまで覚悟が決まっているなら、何も言いう事もないな」

彩華は残念そうな表情で、投降を受け入れない彼を見つめ、そして話に耳を傾けた。

「我々『ナイグラ機関』は帝国主義を排除し、民衆が失った権利を取り戻すために、行動する者である。
そのために、現在不当に逮捕監禁されている同志、百五十四名の解放を要求する。
諸君らの賢明な返事を頂きたい」

彼は話し終えると、腕を組み正面に立つ彩華を睨みつけ、その返事を待った。
ここで要求が通らなければ、自決する覚悟を決めている。
だからと言って彩華が要求を飲む事はない。
「立つ位置が違えば、信じる正義が変わるのは道理だな。

お前のような強い信念の持ち主と、同じ立ち位置に並んでみたかったな。
残念だが要求を飲む事は出来ぬ。これが私達の答えだ。
これにて幕を下ろさせてもらう」

「ふ……」
彩華の言葉を聞いた彼は、固く結んでいた口を一瞬ゆるめた。
その直後、彼は予想通りの行動にでる。

ズボンのポケットからマッチを取り出し、素早く点火させた。

「うわっ！」

それは一瞬の出来事だった。

彼がマッチを点火させるために、視線を彩華から着火剤に一瞬だけ向けた。
その瞬間を彩華は見逃さず、踏み込むと同時に抜刀していた。
そして短い悲鳴と同時に、点火したマッチを持った右手が飛んだ。

そのまま彼の脇をすり抜けた彩華が切り返すと、刀の峰で二の太刀を彼の足めがけて振り下ろした。
打撃武器となった刀に足をすくわれ、彼はそのまま転倒し、彩華に取り押さえられた。

「すまん、火種を持つ指先一つ切るつもりが、このような事に……主の反応を見切れなかった」

「おいおい、なに調子狂う事言ってんだ。勘弁してくれ」

彩華お姉様の決着がついたところで、私が固めていた正面の五人が逮捕されました。
ようやく魔法の制御から解放された私は、ヘロヘロになって座り込んでしまいました。

『アリエラちゃん、よくがんばったわね。お姉さん褒めちゃうわ』
『あ、ありがとう明姫姉』
『ところで、竜王様が怒ってましたわよ。
次に呼んだら二倍、生け贄を食わせろってぼやいてお帰りになりましたわ』
『ひえっ！　二倍って……竜王様ごめんなさい』

今回の反抗活動を鎮圧する過程で、「ナイグラ機関」と言われる、帝国の残党の作り上げた組織の存在を知りました。
今も続く反抗活動を、中心でまとめいるようです。

反抗活動の鎮圧が終わり、私達は一度庁舎に戻りました。
当然、鈴音お姉様がおっしゃっていたように、彩華お姉様に呼びつけられました。

コンコン……

「どうぞ」
私と鈴音お姉様は、恐る恐る彩華お姉様の軍務室に入ります。

「失礼します」

「……」
「彩華姉さん、本日は大変申し訳ございませんでした」
「……」
「あの……彩華お姉様、ご、ごめんなさい」
「……」
彩華お姉様は部屋に入った私達を睨みつけたまま、口を開こうとしません。
するとあまりの気まずさに、報告に来ていた山城分隊長が間に入ります。
「まあまあ山神侍大将、彼女達も良かれと思ってやった事です。それに結果として早い解決に結びつきました。
この辺りで勘弁してあげて下さい」
「……まあ、仕方ない。
今回は山城分隊長に免じて、大目にみよう」
「あ、彩華姉さん、ありがとうございます」
「ありがとうございます、彩華お姉様」
しかし彩華お姉様の話はこれで終わりそうにありません。
しっかりと私に視線を向けています。
「ひっ、あ、あの何でしょうか？　彩華お姉様」
「アリエラ、特に何かという訳ではないのだが、今日も例の発作みたいなものが出たようだな」
「は、はい……」

「大勢の前であれだけの事を言われたんだ、晒した醜態はさておき、心理的には多少馴染んできたのではないか？」

「は、はい……」

「なあにアリエラちゃん、その返事は……もっとしっかりしなさい」

「ひっ！　はい！」

「そもそもアリエラちゃんは……」

彩華お姉様のありがたいお説教は、いつの間にか鈴音お姉様までお説教する側に加わって、この後二時間に及びました。

もっとも一番悲惨なのは、たまたま居合わせて、退室するタイミングを逃した山城分隊長ですが……

夕食で一度中断されたお説教タイムでした。

しかし、報告書は後回しという鈴音お姉様と、報告書の提出がなければ仕事がないという彩華お姉様の二人に引っ張られるまま、恐怖の入浴時間を迎えました。

「ねえねえアリエラちゃん、帝国時代は『銀髪の白鬼』なんて言われてたの？」

「ひっ！　そ、その話は聞かなかった事にして下さ・イ」

「アリエラ、そんな風に言われてたのか、それとも呼ばせていたとか」

「ひえ！　ま、周りが、勝手に呼んでいたんで・ス」

「彩華姉さんの黒髪も綺麗だけど、アリエラちゃんの銀髪も良いわね。
それに通り名のように肌も白いし……ふふ
でも、バツはしっかり与えないと駄目よね」

「あっ、す、鈴音お姉様……駄目です……ご、ごめんなさいです……ゆ、許して下さい……」

私の懇願は、一度も受け入れられた事はないのですが、ついついしてしまいます。
この懇願でお姉様達の指導に、一段と熱が入るともいわれるのですが……

しかし、どこで間違ったのでしょう、本日も何故か私一人バツを受けながら、時間は流れていきました。

狗と呼ばれて　１１（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

狗と呼ばれて　１２

「アリエラちゃん、起きなさいよ」
「……ふぁぁ……はっ！　お、おはようございます、鈴音お姉様」
ここに来てからほぼ毎日、私は鈴音お姉様か彩華お姉様の美声で目覚めます。

「全く、毎日毎日、しっかり熟睡できてるようで羨ましいわね。
分けてもらえないかしら、アリエラちゃん」

そして何故私がぐっすり眠れるのかを、知ってか知らないでか、厳しい指摘をしてきます。

私だって先に目覚める事が当然あります。
でも『先に目覚めたのなら、何故起こしてくれないの』なんて恐怖の言葉を、さらりと鈴音お姉様に言われて以来、自己防衛のため『必ず最後に目覚める』ことにしています。

――例え先に目が覚めてもです。

当たり前ですよね。誰だって裸リボンで、首から『食べてね、うふ（ハートマーク）』なんて書いたプレートを下げて、お腹を空かした猛獣さんの前には出て行きません。

「アリエラちゃん、何しているの？　今日も髪の毛が爆発しているんでしょう。早く来なさい」
「は、はい、今行きます」

私達が参加した反抗活動の鎮圧から一週間が経ちました。
今回のグループが初めて『ナイグラ機関』なる集団組織を名乗ったため、大変厳しく取り調べで追求していたようです。
もっともいくら厳しいと言っても、そこ神国軍、けっして怪しい組織ではありませんので、彼らの人権を尊重し、人道的な配慮をしたものだったようです。

ですから、帝国の取り調べを知っている私からすると、かなり穏やかで優しいものと思っていました。

実際に『そんな事で口を割るのかな』と心配もしていました。
そんな心配をする私をよそに、口を固く閉ざしていた彼らは、何故か三日もすると話を始めるのです。
その訳を知りたかったのですが……私は取り調べに立ち会う事を許してもらえませんでした。

――中では一体何が行われていたのでしょうか――

それはさておき彼らの情報をまとめると、現在『ナイグラ機関』は、このトゥルーグァより約五十キロメートル北上したところにある、辺境ながらも大規模な都市『サーベ』に、その本拠地を置いているようです。

この件は、彼らが口を割り出したときから逐次、本都に伝えられています。
それを受けて本都より、神楽兄さんとヘリオ先輩が派遣される事になりました。そして早ければ今日の午後にも、トゥルーグァ庁舎に到着します。

しかしヘリオ先輩は大丈夫なんでしょうか。
また何かしらの失態を犯すのではないかと、思いやりのある優しい私は心配です。

「ふう、やっと到着だ。やっぱり遠いなここは……」
俺とヘリオがトゥルーグァ庁舎の正門前に到着したのは、本都を出発してから二日後の午後二時を少し回ったところだった。

「しかし、本当に大丈夫かヘリオ」
「はい、ご心配かけてすみません。もう大丈夫です」

俺は鈴音からの連絡で、大丈夫と言われていたアリエラですら、本都からトゥルーグァまでの道中に一度、そして身の上を話しながら一度、心の傷が開いて気絶した事を知っていた。
更には、先日の一件の最中も、かなり危なくなっていたと聞いたし……
もっともアリエラのそれは、ヘリオの場合と理由が大きく違うから、簡単に比較はできない。
しかしアリエラにしろヘリオにしろ、これで大丈夫なのだろうか。

「天鳥神楽様、ヘリオ・ブレイズ様、長旅お疲れさまです」
「お役目、ご苦労様です」
俺達は、形だけのチェックを受けて敷地内に入り、庁舎へ向かって足を進める。
もともと馬鹿でかい敷地の宮殿である。おかげで正門から庁舎までは結構な距離がある。
いい加減、敷地を小さくしてもらいたいものである。

――それじゃ建物の位置は変わらないから、歩く距離は一緒だ、などというツッコミはそっと無視とする。

ようやく、庁舎の玄関が見える庭園跡地の、ちょっとした広場にさしかかると、玄関前で立っている二人の女性が目に入った。

間違いなく今回、本都でのんびり過ごしていた俺やヘリオから、貴重な休養時間を奪い去った張本人達である。

鈴音は『たまたまその場に居合わせた』と言っているようだ。しかしどう考えても自ら好き好んで、現場に飛び込んで行ったとしか思えない。

――あっ、これはあくまでも、俺個人としての見解です――

鈴音とアリエラの二人は俺達の姿を確認すると、嬉しそうに大声を出して、手を振りながら駆け出した。

――まったく、場所もわきまえずに大声でまったく……恥らうという感情はどこにって、もしかして感情消失の副作用てか？

「兄さん達、お疲れさま、お待ちしてました」

「神楽兄さん、ヘリオ先輩、お疲れさまです」

その気持ちがあるなら、もうちょっとゆっくりと事を起こしてもらいたかった。

とりあえず俺は良いとしても、ヘリオは使えるかわからないぞ。

しかし、せっかく妹二人が可愛い笑顔で出迎えてくれた訳だ。ややこしい理屈を考えていないで、俺とヘリオは挨拶を返す。

「よお、二人とも久しぶり、待たせたな」
「鈴音さんにアリエラ、今回は活躍したようだね」
たかだか二週間程離れていただけで『久しぶり』が付いてしまうとは……失ってわかる何とやらではないが、確かにこの二週間、野郎だけの軍務室は静かだった。
当然の事だが、凹み気味のヘリオとじゃ会話も弾まないし、実際のところ少々寂しかったかも。
とにかく可愛い妹達がしでかした不始末――あれ？　いや手柄のおかげで反抗組織が見え出した訳だ。ここはヘリオのように素直に、褒めるのが正解だな。
などと余分な事を考えているうちに、鈴音が駆け寄ってくる――って、そろそろ速度を落として下さいよ。
「兄さん、逢いたかったです」
――あっ！　鈴音が宙を舞った……いや、待った！
えっと、これって愛し合う男女が久しぶりに再会して、お互いが駆け寄って、女性が男性の胸に飛び込んで……くるくる回りながら笑ったり、最後は倒れ込んで、抱き合ったまま感激の涙を流したりする、演劇とかで見かけるクライマックスシーンだろう。
俺もそうしたい気持ちはわかる。
だが鈴音、待つんだ。あれは確かに理論上は可能だ。実際に演劇でもやっている訳だからな。

でもよく聞けよ、彼らはあのクライマックスのために、血と汗をにじませ練習を重ねているからこそ出来る訳だ。

ちなみに俺達のような素人が見よう見まねでやると……

グァゴン……

俺の頭蓋骨が激震を起こし、脳内に鈍い音が響き渡った。

それは勢いよく飛び込んできた鈴音の頭が、俺のあごを見事に捉えた瞬間だった。

「ギョ！！！……」

「イッ！！……」

直後、二人はどこの国にも属さない発音で声を上げた。

次の瞬間、俺の視界は真っ暗な闇に包まれた。

しかし災難は、これで終わってはくれない。

ズデーン……

世の中には物理的要素というのか……まあ、恥ずかしながら学の無い俺には、理解できない『何チャラの法則』のおかげで、勢いそのままの鈴音の体は、あごにいいのをもらってふらつく俺を、そのままなぎ倒した。

「ひゅげ……」

その勢いで背中を地面に強打して、息が止まりそうになる。

しかし昔から『二度ある事は三度ある』とは、よく言ったもんだ。

なぎ倒された俺の上に、鈴音の体が覆い被さってきた。

その時だった。

「ギュゲ！」

腹部に異常なまでの鈍痛を感じた俺は、またもや怪しい発音の言葉を発した。

鈴音の膝が『とある部位』を直撃したようだ。

止めの一撃である。

――うんうん、とりあえず護身術万歳です。

魔法使いである俺は、幾重の結界で物理的にも、魔術的にも守られているのだが、あくまでも『命に危険が及ぶ時』という、凄くご都合主義的なものである。

でも軽い衝撃でさえ、それに匹敵する激痛がほとばしる『とある部分』は、常日頃から守ってもらいたいものである――あっ、結界を発生させてる闇姫さんをはじめ「お人形」さん達は、皆さん女子でした……残念ながら、わかりませんね……

鈴音に押さえ込まれてうごめく事もできず、顔色だけが青くなっていく涙目の俺を気にしてか、鈴音は声をかけてくる。

「に、兄さん……あご大丈夫ですか？　それとも頭をぶってしまいましたか？」

――この言葉、鈴音に悪気が無いのはわかっている。でも、青ざめた理由はそこじゃないんだ……もちろん、わかっていてもここは公

衆の面前だ、その言葉を決して口に出しては駄目だぞ。
それよりお前こそ涙目で大丈夫か？
意図せず繰り出した頭突きが、鈴音本人にも強烈な痛みとして跳ね返ってきたのであろう。
「あっ、鈴音か、ここは昼でも星が見えるのだな――」
今の俺にはこの言葉を口に出すのが精一杯であった。
とりあえず途中経過どうあれ、最後は予定通りに倒れ込んで抱き合った訳だ。しかも鈴音も俺も理由はさておき涙目である。
終わりよければ全て良し……いい言葉である。
――うん、感激のクライマックス完成
はい、感激のシーンはここまで――
「だ、大丈夫ですか神楽さん」
ヘリオ、心配してくれてありがとう。これがわかるのは、お前だけだよ。
多分大丈夫、機能的には異常はないと思う。
「か、神楽兄さん、鈴音お姉様……は、はしたないまねはやめて下さ・イ」
こらアリエラ、どこを間違えてそうなった？
「神楽、鈴音、公衆の面前で何をしている」

おっと、聞き覚えのある声が聞こえるぞ。
懐かしい響きだ。
「久しぶり彩華――」
って公衆の面前って……この声で正気が戻った俺が周りを見渡す。
「あっ！」
いつの間にか倒れ込んで抱き合っている俺達を中心に、半径三メートルほどの人の輪が出来上がっているではないか。
この人々が一部始終を見ていて、心配して集まっているのなら良いのだが、どうもそうではない方が多数を占めているようだ。
こ、これはマズい。
ここが恋人同士で抱き合っていても、自然な場所なら問題が無いのだ。
しかし、ここはお固いのが当たり前な、公的機関の集合体、庁舎の敷地内である。しかも人目につかない場所ならいざ知らず、正門から入って庁舎に向かうための、本通のど真ん中である。
しかも自惚れている訳ではないが、俺も鈴音もそれなりに顔が知れ渡っている。
とにかくだ途中経過はどうあれ、この状態では、兄妹のスキンシップを通り越しているだろう。
誰の目から見ても、俺達は非常に似合わない場所で、怪しい事をしている危ない兄妹と、思われてもおかしくない訳だ。
「お、おい鈴音、周り……それと、ぼちぼち起き上がりたいのだが

……」

「えっ！　あっ！　は、はい、ご、ごめんなさい」

俺の声で、周りを見た鈴音が顔をほのかに赤く染めて慌てて立ち上がった。

こうして鈴音の人的呪縛から解き放たれた俺は、ようやく立ち上がる事ができた。

――まあしかし、このような心地よい呪縛は歓迎なのだが、やはり時と場所を選ばなくては……あっ、膝には注意してもらいたい。

「神楽、来てそうそう何をしているのだ」

「すまんな彩華、ちょっとはしゃぎすぎたようだ」

「仕方ない奴だ……何なら鈴音の代わりに私がやっても……その方が自然だ……」

「なんだって？」

話の途中でうつむいた彩華の言葉が、微妙に聞き取れなかった。

「と、とにかくだ、軍務室に行くぞ」

そう言うと彩華は、庁舎方向にくるりと向きを変えていそいそと歩き出した。

「あっ、こら待てって、なに急いでるんだ」

「べ、別に急いではおらん、神楽が遅いのだ」

「はあ、じゃあ皆さん、行きますよ」

軍務室に入った俺達は、ここまでの経緯を彩華から説明された。

「……と、以上がこれまでの経緯だ。
もっとも現在、自白通りの場所に『ナイグラ機関』の本拠地がある可能性は、低いと思われる」
「まあ、新たな逮捕者が自白する可能性を、当然考えているからな。常に追われるテロ組織は身軽だろうから、移転の手間も知れているだろうしね」
「今、情報部に当たらせている。
確定情報が入りしだい、一気に本拠地を落とすぞ」

その気合いは充分わかるのだが、問題もある。
例え最速で動いたとしても、ここから『サーベ』までは移動で最低一日は必要だろう。
当然彼らもこちらの動向を監視しているはずだ。
したがって俺達がここを出発した直後に、逃げられてしまう事も当然あり得る。

だからといって軍事的に有名人の俺達が、先に『サーベ』に移動するのも問題がある。
なによりも旧帝国軍の残党である彼は、アリエラやヘリオはもちろん、俺や鈴音、そして彩華もご存知のはずである。
極端な事を言えば、本拠地が特定できていようが、いまいがは関係ない。俺達が『サーベ』に向けて動いた瞬間に、彼らの本拠地に伝わり、何らかの対策を打たれてしまう訳である。

――いっそう着ぐるみでも着用して移動するか。

やっぱり暑いから却下――

全く困った問題である。
このあたりの事を彩華に話すと、彼女もその問題には気付いてい

たようで、現在のところ思案中らしい。

「あっ、そうだ神楽兄さん」

何かを思い立ったようにアリエラが、口を開いた――それは、あまりいいアイデアでは……あっ、話を聞く前に失礼でした。

「何か思いついたかアリエラ」

「あの、遠隔魔法ってどうなんですか？　このあいだの闇姫ちゃんみたいな」

「せっかくの提案だが、残念ながら却下だな」

「えっ、出来ないのですか？」

「そうだな……あれは基本的に攻撃魔法には使えないんだ。そもそもそれが出来れば、俺達が危険な戦場に出て行なくても良いだろう」

「あっ、そうか……」

「それ以前にいろいろと条件があってな……どのみち現場に魔法使いがいないと使えないんだ」

「へえー、そうなんですか」

てか、アリエラは今までそれを知らなかったのだろうか。

――明姫、少しはアリエラを教育しろよ。

その後もいろいろと思案を巡らせるが、残念ながらここにいる面々は、どちらかと言えば頭脳より体力派である。例え勘が鋭く、時々社守軍師もビックリするような指摘をしても、基本的には体力派であり、間違っても頭脳派集団では無いのである。

延々と議論を繰り返すが、結局持ち越しとなったのは、言うまでもない結果だった。

狗と呼ばれて　１２（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

狗と呼ばれて　13

「……朝か……」

カーテンの隙間から差し込んだ朝日は、閉じたまぶたを薄地のカーテンのごとく突き抜け、否応無しにも安らぎの時間の終わりを告げる。

早朝とはいえ差し込む夏の日差しは、ジリジリと顔を焦がしていく。

それは起き際の楽しみ、『みんな大好き、まどろみ時間』を容赦なく奪いさる。

「……暑い……」

眩しさと、暑さと、そして優しく鼻腔をくすぐる甘い香りに意識が覚める。

――ん？　てか、香り？

ぷに……

――で……ぷにって……？

ぷに、ぷに……

右手から滑らかで柔らかな、しかも何となく覚えのある感触が伝わってくる。その正体を確かめようと、頭を右に向けて目を開ける。

視界に入ったのは、幸せそうに緩んだ寝顔の鈴音だった。

（あれっ？　鈴音さん……）

「……んん……」

（はっ！　起こしてはいけない……）

なんだかんだと言っても俺も健全な男子の一人である。今しばらくその感触に触れていたかった。

しかし背に腹は代えられない、名残惜しいが俺は慌てて右手を引っ込めた。

とはいってもまだ起きるのは早い、眠れるときは徹底的に寝るのだと、暑さを我慢してもう一度目を閉じ、頭を反対に向ける。

（うぅぅ……目を閉じていても、こっちを向くと眩しい……）

ふにゃ……

？？はい？　ふにゃって……

眩しい日差しを遮ろうと左手を上げたその時、肘が何かに当たり、不思議な感触が伝わってきた。

――はて？　鈴音……いや違うぞ、右側にいたはず……

「……ん……

……神楽、起きていたのか？　悪いが私は、もう少し寝かせてもらうぞ」

……

「……あ、彩華……悪いが、カーテンをしっかり閉めてくれ……」

尋ねたい事はあったが、ようやく口から出たのは、この一言だった。

そして彩華は黙って、手を伸ばしてカーテンを閉めた。

「これでよいか……では……」

俺の返事を聞く前に彩華は目を閉じた。

今事を荒立てたくない俺ももう一度、目を閉じた。

しかし暑い――いくら夏とはいえ、この熱さは異常である。

――ん？　……暑い？　……いや熱いぞ……首から下が妙に熱い……しかも重い……

夏用の薄地の布団が、汗を吸って重くなったとはさすがに考えられない。

それよりもここまでの流れだ。見るまでもなく、想像通りの事が起きているのであろう。

――いや、もしかしたら、万が一、想像もしていない事が、起きているのかもしれない。

一応首を上げて確認する。

――ですよね……

いくら『事実は小説より奇なり』と言えども、それがひっきりなしに起きていたら、作家さん達が困る??既にそういう事態だろう……

当然視界に入ったのは、汗びっしょりになりながらも俺に覆い被さって、幼子のようにしがみついているアリエラだった――それにしてもアリエラ、そんなんじゃ寝苦しいだろう……主に俺が……

けれども彼女は、至福の一時を楽しむような寝顔をしている。

――まったく、よくわからん……さてさてどうしたものだろうか……

と、涼しい顔で考える……いや、そんな場合じゃない、とにかく熱い！

しかし困った……ここから抜け出そうにも、右に鈴音、左に彩華が、被さるアリエラを除ける場所が無い。

仕方が無い……俺はアリエラを抱きかかえ、その場でくるりと回る。

先ほどとは逆に、位置が入れ替わったアリエラに、俺が覆い被さる形になる。

「むぎゅ……」

一瞬俺の体重がかかったため、アリエラが怪しい声を出した。

アリエラが目を覚ましていないのを確認して、俺はそのままゆっくりと起き上がり、怪しくも妖艶な灼熱地獄となっている寝床から離れた。

??へっ、地獄ですか？　はい、ごめんなさい、嬉しい事態です――が、熱い……とにかく熱い……という意味の地獄です。

（こういう事は、冬の凍える時期にして頂きたいものだ）

ある意味現実離れした……とは言っても、健全な男子が一度くらいは憧れる、そんな状況の朝……寝床の脇に立って、幸せそうに眠っている三人の女子を見ながら、とりあえず脱出劇も手馴れてきたと感心する。

ん？　手馴れる？

そう、ここに来てから三度目の朝を迎えた――つまりこの事態は、毎朝の出来事でもあった。

二度寝をする事が事実上不可能となった俺は、シャワーを浴びるために一度部屋から出た。

三十分程して、俺が部屋に戻ってくると、三人の女子は目覚めていた。

姦しいとはよく言ったものだ。起きた直後のはずなのに、既にわいわいとやっている。

――今まで毎朝、これをやっていたのか？

一つツッコミを入れると、百返ってきそな勢いである。

とりあえず、俺が彼女達に汗を流してくる事を勧めると、三人とも素直に部屋から出て行った。

俺は蒸すような熱気がこもった部屋の空気を入れかるために、全ての窓を全開にした。

夏とはいえ早朝のさわやかな空気が、甘く香る夜の空気を押し出し、緑の香りと共に室内に流れ込む。

そしていつも通りの慌ただしい朝の訪れは、一日の始まりを告げる。

時間は午前九時を回ったところである。

鈴音とアリエラは街の巡回に出て行った。

とは言っても、「お人形」禁止令は継続中である。しかも以前より厳しく言い渡されている。

扱えない剣を振り回す訳にもいかないだろう。

結果、ほとんど丸腰の二人は、反抗活動を厳しく取り締まる事が出来ない訳である。

そして私服ならサボる事も出来るだろうが、当然ながら制服姿である。

一体何をしに街に出て行くのだろうか、つい疑ってしまう――例えば制服姿を売りにした、怪しい副業か？

（うん、今度報告書を見てみるか……）

と、訳のわからない事を考えている俺は、はっきり言って暇を持て余している？？あっ、いやそう言う訳ではない。

とりあえず『ナイグラ機関』の本拠地が確定しない事には、動きようが無いのである――決してサボリっているのではない。

（本人の主観による感想であり、全ての人に、そう見えるのではありません）と、付け加えておく。

そして今も一応こうして無い頭を振り絞り、攻略方法を考えているのだが……

「なあ彩華、バルドアの歴史資料のつじつまが合わない気がする。何か知ってるか？」
「ああ、話は聞いている。
意図的に改ざんされているようだな。今各方面に当たらせている――が」
「な、何だ？」
「神楽、よく気が付いたな」
「お、おう、当たり前だよ。俺だってそれなりに勉強しているんだぜ」
当然、社守軍師の入れ知恵である。
「ふうぅーん、そうか、それは良い事だ――期待しているぞ、神楽」
――てか、見透かされているのか？

「それはさておき、地下迷宮の調査はどうなんだ」
「思った以上に規模が大きい上、追跡を妨害するための様々な仕掛けがあってな……はっきり言って作業は遅れている。すまんな神楽」
「別に彩華が謝る事じゃないぞ。
そもそも脱出のために作られた地下迷宮のだし、詳細な資料が残っているとは思えない。
それにしても地下迷宮に関する記述すら、見当たらないのが不自然だな」

資料に書かれている帝国の歴史は、非常に不自然なのだ。
バルドアが帝国を名乗る前、トゥルーグァを首都として近隣を併合するまでは、細かく記されているのだ。
しかしある時期を過ぎると『どこどこを併合した』とだけの、ビックリするくらい簡潔に記すだけになるのだ。

書き手が替わったからなんて言われればそれまでなのだが、一国の歴史を公的に記すものである。その可能性は低いだろう。
つまりは後世に、若しくは俺達に見られてはマズい事が書き記されている可能性がある。
それこそ地下迷宮について、何らかの使い道が記されていると考えてしまう。いや、間違いないだろう、俺の働きの悪い頭でも推測できる。

「ところで神楽」
「どうした彩華」
付き合いの長い、息ピッタリの掛け合いである。
「……ヘリオ・ブレイズはどうした？」

……

「……へっ？　……誰それ……」

いや、決して忘れていた訳では無い……はず……言うなれば、これは俺の優しさである。

間もなく発動されるであろう、大きな作戦に向けて、本調子でないヘリオには、休める時には休んで頂きたいという、俺からの心遣いである――としておいてもらいたい……

「全くヘリオは……しょうがないな、俺ちょっといってくる。
あっ、そのまま巡回してくるよ」
「わかった」

俺は向きを変え、部屋を出ようと扉の取っ手を握ろうとしたその

時、手が触れるのを拒絶するかのように、ふわりと扉が開いた――
自動扉ってか……

「か、神楽さん、僕の存在を忘れないで下さい」
目の前に現れたのは、息を切らしながら、大きく上下に肩をゆらすヘリオだった。

――あれ？　何でわかった？　でもそれは遅刻の理由にはならんぞ。

「あっ、遅れてすみませんでした」

――てか……何でわかった？

「じゃあ彩華、ヘリオも来た事だし行ってくるよ」
「承知した」
「へっ？　神楽さん、行くって……」
「仕事だよ。街の巡回だけどね」
「あっ、気をつけて」
「って、ヘリオも行くんだよ」
「あっ、すみません……って、僕もですか？」
「それが仕事なんだから、当たり前だろう」
「で、でも……」

どうにもヘリオは前回の失態が気になっているようだ。
だがなヘリオ、いつまでもそれじゃ進歩は出来ないぞ、新たな一歩を踏み出そうぜ――なんて、俺って熱いか？
と……そんな事を間違っても口には出せない、内気な俺だった。

「つべこべ言わない、行くぞ」
愚図るヘリオを一刀両断、優しい言葉をかける俺である。

「は、はい……」

そもそもアリエラのように、銀髪というバルドアでも珍しい外見的特徴を持っているのなら、明姫を連れていなくても、その正体に気付かれる事もあるだろう――もっとも、存在感あふれるあの口調では、髪を隠しても……

しかしヘリオよ、お前の外観的特徴は……残念だ……完全に平均的なバルドア人だぞ。

ある意味それはそれで凄い特徴だと思うのだ……天ノ原人の中に、一人でいれば一目瞭然だ――あっ、当然か……その辺りのバルドア人でも、それならわかるもんな。

とにかくだ、今、目を閉じてヘリオの顔を思い浮かべろと言われても――えっと……すまん、覚えていない、となる訳だ。

もしかすると、輝姫を連れていても、正体がばれないかもしれないぞ――っと、もう一人の俺が『さすがにそれは無い無い』と手を横にふる。

こうして俺は、無理矢理ヘリオを連れて、街の巡回に出て行った。

「ほらみろ、何事も無かっただろう」

「はい、思った以上に穏やかでした」

巡回を終えた……と、言うより、一応定められている終業の時間を迎えた俺達は、一度庁舎に戻る。

当然の如く、街中を平然と歩いていても、ヘリオの素性がばれる

事は無かった。
いや、どちらかというと俺の方が問題だった。このトゥルーグァには、神国から訪れている人も多い訳で??結構、話しかけられた……
迷惑という訳では無いが、街中でしかも大声で『筆頭魔術師の神楽様』などと言われると、恥ずかしい……いや、バルドアの人々の目が気になる。
だから何だという事はないのだが??何となくちょっぴりだが、ヘリオやアリエラの気持ちはわかるかな。

「神楽兄さぁーん」
「兄さーん、終了ですか」

そうそうこんな風に大声で??って、鈴音さん、アリエラさん、相変わらず元気ですね。
それにしても、嬉しそうで……怪しい副業で思った以上に、お小遣いが出来ました?

ちょうど正門をくぐったところで、後ろから聞こえる声に、足を止めて振り向く??あっ、決して駆け寄るなよ。

その辺りは鈴音も学習しているようで、小走りで近寄ってきたが、一旦停止は怠らなかった。

??うんうん、交通規則はしっかり守りましょう。

合流した俺達は、彩華の軍務室に向かった。

コンコン……

「どうぞ」
扉を叩くと中から秘書官の優しい声が聞こえた。どこぞの無愛想な秘書官とは大違いである。
俺達が部屋に入ると、奥の執務室の扉が『カチャリ』と開き、彩華が出迎えた??いや違うな、今すぐにでも話したい事があるようだ。

「全員揃っているのは都合良い、とにかく中へ」
「どうした、慌てて」
その慌てぶりというのか、態度から何を話したいのかは察しがついた。
俺達が奥の部屋に入ると、扉を閉めた彩華が振り向いて、すぐさま口を開く。

「つかんだぞ」

??いや、いきなりつかまれても……そこは嫁以外がつかんじゃ……

……はい、ごめんなさい、自重します??

「本拠地だな」
「ああ、先ほど情報部から連絡があった」
「そうか、では作戦の立案だな」
「ん？　それは神楽に任せると、朝言ったはず」

??あれ？　期待してるとは聞いたけど……彩華さん、どこを間違っちゃったのかな……

「なぜ怪訝な顔をしているのだ、神楽」

「あっ、何でもない……」
俺って、そんな表情をしてたのか？
「なら良いが……この件は、当然本都にも伝えた。
社守軍師が、良い知恵を貸してくれるかもしれないな」
「それならありがたいな」
「何だ神楽、自信が無いのか？
それはさておき、本日は終了だな。
明日からは巡回を一時中断して、作戦の立案に集中するぞ」

「はい」
「わかりました」
「承知しました」
「わかった」
アリエラ、鈴音、ヘリオ、俺の順に返事をした。
俺達は部屋を出て、頃合いよく空いた腹を満たすために食堂に向かった。

食事を済ませた俺達は、自室に向かった。
？？てか、ここは俺の部屋の前だけど……何故四人……
「あの皆さん、自室には行かないのですか？」
「私は兄さんにお話が……」
「私もだ」
「ア、アリエラもです」
当然ながら嫌な気分ではない。まあしかし、一応、多少、ちょっとはそういう仕草も必要だろう。

「ふう……」

溜め息というには軽く、普段よりちょっとだけ大きな音を立てて、息を一つ吐くと同時に部屋の扉を開けた。

ガチャ……

……

「どうした神楽、先に入らせてもらうぞ」

……

いや、待てって、この状況は、おかしいだろう……鈴音もアリエラも、目の動きが一点を見つめたまま止まっている。

そんな俺達に、遠慮する事無く部屋に入った彩華は、寝床に腰を下ろす。

「うん、やっぱり慣れた寝床は良い」

一同、無言、沈黙、絶句、撃破？？その他いろいろ……

「あの……彩華さん、これは一体……」

「寝床が一つでは狭いのでな、私のを運んだ」

……それはご苦労様です。

「あ、いや……なんだ、そうじゃなくて……」

「神楽も寝床が広い方が良いだろう」

……少しは熱さから解放されるかも。

「ああ……そうだな……じゃなくて……」

「それに、美女に囲まれて嬉しいのだろう」

……確かに、それはアリだけどね。

「と、当ぜ……いや……ですから……」

「固い事言うな」

あまりの状況に鈴音もアリエラも反論の一つも出てこないようである。

??静かでいいのだが……

というわけで俺の部屋は、どうやら四人部屋になったようだ。

いや正確にいうなら、女子三人の私物はそれぞれの自室に置いてあるから、俺の自室と四人の寝室という、何だかよくわからない部屋になってしまった。

狗と呼ばれて　１３（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

狗と呼ばれて　１４

「……暑い……いや、熱い……」

朝とはいえ夏の日差しは、日の出を迎えて辺りを照らすと共に、大気をどんどん熱していく。

焼けた大気は気温上昇という現象を引き起こし、安眠のひと時を容赦なく削りとる。

例え寝床が広くなって、寝やすくなったとしてもだ――てか皆さん、何で密集隊形を維持しているのですか？

せっかく彩華が自前の寝床を持ち込んだのに、昨日までと同じく、三人の女子が俺を中心に右、左、そして上と集合している――広がった寝床を、もっと有効活用しましょう。

しかしこの時期は一度目が覚めてしまうと、その後『まどろみ時間』を楽しむ事も、二度寝する事も不可能である――それ以前に、この状態では無理です。

とにかく俺は、左右のお嬢さん方を起こさないように、覆い被さりながらしがみつく幼子を適切に処理をして、『怪しい熱帯夜』の呪縛から逃れる。

寝床から抜け出した俺は、いつものように汗を流すために、シャワー室に向かおうとした。

「……うぅぅん……」

暑さで寝苦しかったのか、不意に聞こえた艶かしい声に足を止めた――アリエラじゃない事は確かだ。

振り向いた俺の目に入る見慣れてきた光景が、今朝は不自然に見える。

そこには、二倍の広さになった寝床にもかかわらず、三人は何故か真ん中に集まっている――何だかな……広くした意味がないだろう。

見れば見るほどおかしく見える光景に、俺は一旦部屋を出るのをやめた。

一度寝床に近づき脇にあるイスに腰掛けて、しばしの間観察する。

――彩華に鈴音か……仲良くやっているみたいだな。

俺は『初何とか』と言われる、女性といたす行為において、彩華がほぼ全て受け止めてくれたのを思い出す。

一応最終段階まで進んだ訳だが……残念ながら既に軍属だった俺達は、配置転換など大人の理由で、その後は直接逢う機会がほとんど無くなってしまう――結局、うやむやのままなんだよな……

しかも鈴音にあんな事を言っちゃった訳だし……

と、変な罪悪感が沸き上がってくる――うん、ろくな死に方をしないな……とりあえず現状なら、魔法使い同士の闘いで命を落とす事はなさそうだが、この三人の誰かに刺されそうだ。

――って、三人……？　そう、ここには三人の女子がいる訳で……彩華と鈴音がここにいる理由は、俺でもわかる。

で、わからないのがアリエラさん……ある意味一番よい場所を陣取っている訳ですが、あなたは何故、ここにいるのでしょうか？

そりゃ、確かに『見て』なんて言われて、下着姿を見た覚えはありますが……だからと言って、それだけで寝床を一緒にするのは、どうかと思いますよ。

――以上、安らぐ乙女の観察と、我が身の将来についての考察は、これにて終了――

汗を流してこようと立ち上がり、扉の方に向かって歩き出した。

「……うぅぅん……あっ、兄さん……おはようございます……」

再び聞こえた艶かしい声と共に呼び止められた俺は、再度寝床の方を向く。

「おはよう、鈴音」

基本、起こしてはいけない鈴音が、自ら起きた事に安堵する。

しかし将来、鈴音と寝床を共にするお方は、大変である――ちなみに俺が一番目の候補と言われているようなのだが……

「……どこに行くのですか……？」

「ちょっと汗を流しに……」

「……兄さんが行くところなら、私も連れてって……」

かろうじて上半身を起こした鈴音は、寝ぼけ眼で俺の顔を見つめ続けている。多分、いま何を言ったのか、わかっていないのであろう。

「……兄さん、抱っこ……」

「はい？」

「だから……抱っこで連れてって……」

朝からこの展開はさすがに読めなかった。
鈴音は両手を俺の方に差し出し、寝床の上を跳ね出した――鈴音、それは抱っこじゃなくて、駄々っ子だぞ。

「あっ、こら鈴音、みんなが起きるぞ」
「抱っこ！」

――あっ、完全に目覚めてるな。

と、ベタな演技はわかった。しかし鈴音は、このままでは引き下がりそうにない。

「わかったから、騒がない」

寝床で駄々をこねる鈴音を抱き上げようとしたその時、心まで凍りそうな冷ややかな何かが、俺を貫いた。

「神楽……これ以上、気温を上げぬようにしてくれ」
「お、おはよう彩華さん……」

当然、異常な振動で目覚めた彩華に釘を刺され、鈴音を抱きかかえようとした俺は、そのままの格好で三歩後退した。

「ちっ……」
軽く舌打をした鈴音は、未だに起きる気配がないアリエラの、柔らかそうなほっぺたをつまんだ――何故、アリエラなんだ？

「ぎにゅ……？」

しかしアリエラは図太い。（いや、鈍感）
不思議な発音で怪しい声を上げたが、安眠継続中……しかも幸せいっぱい、ついでに汗いっぱいの顔も継続中――なんだかな……

「さてと、シャワー浴びてくる」
「あっ、兄さん私も……抱っこ……」
またもや鈴音が寝床で跳ねる。

「こら鈴音、暴れるでない。いくらアリエラが鈍感でも、起きるぞ」
「ふぁい……？　呼びましたふぁ……」

……

「ふっ、みんな起きたから、みんなでシャワーに行くか」
ということで、早朝から落ち着きの無い俺達であったが、そのドタバタ劇も終わった。

そして午前九時、本日は全員揃って、彩華の軍務室に集まっている。
ちなみに存在感のないヘリオもここにいる。
昨日、彩華が予告した通り、巡回任務は中断して軍議を始める。
俺達の当面の議題は、当然『ナイグラ機関』の本拠地をどのように落とすかである。
「……と、いうことで辺境ながらも『本都』や『トゥルーグァ』に匹敵する、十万人規模の超大規模都市『サーベ』である。

現在の『ナイグラ機関』の本拠地は、一番の繁華街にある大規模商業施設『トゥインクルモール』内に入っているようだ。
一般人が主に利用する施設故、全面破壊は出来ない。なによりも利用客全員が、人質に取られているようなものだ。
全く困ったもんだ。
ちなみに『サーベ』には他に『サニーシャインモール』と『ムーンライトモール』がある。
彼らの本拠地は平時においても、不定期にその三カ所を、移転させているようだ」

ここまで凛と澄んだ声で話すと彩華は、表情を少しだけ曇らせて、「ふう」と一つ溜め息を漏らす。
それは攻略の難易度の高く、話をしている彩華本人が、嫌気しているようにも見えた。

「結局は大規模部隊の投入は出来ないという事だな」
「そうだ。したがって、神楽達が主力となる」
「期待はありがたいが、どうやって『サーベ』に近づくかだな」
「並大抵の変装では意味がないぞ、神楽」

やっぱり着ぐるみか――考えるだけで暑そうだ、却下！

「ところで地下迷宮について、何か進展は……って昨日の今日じゃだな……」
勢いよく話し出した俺だったが、言葉の途中で『調査が遅れている』と、昨日彩華が俺に返事をした事を思い出した。
そして変に恥ずかしくなって、途中から急激に声の音量が下がった。

――最近忘れっぽくなったのか、契約の副作用で老化も人の倍の速

度ってか。

「神楽、どうにも地下迷宮にこだわっているようだが……どうしてだ？」

「あっ、いやこだわるとかじゃなくて、俺達がここを占領したときの事を、彩華も覚えているだろう」

「もちろんだ」

――そうあの時、潜入した俺達が、ここの正門に到着した時には、宮殿内には大勢の兵士達がいたはず。

しかし俺達が突入した時には、人影はほとんどなかった。

しかも周囲の忍達も、脱出した姿を確認できていないのだ。

その上、気が付いた時には、脱出した者達が『ナイグラ機関』を名乗り、『サーベ』に集結している。

「地下迷宮は、どう考えても単なる脱出路じゃないと思うんだが……そうだな言えば、戦略的に必要なものだったとか……」

「あの……」

その時、あまり聞いた事のない声色が、俺と彩華の話に割って入ってきた。

俺と彩華は、息ピッタリにハモって口を開く。

「誰……？」

「……」

声色の主は、俺達からの予想外の返事と変な迫力に負けたのか、無言の返事が先ず返ってきた――ヘリオとわかっていたのだがつい……

「ん？　ヘリオ、話しがあるのではないのか？」
当然の事だが彩華も声色の主がヘリオとわかっていたようだ。
「えっ、あっ、すみません……」
俺と彩華、そしてアリエラの『だから何だ』と、話の続きを猛烈に催促する視線がヘリオに集中する。
その迫力に更にたじろいだように見えたヘリオだった。しかし『よし』とばかりに小さくうなずいて、覚悟を決めたように話を始める。
――ってか、会議で意見を述べるのに、覚悟が必要ってどうよ。
「えっと、皆さんが話しているのは、『戦略的支援地下道（Strategic Support Subway）』通称『3S』と呼ばれたものです」
「あの……ヘリオさん……よくご存知ですね」
「すみません、隠しているつもりはなかったのですが、皆さんが『3S』について話している事を今知りましたので……」
俺は思い返してみた??確かに……見事にいない。
存在が薄いから気が付かない訳ではなく、その場にいないのだ。で、話が終わると現れる。
??天性のものなのか？　天然系属性？　いや意味合いが違う上、その称号はあまり男に使いたくないぞ。
と、いうことで俺の中でのヘリオは、単に『間の悪い野郎』という事に落ち着く。

「あっ、そう言えば……資料があります。取ってきますので少し時間を下さい」
彩華が「行ってこい」と返事をすると、ヘリオはすぐさま部屋を出て行った。
??てか、資料って……俺達が必死で探していたものまで持ってる訳か？　困った奴だ……もっとも見てみないとわからないけどね。
「ところで、もしかしてだけど、アリエラさんもご存知だったのですか？」
俺はちょっとした悪戯心と共に、試しにアリエラにも話題を振ってみた。
「ア、アリエラは、し、知りませんでしたで・ス」
「本当かしら、アリエラちゃん。もし嘘だと大変な事になっちゃうわよ……ふふ。
今正直に言えば、許す……かもよ……ふふ」
「ひっ！　ア、アリエラは、そ、その……今、ヘリオ先輩が言った事くらいしか知りませんし、そ、その……聞かれなかったから……」
アリエラは鈴音にツッコまれて口が軽くなる。
「まあいいわ、とりあえず覚悟を決めておきなさい」
「ひえっ！　す、鈴音お姉様……それは……へへ……」
アリエラは鈴音から受ける仕打ちを、どことなく期待しているようだ――まあ、それはとりあえずとして……
「失礼します」
ガチャリ。

ちょうど話が途切れたところで、秘書官の声と共に扉が開いた。
そこには扉を開けた秘書官と、両手に重量級の書物を何冊か抱え、息を切らし汗びっしょりのヘリオ立っていた??珍しく間が良いぞ。

「ではヘリオ、話を続けてくれ」
息があがっているヘリオに対して、彩華が話を進めるように催促する??息くらい整えさせろよって、ヘリオは思って……いないか。

「は、はい、直ちに……ハアハア……」
扉を閉めたヘリオが席に戻り、両手に持ったいかにもな書物を二山に分けて置いた。

「ふう……えっと……これが『３Ｓ』の資料で……主にその構造が記されています……ハアハア……
それから……こっちが、『３Ｓ』を使った戦史が記された……ものです……ふう……」
「えっと、ヘリオ……何でこれだけの資料を持っているんだ?」
当然の疑問である。

「帝国軍の参謀だった、アリス・ガードナーに『今後必要になるから』と渡されたのです」

??いや、そうじゃなくて、何で渡したのがヘリオなんだって。
と言っても、その参謀の考えは、今更わからないから仕方ない。

「へ、ヘリオ先輩、不潔で・ス！」

??えっとアリエラさん、どこを間違うとその言葉が出てくるのですか?

「へっ？　何でそうなるのアリエラ」
俺が声に出すまでもなくヘリオ呟く。
「あっ、ちょっと、少し言ってみただけで・ス！
アリエラの言葉でうろたえないで下さ・イ！」
「そうか、アリエラはガードナー参謀が嫌いだったからな」
「そんなんじゃ、ありませ・ン！」
その参謀がどんな人物だか俺は知らない。しかし、どう考えても処分するはずの資料を、ヘリオに渡す意図がわからない。
戦後、帝国残党の暴走を止めるためとしか、思えないのだ。
それにしても何故、ヘリオに……よほどのお気に入りだったのか？　それでアリエラが嫉妬して？？って、それは無いだろう。
とりあえず俺達は、ヘリオの持ち込んだ資料に目を通す。
実際のところ、その規模には驚くばかりであった。この『トゥルーグァ』を中心に各方面に向かって地下通路は延びている。
？？よくもまあ、これだけ穴を掘ったもんだ。
つい感心してしまう。それでもまだ途中だったようで、ゆくゆくは各拠点を結ぶつもりだったようだ。
注目の『サーベ』にも当然地下道は続いている？？って、五十キロだぞ。どれだけの期間をかけたんだ？
全てが一本でつながっているという訳ではないが、それにしても何だかな……

時々会話はあったが、ほとんど無言である。
静まり返った部屋に、外からの虫の鳴き声がうるさく感じ程、響き渡る。

時間の経過は早いもので、結局それは『良い子はお休みの時間』まで続いた。
ここで一旦軍議は打ち切られて、明日への持ち越しとなった。
実際のところ、あれだけの資料を検討するだけでも二、三日はかかりそうだ。

久しぶりに大量の文字や図面と格闘したためか、目が辛い。
軍務室から出た俺達は遅い夕食をすませ、自室に戻る事に――まあ、ヘリオ以外は俺の部屋に来るのだけど……

で……いつものパターンです。
鈴音と彩華に浴場へ連れいかれるアリエラは、なぜか嬉しそうである。

寝る支度をすませた俺は、明日も熱さで目覚める事を覚悟して、寝床に入った。

狗と呼ばれて　１４（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

狗と呼ばれて　15

「……はいはい、この暑さと眩しさは朝ですね……わかりましたから……今起きます」

昨日の日中降り続いた雨は、その日の夕刻にはぴたりと上がった。言えば『雨のち快晴』、青竹を割ったような気持ちの良い天気であった。

――否！　確かに気分だけは気持ちが良い。だがしかし現実は……

夕刻とはいえまだ強い日差しが、日中の雨を容赦なく天に還す。それは湿度の上昇という現象を引き起こし、不快指数も急激に上昇させる。

結果、蒸すような熱気はそのままで、熱帯夜に突入した――別にそれでなくても、蒸すような熱帯夜だけどね。

俺は『まどろみ』という、失った至福の一時に後ろ髪を引かれながら、一つ溜め息を吐いてまぶたを開く。

その瞬間、いつもと違う優しくも冷たい白光に瞳が満されて、俺の視界は何も描かれていない純白に染まる。

「……あれ……？」

何が起きたのか、わからなかった。

――ってか、これは死後の世界か？　ついに刺されちゃったか？

この後、お花畑が見えてくるんだよな……なんだか、甘い香りにも包まれているし……

と、怪しい妄想が駆け巡る頭を置き去りにして、視界が開けてきた。

「……あれ……？」

大切な事なので二度――別に大切な事ではないが……

時間は午前三時、まだ日も昇っていない夜中であった。

夜空にぽっかりと浮かぶ丸い月が煌煌と闇を照らす。その一筋の光が、カーテンの隙間から差し込んでいた。

「はあ……寝直すにもな……」

溜め息まじりに呟く。

いつにも増して寝苦しい訳である。更に蒸し返す暑さのためなのか、いつもより甘く漂う香りが強い。

そのおかげで変に頭が冴えてきた。

……しかし、この香りは本当に匂っているのだろうか？　――実は健全な男子の女子に対する妄想……い、いや、ではなくて、印象の一つが頭の中で甘い香りとして、勝手に具現化しているだけなのかもしれない。

などと、おかしな事が頭を巡り出す。

そして、いつものように俺に覆い被さって、幸せそうな寝顔をしているアリエラのほっぺたを、ぷにぷにと人差し指で押した――アリエラのほっぺたをいじる必要はないのだが、気持ち良さそうなのでつい……

「うにゅ……」

コケティッシュな声を上げたアリエラを見つめながら、ふと思う。

「こんな夜は、悪い事を考える奴がいるんだろうな……」

俺は、『決して旗を立てた訳ではないぞ』と、自身を納得させる。

時を同じくして、『サーベ』にある商業施設『トゥインクルモール』地下の一室で、深夜の会議を開く少々怪しい一団がいた。

旧帝国軍元帥ナドウッド・ナイグラをはじめとする、反抗組織『ナイグラ機関』の幹部達である。

ちなみに、彼らが深夜に会議を行っているのは、決して神楽が旗を立てたからではない。

現在統治している神国の法により、非合法組織である彼らは、事あるごとにこうして、人目につきにくい深夜に集まり会議を開く。

つまりは、たまたま、偶然、深夜に目覚めた神楽が、そのように思っただけの事である。

「先日、予定通り我らは、神国に対して『ナイグラ機関』と名乗りをあげた訳ですが、今後の活動計画も予定通りで構いませんか？」

一人の若者が声を上げた。

「ああ、名乗りを上げるまでの第一段階はこれにて終了、以降は第二段階へと進める」

簡潔に若者の問いに答えたのは、『ナイグラ機関』のリーダー、ナドウッド・ナイグラだった。

「我々の目的は、民衆が失った権利を取り戻す事である。
しかし残念な事に、現在の我々の力だけでは心もとない。
よって今後しばらくは、我らの活動を民衆に浸透させ、味方につける事が重要となる。
先ずはこの『サーベ』から、民衆決起の知らせを各地に配信する。
以上が第二段階の概要である」
ナドウッドの答えを補足するのは、旧帝国参謀長イスカラ・ストントーチであった。帝国時代と同じく、現在もナドウッドの片腕として、作戦立案などを行っている。

確かに腐敗した帝国主義が最終的に敷くのは、昔も今も変わらず圧政である。
それはごく少数の特権階級と言われる者共が、己の地位と利権を守る為に、持っている力をあろう事か内に向け、恐怖により民衆を支配する。
つまり一番の犠牲者は民衆となる。
彼ら『ナイグラ機関』の理念は、そうした民衆にとって、まさに正義である。

――統治機関が今もなお、帝国時代末期の支配体制のように、腐敗した状態であるならば。

しかし、現在は統治体制が神国に移り、『ナイグラ機関』の言うような、帝国主義ではなくなっている。
それでも、何かしらの理由をつけて、民衆のためと『反帝国主義』をうたう彼らは、ある意味立派である。

――彼らがその理念を、貫き通すのならば。

午前九時、会議に望む俺は、左手で首筋をおさえていた。

夜中に蒸し暑さと差し込む月明かりで目覚めた俺は、寝床を抜け出し、そのまま脇に置いてあるイスに腰掛けた。そして、艶かしく安らぐ月下美人達の観察をぼんやりと行っていたのだが、いつしか眠ってしまったようだ。

で、気が付いた時には、無理な体勢がたたって……く、首が動かん――はい、自業自得？　なのか？

「神楽、大丈夫なのか？」

「ああ、何とか」

「全く、変なスケベ心を出すから、自業自得だな……一言いってくれれば……」

――彩華さん、スケベ心では無いぞ。で、最後は何て言った？

「そうですよ兄さん。女子の寝相を見比べるなんて……私だけにしてくれれば……」

――鈴音さん、綺麗なものはつい見とれるだろう。で、最後は何て言った？

「何だか、とっても、不純で・ス！　いくらアリエラが可愛いからって……プニプニは……」

――アリエラさん、最後まで聞こえましたが、微妙に論点がずれていますよ。

「神楽さん、女性の寝姿を覗くって、ノゾキが趣味なんですか？」

――ヘリオさん……大幅な勘違いをありがとうございます。って、俺の部屋の惨状を知らなかったかな？

何ならこの時期だけ、入れ替わってもいいぞ……やっぱ駄目、今の無し。

俺が痛い首を押さえながら、皆さんからの大変お優しい気遣いに触れて、うれし涙が流れ出した??さて皆さん、仕事をしよう。

三日前にヘリオが提出した、『３Ｓ』関係の資料の検討は、ほぼ終了していた。そして作業が遅れていた現場の調査も一気に進み、各方面への回廊も姿を現していた。

そして本日からは、『ナイグラ機関』に対処するため、作戦の立案していく事になっている。

非常に足が遅いのはわかっている。頭の回転が少々残念な俺達だから、仕方がない。実際社守軍師なら、一日もあれば何らかの策を作り上げてしまうだろう。

一応お願いはしてみたのだ。

しかし先日届いた書簡には、『たまには頭も使ってね。期待してるわよ、ウフ（ハートマーク）』と一行書き記されているだけであった――何だかな……書簡にも裏人格登場か？

「ヘリオ、この資料の存在を『ナイグラ機関』は知ってるのか？」

俺が、おかしな回想をしているうちに彩華の言葉で会議は始まった。

「多分ですが、彼らは全てを処分していると思っているはずです」
「では、『３Ｓ』を使っての強襲も有りという事だな」
「いや彩華、それは微妙だぞ」
「微妙って何だ、神楽」
「単純な事だよ、彼らは『３Ｓ』の存在を知っている」
「しかし神楽、彼らは『３Ｓ』を封じていると、確信していないか？」
「そこだ彩華、封じる。つまり出口はふさがれている可能性がある訳だ。
地下道を延々と進み『サーベ』に辿り着いたら、外に出れなかったって、シャレにならんぞ」
「あっ……確かに……」
非常に単純な事を指摘された彩華は、顔を桜色に染めてうつむいた。久しぶりに見た彩華の照れ顔は、何だか可愛らしく見える――あっ、会議中に失礼しました。

ところで他の皆さん『おい、『３Ｓ』を一番気にかけていたお前がそれを言うのか』的な、そのジト目は何だ。

「まあ、なんだ……その……とにかくだ、『３Ｓ』を使うなら、出口の様子は確認しておかないとな、ハハ……」
俺は慌てて、自身のフォローをする。

「それより兄さん、『３Ｓ』を使わず上手く行う方法があるのですか？」
「それがね、鈴音さん――残念ながらその手段が無いから、こうして『３Ｓ』にこだわって……でも期待の『３Ｓ』が、使えなさそうだから皆で困っているんだよ」
当然である。もし良い手段があれば、『３Ｓ』を気にかけたり、ヘリオの資料を読だりする以前に、さっさと作戦を立案し、既に実

行段階に入っている。

「あっ……確かに……」

非常に単純な事を指摘された鈴音は、顔を桜色に染めてうつむいた。久しぶりに見た鈴音の照れ顔は、何だか可愛らしく見える――あっ、会議中に失礼しました。（はい、デジャビュでごめんなさい）

鈴音と言葉遊びをしているうちに、照れ状態から回復した彩華が俺の方を見て、にやりと怪しく笑みを浮かべた??ろくでもない、いや失言、良い事を思いついたな。

「なあ神楽、もしだぞ、もし出口が封鎖されていてもだぞ、私や神楽が、その『どかん』とだな……」

「彩華さん、それは却下です！」

彩華が話し終える前に、俺は口を挟んだ。

??確かに『目的のために手段は選ばず』は、時と場合によってはありかも知れないが、『手段がいつのまにか目的』になっちゃ駄目でしょう。そもそも『どかん』とやった上が、民間の施設とかだと、シャレにならないよ。

てか、皆さん??主に彩華と鈴音だが……お疲れのようで、頭が回らなくなっているようだ。

このまま話を続けると、「『サーベ』の街を丸ごと『どかん』する」とか、ろくでもない事を言い出しそうな勢いである。

すると今度は、鈴音が照れ状態から回復している。そして俺の方を向いて、不気味に微笑みかける??って、なんで俺なんだ。

「あの、兄さん……」

「大変貴重な意見でしたが、却下！」
「えぇぇぇ！　何にも言ってないのに」
「とにかく『どかん』は禁止です」
「ちっ……」
「鈴音さん、舌打ちも禁止です」
「はぁーい……」

やっぱり『どかん』か、と思う俺にまたもや『ならお前も意見言ってみろよ』と、催促まじりのジト目視線が飛んでくる？？てか、アリエラさんにヘリオさんもこっち組ですよ。

「わかりました」
俺は耐えかねて口を開いた。

「えっと……『３Ｓ』を使って、先ずは『サーベ』の手前、『エイゼ』に出る」
「で、どうするんだ？」
期待一杯で彩華が問いかけてくる。

「そこからなら、『サーベ』まで七、八キロだろう。走ればすぐだぞ」
「神楽、却下だ」
「なんで？」
「だから、彼らは『３Ｓ』を知っているんだろう」
「そうよ兄さん、そんな近い所の出口なんだから、きっとふさがってるわよ」
「だから、そこは『どかん』とだな……」
「ほう、散々『どかん』禁止と言っておいて、結局はそれか」
「いや彩華、ちょっと意味合いが違うぞ」
「どう違うのだ？」

「だからな……そのだな……ごめんなさい……」
はい、敗戦です。俺の負けでいいです。
「全く神楽も、まともな意見が無いとは……」
「兄さん、情けないわ」
いや、それを『どかんシスターズ』に言われたく無いのだが……
「えっと、アリエラやヘリオは何か無いか？」
「ア、アリエラですか？　へへ……えっと……うぅぅ……」
「はい、大丈夫です。次のヘリオさんに行きましょう」
「難しく考えないで、普通に『サーベ』に行けば良いのでは？」
「大変シンプルなお答えを、ありがとうございました」
彼らを牽制するという意味でなら、確かにそれも有りなんだが……今更です。
やはり皆さん、使い慣れない頭が大変お疲れのようなので、ここは一度休憩を挟もう？？会議中は良案が浮かばないとも言うしね。
「ちょっと早いが昼食をとらないか？」
「そうだな、『腹が減っては、頭働かず』と言うしな」
？？って、誰が言ったそれ。
「そうね、でも、何でこんなにお腹が減るのかしら？　動いていないのに、変よね」
「頭を使うと、結構エネルギーが必要だからな」
「へへ……何食べようかな……」
？？幸せそうですね、アリエラさん。
で、ヘリオは微妙に落ち込んでいるように思えるのだが、何故？

と、それぞれが思いを胸に秘め、俺達は軍務室を後にして、食堂に向かった。

まだ昼休み時間前だったため、食堂は空いていたが、俺達はそれぞれ食事を手にして、同じ机についた。

食べながら、何か良い策が無いかと思案をするのだが、期待通りの結果にはならなかった。

どうやら、俺以外の皆さん??主に彩華、そして鈴音の二人だが……も、何やら考えていたようだ??うん、時には静かな食事も良いものである。

残念ながら俺と同じで、日替わりランチをじっくりと味わうだけになったようだ。

三十分程した頃、昼休み時間を迎え食堂が込み合ってきたので、俺達は席を立ち、軍務室に戻った。

ガチャ。

「キャ！」

ドタン。

彩華が扉を開けると同時に、タイミング良く（ん、悪くか？）外に出ようとした秘書官とぶつかり、秘書官は可愛らしい悲鳴をあげて尻餅をついた??さすが彩華、鍛え方が違うな。

「いったー」

「大丈夫か？」

「や、山神侍大将、た、大変です！　た、た、たたただ、たった今入ったじょ、じょう、情で……情報で……」

「慌てるな、どうした」
「サ、サ、『サーベ』で民衆決起が発生しました。その規模、い、い、いち、一万人です」
「「「「なにいいい！！！」」」」
俺達は声を揃えた。
突拍子の無い出来事に、目の前で未だに尻餅をついた状態で、『パンツ丸出しちゃん』となっている秘書官が、視界に入らなくなる程の衝撃だった。
同時にそれは、
「これで、ややこしい策は不要、堂々と『サーベ』に乗り込める」
と、不謹慎にも思った瞬間でもあった。

狗と呼ばれて　１５（後書き）

読み進めていただき、ありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3618u/

正義の名分　～乱世ではよくある話～

2011年10月26日12時08分発行